

堀 谷 戸 遺 跡

－ 特別養護老人ホーム建設
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

1 9 9 9

群馬県安中市教育委員会

堀 谷 戸 遺 跡

－ 特別養護老人ホーム建設
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

1 9 9 9

群馬県安中市教育委員会



堀谷戸遺跡全景



堀谷戸遺跡 H-3号住居址竈遺物出土状況

序

安中市は、群馬県の西南部に位置し上毛三山に囲まれ、市の中央を碓氷川が流れ川に沿って緑豊かな田園が広がっています。また、古くは東山道が通り、江戸時代には中山道が、そして現在は国道18号が通って交通の要衝となっています。

堀谷戸遺跡の発掘調査は、野殿地区に特別養護老人ホーム（のどの荘）建設に伴うものです。今回の調査では、古墳時代から平安時代にかけて人々が生活した竪穴住居の跡などが発見されました。

住居の中からは、^{つき}坏・^{わん}碗・^{かめ}甕・皿・壺といった土器や、紡錘車（糸を紡ぐのに用いた）が出土しました。また、平安時代の住居からは「太」の文字が書かれた須恵器皿（墨書土器）が出土しました。同じ文字が書かれた須恵器が北東に位置する西殿遺跡からも出土しています。こうしたことから、この集落が「太」に関連のある名称の村であったことが想像されます。

このような遺跡の様子を後世の人々に伝えていくために、発掘調査により記録保存の措置を講じております。また、埋蔵文化財は、将来の文化の発展・向上の基礎をなすもので、かけがえない郷土の遺産であります。市民の皆様にも郷土の歴史を学習していただけるよう、社会教育、学校教育の場で広く活用を図り、文化財愛護の精神の普及に努めていく所存であります。

終わりに、発掘調査にご協力していただいた地元の皆様や、調査に従事していただいた大勢の方々に厚く御礼申し上げますとともに、この報告書が市の歴史資料として広く活用されることを願っております。

平成11年3月

安中市教育委員会

教育長 山中 誠 次

例 言

1 本書は安中市福祉事務所が実施した特別養護老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、安中市野殿字堀谷戸に所在する堀谷戸遺跡（略称H-2）の正式報告である。

2 発掘調査及び遺物整理は安中市単独事業として実施した。

3 発掘調査及び遺物整理の期間は以下のとおりである。

試掘調査 平成8年3月11日～15日

発掘調査 平成8年4月8日～7月5日

遺物整理 平成10年4月～平成11年2月

4 発掘調査は安中市教育委員会社会教育課文化財係主任(文化財保護主事)大工原豊が担当し、遺物整理は大工原と同主事井上慎也が担当した。

5 本文の執筆は大工原、井上、外山政子（市史編さん調査員）が行い、執筆箇所は文末に記した。また、本書の編集は大工原が行い、それを吉沢栄子が補助した。

6 土師器・須恵器の分類・時期決定については、外山が行った。

7 遺物整理事業の分担は以下のとおりである。

全体の統括・監修	大工原
遺構図の実測・トレース	伊田百合子、平出紀子
遺構図版・土層観察表の作成	伊田百合子、平出紀子、高林直美
縄文土器の拓本・実測・トレース	高瀬敦子、筑井美佐子、吉沢栄子
石器の分類・実測・トレース	井上慎也
土師器・須恵器の拓本・実測・トレース	筑井、平出、高瀬、吉沢 外山、三浦京子（市史編さん協力員）
土師器・須恵器の分類、土器観察表作成	筑井、高瀬、吉沢、外山、三浦
鉄器実測・トレース・観察表作成	筑井、吉沢
遺物図版等の作成	筑井、高瀬、吉沢

8 遺構写真の撮影は大工原が行った。また、遺構実測用航空写真の撮影は（有）青高館に委託して行った。実測及び図版用遺物写真撮影は、写真家小川忠博に委託して行った。

9 基準杭測量は㈱大成測量に委託して行った。

10 テフラ分析及び植物珪酸体分析は、㈱古環境研究所に委託して行った。

11 調査・遺物整理期間中、以下の方々にご指導・ご教示をいただいた。記して感謝の意を表し

たい。(敬称略)

飯田陽一 小野和之 柴山宗寛 藤巻正勝 右島和夫 若狭徹

12 調査組織は以下のとおりである。

安中市教育委員会事務局

教育部長 真下 仁 (平成9年3月転出)

阿久津浩司

社会教育課長 多胡泰宏 (平成9年3月退職)

横田道夫

文化財係長 杉山 弘 (平成9年3月転出)

佐藤輝雄

主 任 大工原豊 (発掘調査・遺物整理担当)

(文化財保護主事)

同 千田茂雄

主 事 深町 真

主 事 井上慎也 (遺物整理担当)

社会教育指導員 中嶋昇太郎 (平成9年3月転出)

小板橋 靖

発掘調査従事者 伊田百合子 清水 正 下マス江 須藤ダイ 多胡 静 田島元治

田島かつ子 田島せい子 田中利策 筑井美佐子 西村水子 平出紀子

柳沢奈美 湯川光子

遺物整理従事者 伊田百合子 高瀬敦子 高林直美 筑井美佐子 平出紀子 吉沢栄子

凡 例

1 遺構実測図は1/80を基本とした。また、遺跡全体図は1/200とした。

2 図中の各種スクリーントーンの意味は下図のとおりである。

3 遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

縄文土器：1/4

土師器・須恵器：1/4

須恵器大甕：1/16

手つくね土器：1/2

石器：1/4、1/2

鉄器・鉄製品：1/2

紡錘車・白玉：1/2

4 遺物実測図中のスクリーントーン・マークの意味は下図のとおりである。

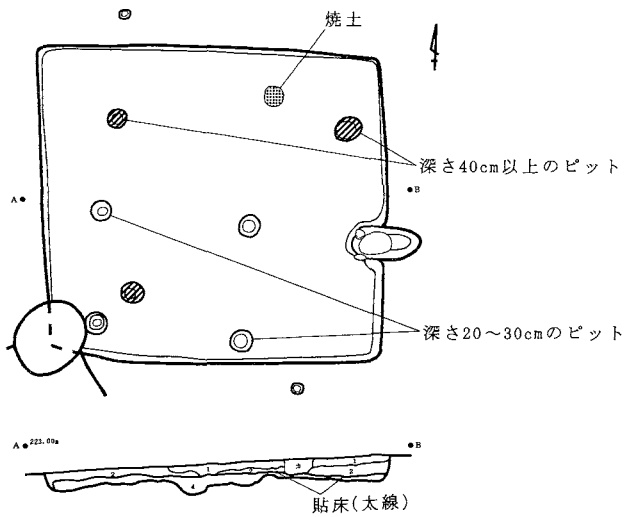
5 石器実測図中の記号は石材の略号であり、略号と石材の関係は以下の通りである。

Ob：黒曜石

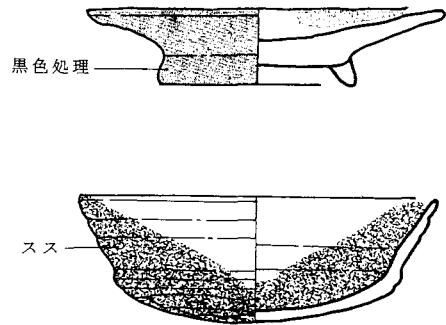
Sh：頁岩・泥岩

An：安山岩

Se：蛇紋岩



住居の記載例



☆ 自然釉

★ 灰釉

○ 土師質

● 須恵器

土器の記載例

遺構中のスクリーントーンの意味

本文目次

序 例言 凡例 目次

I 調査の経過

- 1 調査に至る経過 1
- 2 調査の経過 1

II 調査の方法

- 1 発掘調査の方法 2
 - (1) 調査の方針と目的 2
 - (2) 試掘トレンチと本調査区の設定 2
 - (3) 遺構確認面 2
 - (4) 遺構の調査方法・記録方法 3

- 2 遺物整理の方法 4
 - (1) 遺物整理の方針と目的 4
 - (2) 遺構の記載・分析の方法 4
 - (3) 遺物の記載・分析の方法 4

III 遺跡の地理的・歴史的環境

- 1 地理的環境 6
- 2 歴史的環境 6
- 3 層序 11

IV 遺構と遺物

- 1 遺跡の概要 12
- 2 縄文時代の遺物 13
- 3 古墳時代～平安時代の遺構と遺物 15
- 4 中世の遺構 114

V 成果と問題点

- 1 堀谷戸遺跡における土器群について 121
- 2 住居址について 127
- 3 集落の変遷について 135

VI 自然科学分析

- 1 テフラ分析 142
- 2 植物珪酸体分析 147

I 調査の経過

1 調査に至る経過

平成7年5月安中市福祉事務所より、安中市教育委員会へ特別養護老人ホーム建設に係る照会があった。該当区域の北東部において昭和62年度に県営農免農道建設に伴い、奈良・平安時代の集落遺跡（西殿遺跡）が確認されており、該当区域内にも同様な遺跡が存在する可能性が高いと予測された。そこで、該当区域内で事業を実施する場合、埋蔵文化財に対する影響が考えられるので、福祉事務所と市教育委員会との間で協議を行い、試掘調査を実施することにした。

そして、試掘調査を平成8年3月に実施したところ、古墳時代～平安時代にかけての住居址が多数確認された。そのため、再度福祉事務所と協議を行い、工事実施前に発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになった。

2 調査の経過

試掘調査は平成8年3月11日～15日までの5日間実施した。事業区域内に幅2mのトレンチを20m間隔で5本設定した。次に、バックホーにより表土の掘削を行い、作業員により人力で遺構の確認を行った。台地部分は確認面までの深さが浅く、表土直下でローム層となっていた。北側の台地部分では、古墳時代～平安時代の住居址が15軒、溝1条が確認された。また、南側の台地部分では住居址が2軒、溝1条が確認された。（なお、ここで住居址と推定されたものは、本調査により風倒木と攪乱であることが判明した。）また、中央に存在した谷部分では、全く遺構が確認されなかった。本調査を行うことがほぼ決定的であったため、試掘部分についての正確な実測図の作成は行わず、簡単な遺構測量と写真撮影を行い、そのまま埋め戻さずに試掘調査を終了した。

本調査は遺構の確認された南北台地部分約5,230m²を対象として実施することにした。調査は平成8年4月8日に開始し、次章（II調査の方法）に述べている方法と手順で実施した。先に南調査区の調査を行い、5月8日までは調査を完了した。また、北調査区は5月7日から遺構調査を行い、7月5日までにすべての調査を完了した。本調査の期間中は好天に恵まれ、順調に進行した。また、平成8年6月22日・23日の2日間、市民を対象とした現地説明会を実施し、調査の成果を公開した。

（大工原 豊）

Ⅱ 調査の方法

1 発掘調査の方法

(1) 調査の方針と目的

安中市では、これまでに古代の集落遺跡の面的な調査はほとんど行われていなかった。そのため、集落の構造については、不明な点が多く存在していた。しかし、今回の調査では、台地一つを面的に調査することができたので、集落において住居がどのように配置されていたか、についてある程度把握することが可能となった。そこで、同時並存する住居の分布状態を分析し、集落の景観を復元することを目的とした。

次に、野殿地区における発掘調査は今回が2度目であり、この地区の遺跡の在り方については、不明な点が多かった。そこで、この地区の考古学的基礎資料を得ることも目的とした。

第3に、河川との比高の大きい丘陵地帯への、集落の入植・開墾がどのような歴史的・社会的背景の中で行われたのかを明らかにさせるための資料を得ることも目的とした。

(2) 試掘トレンチと本調査区の設定

試掘トレンチは、事業区域内に幅2mのトレンチを20m間隔で5本設定した。次に、バックホーにより表土の掘削を行い、作業員により人力で遺構の確認を行った。南北の台地部分で、遺構が確認され、中央に存在した谷部分では、全く遺構が確認されなかった。そこで、南北の台地部分5,230m²を本調査の区域とした。4m×4mのグリットとし、グリットの呼称は北西隅の座標値とし、北から南へアルファベットでA・B・C・・・、西から東へ算用数字で1・2・3・・・、と4m進法で呼称することとした。

(3) 遺構確認面

本遺跡の基本層序は第3図に示したとおりである。ここでは表土(I a層)の直下にローム層(V層～VI層)が堆積しており、その間の層(安中市基本層序I b層～IV層)は欠落していた。また、表土層も全体に浅く、特に北調査区東側や、南調査区では10cm程度の部分が広く存在していた。したがって、V層ないしVI層上面で遺構の確認を行った。当時の地表面に当たる層位は存在しておらず、遺構の深さも本来よりも相当浅くなっていると判断される。

(大工原 豊)

(4) 遺構の調査方法・記録方法

本遺跡における遺構の調査方法・使用機材等は第1表のとおりである。この中には安中市の発掘調査において、開発した独自の方法をいくつか含んでいる。住居址の精査・遺物取り上げにおける分層16分割法とそれを基に作成した遺物分布図、航空ビデオを利用した遺構平面図作成法、ビニール転写法がそれである。各方法についてはA図に概略を示した。この方法の詳細は『中野谷地区遺跡群』（1994年）、『中野谷松原遺跡』（1996年）を参照されたい。

(大工原 豊)

作業工程	住居址	土坑	ピット	溝
グリット杭設置	測量業者委託			
表土掘削・除去	バックホー			
遺構確認	ジョレン			
遺構精査	移植ゴテ ねじり鎌 竹箆	移植ゴテ ねじり鎌 竹箆 中華用お玉	移植ゴテ ねじり鎌 竹箆 中華用お玉 山芋掘用突き	移植ゴテ ねじり鎌 バックホー
遺物取り上げ法	分層16分割法	一括	一括	2m毎に分割
遺構平面図	航空ビデオ利用法（ビデオ画像→ビデオプリント→デジタルコピー→図化）			
遺物分布図	デジタル方式			
土層断面図	ビニール転写法（原寸大で図化→写真縮小→プリント原図）			
遺構断面図	図面起こし			
遺構写真(地上)	リバーサル(35mm) モノクロ(35mm)			
遺構写真(航空)	リバーサル(35mm) モノクロ(35mm・6×7)			

第1表 作業工程別調査方法一覧表

2 遺物整理の方法

(1) 遺物整理の方針と目的

調査の方針と目的についてはすでに述べたとおりであり、初期の方針に沿って遺物整理は行うこととした。原則としては、継続的にすでに実施されていてある程度の成果が認められる中野谷地区遺跡群の遺物整理の方法に準拠して実施することにした。まず第1段階として遺構と遺物を別々に扱い、それぞれの諸特徴が明らかになるように整理を行った。第2段階として遺構と遺物を総合化し、相互補完的整理を行う手順をとった。そして、最終的には時間的・空間的様態を明らかにし、時期ごとの集落の景観を復元することにした。

(2) 遺構の記載・分析の方法

住居址は平面図・土層断面図・遺構断面図・遺物分布図・写真・調査時の所見等を総合的に判断し、遺構図版を作成した。住居址に重複がある場合、土層堆積状態から新旧関係の確認に努め、住居ごとに分離して図版を作成した。なお、整理ではパーソナルコンピューターやスキャナー・デジタイザー等の情報処理機器をできるだけ利用し、データや図面をデジタル化し、あとでの利用がしやすいようにした。

住居址平面図・同遺物分布図・同土層断面図・同遺構断面図・竈土層断面図・土層断面図・土層観察表・住居址観察表を掲載した。トレースはパソコン・デジタイザーを使用して行い、図版の版組み・文字組み込みもパソコン画面上で行った。なお、主要な遺物については、分布図中に出土位置を図示した。

また、土坑・溝については住居址に準じ、平面図・土層（遺構）断面図・土層観察表を掲載した。

(3) 遺物の記載・分析の方法

〔縄文土器の分析・記載方法〕 縄文時代の遺構は検出されず、遺物が若干検出されたのみであった。土器群は型式学的方法により分類を行い、図示した土器は残存率の高いもの・時期的特徴を有するものを選択し掲載した。また、相伴関係を把握し易いように、出土層位・出土位置を明示した。レーザーセンサーを利用した断面図化機（T&F社製クロスス）により断面図を作成する方法を用いて行った。また、拓本は掃除機を用いた拓本採取法により行った。

〔石器の分析・記載方法〕 石器の実測はコピーを利用して行った。レーザーセンサーを利用した断面図化機により断面図を作成する方法を用いて行った。全点について石器観察表を作成した。

[土師器・須恵器の分析・記載方法] 実測は長焦点法による写真実測と、レーザーセンサーを利用した断面図化機（T&F社製クロシス）により断面図を作成する方法を用いて行った。

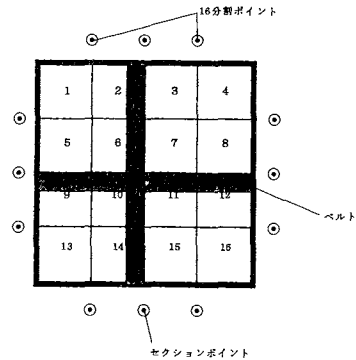
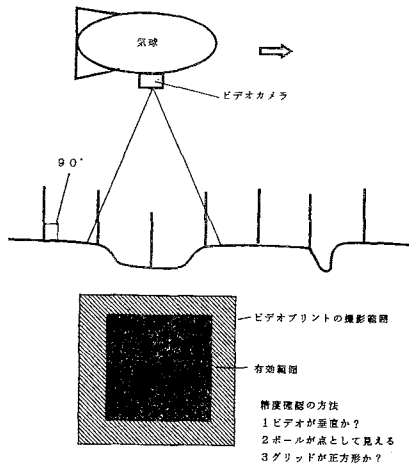
各層毎に口縁部・底部の残存するもの、時期的特徴を有するものを選択した。なお、土師器・須恵器は、坂口・三浦編年（坂口・三浦 1986）に準拠し、さらに最近の調査成果を踏まえ、時期を決定した。

[鉄製品の分析・記載方法] 鉄製品は実測図と観察表を示し、簡単な所見を記載した。

[編み物石の分析・記載方法] 編み物石については、長さ・幅・厚さ・重量を計測し、これをもとに計測値グラフを示した。

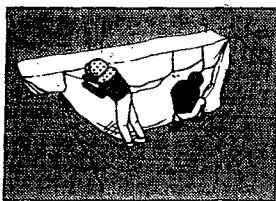
(大工原 豊)

ビデオによる実測

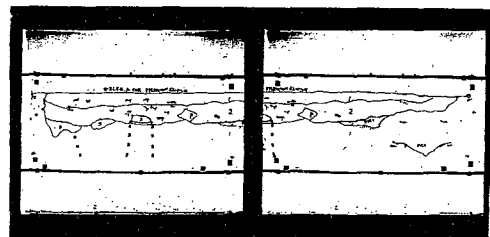


2 住居址の16分割の方法と各区の位置

1 航空ビデオ利用による平面図作成法



3 土層転写法



4 土層断面図ベタ焼き (1/40)

A 図 調査の方法

Ⅲ 遺跡の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

安中市は、群馬県西部に位置し、関東と長野県を結ぶ交通の要路にあたる（第1図）。碓氷峠付近を水源とする碓氷川が西から東へ流れ、市域を南北に分断する。また、碓氷川の北側にはこれと並行して九十九川が流れ、安中市東部で碓氷川に合流する。北方を秋間丘陵によって、群馬郡倉淵村および榛名町と境とし、西方はその分岐丘陵である後閑丘陵によって、碓氷郡松井田町と境としている。さらに、東方および東南方には、富岡市より高崎市につらなる岩野谷丘陵が分布し、南方には碓氷川によって、形成された河岸段丘をへだてて富岡市と境とする。

野殿地区は安中市の南東部に位置し、碓氷川の右岸（南岸）の丘陵上にあたる。この丘陵は岩野谷丘陵と呼ばれるもので、高崎観音山方面に連なり、南側は鑛川によって浸食されている。基盤は第三紀富岡層群であり、その上部を野殿集塊岩により厚く覆われている。山形は老年末期の様相を示しており、隆起準平原的な地形を呈している。また、東に岩井川、西に天神川が流れ、これらの河川に浸食され、東西は急峻な斜面によって隔絶されている。北側も下位段丘との間に急峻な斜面が存在し、下位段丘面との比高は約70mを計る。しかし、丘陵の上面は比較的緩やかな台地的な地形を呈している。

今回調査した堀谷戸遺跡の所在する場所は、この野殿地区の中央やや西に位置する（第2図）。西へ向かって舌状台地がいくつも延びており、その間は浸食され谷地を形成する。それぞれの谷頭には湧水が認められるが水量は少ない。「堀谷戸」という字名は、こうした谷地に由来すると推定される。

（大工原 豊）

2 歴史的環境

本遺跡の周辺に存在する遺跡について概観する。岩野谷地区での発掘調査は、西殿遺跡（2）と野殿北屋敷（3）の調査があるだけであり、大部分は不明である。詳細分布調査の結果によれば、野殿地区の平坦部分には古墳時代～平安時代の遺物散布地が面的に存在しており、堀谷戸遺跡と類似した集落遺跡が点在していたと推定される。なお、弥生時代まで遡る遺跡は存在しておらず、この地区への農業集落の進出は古墳時代（6世紀代）と推測される。碓氷川下位段丘面に相当する岩井地区では、古墳時代～平安時代にかけての遺物散布地が広く存在しており、大規模

な集落の存在が推定される。岩井西ノ平地区では奈良・平安時代の土師器・須恵器が出土した記載が『安中市誌』（1964年）にみられ、集落の一部と推定される。こうした岩井地区の集落遺跡は『和名抄』に記載のある「石井郷」の中心的部分に相当すると推察される。そして、本遺跡をはじめとする野殿地区の古代集落遺跡も「石井郷」の一部を構成していたと推測される。

野殿地区に存在する古墳としては、本遺跡の北東約1kmの位置に所在する野殿天王塚古墳（旧岩野谷村56号墳：4）が知られている。この古墳は大形円墳で横穴式石室が開口しており、6世紀後半期のものである。この時期の本地域の有力豪族の古墳と考えられている。また、野殿地区では他に東部（字屋敷前）に2基の古墳（5・6）が存在するのみであり、古墳の数は少ない。

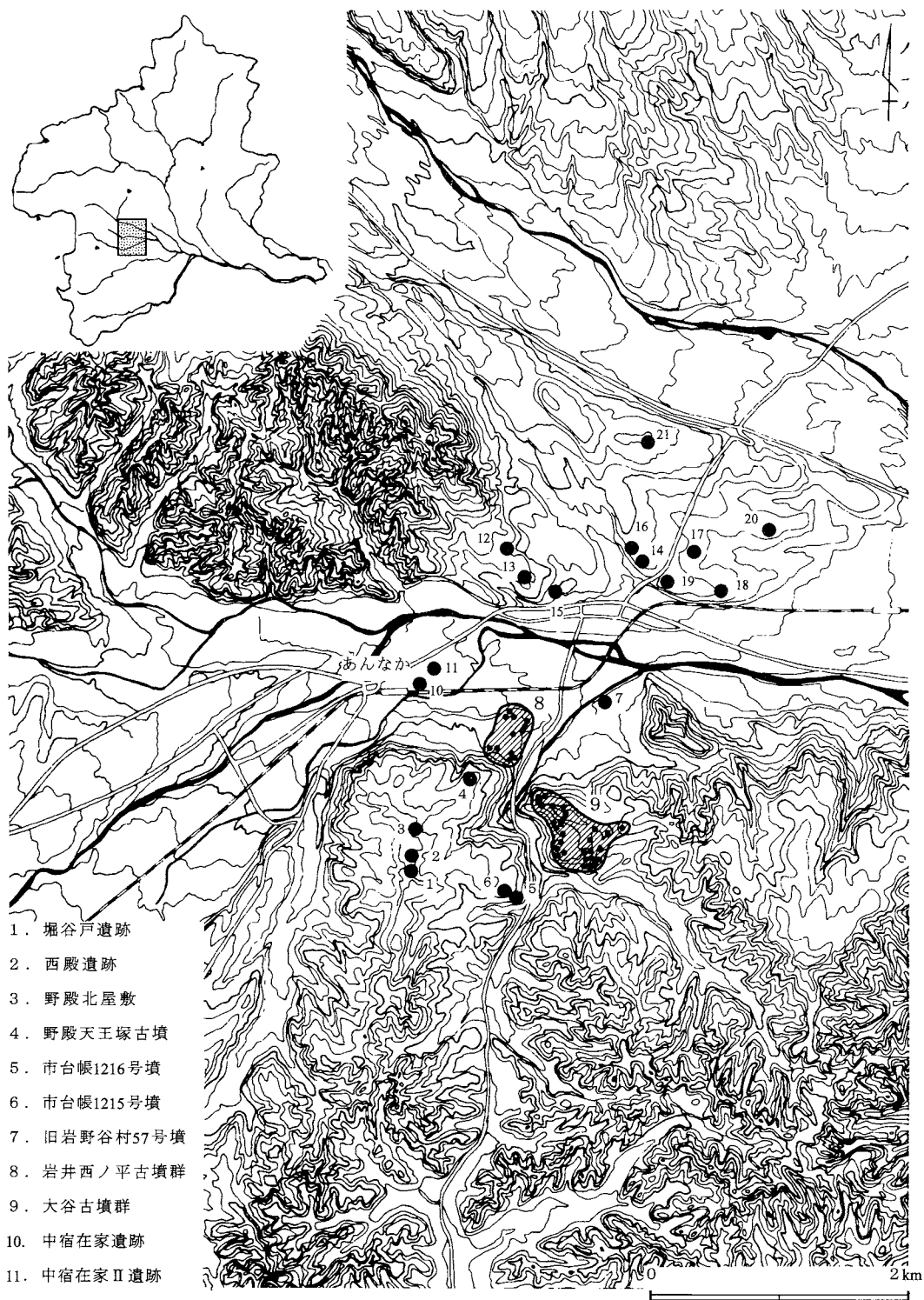
しかし、野殿地区の北東の下位段丘面に位置する岩井地区には多数の古墳が存在している。大形円墳としては旧岩野谷村57号墳（7）がある。『上毛古墳綜覧』（1935年）によれば玉・鏡・刀が出土しているとの記載があり、野殿天王塚よりも古い時期の有力豪族の古墳と推定される。

また、野殿地区の東方の下位面の台地上には十数基から成る岩井西ノ平古墳群（8）が存在している。そして、岩井川を挟んで東に位置する丘陵上には30数基からなる大谷古墳群（9）が存在している。ちなみに『上毛古墳綜覧』には旧岩野谷村に71基の古墳が登録され、野殿地区16基、大谷地区16基、岩井地区39基とある。

古代における生産基盤となる水田址については、野殿地区の北方の下位段丘面に当たる中宿在家遺跡（10）では、浅間B軽石直下の水田址が面的に検出されている（友廣他 1997）。また、この遺跡では中世の掘立柱建物址群が検出されている。

本遺跡の北方に存在する野殿北屋敷では、近世の屋敷跡の堀が検出されている。また、本遺跡の北東には宗泉寺があり、開基は小幡氏とされている。この地区は江戸時代には旗本小幡氏の所領であり、両者とも小幡氏に関連するものと推定される。

（大工原 豊）



第1図 本遺跡群と周辺関連遺跡

	遺 跡 名	旧	縄 文					弥生	古 墳				奈良	平安	中世	近世	
			草	早	前	中	後		晩	中	後	前					中
1	堀 谷 戸 遺 跡			*								○	○	◎	◎	△	
2	西 殿 遺 跡			*									○	○	○		
3	野 殿 北 屋 敷															○	△
4	野 殿 天 王 塚 古 墳																
5	市 台 帳 1216 号 墳																
6	市 台 帳 1215 号 墳																
7	旧 岩 野 谷 村 57 号 墳																
8	岩 井 西 ノ 平 古 墳 群																
9	大 谷 古 墳 群																
10	中 宿 在 家 遺 跡													○	◎	○	
11	中 宿 在 家 Ⅱ 遺 跡													○	◎		
12	古 城 遺 跡	◎												○	◎		
13	板 鼻 城 遺 跡														◎		
14	立 的 塚 (荒 木 山)																
15	旧 板 鼻 町 4 号 墳																
16	屏 風 岩 遺 跡																
17	観 音 塚 古 墳																
18	八 幡 二 子 塚 古 墳																
19	八 幡 遺 跡								◎	◎	◎	◎					
20	七 五 三 引 遺 跡																
21	若 田 遺 跡																

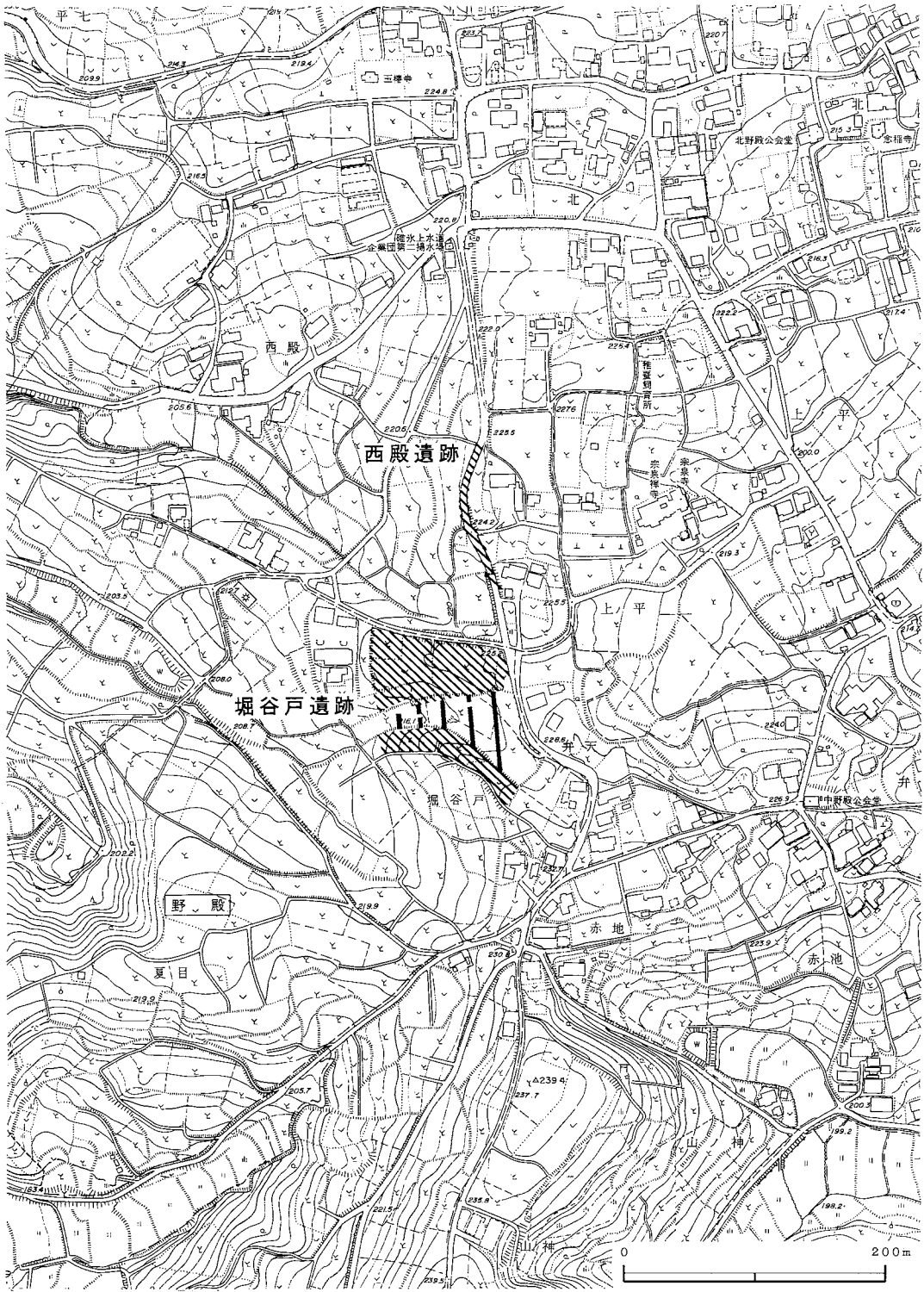
◎ 住居5軒以上・古墳・記念物

○ 住居5軒以下・大溝・水田・畑など

△ 遺構有り(土坑・溝など)

* 遺物のみ

第2表 周辺遺跡一覧表



第2図 遺跡位置図

2 層序

本遺跡の基本層序は第3図のとおりである。遺構の存在する台地部分では、安中市の基本層序 I a 層（現在の表土層）の直下に、V 層（黄褐色粘質土層）、VI 層（黄色軽石層）が堆積しており、その間の層序は欠落していた。VI 層は浅間板鼻黄色軽石層（A s - Y P : 1.3 万年前）に相当する。I a 層は浅く大部分は 10~15cm 程度の層厚であった。しかし、北調査区の南西部分では比較的層が厚く堆積しており、この場所に存在していた H-32 号住居址の覆土上層には II b 層（浅間 B 軽石純層 : A s - B ・ 1108 年降下）が堆積していた。

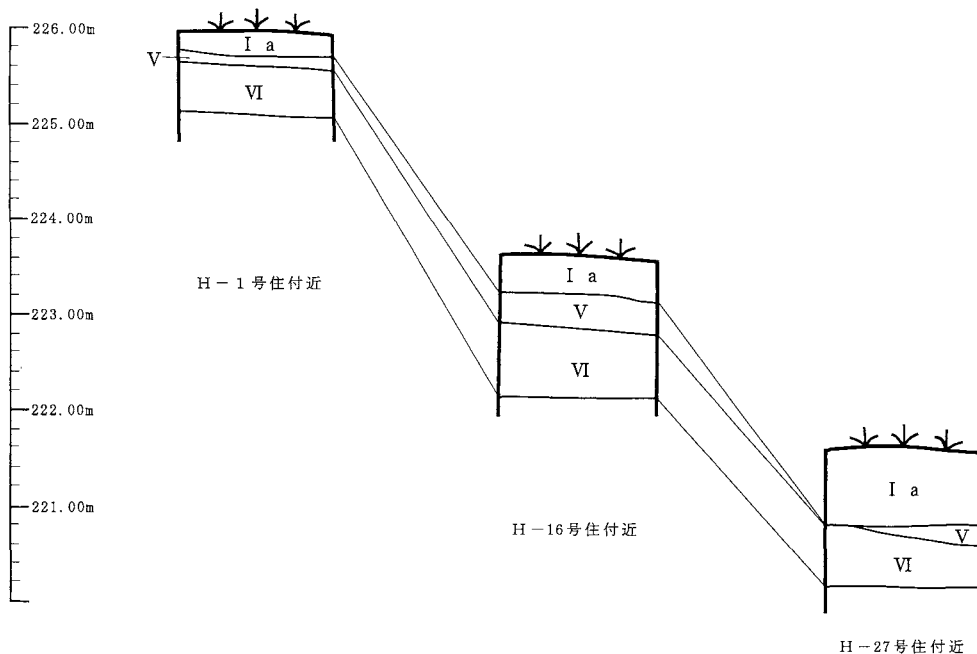
谷部分を含め、一般的に堆積している I b 層（浅間 A 軽石純層 : A s - A ・ 1783 年降下）は全く確認されなかった。II a 層は中世の溝覆土に認められる。III 層は古墳時代~平安時代の遺構覆土に堆積している。IV 層は縄文時代の土坑覆土に認められる。なお、北東に隣接する西殿遺跡では本遺跡で欠落している I b 層~IV 層までが堆積している。

以上のように、本遺跡の土層堆積状態は非常に悪いが、これは人為的な台地の削平が、中・近世の時代に行われていたためと推定される。

（大工原 豊）

層名	色調	しまり	粘性	混入物			備考
				A s - A	A s - B	A s - Y P	
I a 層	黒褐色土層		△	△	○		
V 層	黄褐色粘質土層	IV < V	◎	◎			※
VI 層	黄色軽石層	V < VI	×	×			◎ A s - Y P 純層

第3表 基本層序土層説明



第3図 基本層序柱状図

IV 遺構と遺物

1 遺跡の概要

今回の発掘調査によって検出された遺構は古墳時代～平安時代が中心である。この時代の住居址は37軒であり、6世紀後半に集落が形成されはじめ、7世紀第1四半期にピークを迎える。しかし、8世紀前半～9世紀前半までの約150年間は集落がほとんど途絶しているようである。そして、9世紀後半になると再び集落が形成され、小規模な集落が9世紀末まで約50年間継続する。その後の時期の遺構・遺物は全く検出されなくなるので、この時期をもって集落は廃絶されたものと推定される。集落が断絶する8世紀～9世紀前半までの時期は、何らかの社会的・経済的な要因が存在していたと推察される。

通常の竪穴住居以外に、6世紀後半には工房的な施設を備えていたと推定される住居址（H-2住）が検出されている。また、最も住居数が多い7世紀初頭の時期では、一辺8mの大形住居址（H-16住）が台地中心の立地条件の良い場所に構築されており、この支群の中心的な存在であったと判断される。この住居址を中心に他の住居址が配置されており、集落形態を知ることができる。

なお、住居以外の遺構としては、竪穴状遺構2基、井戸状遺構2基、土坑9基などが検出されている。

出土した遺物は、土師器（甕・坏・高坏）、須恵器（甕・碗・皿・壺）、紡錘車、玉、砥石、編物石（薦編石）、鉄製品などがある。土器は遺棄された状態で共伴関係が分かる事例が存在する。なお、9世紀後半の時期では、墨書土器が検出されている。

中・近世の遺構としては、舌状台地を縦（東西）に区画する溝が2条検出された。断面形態と水流の痕跡はないことから、「シシ堀」等の機能をもった耕地の維持・管理のための遺構である可能性が高い。

（大工原 豊）

2 縄文時代の遺物

(1) 概要

縄文時代の遺物は全て住居址覆土、溝覆土、グリッドといった遺構外から検出された。主な遺物は縄文時代前期と後期の土器片少量と石器20点である。しかし、縄文土器については、破片資料が縄文あるいは無文で、しかも摩滅したものが多いため、時期が判然としないものがほとんどである。このうち時期が特定できるものについて図示した。また、石器についても特徴のある器種に限定して図示した。

(2) 縄文土器

1は胴部破片で半截竹管による矢羽状の集合沈線と平行沈線が施されている。縄文時代前期後半諸磯c式に属すると思われる。2と3は胴部破片で単節RLの斜縄文が施されている。縄文時代前期に属すると思われる。4は口縁部破片で波頂部に円筒状の突起が付され、押圧あるいは刺突を加えた隆帯が施される。また、口縁に沿って3本の沈線(凹線)が施される。縄文時代後期後半高井東式に属すると思われる。5は口縁部破片で口唇部に刻み目をもつ。沈線で区画された内側には磨消縄文が施されている。縄文時代後期後半加曽利B式に属すると思われる。

(3) 石器

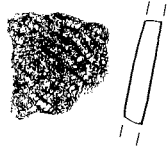
検出された石器は石鏃1点、打製石斧5点(完形1点、破片4点)、剥片A類2点、剥片B類11点、玦状耳飾1点である。石材組成は黒曜石2点、チャート1点、頁岩14点、安山岩2点、瑪瑙1点である。

6は黒曜石製の石鏃I形態(凹基無茎)である。打製石斧はII形態(平面短冊形・両面調整・断面レンズ状・両刃)3点、IIIb形態(側縁部に袂入部が存在)1点、不明1点である。全て頁岩である。8はII形態の刃部部分である。使用による摩耗痕が観察される。9はIIIb形態の完形品で、断面三角形を呈し、刃部は両刃で両端に存在する。表裏全面に使用による摩耗痕が、中央部には装着痕が観察される。同様な形態が天神原遺跡に存在することから、後期後半に属すると思われる。7は瑪瑙製玦状耳飾の欠損品である。研磨により円形に整形されている。上半部には径3mmの穿孔が観察される。形態的特徴から比較的古い時期のものと推定され、縄文時代前期中葉頃のものとして推定される。9の打製石斧と7の玦状耳飾以外は形態的特徴に乏しいため、帰属時期は判然としない。

(井上 慎也)



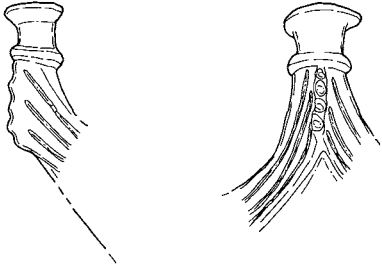
H-32号住5区2層 1



H-16号住1区1層 2



H-16号住12区1層 3



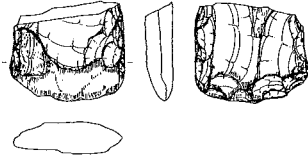
M-2号溝10区上層 4



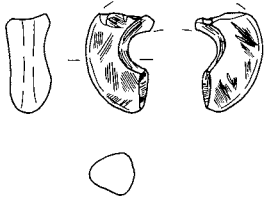
H-36号住11区1層 5



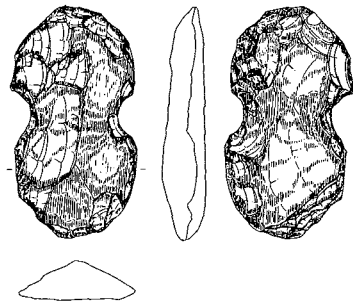
H-3号住16区2層 Ob 6



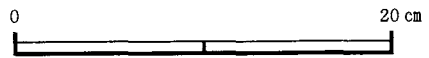
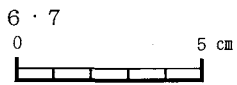
H-16号住16区1層 Sh 8



H-13号住5区3層 Mh 7



M-1号溝26区上層 Sh 9



第4図 縄文時代の遺物実測図

3 古墳時代～平安時代の遺構と遺物

(1) 遺構

[住居址] (第5図～第34図)

全部で37軒検出された。各住居址の諸属性は第4表～第5表のとおりである。時期別の内訳は、6世紀後半8軒、6世紀末～7世紀初頭15軒、7世紀第1四半期3軒、7世紀第3四半期・第4四半期・8世紀前半各1軒、9世紀後半7軒、時期不明1軒である。

台地の平坦部分に存在する住居址は、竪穴が浅いものが比較的多い。特に、H-1・2・5～9号住居址の存在する調査区東部分で、その傾向が顕著であり、この部分を中心に後世の削平行為が行われていたと判断される。また、南斜面に存在する住居址は、「ちり取り形」に南側が削平されている場合が多く、東竈の場合、竈の上部が失われているものが目立つ。

本遺跡の住居址では、竈脇の土坑が柱穴状に小さく深いものが多いことが特徴的である。こうした土坑が存在するものは、ほとんどが6世紀末～7世紀初頭のものであり、時期的な特徴とも考えられる。この施設の機能・用途と関連して注目される。

以下、特徴的な住居址について、調査所見を述べる。

H-2号住居址 (第6図) この住居址は床面中央部から南部に多数の柱穴が存在しており、また、南側には張出も存在する。一般的な住居址とは構造的に異なっており、何らかの施設が設置されていたと判断される。また、土坑(D-1)の覆土中には焼土が混入しており、通常の内土坑とは差異が認められる。このように柱穴が多数存在する事例は、下塚田遺跡(中野谷地区)における鍛冶工房址(H-3、H-4)と類似している。出土遺物から6世紀後半のものと推定される。

H-16号住居址 (第16図) 本遺跡最大規模の住居址であり、一辺8mの正方形を呈する。主柱穴は4本であるが、これ以外に補助的な柱穴が2基存在している。竈は北中央に存在し、すぐ東にはしっかりとした土手状の縁の付いた土坑(D-1)が存在している。この土坑の両脇には鉢・甕下半部が設置されていた。規模・位置・施設等からみて、この集落の指導的立場の人間が居住していた住居址と考えられる。出土遺物から7世紀第1四半期のものとみられる。

H-26号住居址 (第22図) 標準的な規模の住居址であるが、南側に張出部を有する。張出部の両脇に土坑(D-1・2)が存在している。こうした張出部を有する住居址は、諏訪ノ木遺跡(未報告)で検出されている例がある。出土遺物から6世紀末～7世紀初頭のものともみられる。

住居名	平面形態	形態	規模 (m・m ²)		貼床	南北軸方向 N→E (°)	床下 土坑	柱穴	方位 位置 N→E (°)	竪 構造	時期
			南北	東西							
H-1号住	中形縦長方形	L	4.0	3.1	0.2	12.40	-	-	東	A	9 C後半
H-2号住	中形正方形	B2	3.8	4.0	0.4	15.20	○	4	東	A	6 C後半
H-3号住	中形縦長方形	F	4.1	3.4	0.4	13.94	○	-	東	A.石	6 C末～7 C初
H-4号住	小形正方形	H	2.8	3.2	0.2	8.96	○	-	北	A	6 C末～7 C初
H-5号住	中形橫正方形	F	(2.2)	(3.4)	0.1	(7.48)	○	-	東	A.石	6 C末～7 C初
H-6号住	中形正方形	E	4.4	4.8	0.1	21.12	○	4	東	A	6 C末～7 C初
H-7号住	中形正方形	F	3.6	3.8	0.2	13.68	○	4	東	A.石	6 C末～7 C初
H-8号住	中形正方形	F	4.0	4.1	0.3	16.40	○	4	北	A.石	6 C末～7 C初
H-9号住	中形正方形	B1	3.9	4.4	0.2	17.16	○	-	西	A	6 C後半
H-10号住	小形橫長方形	G1	2.8	3.9	0.2	10.92	○	-	北	A.石	6 C末～7 C初
H-11号住	中形縦長方形	G1	-	3.6	0.2	-	○	-	-	-	7 C ?
H-12号住	中形縦長方形	L	(2.2)	3.0	0.2	(6.6)	○	-	東	A.石	9 C後半
H-13A号住	中形縦長方形	L	3.6	3.0	0.3	10.80	○	-	東	A.石	9 C後半
H-13B号住	中形正方形	M	3.0	3.2	0.3	9.60	○	-	東	A	9 C後半
H-14号住	中形橫長方形	K	(1.8)	4.0	0.1	(7.2)	○	-	東	A	9 C後半
H-15号住	中形橫長方形	G1	3.0	3.6	0.2	10.80	-	-	東	A	7 C第1 四半期
H-16号住	大形正方形	D	7.2	8.0	0.4	57.60	○	4	北	A.石	7 C第1 四半期
H-20号住	大形正方形	A	5.4	6.0	0.2	32.40	○	3	西	A	6 C後半
H-21号住	不明		(0.4)	(4.5)	-	(1.8)	-	-	-	-	不明
H-22号住	大形正方形	A	6.8	6.4	0.4	43.52	○	4	北	A	6 C後半

平面形態 大形：6 m以上 中形：4～6 m 小形：4 m以下 竪構造 A：□△+黑色土

第4表 古墳時代～平安時代住居址観察表 (1)

住居名	平面形態	形態	規模 (m・㎡)				貼床	南北軸方向 N→E (°)	床下 土坑	柱穴	電 位置	電 南北軸方向 N→E (°)	電 構造	時期
			南北	東西	深さ	面積								
H-23号住	小形縦長方形	N	2.7	2.4	0.2	6.48	○	0	-	-	東	90	A. 石	9 C後半
H-24号住	中形正方形	E	4.8	4.8	0.6	23.04	○	345	-	3	北	0	A	6 C末~7 C初
H-25号住	小形横長方形	C	2.2	2.9	0.2	6.38	○	355	-	-	北	0	A	6 C後半
H-26号住	中形横長方形	G2	3.0	4.4	0.2	13.20	○	340	-	3	東	60	A	6 C末~7 C初
H-27号住	中形正方形	E	4.4	4.4	0.4	19.36	-	320	-	-	東	50	A	6 C末~7 C初
H-28号住	中形正方形	E	4.3	4.4	0.2	18.92	○	15	-	4	北	0	A	6 C末~7 C初
H-29号住	小形正方形	H	3.0	3.0	0.1	9.00	-	338	-	-	東	60	A	6 C末~7 C初
H-30号住	中形正方形	B1	3.8	4.0	0.3	15.20	○	324	-	-	東	53	A. 石	6 C後半
H-31号住	中形正方形	B1	4.0	3.8	0.3	15.20	○	336	-	4	西	247	A	6 C後半
H-32号住	中形正方形	J	4.4	4.6	0.6	20.24	○	0	-	-	東	90	A. 石	9 C後半
H-33号住	中形正方形	I	3.6	3.2	0.1	11.52	○	334	-	-	東	103	A	7 C第3 四半期
H-34号住	中形縦長方形	I	4.5	4.2	0.6	18.90	○	337	-	-	東	74	A	7 C第4 四半期
H-35号住	中形正方形	E	4.2	4.2	0.6	17.64	○	359	-	4	東	90	A. 石	6 C末~7 C初
H-36号住	大形正方形	D	6.7	6.1	0.2	40.87	○	355	-	3	東	90	A. 石	7 C第1 四半期
H-38号住	中形横長方形	C	2.6	4.0	0.2	10.40	○	355	-	-	東	85	A	6 C後半
H-39号住	中形横長方形	G	3.6	4.0	0.4	14.40	○	352	-	-	北	344	A	6 C末~7 C初
H-40号住	中形正方形	I	-	3.8	0.4	-	○	345	-	-	東	75	A	8 C前半

平面形態 大形：6m以上 中形：4~6m 小形：4m以下 電構造 A：□—△+黑色土

第5表 古墳時代~平安時代住居址観察表(2)

H-32号住居址（第27図） この住居址は遺存状態が良好であった。この住居址は堅穴が構築時のままの状態と推定され、壁上端部には垂木尻が埋め込まれていた浅い柱穴が多数検出されている。堅穴は0.7mの深さを計る。この住居址は床面に主柱穴は存在しておらず、垂木を合掌させた状態で屋根を保持させていたものとみられる。また、覆土の観察では土屋根の崩落した痕跡は確認できなかった。

なお、H-32号住居址は9世紀後半のものであるが、浅間B軽石層（II b層：1108年降下）が覆土上部に一次堆積しており、廃絶後約200年間は住居堅穴が窪地として残っていたことが確認されている。ここでは、10世紀以降は集落が存在しておらず、放置されていたと推定される。安中市域での調査事例で、浅間B軽石層が遺構覆土中に一次堆積しているのは、住居址等堅穴のある遺構では下塚田H-4号工房址（大工原 1990）、細田遺跡H-1号住居址などで検出されており、いずれも9世紀後半の遺構である。また、中野谷地区遺跡群の「牧」に関連する大溝では、すべて覆土上層に浅間B軽石が堆積しており、少なくとも同じ時期まで遡る遺構と推定される。県内では廃絶後放置された9世紀後半の住居址が1,000年以上窪地として残存していた事例が六合村熊倉遺跡で確認されている（能登他 1984）。そして、「人為的改変」や火山災害などの「突発的な出来事のないかぎり、凹地は凹地のまま地表面として永く残される」ものと考えられている。本遺跡の事例も廃絶後の埋没過程を知る上で重要な資料となろう。

〔堅穴状遺構〕（第28図・第33図）

堅穴状遺構は2基存在する。諸属性は第6表のとおりである。

T-1号堅穴状遺構（第28図） 一辺約2mの正方形を呈する小型の堅穴で、中央に1基・北壁際に2基の柱穴が存在している。規模・形態からみて、住居址とは考えられず、何らかの補助的施設であったと推定される。

T-2号堅穴状遺構（第33図） 竈が検出されていないことから堅穴状遺構としたが、住居址であった可能性が高い。H-39号住居址により壊されており、これより古い遺構である。

〔土坑〕（第35図）

土坑としたものは全部で9基検出された。不整形のものが多く、機能・用途も判然としない。

〔井戸状遺構〕（第36図）

井戸状を呈する大穴が2基検出されている。いずれも湧水がないことから、井戸本来の機能は有していない。ただし、一時的に貯水すること可能であり、貯水施設の可能性もある。また、穴

蔵的な貯蔵施設の可能性もある。

I-1号井戸状遺構 直径4.2mの円形で、深さは2.1mである。底面は平坦で断面形は箱形を呈する。覆土は自然堆積の状態を示しており、土層堆積状態をみる限りでは明確な掘り直しの痕跡（不整合面）は存在していない。底面中央には一部弱い焼土部分が存在しており、底面で火を焚いたことがあることが判明している。また、北側面下部（底面から約40cmのAs-BP層群部分）にはオーバーハングして横穴状を呈する部分が存在している。これは水面がこのレベルに存在し、水によって浸食された状態を示している。

遺物としては3層から7世紀初めの土師器が出土しているので、6世紀末～7世紀前葉の遺構と推定される。

I-2号井戸状遺構 直径2.4mの円形を呈し、深さは1.8mを計る。断面形はU字形を呈する。底面からは楕円形の川原石が1個検出されている。覆土の堆積は一般的な状態であり、自然埋没と推定される。

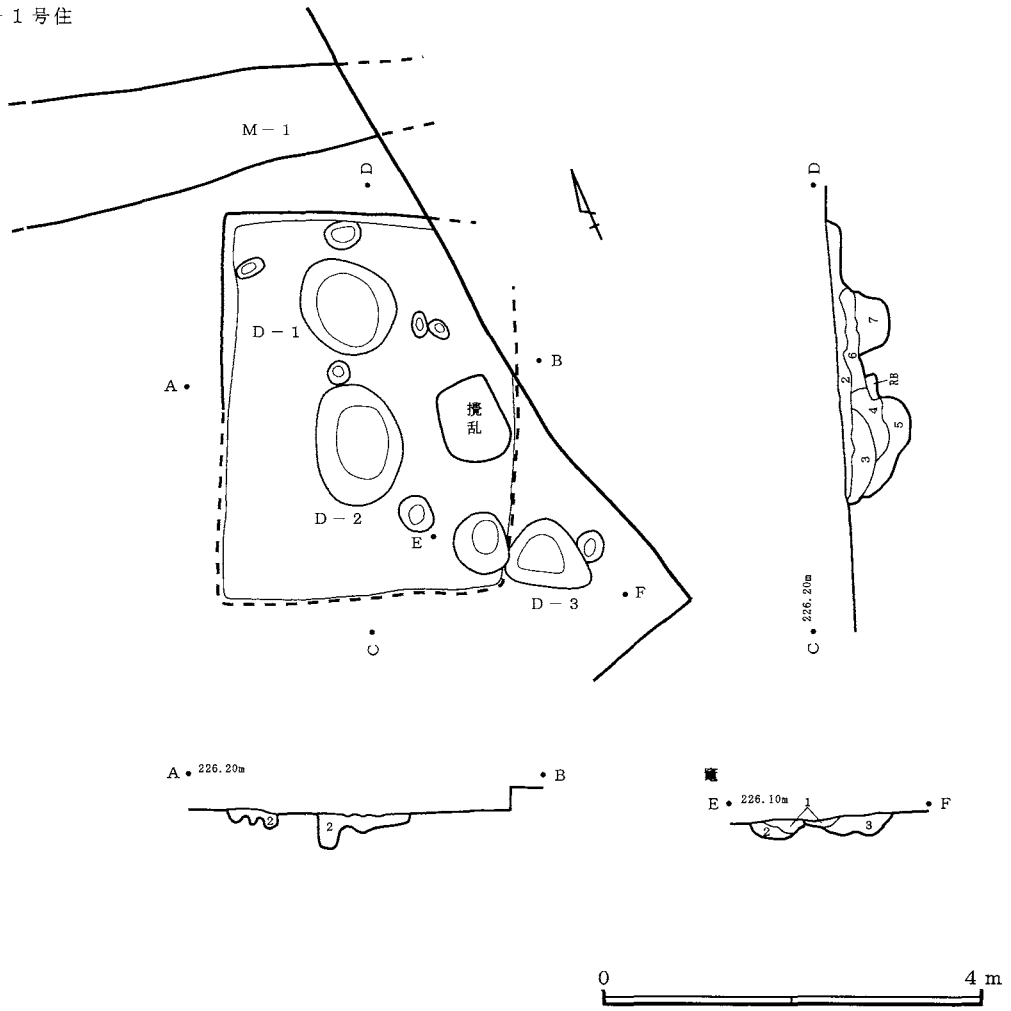
(大工原 豊)

遺構名	平面形態	規模 (m・㎡)				南北軸方向 N→E(°)	柱穴	時期
		南北	東西	深さ	面積			
T-1号竪穴	小形正方形	2.0	1.9	0.2	3.8	0	3	不明
T-2号竪穴	小形横長方形	2.0	1.4	0.2	2.8	345	—	不明
I-1号井戸		4.1	4.2	2.1				6C末～7C初
I-2号井戸		2.4	2.3	1.8				不明

規模 小形：4m以下

第6表 竪穴状遺構・井戸状遺構観察表

H-1号住

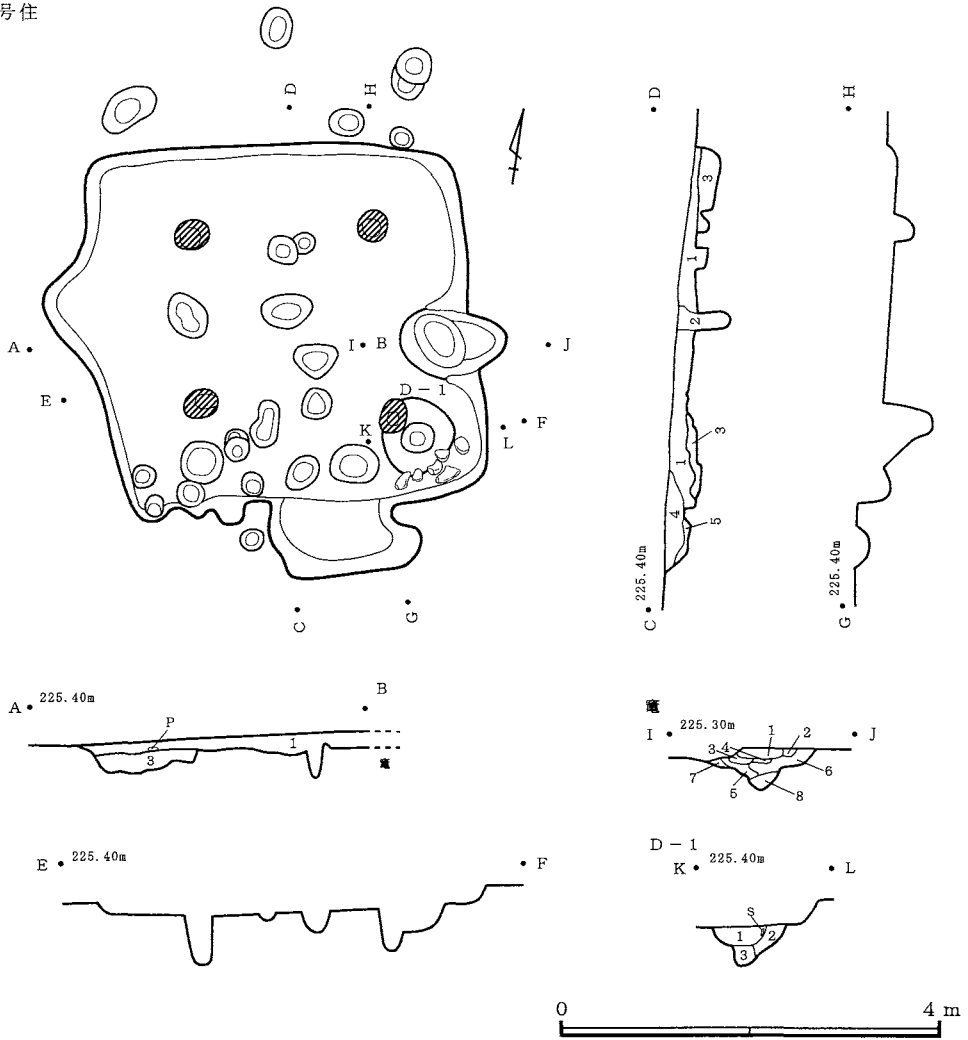


H-2 H-1号住

遺構名	層番 層名	色調	しまり	粘性	混入物					
					RP	RB	YP	C	焼土	
竈	2	黒褐色土層10YR	1~2	△	△	※	※	※	×	×
	3	黒褐色土層10YR	2<3	△	△	△	※	※	×	×
	4	黄褐色土層10YR	2<4	○	○	※	△	○	×	△
	5	黄褐色土層10YR	4~5	△	△	△	※	◎	×	×
	6	褐色土層10YR	5>6	×	×	△	※	○	×	×
	7	褐色土層10YR	6<7	×	×	△	※	◎	×	×
	1	にぶい赤褐色土層5YR		△	△	△	△	△	※	△
	2	黒褐色土層10YR	1>2	△	△	※	※	※	×	×
	3	黒褐色土層10YR	2<3	△	△	※	※	△	×	×

第5図 H-1号住居址実測図

H-2号住

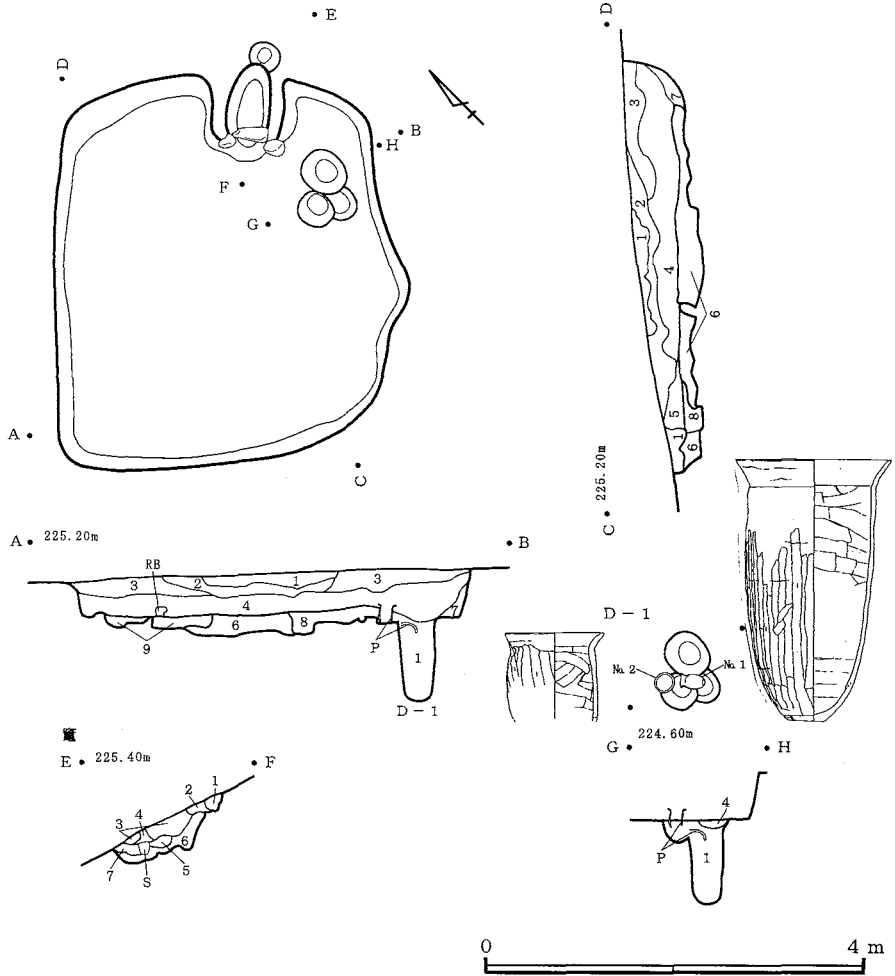


H-2 H-2号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考	
						RP	RB	YP	C		
D-1	1	黒褐色土層10YR		△	○	※	※	※	×		
	2	黒褐色土層10YR	1>2	△	○	×	×	※	×		
	3	褐色土層10YR	1<3	○	○	△	◎	○	×	貼床	
	4	暗褐色土層10YR	1<4	△	○	△	△	○	×	貼出部	
	5	褐色土層10YR	4<5	○	◎	○	○	×	×	貼出部	
竈	1	黒褐色土層10YR		×	○	×	※	※	△	×	
	2	褐色土層10YR	1<2	×	○	△	△	△	△	△	
	3	暗褐色土層10YR	2>3	×	○	○	※	※	※	△	
	1	黄褐色土層		○	◎	◎	◎	※	×	※	竈天井
	2	暗褐色土層7.5YR	1>2	△	△	※	×	×	×	※	
	3	黒褐色土層10YR	1>3	△	○	※	×	※	※	※	
	4	褐色土層10YR	3<4	△	△	△	×	※	×	※	
	5	暗褐色土層10YR	3<6	△	○	※	×	※	×	※	
6	褐色土層7.5YR	5<6	△	○	△	×	※	※	○		
7	暗褐色土層5YR	6<7	○	×	×	×	◎	×	◎		
8	黒褐色土層7.5YR	6>8	△	△	×	×	△	×	※		

第6図 H-2号住居址実測図

H-3号住

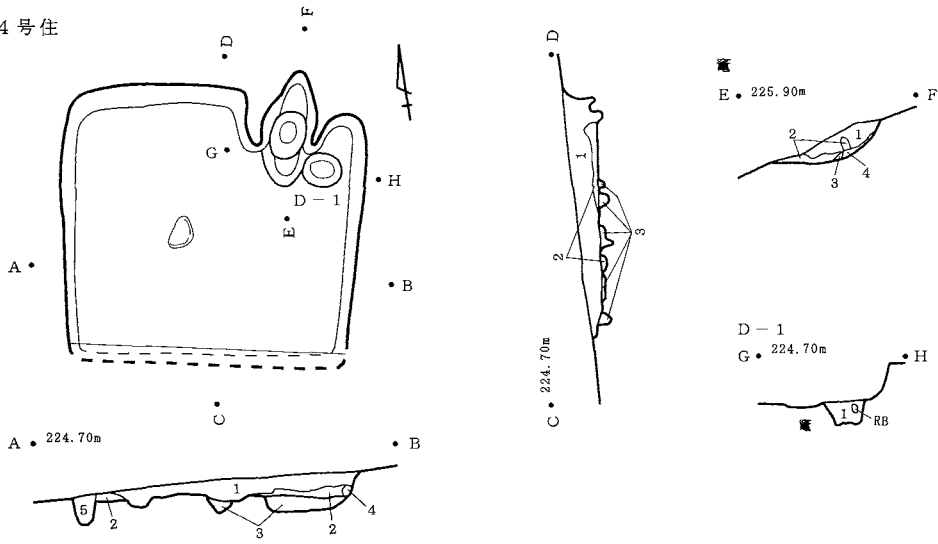


H-2 H-3号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物					備考
						RP	RB	YP	C	焼土	
竈	1	黒褐色土層10YR		△	○	×	×	※	※		
	2	暗褐色土層10YR	1<2	△	○	△	×	※	※		
	3	黒褐色土層10YR	2>3	△	○	×	×	※	※		
	4	黒褐色土層10YR	3=4	△	○	※	※	△	△		
	5	暗褐色土層10YR	4<5	△	○	○	○	△	※	○	
	6	褐色土層10YR	5<6	○	○	○	○	×	×	貼床	
	7	暗褐色土層10YR	4<7	△	○	○	※	※	×	×	
	8	黒褐色土層10YR	6>8	△	○	△	※	△	×	×	貼床
	9	黒褐色土層10YR	6>9	△	○	△	※	△	※	※	貼床
竈	1	黒褐色土層10YR		△	○	×	×	※	×	×	煙道
	2	褐色土層10YR	1<2	△	○	△	×	※	※	×	
	3	黄褐色土層10YR	2<3	○	◎	◎	◎	※	×	※	天井
	4	褐色土層10YR	3>4	○	○	○	△	※	×	※	
	5	暗褐色土層10YR	4>5	△	○	△	※	※	※	△	
	6	赤褐色土層5YR	5<6	△	△	△	※	※	※	○	
	7	暗褐色土層10YR	4>7	△	○	△	×	※	×	※	
D-1	8	明赤褐色土層2.5YR	6<8	△	△	○	×	※	×	◎	火床層
	1	黒褐色土層10YR	1<2	△	○	※	※	△	◎	×	

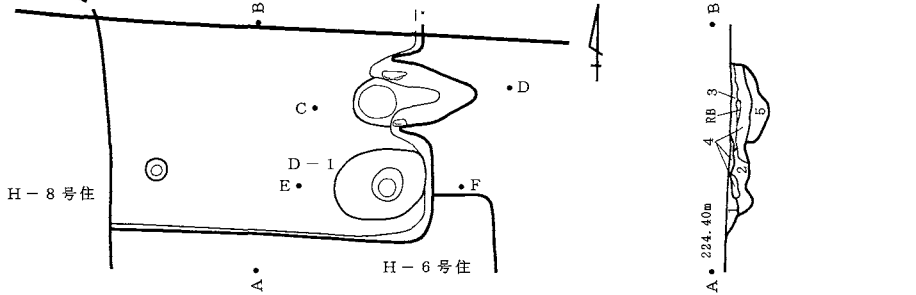
第7図 H-3号住居址実測図

H-4号住

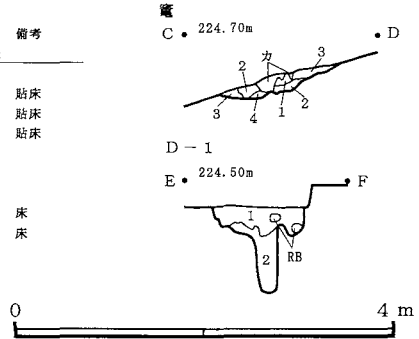


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			備考
						RP	RB	YP	
竈	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	※	※	
	2	暗褐色土層10YR	1<2	○	○	△	△	※	
	3	褐色土層10YR	2<3	○	○	△	△	△	貼床
	4	褐色土層10YR	2<4	○	○	○	△	※	
	5	黒褐色土層10YR	1>5	○	○	※	※	×	
D-1	1	褐色土層10YR		○	○	○	△	※	×
	2	赤褐色土層5YR	1<2	○	○	※	※	※	△
	3	暗赤褐色土層5YR	2>3	○	○	×	×	×	※
	4	褐色土層10YR	3<4	○	○	※	※	×	※
D-1	1	褐色土層10YR		○	○	△	△	※	

H-5号住

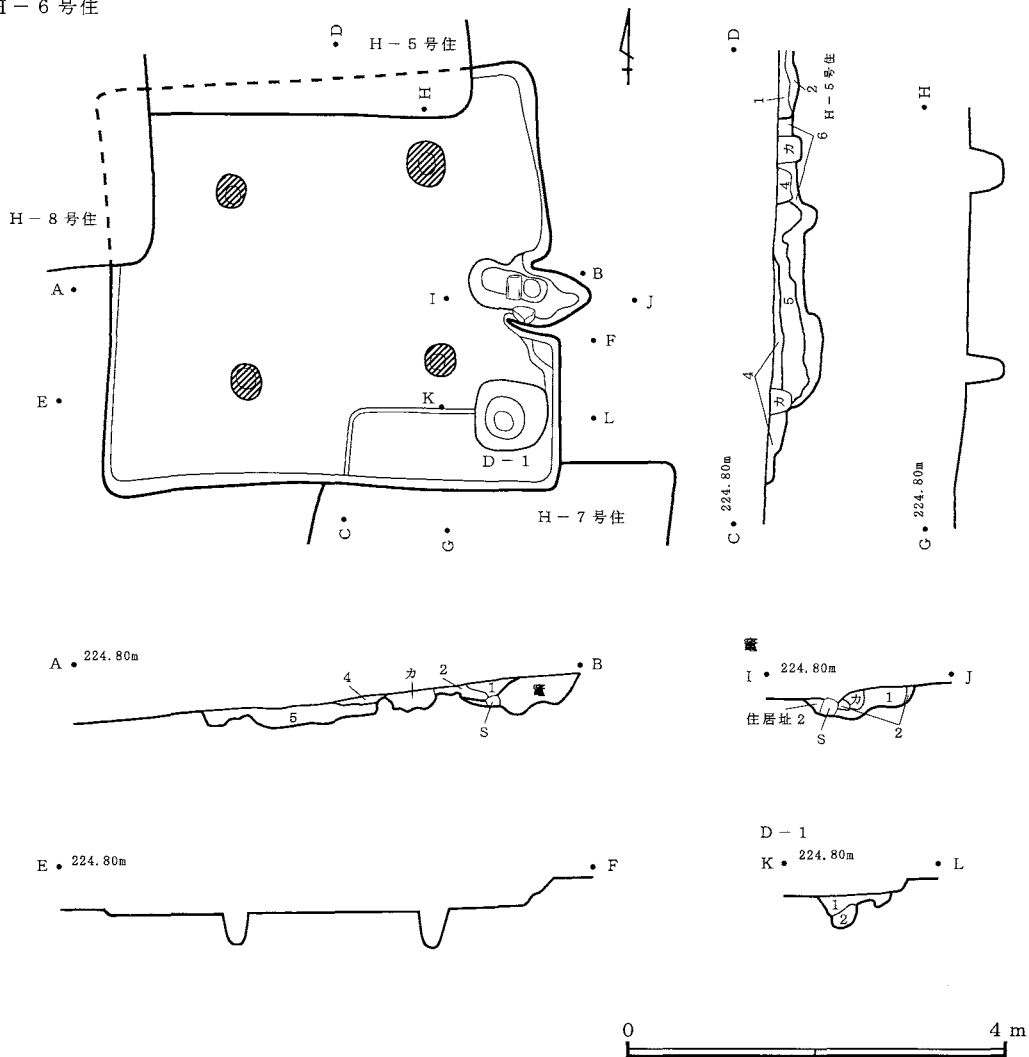


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	C 焼土	
竈	1	黒褐色土層10YR		△	○	※	※	△		
	2	黄褐色土層10YR	1<2	◎	◎	◎	◎	○		貼床
	3	暗褐色土層10YR	2>3	○	○	△	○	○		貼床
	4	暗褐色土層10YR	3<4	△	○	△	○	○		貼床
	5	黒褐色土層10YR	4>5	△	△	×	※	※		
D-1	1	赤褐色土層5YR		○	○	○	○	×	○	
	2	褐色土層7.5YR	1>2	△	△	△	×	※	×	△
	3	褐色土層10YR	2>3	○	○	△	△	※	×	床
	4	黒褐色土層10YR	3>4	△	○	※	※	×	×	床
D-1	1	黒褐色土層10YR		△	○	※	△	△		
D-1	2	黄褐色土層10YR	1<2	×	○	○	○	◎		



第8図 H-4号・H-5号住居址実測図

H-6号住

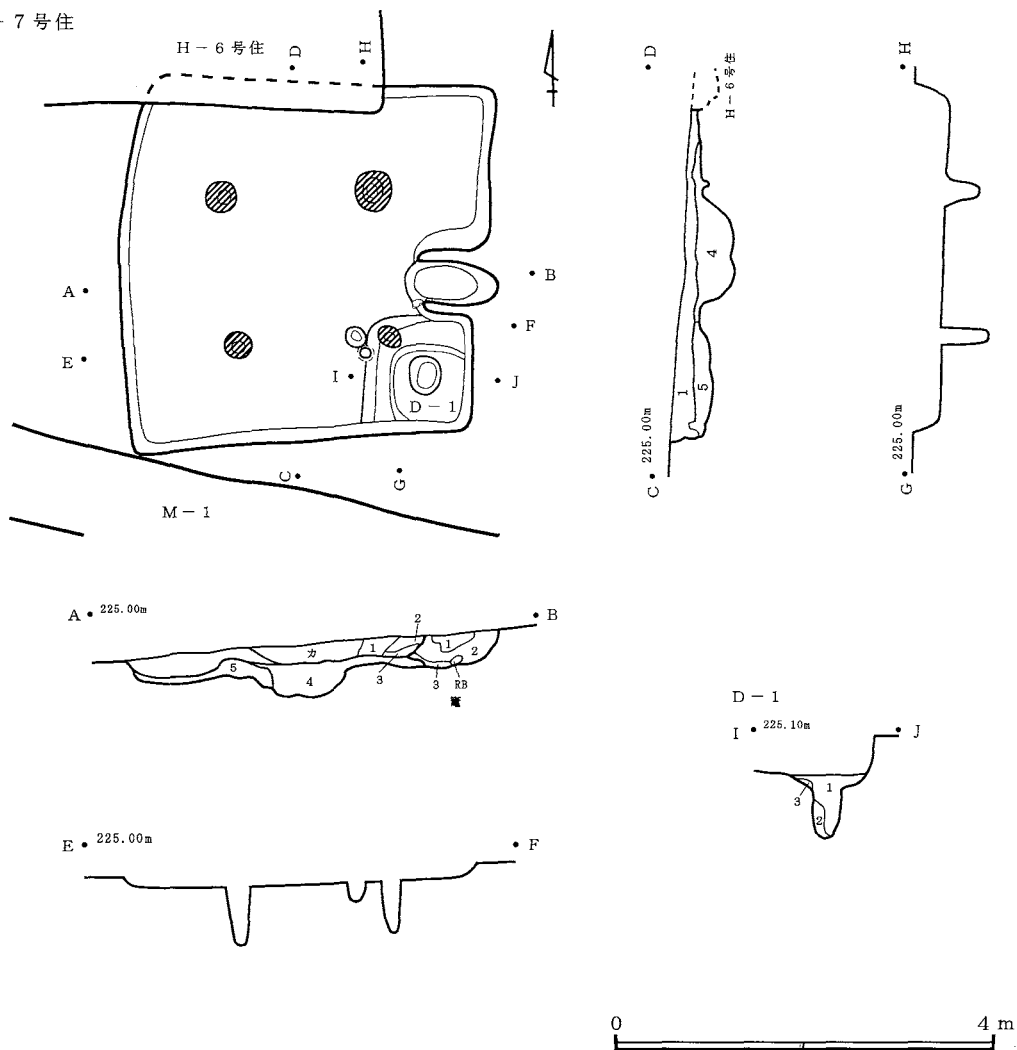


H-2 H-6号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物					備考
						RP	RB	YP	C	焼土	
竈	1	黒褐色土層10YR		△	○	※	※	※	×	※	
	2	褐色土層10YR	1 < 2	△	○	△	△	※	×	※	
	3	黒褐色土層10YR	2 > 3	△	○	×	×	※	※	×	
	4	黄褐色土層10YR	2 < 4	○	○	○	◎	◎			貼床
	5	暗褐色土層10YR	4 > 5	△	○	○	○	○			
	6	暗褐色土層10YR	5 > 6	△	○	△	○	◎			
D-1	1	赤褐色土層5YR		△	△	○	△	△	※	○	
	2	暗褐色土層10YR	1 > 2	△	○	※	×	△	×	×	
D-1	1	黒褐色土層10YR		△	○	※	※	△	※	※	
	2	暗褐色土層10YR	1 < 2	△	○	○	※	○	※	※	

第9図 H-6号住居址実測図

H-7号住

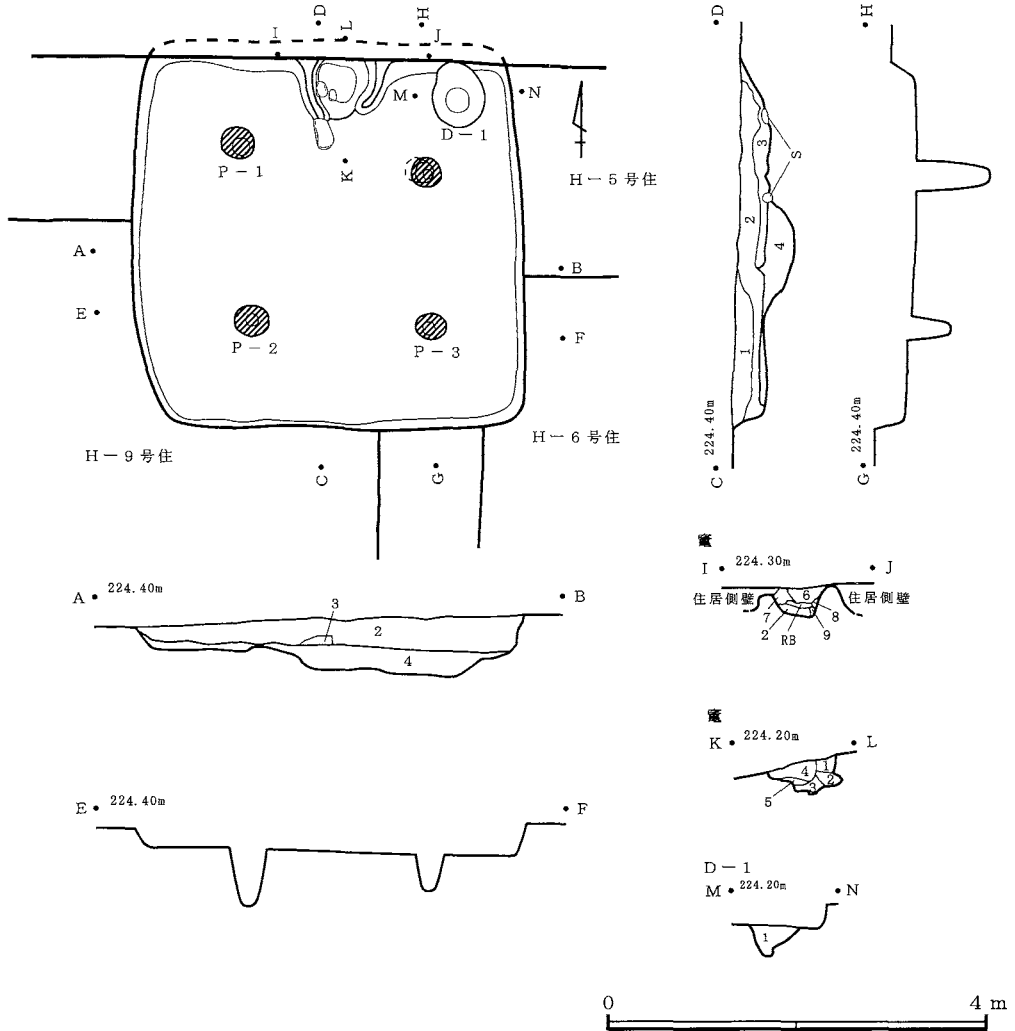


H-2 H-7号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	C	
竈	1	黒褐色土層10YR	△	○	※	※	※	※		
	2	褐色土層7.5YR	1 < 2	△	◎	◎	◎	※	※	※
	3	褐色土層7.5YR	2 > 3	△	○	△	※	※	※	※
	4	黄褐色土層10YR	3 < 4	△	○	○	◎			貼床
	5	にぶい黄褐色土層10YR	4 < 5	○	◎	○	○	※		貼床
D-1	1	黄褐色土層10YR	△	◎	◎	◎	※	×	×	
	2	赤褐色土層5YR	1 > 2	△	△	△	※	※	○	
	3	褐色土層10YR	2 > 3	△	△	△	※	※	×	※
D-1	1	黒褐色土層10YR	△	△	※	※	※	※		
	2	暗褐色土層10YR	1 < 2	△	△	○	△			
	3	黄褐色土層10YR	2 < 3	○	○	○	○	※		

第10図 H-7号住居址実測図

H-8号住

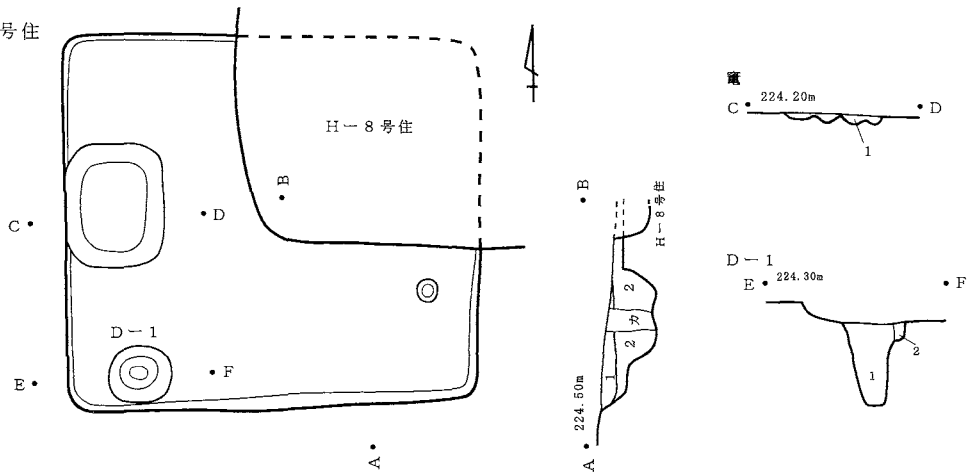


H-2 H-8号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	C	
竈	1	黒褐色土層10YR		○	○	※	※	△		
	2	暗褐色土層10YR	1<2	○	○	△	△	△		
	3	黒褐色土層10YR	2<3	○	○	※	※	△		
	4	褐色土層10YR	3<4	○	○	○	◎	○		貼床
	1	褐色土層7.5YR		△	△	△	※	△	×	△
	2	赤褐色土層5YR	1<2	△	△	△	※	△	×	○
	3	暗褐色土層10YR	2<3	△	△	※	※	×	×	△
	4	黄褐色土層10YR	3<4	○	◎	◎	◎	※	×	×
	5	黄褐色土層10YR	4<5	◎	◎	○	◎	※	×	×
	6	褐色土層7.5YR	1>6	△	○	※	※	×	×	※
	7	褐色土層7.5YR	1<7	△	△	△	※	×	×	△
	8	褐色土層7.5YR	1<8	△	△	△	※	×	×	△
	9	黒褐色土層10YR	2<9	△	△	※	※	※	×	※

第11図 H-8号住居址実測図

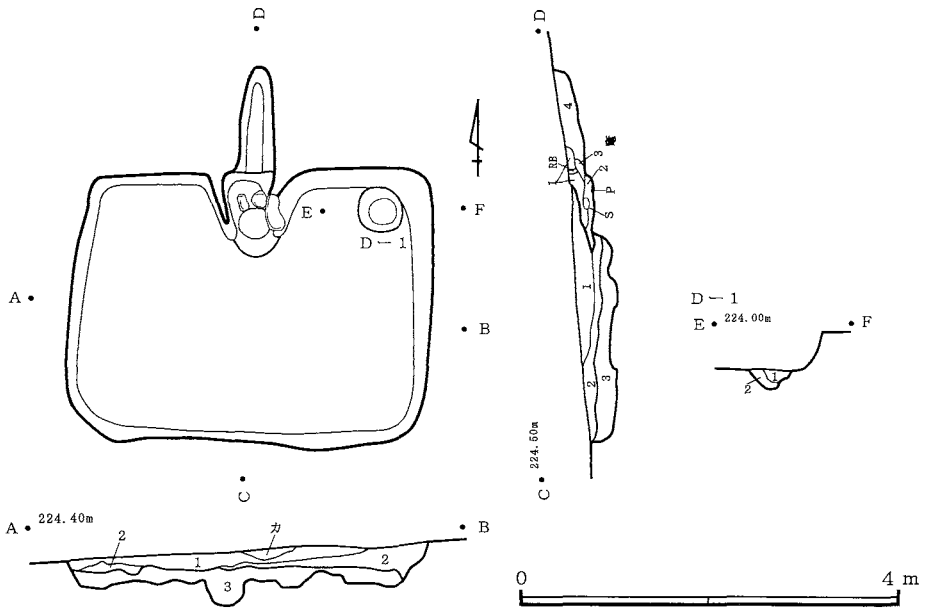
H-9号住



H-2 H-9号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物					備考
						RP	RB	YP	C	焼土	
竈	1	黒褐色土層10Y R		△	○	※	※	※			貼床
	2	黄褐色土層10Y R	1 < 2	△	○	○	◎	○			
D-1	1	黒褐色土層10Y R		△	△	※	△	△	×	△	
	2	暗褐色土層10Y R	1 < 2	△	○	※	○	△			

H-10号住

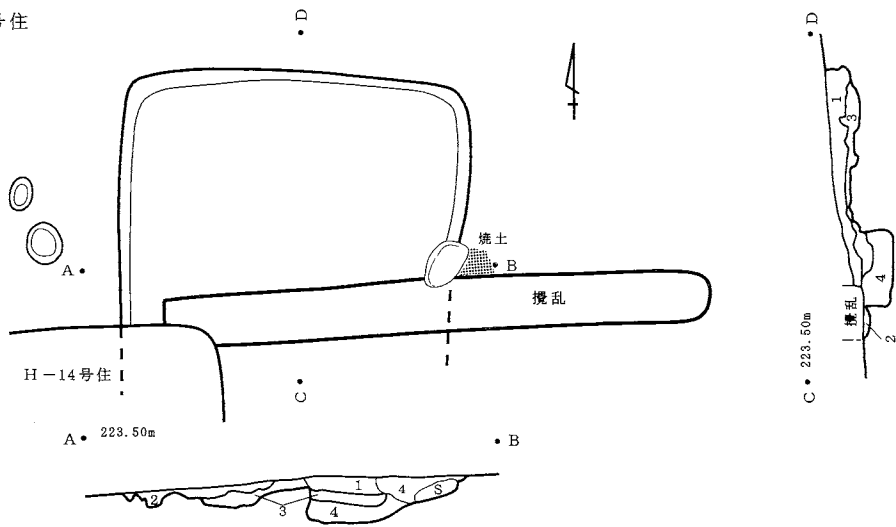


H-2 H-10号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物					備考
						RP	RB	YP	C	焼土	
竈	1	黒褐色土層10Y R		△	○	×	×	×			貼床
	2	黒褐色土層10Y R	1 < 2	△	○	※	×	※			
	3	褐色土層10Y R	2 < 3	△	○	○	◎	○			
	4	暗褐色土層7.5Y R	3 > 4	△	△	※	×	※	×	※	
D-1	1	暗褐色土層7.5Y R	1 < 2	○	○	○	○	※	×	△	
	2	暗赤褐色土層7.5Y R	2 > 3	△	○	△	※	※	×	△	
	3	暗褐色土層7.5Y R	3 > 4	△	○	※	※	※	×	※	
	4	暗褐色土層7.5Y R		○	○	△	※	△	×	×	

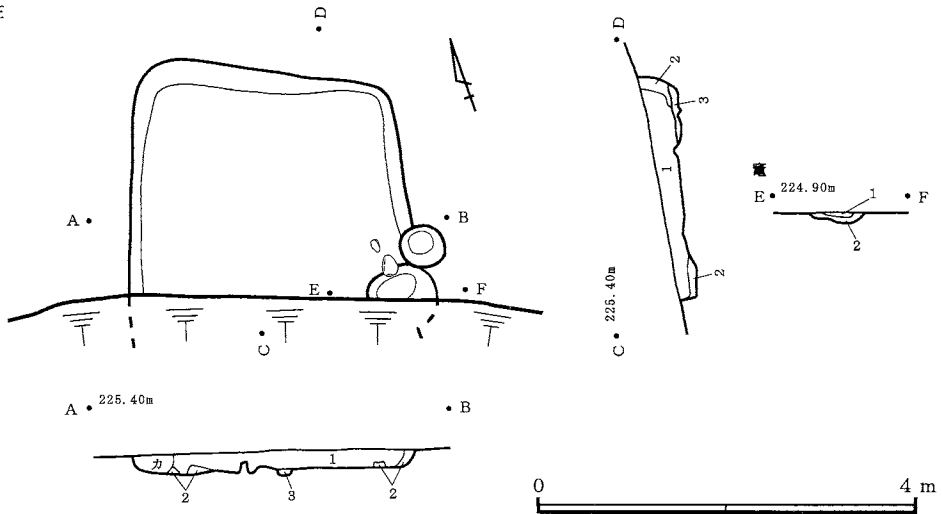
第12図 H-9号・H-10号住居址実測図

H-11号住



H-2 H-11号住		色調	しまり	粘性	混入物				備考
遺構名	層番 層名				RP	RB	YP	C	
	1 黒褐色土層10YR		△	○	※	※	△	△	×
	2 暗褐色土層10YR	1 < 2	△	○	△	△	※	×	×
	3 褐色土層10YR	2 < 3	○	◎	○	○	△	×	×
	4 暗褐色土層10YR	3 > 4	△	○	△	△	※	×	×

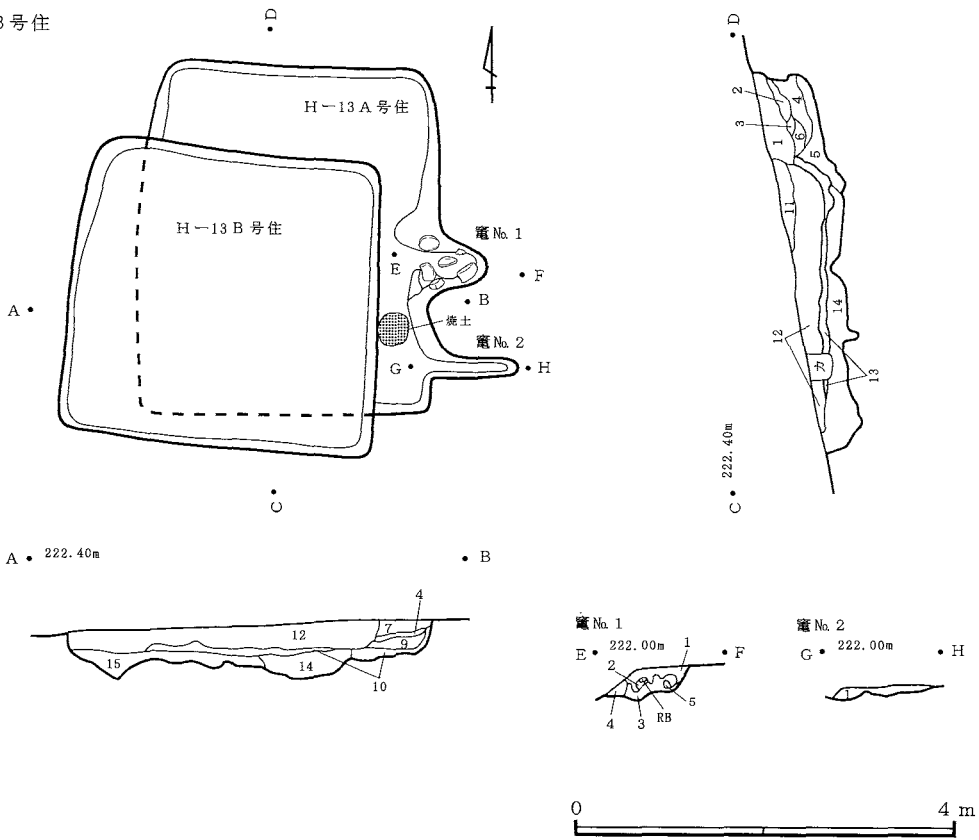
H-12号住



H-2 H-12号住		色調	しまり	粘性	混入物				備考
遺構名	層番 層名				RP	RB	YP	C	
	1 黒褐色土層10YR		△	○	※	※	※	※	×
	2 黒褐色土層10YR	1 < 2	△	○	△	※	※	×	×
	3 暗褐色土層10YR	2 < 3	○	○	○	※	※	×	貼床
竈	1 褐色土層5YR		△	△	○	※	×	※	○
	2 褐色土層7.5YR	1 < 2	△	△	◎	※	×	×	△

第13図 H-11号・H-12号住居址実測図

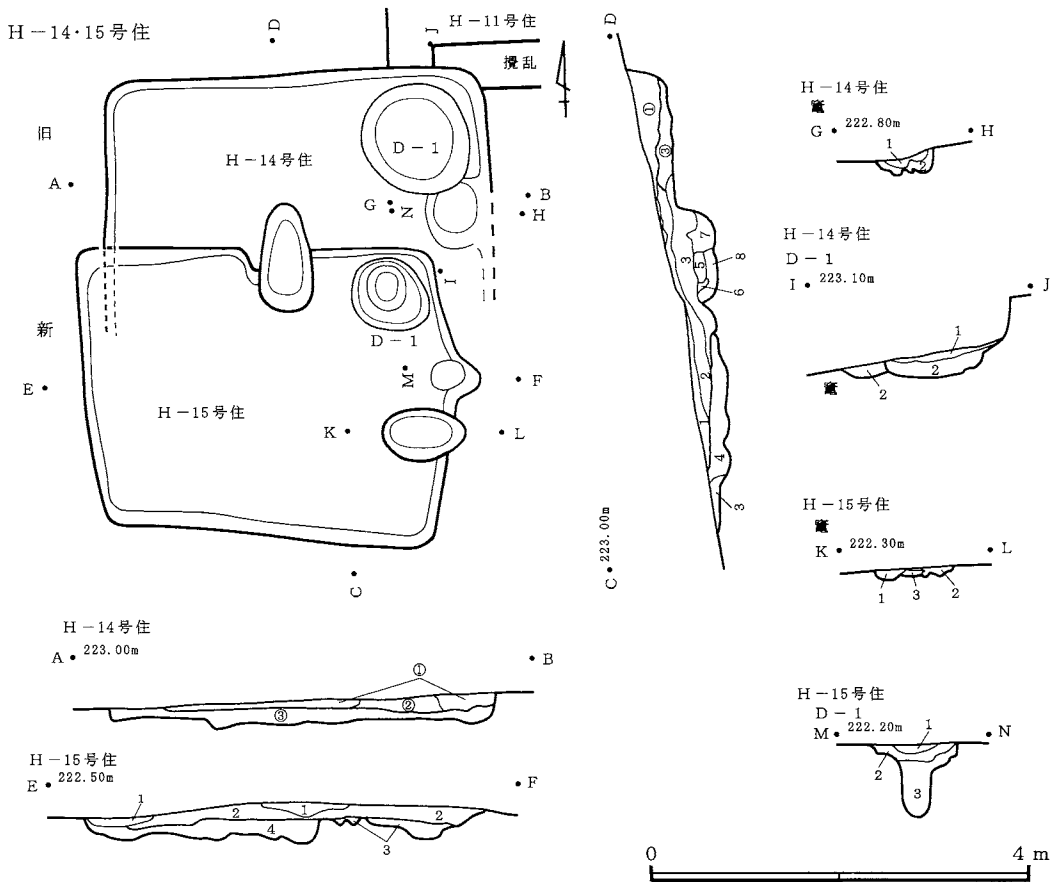
H-13号住



H-2 H-13号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	湿人物				備考	
						R	P	R	B		Y
	1	黒褐色土層10YR		△	○	×	×	×	×	×	×
	2	暗褐色土層10YR	1<2	△	○	※	×	×	×	×	×
	3	黒褐色土層10YR	2>3	△	○	×	×	×	※	×	×
	4	暗褐色土層10YR	3<4	△	○	※	×	×	×	×	※
	5	にぶい黄褐色土層10YR	4<5	△	◎	○	○	×	×	※	※
	6	黒褐色土層10YR	3<6	△	○	※	×	×	×	×	×
	7	暗褐色土層10YR	2<7	○	◎	※	×	×	×	×	※
	8	褐色土層10YR	7<8	△	◎	△	※	×	×	×	×
	9	暗褐色土層10YR	8>9	△	○	△	※	×	×	※	※
	10	にぶい褐色土層10YR	9>10	△	○	○	○	×	×	×	※
	11	黒褐色土層10YR	1<11	○	○	×	×	×	×	×	※
	12	暗褐色土層10YR	11<12	○	○	※	※	×	×	※	※
	13	黄褐色土層10YR	12<13	△	◎	○	○	×	×	×	貼床
	14	褐色土層10YR	13>14	△	◎	△	△	×	×	×	×
	15	黄褐色土層10YR	13<15	△	○	◎	△	×	×	×	×
竈No.1	1	暗褐色土層10YR		○	○	△	×	×	×	×	※
	2	褐色土層7.5YR	1<2	○	○	△	△	×	×	×	△
	3	にぶい赤褐色土層5YR	2<3	△	△	△	※	×	×	×	○
	4	褐色土層10YR	1>4	○	○	※	×	×	×	×	※
	5	にぶい黄褐色土層10YR	4<5	△	△	△	×	×	×	×	※
竈No.2	1	褐色土層7.5YR		○	○	○	○	×	×	×	※

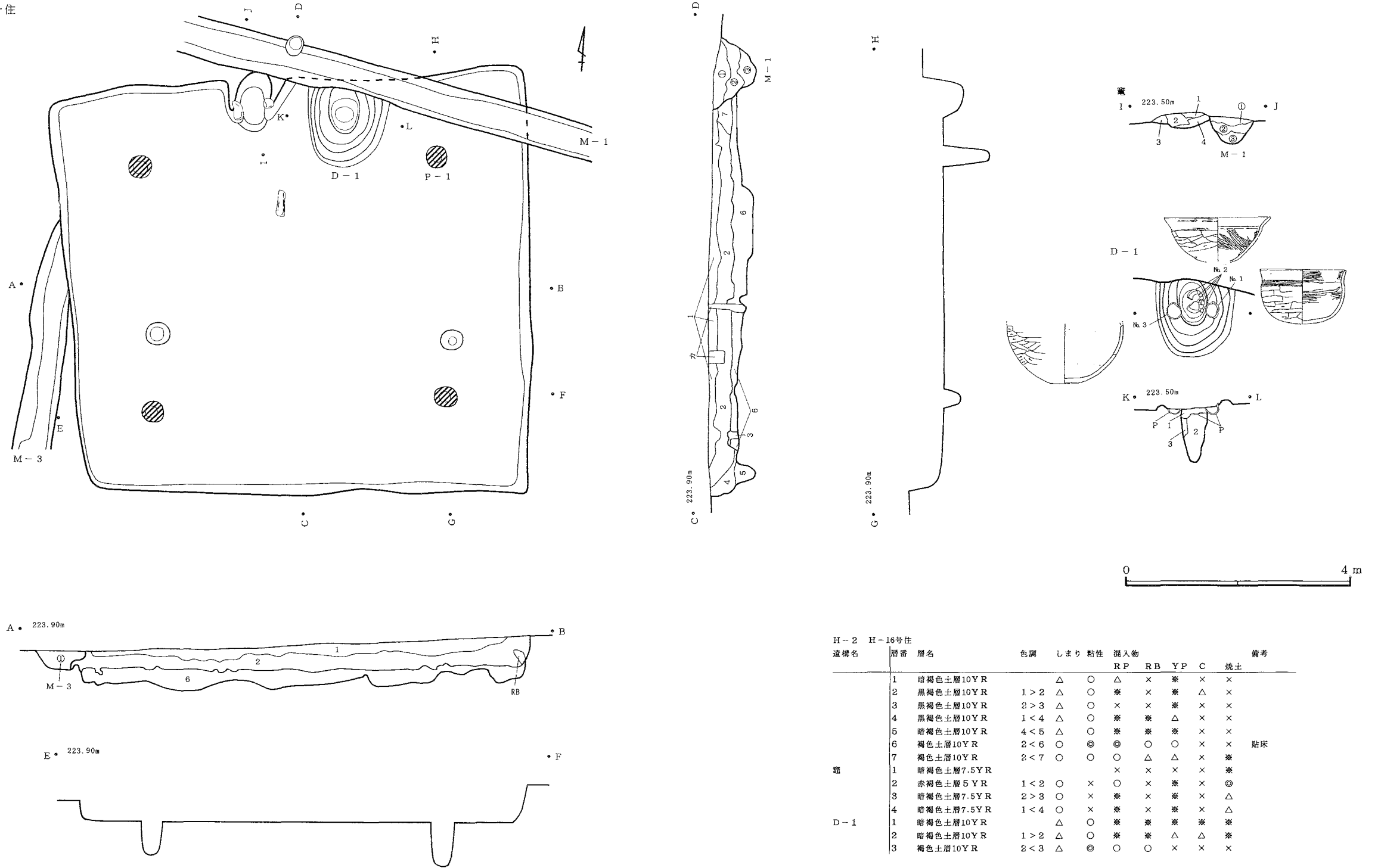
第14図 H-13A・13B号住居址実測図



H-2 H-14号住		層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
遺構名	層名						RP	RB	YP	C	
竈	①	黒褐色土層10YR	△	○	※	×	※	×	※		
	②	暗褐色土層10YR	1 < 2 △	○	△	△	※	×	※		
	③	褐色土層10YR	2 < 3 ○	◎	○	○	※	×	※	貼床	
	1	黒褐色土層7.5YR	△	○	※	×	※	×	※		
D-1	2	暗褐色土層10YR	1 < 2 △	○	※	△	×	※	※		
	1	黒色土層10YR	△	○	×	×	※	※	※		
	2	褐色土層7.5YR	1 < 2 △	○	△	※	※	※	※		
H-2 H-15号住		層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
遺構名	層名						RP	RB	YP	C	
竈	1	暗褐色土層10YR	△	○	※	×	※	×	×		
	2	黒褐色土層10YR	1 > 2 △	○	×	×	※	※	×		
	3	暗褐色土層10YR	2 < 3 △	○	△	△	※	×	※	貼床	
	4	褐色土層10YR	3 < 4 ○	◎	○	○	×	×	×	貼床	
	5	赤褐色土層5YR	3 < 5 △	△	○	○	※	×	○		
	6	明褐色土層7.5YR	5 > 6 △	◎	○	◎	※	×	※		
	7	褐色土層10YR	6 < 7 △	○	△	△	×	×	※		
	8	褐色土層10YR	7 ≈ 8 △	△	○	△	△	※	×	※	
D-1	1	褐色土層10YR	○	○	△	×	※	×	×		
	2	明赤褐色土層5YR	1 < 2 △	△	○	×	※	×	◎		
	3	暗褐色土層10YR	1 > 3 ○	○	△	△	×	×	※		
D-1	1	黒褐色土層10YR	△	○	※	×	×	×	×		
	2	暗褐色土層10YR	1 < 2 △	○	※	※	×	×	×		
	3	褐色土層10YR	2 < 3 △	○	※	△	※	×	×		

第15図 H-14号・H-15号住居址実測図

H-16号住

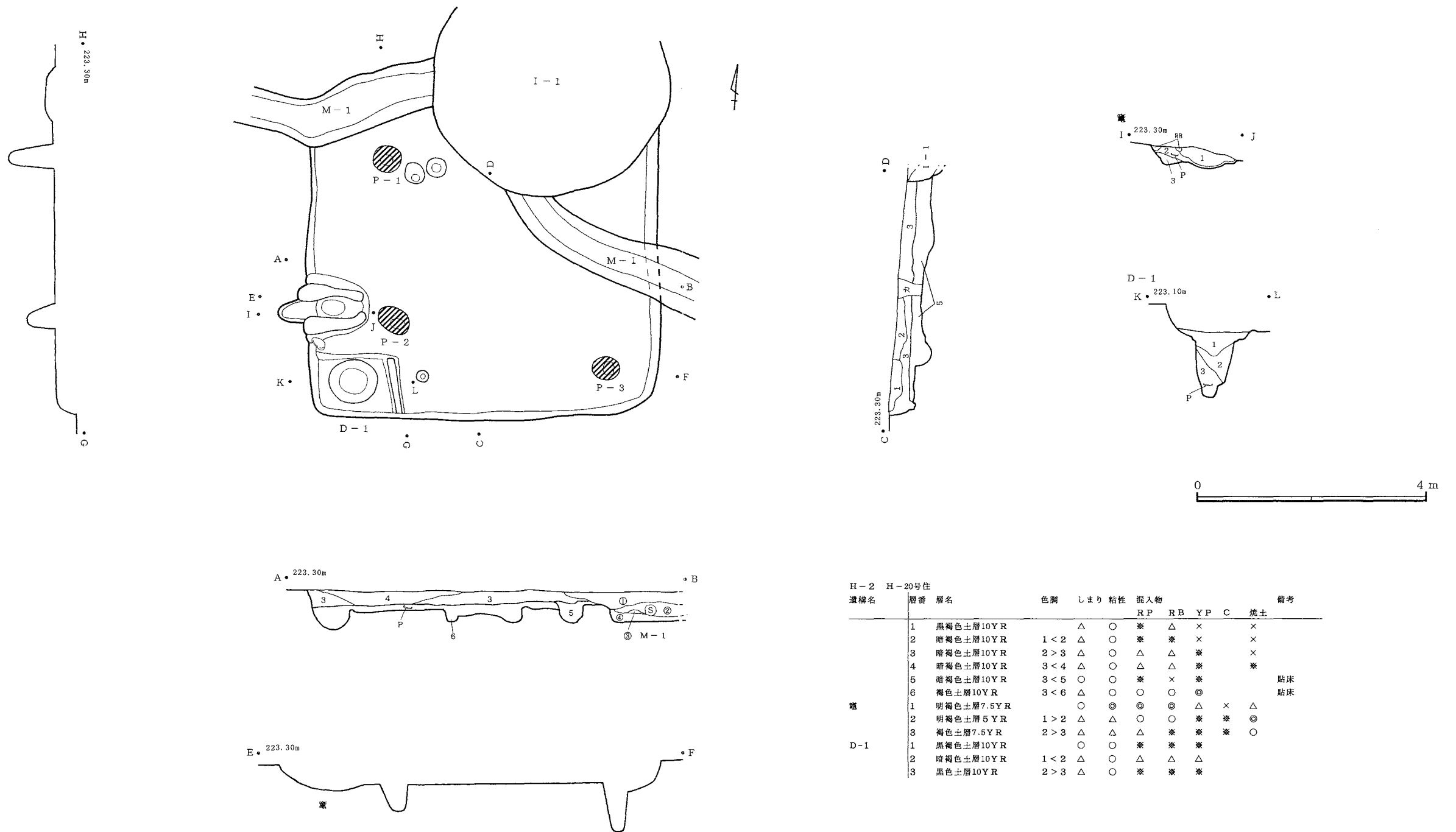


H-2 H-16号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	C	
竈	1	暗褐色土層10YR		△	○	△	×	※	×	×
	2	黒褐色土層10YR	1>2	△	○	※	×	※	△	×
	3	黒褐色土層10YR	2>3	△	○	×	×	※	×	×
	4	黒褐色土層10YR	1<4	△	○	※	※	※	×	×
	5	暗褐色土層10YR	4<5	△	○	※	※	※	×	×
	6	褐色土層10YR	2<6	○	◎	◎	○	○	×	×
	7	褐色土層10YR	2<7	○	○	○	△	△	×	※
D-1	1	暗褐色土層7.5YR				×	×	×	×	※
	2	赤褐色土層5YR	1<2	○	×	○	×	※	×	◎
	3	暗褐色土層7.5YR	2>3	○	×	※	×	※	×	△
	4	暗褐色土層7.5YR	1<4	○	×	※	×	※	×	△
D-1	1	暗褐色土層10YR		△	○	※	※	※	※	※
	2	暗褐色土層10YR	1>2	△	○	※	※	△	△	※
	3	褐色土層10YR	2<3	△	◎	○	○	×	×	×

第16図 H-16号住居址実測図

H-20号住

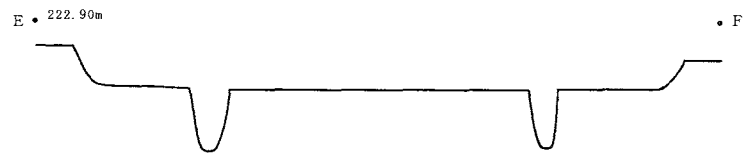
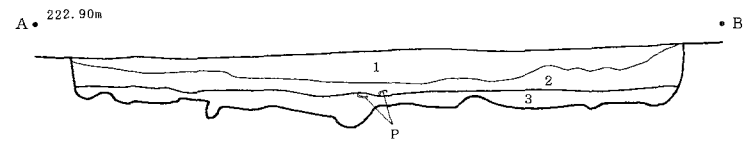
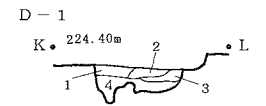
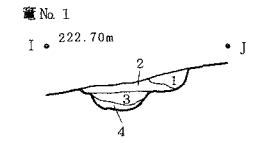
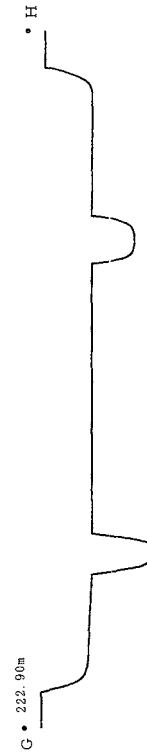
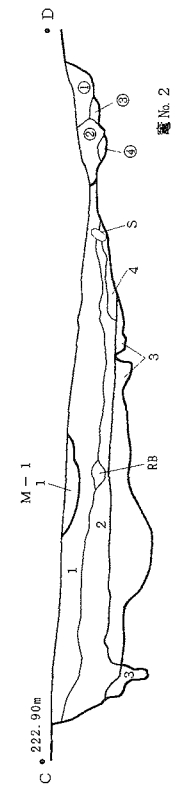
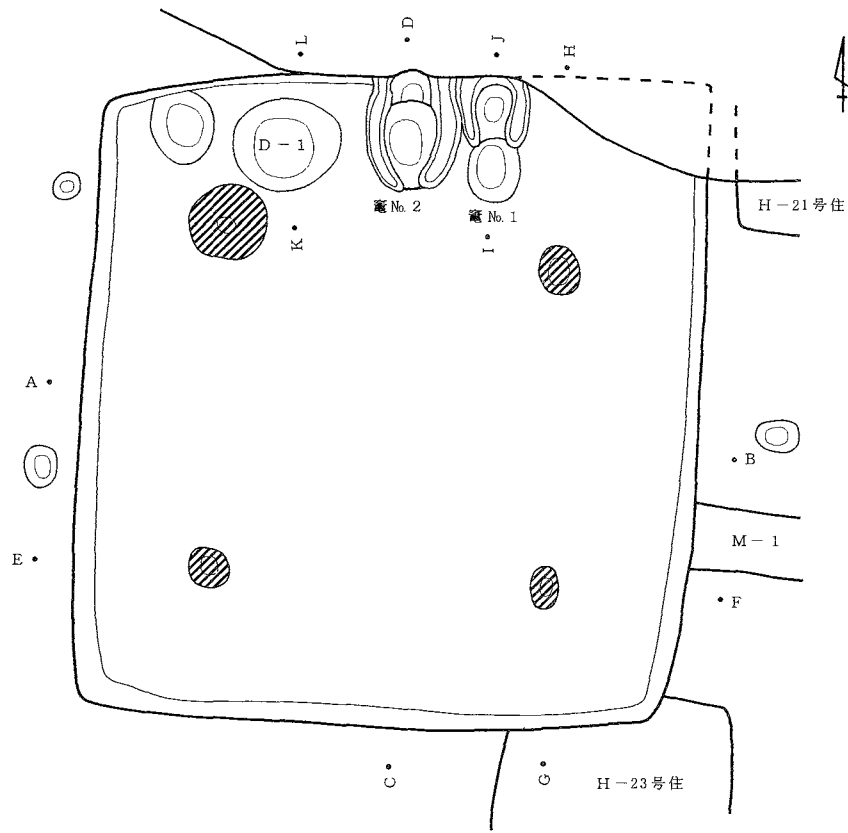


H-2 H-20号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	C	
竈	1	黒褐色土層10YR		△	○	※	△	×		×
	2	暗褐色土層10YR	1 < 2	△	○	※	※	×		×
	3	暗褐色土層10YR	2 > 3	△	○	△	△	※		×
	4	暗褐色土層10YR	3 < 4	△	○	△	△	※		※
	5	暗褐色土層10YR	3 < 5	○	○	※	×	※		貼床
	6	褐色土層10YR	3 < 6	△	○	○	○	◎		貼床
D-1	1	明褐色土層7.5YR		○	◎	◎	◎	△	×	△
	2	明褐色土層5YR	1 > 2	△	△	○	○	※	※	◎
	3	褐色土層7.5YR	2 > 3	△	△	△	△	※	※	○
D-1	1	黒褐色土層10YR		○	○	※	※	※		
	2	暗褐色土層10YR	1 < 2	△	○	△	△	△		△
	3	黒色土層10YR	2 > 3	△	○	※	※	※		

第17図 H-20号住居址実測図

H-22号住

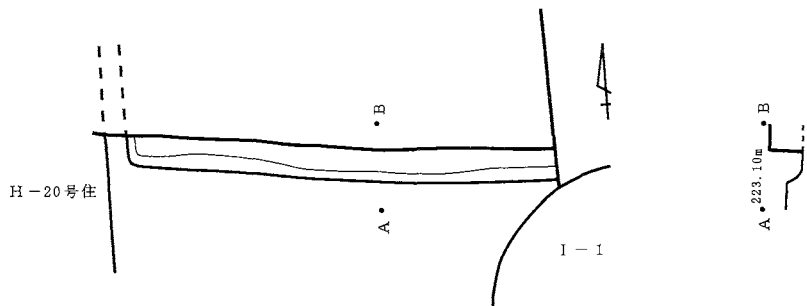


H-2 H-22号住

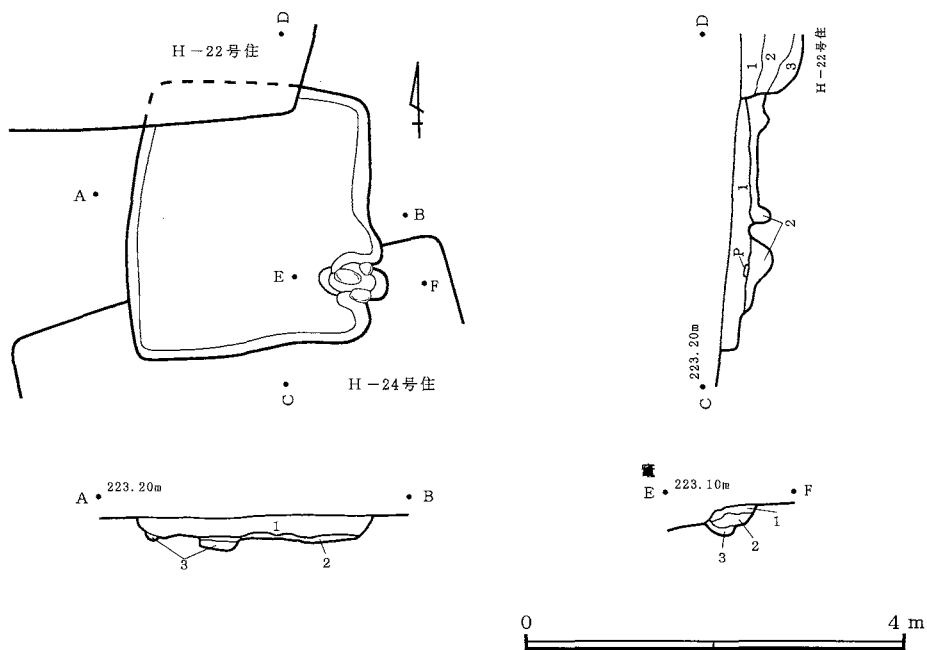
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考	
						RP	RB	YP	C		
No. 1	1	黒褐色土層10YR		△	○	※	△	△	×	×	
	2	黒褐色土層YR10YR	1 < 2	△	○	※	※	△	※	△	
	3	暗褐色土層10YR	2 < 3	×	○	△	△	△	×	×	貼床
	4	褐色土層10YR	3 < 4	△	○	○	○	◎	※	△	
No. 2	1	褐色土層7.5YR		△	△	○	×	※	×	△	
	2	褐色土層10YR	1 > 2	△	○	○	※	※	※	※	
	3	赤褐色土層5YR	2 < 3	○	○	○	※	※	×	○	
	4	暗褐色土層10YR	3 > 4	△	△	※	※	※	×	※	
D-1	1	暗褐色土層7.5YR		△	○	△	※	※	※	△	
	2	褐色土層10YR	1 < 2	△	◎	◎	○	※	※	※	
	3	黒褐色土層10YR	2 > 3	△	○	※	※	※	×	※	
	4	明赤褐色土層5YR	2 < 4	×	×	○	※	※	×	◎	
D-1	1	黒褐色土層10YR		△	○	※	※	△	×	×	
	2	黒褐色土層10YR	1 > 2	△	○	※	※	※	×	×	
	3	暗褐色土層10YR	2 < 3	○	◎	※	○	※	×	×	
	4	黒褐色土層10YR	3 > 4	△	○	※	※	※	×	×	

第18図 H-22号住居址実測図

H-21号住



H-23号住

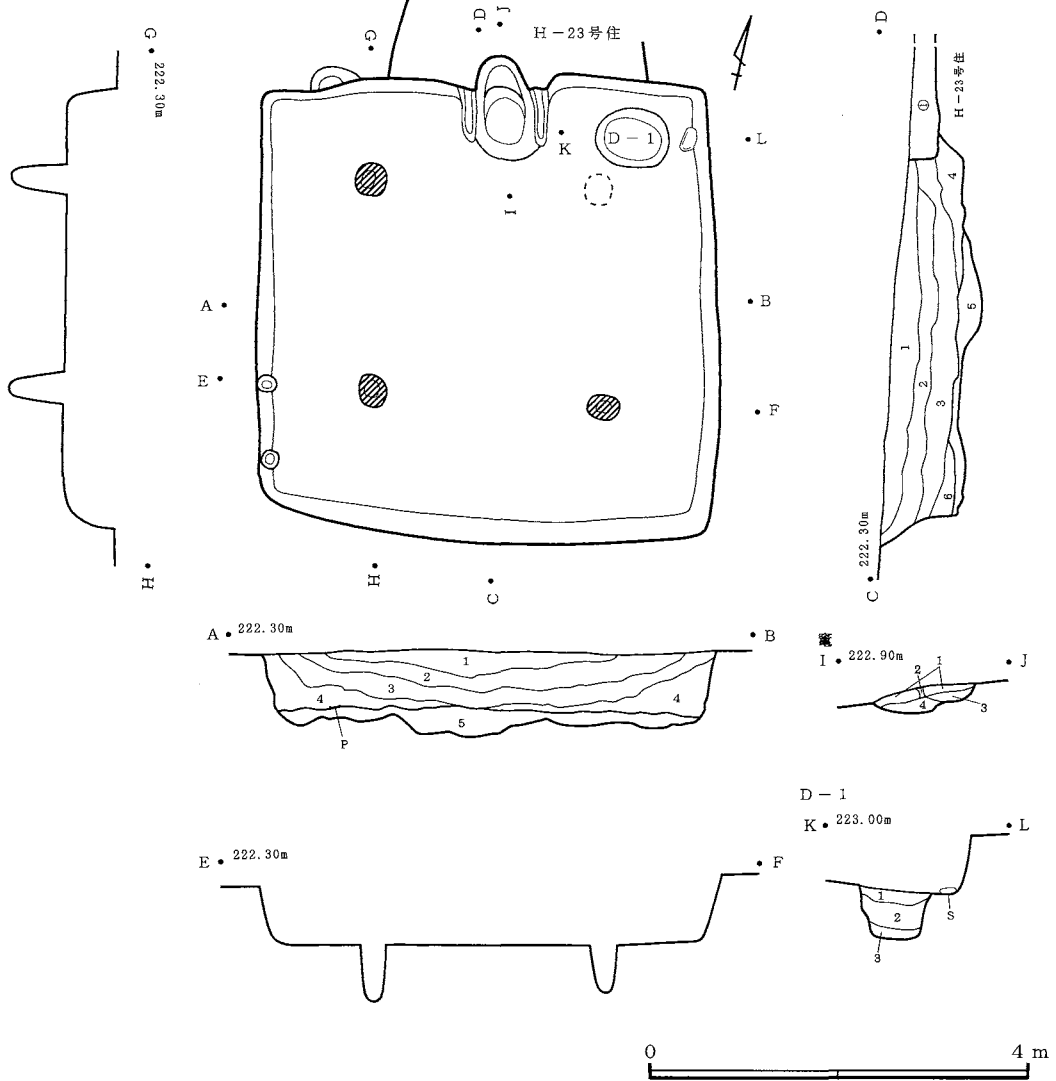


H-2 H-23号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考	
						RP	RB	YP	C		
竈	1	黒褐色土層10YR		△	○	△	※	※	○	×	
	2	暗褐色土層10YR	1 < 2	○	◎	○	△	※	×	×	貼床
	3	黒褐色土層10YR	2 < 3	△	○	※	※	※	×	×	
	4	褐色土層10YR	3 < 4	○	○	○	△	※	×	※	H-24号住フク土
	1	褐色土層10YR		△	○	※	×	※	×	※	
	2	赤褐色土層5YR	1 < 2	○	○	△	×	※	※	○	
	3	暗褐色土層7.5YR	2 > 3	△	○	※	△	※	×	△	

第19図 H-21号・H-23号住居実測図

H-24号住

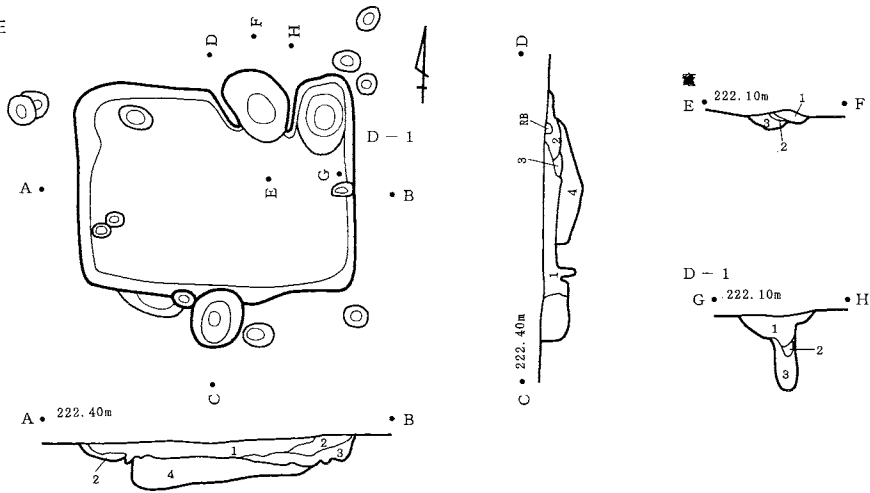


H-2 H-24号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	C	
壁	1	黒褐色土層10YR	△	○	※	×	※	×		
	2	暗褐色土層10YR	1 < 2 △	○	△	※	○	×		
	3	暗褐色土層10YR	2 > 3 △	○	※	※	△	×		
	4	黒褐色土層10YR	3 > 4 △	○	※	△	△	×	※	
	5	褐色土層10YR	4 < 5 △	○	◎	○	○	×		貼床
	6	暗褐色土層10YR	3 < 6 △	○	※	※	○	×	△	
D-1	1	褐色土層10YR	◎	◎	○	△	※	※	※	
	2	暗褐色土層10YR	1 > 2 ×	○	※	×	×	×	※	
	3	暗赤褐色土層5YR	1 > 3 △	○	×	×	※	※	△	
	4	にぶい赤褐色土層10YR	3 < 4 ×	△	※	×	×	×	○	
D-1	1	黒褐色土層10YR	○	○	※	※	※	※	×	
	2	暗褐色土層10YR	1 < 2 △	○	△	△	△	※	×	
	3	暗褐色土層10YR	2 > 3 △	○	△	※	×	※	×	

第20図 H-24号住址実測図

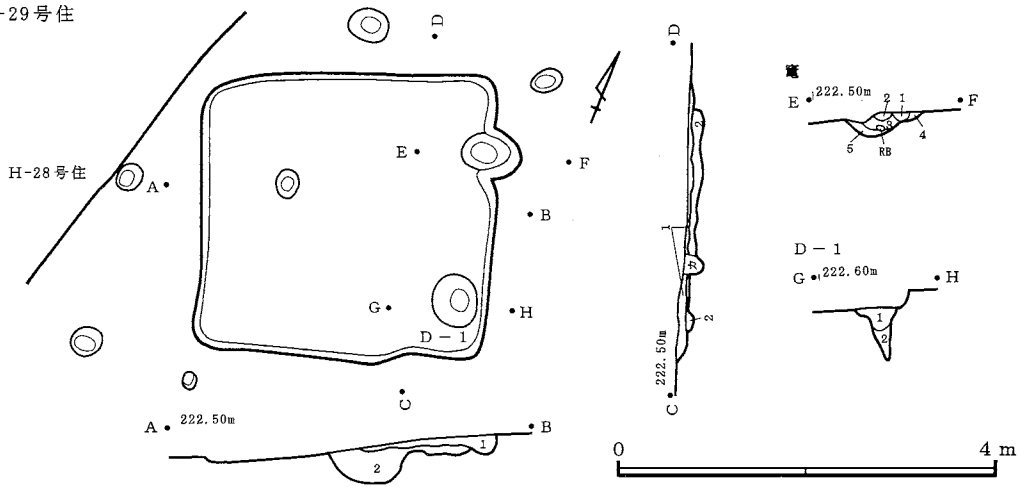
H-25号住



H-2 H-25号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	C	
竪	1	黒褐色土層10YR	△	○	※	△	※	×	×	貼床
	2	暗褐色土層10YR	1<2 △	○	△	※	※	×	×	
	3	黒褐色土層10YR	2>3 △	○	※	※	※	×	×	
	4	黄褐色土層10YR	3<4 △	○	○	◎	×	×	×	
D-1	1	にぶい褐色土層7.5YR	△	○	△	×	※	×	△	
	2	明赤褐色土層5YR	1<2 △	○	○	×	※	×	◎	
	3	暗褐色土層7.5YR	2>3 △	○	※	△	△	×	※	
D-1	1	褐色土層YR	△	○	※	×	※	×	△	
	2	褐色土層YR	1>2 △	○	※	×	※	×	×	
D-1	3	褐色土層YR	2<3 △	○	○	△	×	×	×	

H-29号住

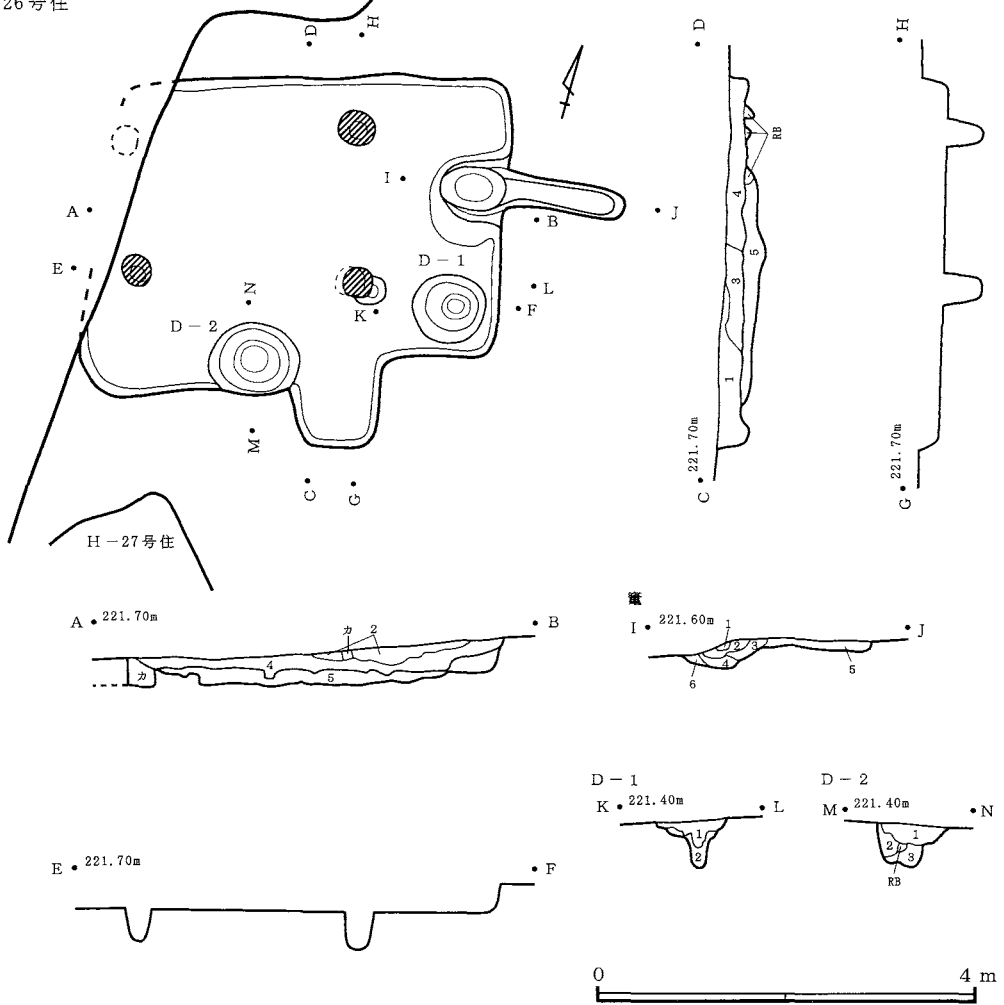


H-2 H-29号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	C	
竪	1	黒褐色土層10YR	△	○	※	※	×	×	貼床	
	2	褐色土層10YR	1<2 △	△	※	△	○	×		×
	1	暗褐色土層7.5YR	△	○	※	×	※	×		△
	2	赤褐色土層5YR	1<2 ○	○	△	×	※	×		※
	3	暗褐色土層5YR	2>3 △	○	※	△	※	×		○
D-1	4	褐色土層10YR	1<4 △	○	△	×	※	×	※	
	5	黒褐色土層7.5YR	3>5 △	○	※	×	※	×	※	
	1	黒褐色土層10YR	△	○	※	※	×	×	×	
D-1	2	褐色土層10YR	1<2 △	◎	○	※	※	×	×	

第21図 H-25号・29号住居址実測図

H-26号住

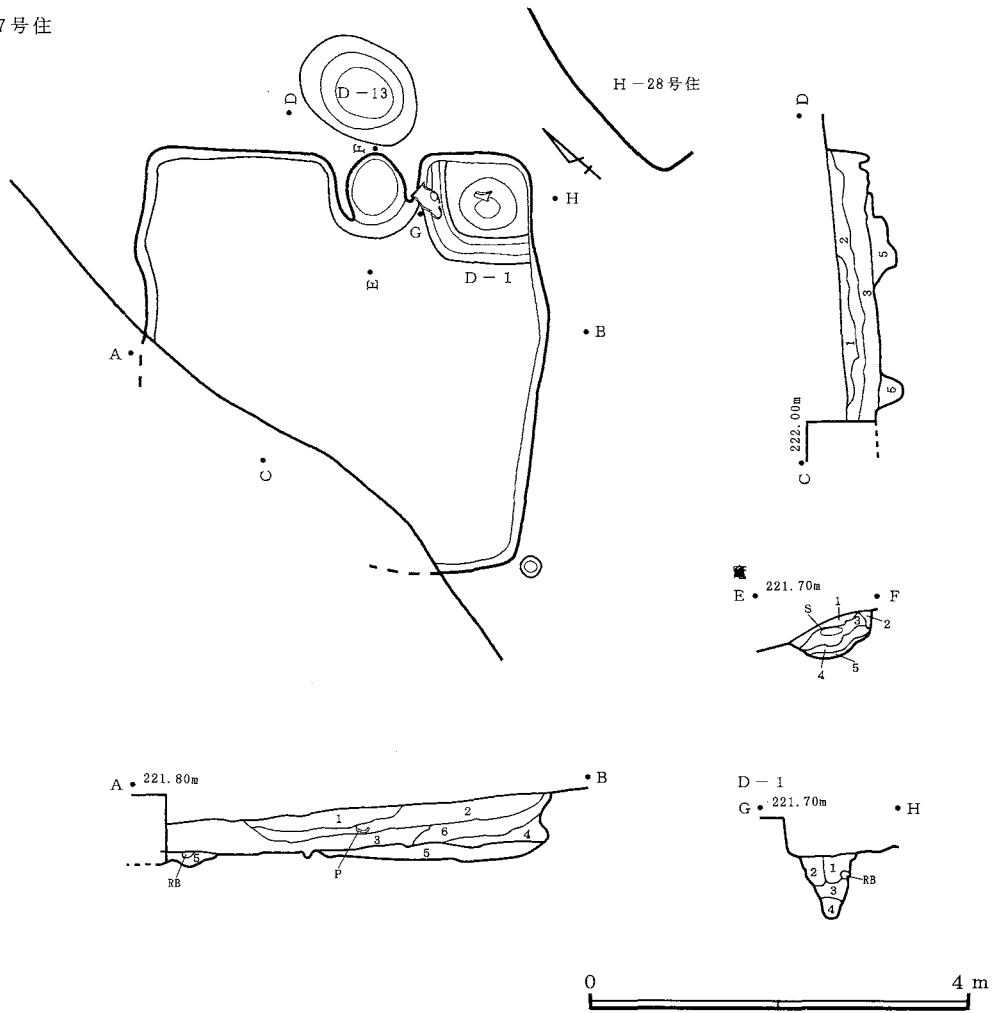


H-2 H-26号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考	
						RP	RB	YP	C		
竈	1	黒褐色土層10YR		×	○	×	×	※	×	×	
	2	暗褐色土層10YR	1<2	△	○	△	△	※	×	×	
	3	暗褐色土層10YR	2<3	△	○	△	※	△	×	×	
	4	黒褐色土層10YR	3>4	※	○	※	△	※	×	×	
	5	褐色土層10YR	4<5	△	△	△	△	◎	×	×	貼床
	6	暗褐色土層10YR		△	○	△	×	※	×	×	
D-1	1	暗褐色土層10YR		△	○	△	×	※	×	×	
	2	褐色土層7.5YR	1<2	△	○	△	×	※	×	×	
	3	褐色土層7.5YR	2<3	△	○	△	×	△	×	×	
D-2	1	暗褐色土層10YR		△	○	△	×	※	△	△	
	2	暗褐色土層10YR	1<2	△	○	△	×	※	×	×	
	3	暗褐色土層10YR	2>3		◎	◎	※	※	×	×	

第22図 H-26号住居址実測図

H-27号住

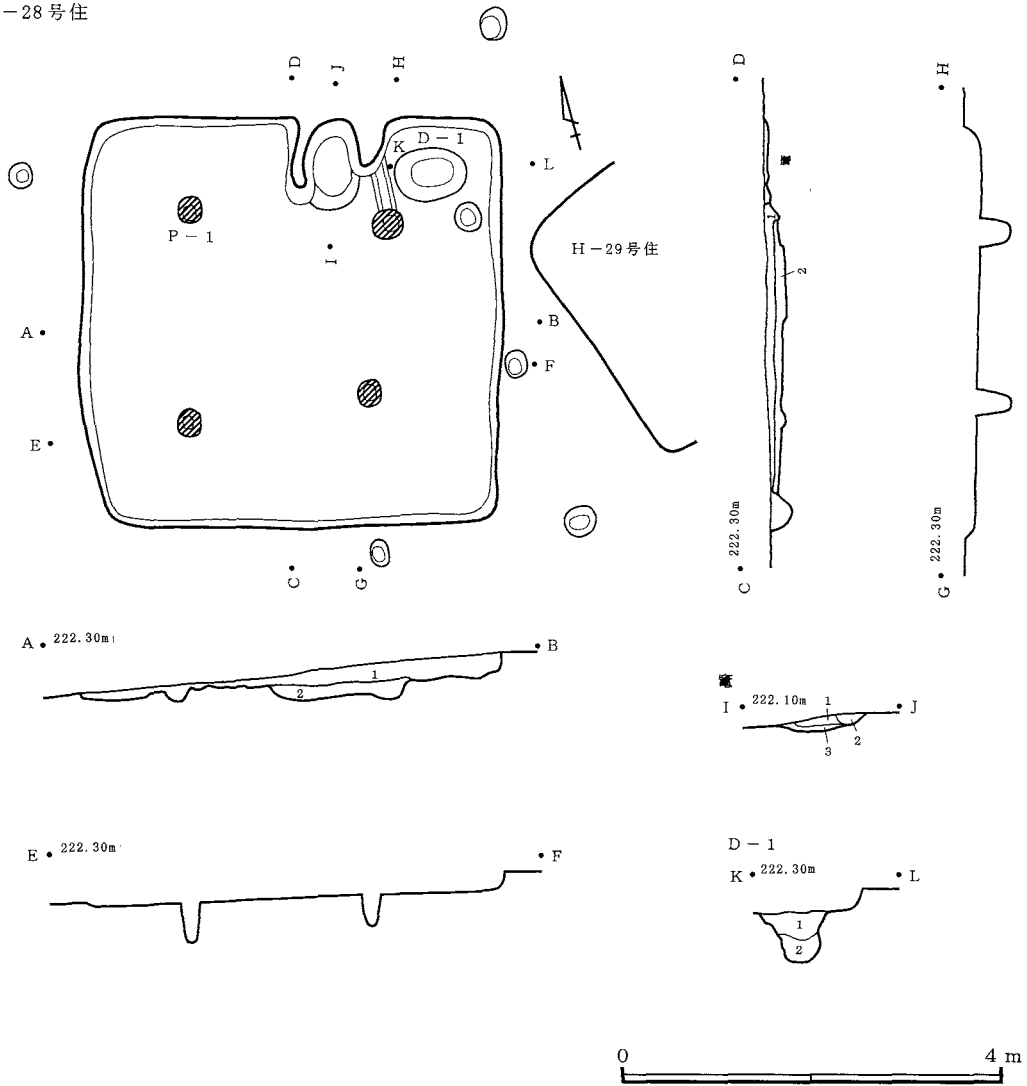


H-2 H-27号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	C	
竪	1	暗褐色土層10YR	△	○	△	○	△	×	×	
	2	暗褐色土層10YR	1 > 2 △	○	※	※	※	×	×	
	3	暗褐色土層10YR	2 < 3 △	○	△	△	△	×	×	
	4	褐色土層10YR	3 < 4 △	○	○	※	※	×	×	
	5	褐色土層10YR	4 < 5 △	◎	◎	△	○	×	×	貼床
	6	黒褐色土層10YR	3 > 6 △	○	※	×	※	×	×	
竪	1	褐色土層7.5YR	△	○	△	※	※	×	※	
	2	暗褐色土層10YR	1 > 2 △	○	△	△	※	×	※	
	3	褐色土層10YR	1 < 3 ○	◎	◎	○	※	×	△	
	4	褐色土層7.5YR	3 > 4 △	○	△	※	※	×	△	
	5	暗褐色土層7.5YR	4 > 5 △	○	※	△	※	×	※	
D-1	1	黒褐色土層10YR	△	○	△	△	※	△	×	
	2	暗褐色土層10YR	1 < 2 △	○	△	△	※	×	×	
	3	黒褐色土層10YR	1 > 3 △	○	※	×	※	×	×	
	4	暗褐色土層10YR	3 < 4 △	◎	△	△	×	×	×	

第23図 H-27号住居址実測図

H-28号住

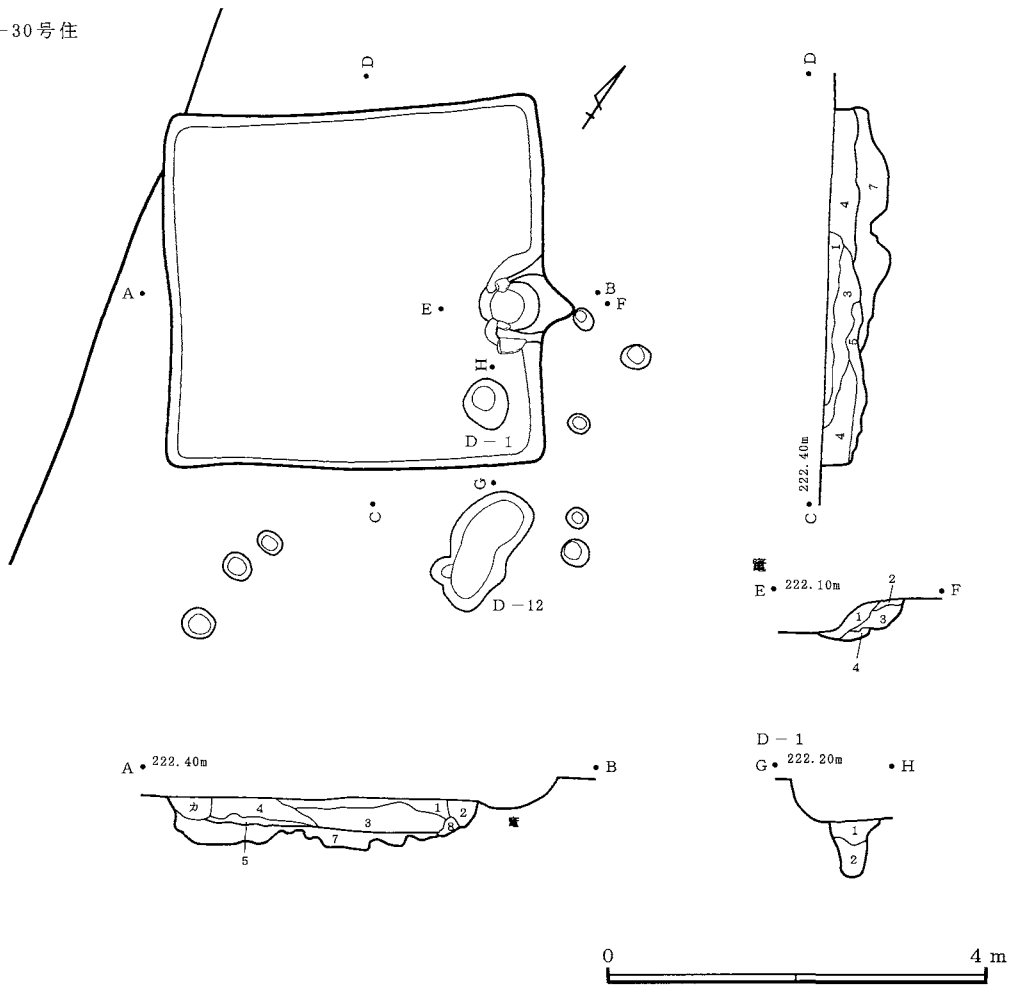


H-2 H-28号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考	
						RP	RB	YP	C		
竈	1	黒褐色土層10YR		△	○	※	×	※	※	△	下面焼土
	2	褐色土層10YR	1<2	△	△	△	△	◎	×	×	貼床
	1	赤褐色土層5YR		△	○	※	※	※	×	△	
	2	赤褐色土層5YR	1<2	◎	○	※	※	※	※	○	
D-1	3	明褐色土層5YR	2<3	△	△	※	※	◎	◎	×	
	1	黒褐色土層10YR		△	○	※	○	※	×	×	
	2	暗褐色土層10YR	1<2	△	○	○	△	※	×	×	

第24図 H-28号住居址実測図

H-30号住

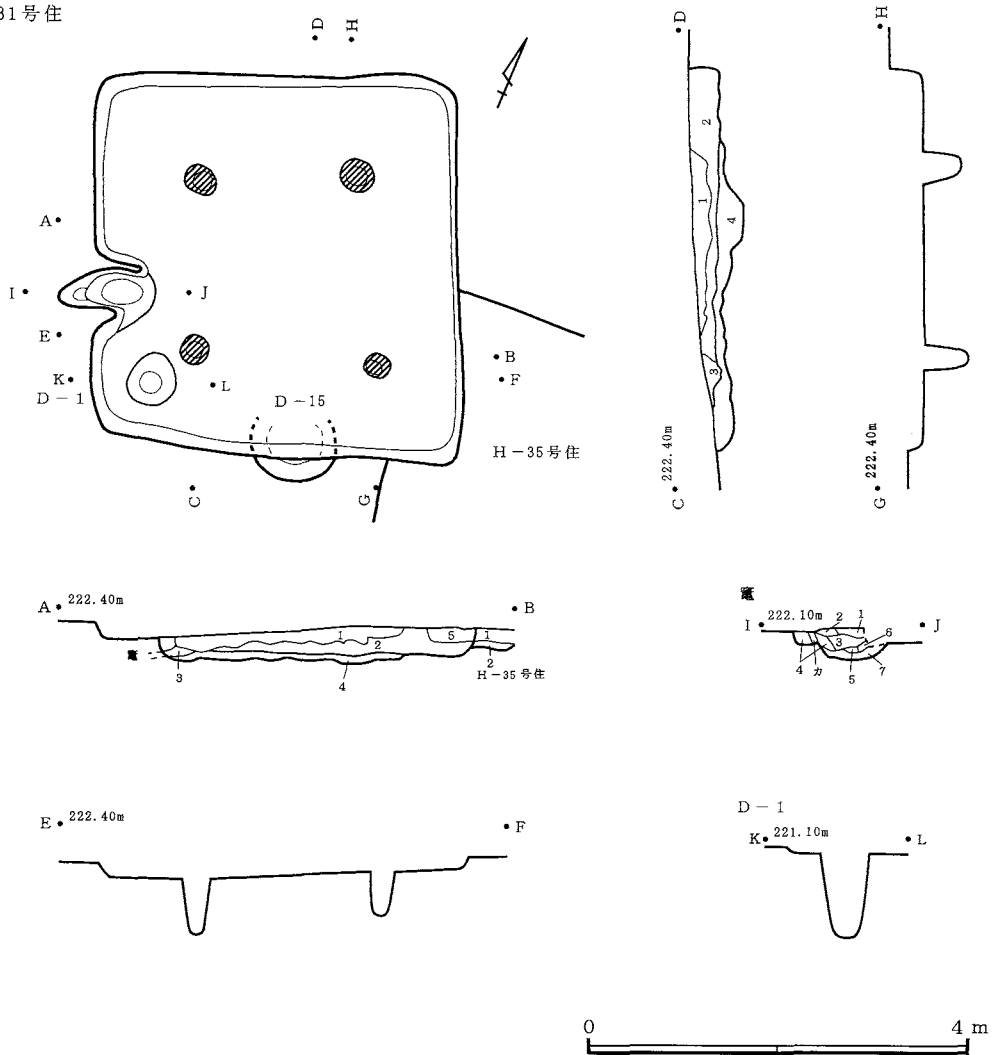


H-2 H-30号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物					備考
						RP	RB	YP	C	焼土	
竈	1	暗褐色土層10YR		△	○	○	×	×	×	×	
	2	暗褐色土層10YR	1 > 2	△	○	△	×	※	×	×	
	3	黒褐色土層10YR	1 > 3	△	○	※	×	※	※	×	
	4	黒褐色土層10YR	3 < 4	△	○	※	×	△	※	×	
	5	暗褐色土層10YR	4 < 5	△	○	△	×	△	×	×	
	6	褐色土層10YR	4 < 6	○	○	○	△	※	×	×	
	7	褐色土層10YR	6 < 7	○	△	◎	◎	◎	×	×	貼床
	8	暗褐色土層10YR	2 < 8	△	○	△	×	※	×	※	
竈	1	褐色土層10YR		○	◎	◎	○	※	×	※	
	2	暗赤褐色土層5YR	1 > 2	△	△	○	△	※	×	△	
	3	極暗褐色土層7.5YR	1 > 3	△	△	※	※	※	×	△	
	4	にぶい褐色土層7.5YR	3 < 4	△	△	△	△	※	×	△	
D-1	1	黒褐色土層10YR		△	○	△	※	※	×	×	
	2	褐色土層10YR	1 < 2	△	◎	○	○	※	×	×	

第25図 H-30号住居址実測図

H-31号住

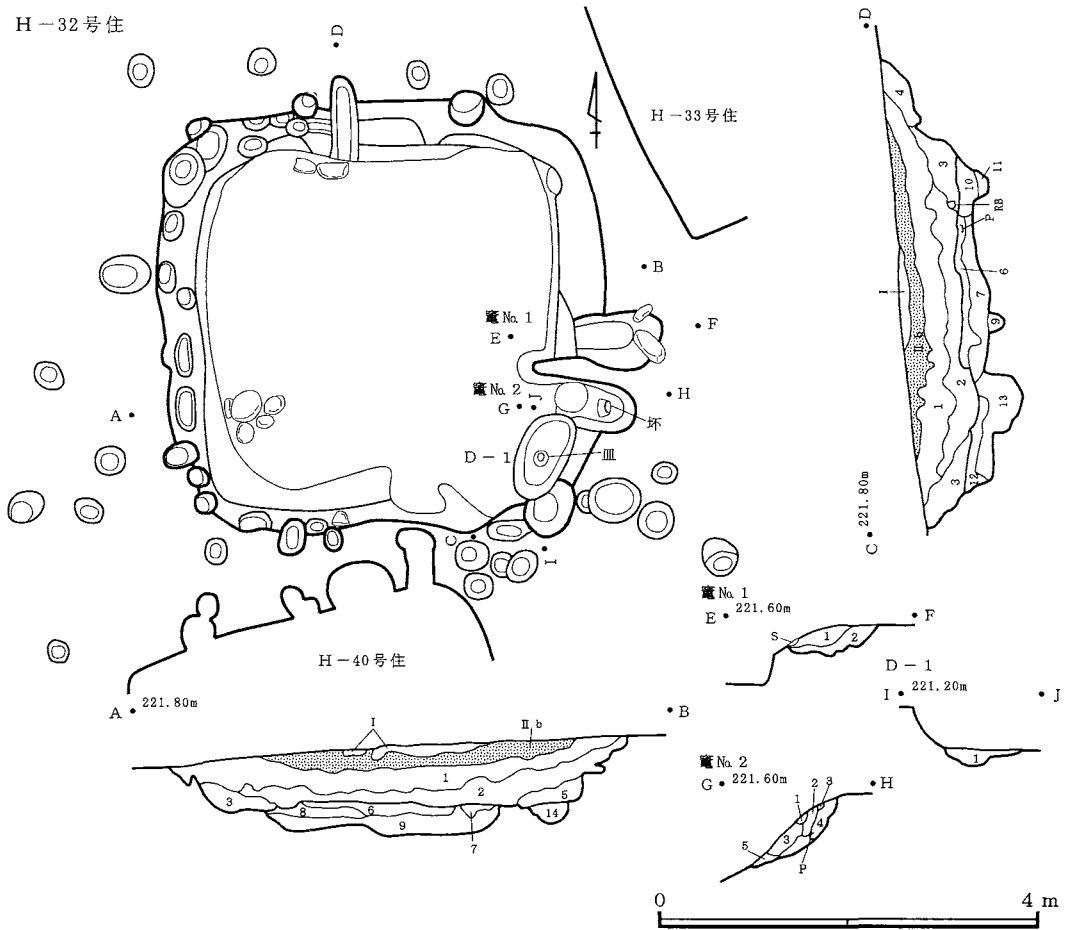


H-2 H-31号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	C	
竈	1	暗褐色土層10YR		△	○	△	△	△		
	2	黒褐色土層10YR	1 > 2	△	○	※	△	△		
	3	暗褐色土層10YR	1 > 3	△	○	△	△	※		
	4	暗褐色土層10YR	3 < 4	△	○	※	※	△		貼床
	5	黄褐色土層10YR	2 < 5	○	○	○	△	◎		
	1	黄褐色土層10YR		○	◎	○	◎	※		
	2	黒褐色土層10YR	1 > 2	△	○	※	△	※		※
	3	暗赤褐色土層5YR	2 < 3	△	○	※	※	※		※
	4	暗褐色土層7.5YR	3 > 4	△	○	※	※	※		△
	5	明褐色土層5YR	3 < 5	△	△	△	×	※		△
	6	暗褐色土層7.5YR	3 > 6	△	○	×	×	※		◎
	7	黒褐色土層10YR	6 < 7	○	○	※	※	△		◎

第26図 H-31号住居址実測図

H-32号住

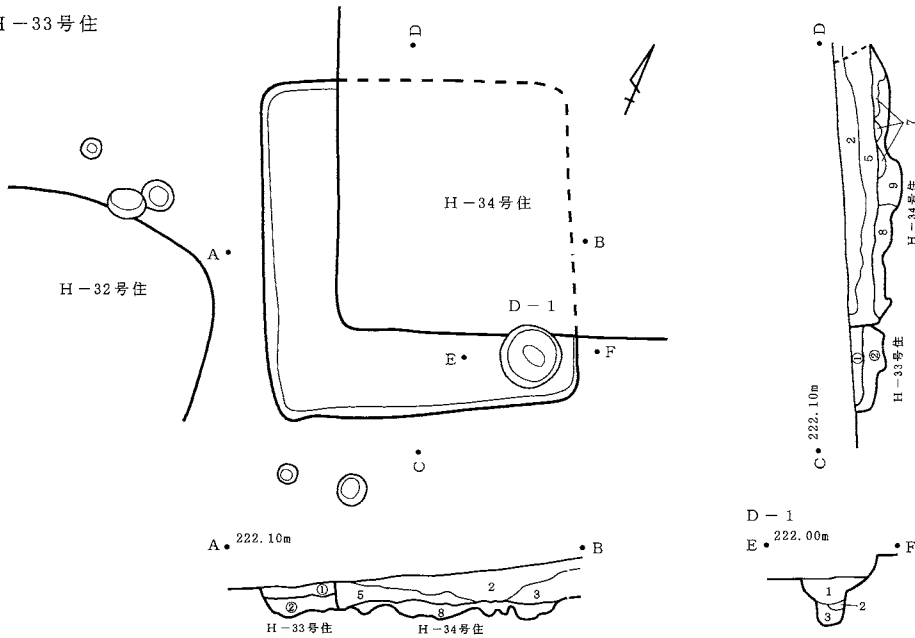


H-2 H-32号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考	
						RP	RB	YP	C		焼土
竈No. 1	1	黒褐色土層10YR	○	×	×	×	×	×	×	×	
	2	暗褐色土層10YR	1 < 2	△	○	△	※	※	※	×	
	3	暗褐色土層10YR	2 > 3	△	○	△	※	△	×	×	
	4	黒褐色土層10YR	3 > 4	△	○	×	×	△	×	×	
	5	黒褐色土層10YR	2 > 5	△	○	※	×	×	×	×	
	6	褐色土層10YR	2 < 6	△	◎	○	△	※	×	×	貼床
	7	褐色土層10YR	6 < 7	○	◎	○	○	※	×	×	貼床
	8	にがい赤褐色土層5YR	6 < 8	△	○	△	※	※	※	△	貼床
	9	褐色土層10YR	6 > 9	△	◎	△	△	※	※	×	貼床
	10	褐色土層10YR	9 < 10	△	◎	△	△	△	×	×	貼床
	11	黒褐色土層10YR	10 > 11	△	○	※	×	※	×	×	貼床
	12	黄褐色土層10YR	6 < 12	○	◎	◎	◎	×	×	×	貼床
	13	暗褐色土層10YR	9 > 13	△	○	△	△	△	※	×	貼床
	14	褐色土層10YR	5 < 14	△	○	△	△	△	※	※	貼床
竈No. 2	1	褐色土層7.5YR	○	○	○	※	※	※	△		
	2	赤褐色土層5YR	1 > 2	△	△	※	×	※	×	○	
D-1	1	褐色土層7.5YR	△	△	△	※	×	※	×	※	
	2	褐色土層7.5YR	1 > 2	△	△	△	×	※	×	△	
	3	褐色土層10YR	2 > 3	△	○	○	○	※	×	△	
	4	赤褐色土層5YR	3 < 4	△	△	△	×	※	×	△	
	5	褐色土層7.5YR	4 < 5	△	○	△	×	※	×	△	

第27図 H-32号住居址実測図

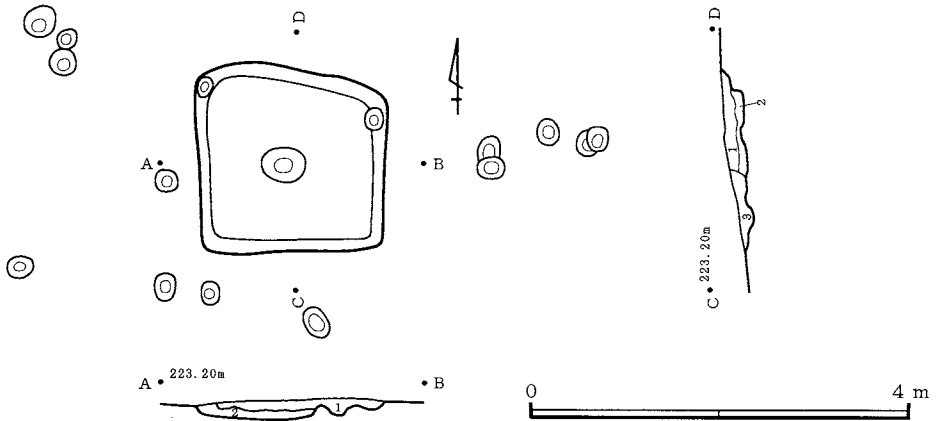
H-33号住



H-2 H-33号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考	
						RP	RB	YP	C		
D-1	①	黒褐色土層10Y R		△	○	※	×	※		貼床	
	②	暗褐色土層10Y R	1 < 2	△	○	※	※	△			
	1	黒褐色土層10Y R		△	○	※	※	△	※		×
	2	明黄褐色土層10Y R	1 < 2	△	◎	◎	◎	※	×		×
	3	黒褐色土層10Y R	2 > 3	△	○	※	※	※	×	×	

T-1号竪穴

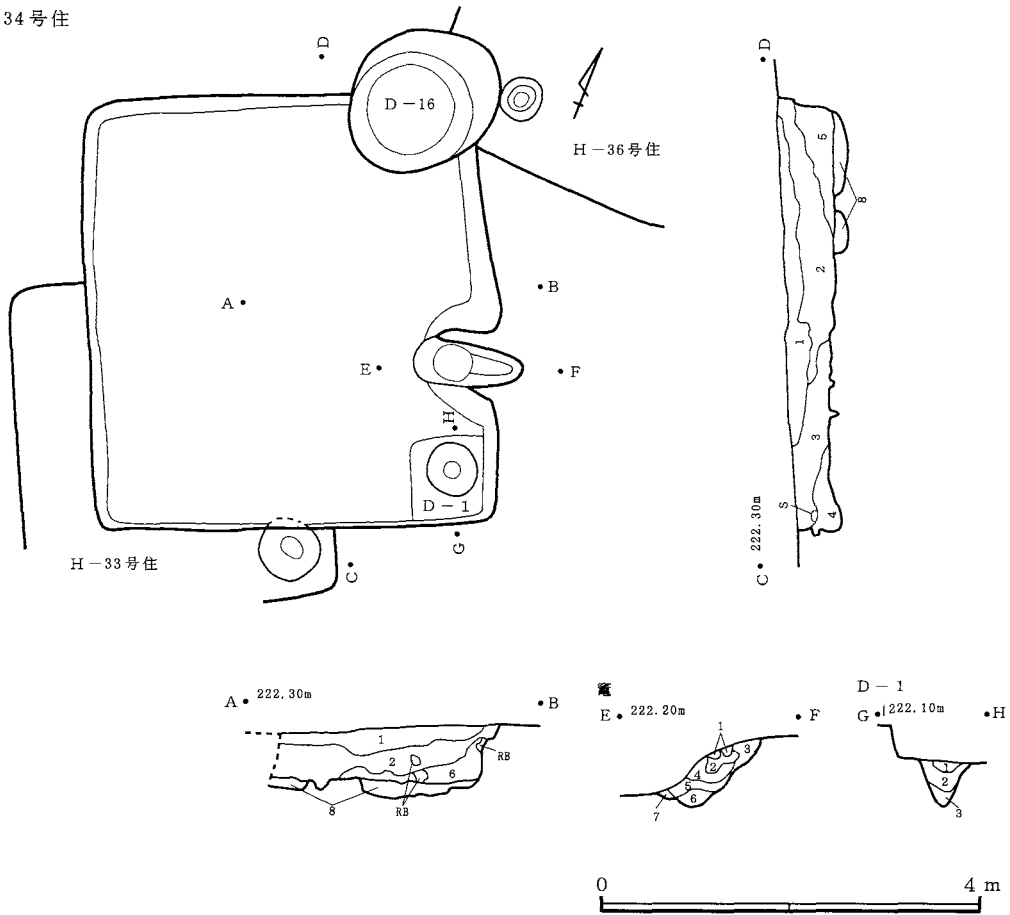


H-2 T-1号竪穴

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				
						RP	RB	YP	C	
	1	黒褐色土層10Y R		△	○	※	※	※	×	×
	2	黒褐色土層10Y R	1 < 2	△	○	△	△	×	×	×
	3	暗褐色土層10Y R	2 < 3	△	○	○	△	△	×	×

第28図 H-33号住居址・T-1号竪穴状遺構実測図

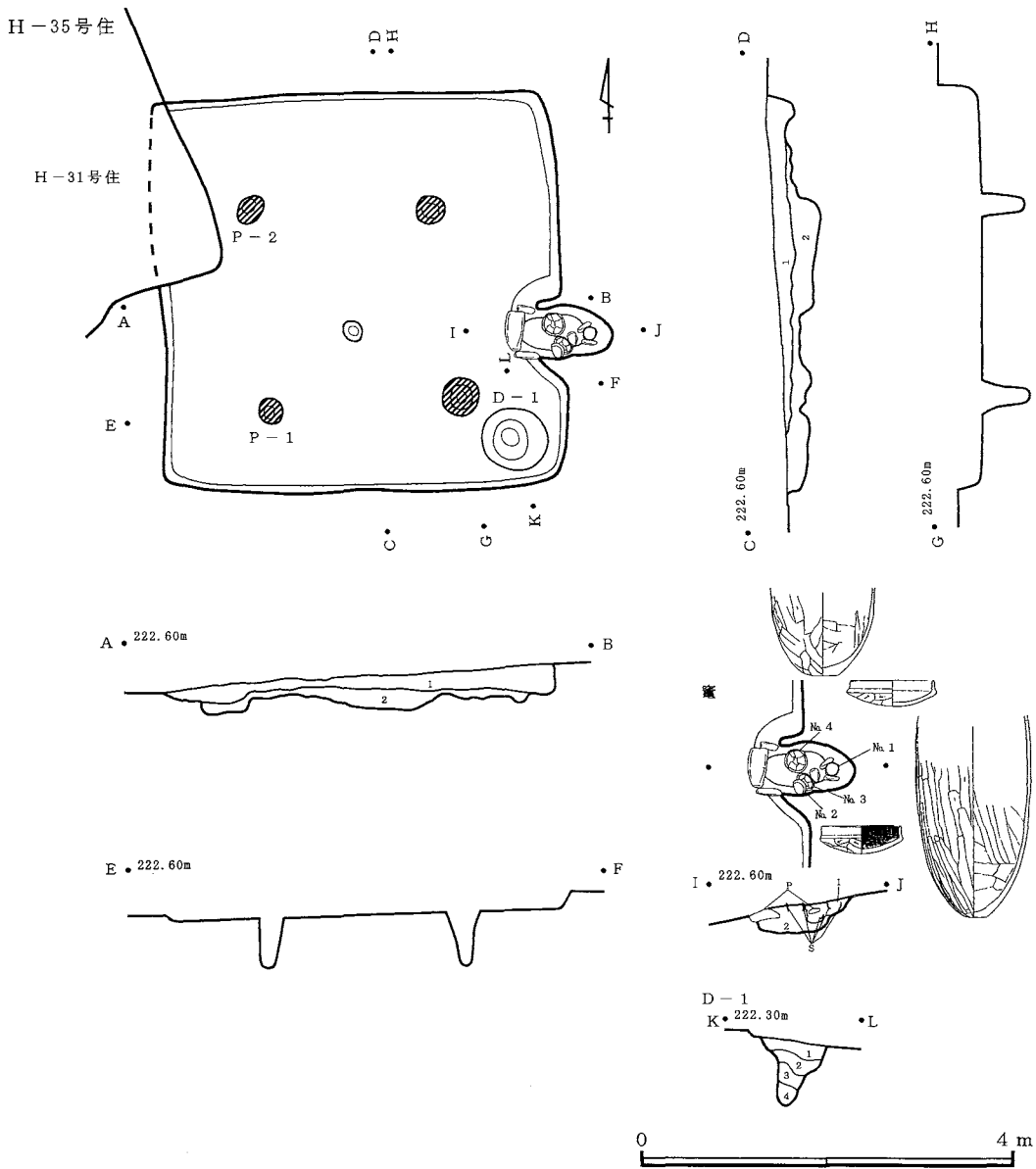
H-34号住



H-2 H-34号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	C	
	1	黒褐色土層10YR		△	○	×	×	※		
	2	黒褐色土層10YR	1<2	△	○	※	※	※		
	3	暗褐色土層10YR	2<3	△	○	△	※	※		
	4	暗褐色土層10YR	3<4	△	○	△	※	※		
	5	黒褐色土層10YR	2>5	△	○	×	×	※		
	6	暗褐色土層10YR	2<6	△	◎	△	△	※		※
	7	黄褐色土層10YR	5<7	○	○	○	◎	◎		
	8	褐色土層10YR	7<9	○	◎	△	○	△		貼床
	9	黒褐色土層10YR	8>9	△	○	△	△	※		
竈	1	黒褐色土層10YR		△	○	※	×	※		※
	2	黄褐色土層10YR	1<2	△	◎	◎	○	※	※	※
	3	褐色土層7.5YR	2>3	△	○	○	×	※		○
	4	にぶい黄褐色土層10YR	3>4	△	○	△	×	※	※	△
	5	褐色土層7.5YR	4<5	△	○	△	×	×	※	○
	6	にぶい赤褐色土層7.5YR	5<6	△	○	△	×	※		◎
D-1	7	黒褐色土層10YR	5<7	△	○	※	×	※		×
	1	黒褐色土層10YR		△	○	×	×	×	×	×
	2	暗褐色土層10YR	1<2	△	○	△	※	※	×	×
	3	暗褐色土層10YR	2<3	△	○	△	※	×	×	×

第29図 H-34号住居址実測図

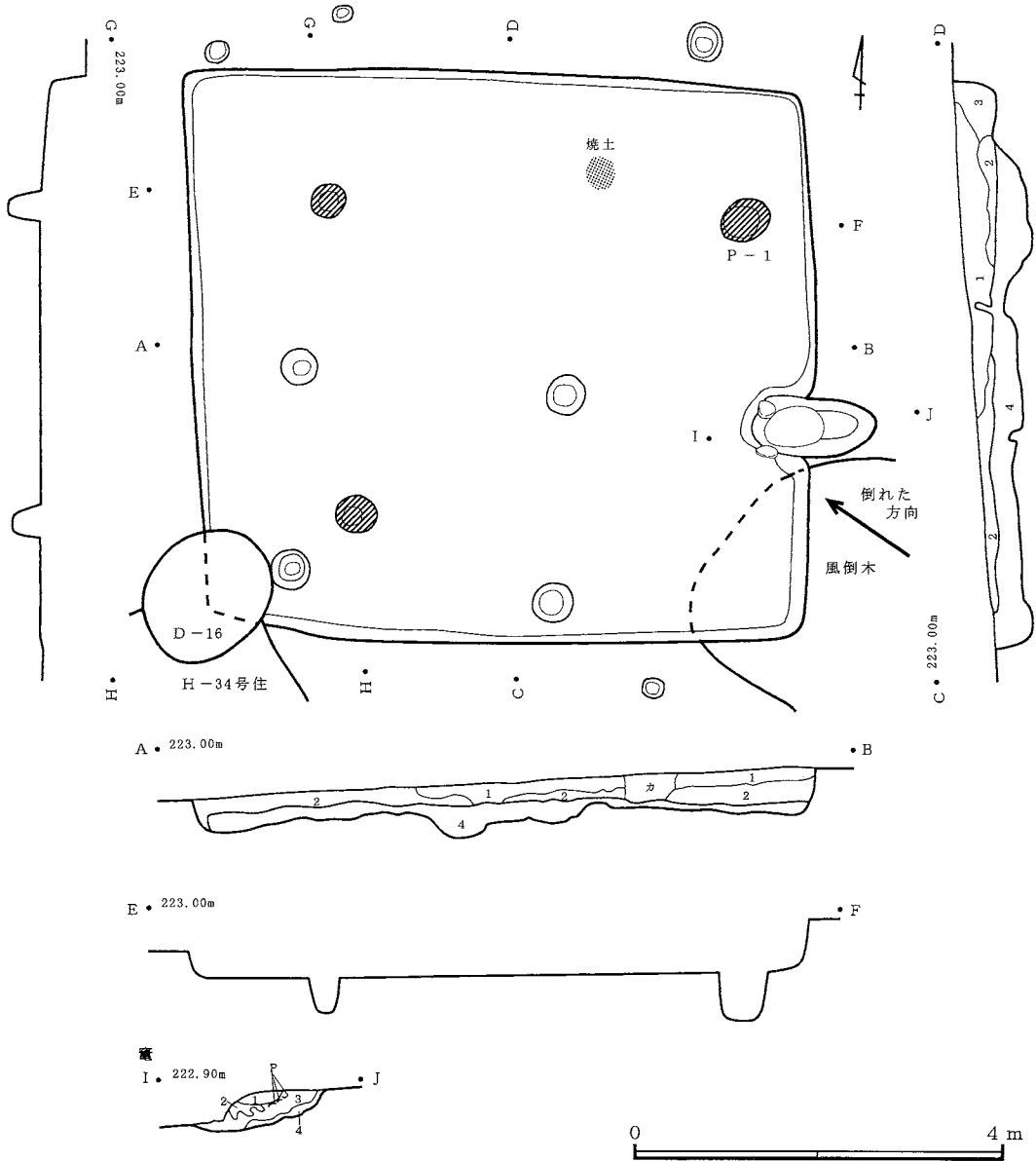


H-2 H-35号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考	
						R	P	R	B		Y
	1	暗褐色土層10Y R		△	○	※	△	※			
	2	黒褐色土層10Y R	1 > 2	△	○	※	※	△			貼床
	3	褐色土層10Y R	1 < 3	△	△	△	○	◎			
竈	1	暗赤褐色土層7.5Y R		△	○	※	×	※		×	○
	2	黒褐色土層10Y R	1 > 2	△	○	※	×	※	※	※	※
D-1	1	黒褐色土層10Y R		△	○	※	※	※		×	×
	2	暗褐色土層10Y R	1 < 2	△	○	△	△	△		×	×
	3	黒褐色土層10Y R	2 < 3	△	○	○	○	△		×	×
	4	黒褐色土層10Y R	3 > 4	△	○	△	○	※		×	×

第30図 H-35号住居址実測図

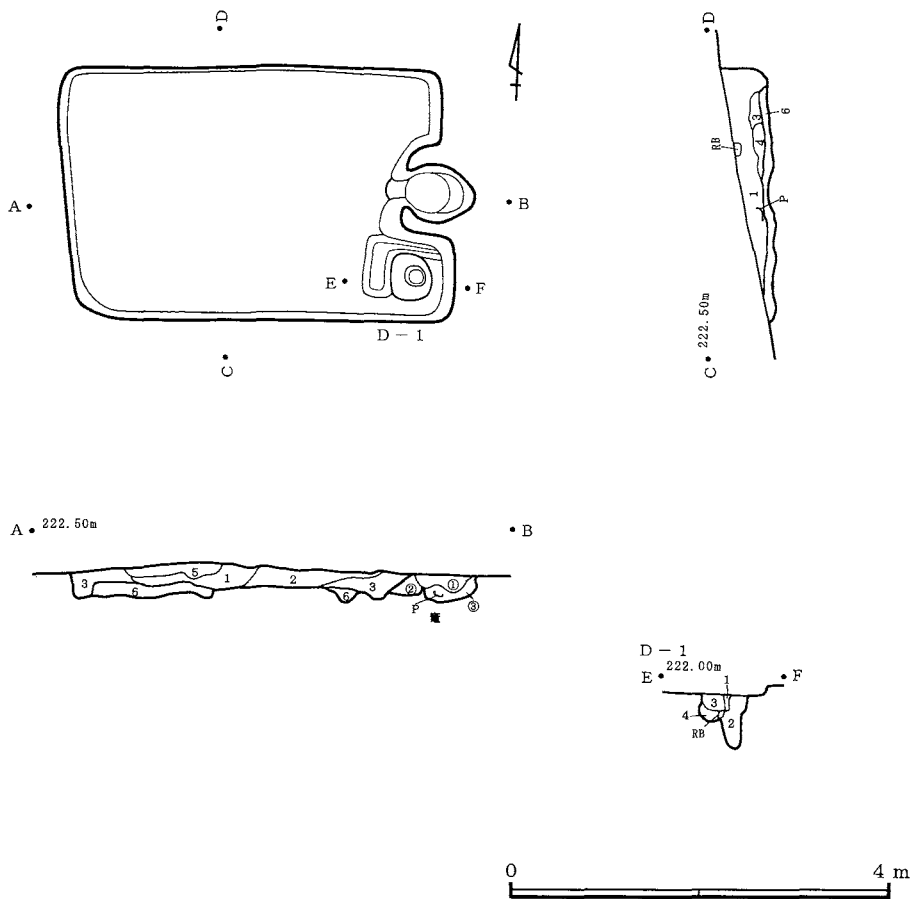
H-36号住



H-2 H-36号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	C	
竈	1	黒褐色土層10YR		△	○	※	※	※		※
	2	暗褐色土層10YR	1 < 2	△	○	△	○	△		※
	3	黒褐色土層10YR	2 > 3	△	○	※	※	※		※
	4	褐色土層10YR	2 < 4	△	○	◎	◎	◎		貼床
	1	褐色土層10YR		○	◎	○	◎	※	※	※
	2	黒褐色土層7.5YR	1 > 2	△	○	※	※	※	×	◎
	3	明褐色土層2.5YR	2 < 3	△	△	◎	△	※	×	◎
	4	黒褐色土層7.5YR	3 > 4	△	○	※	※	※	×	△

第31図 H-36号住址実測図

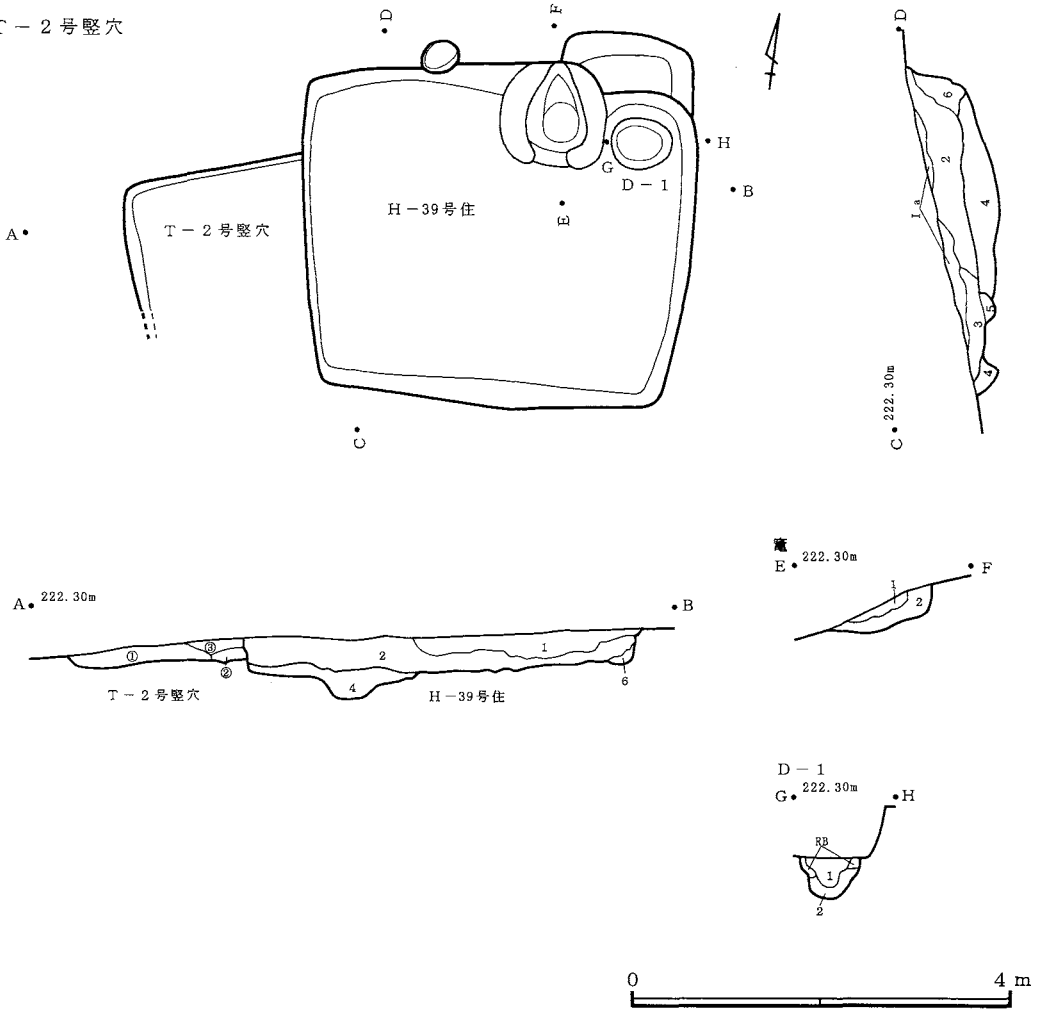


H-2 H-38号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	C	
竪	1	黒褐色土層10YR		△	○	※	△	※	※	×
	2	暗褐色土層10YR	1 < 2	△	○	△	○	※	×	×
	3	暗褐色土層10YR	2 < 3	△	○	○	△	×	×	×
	4	黄褐色土層10YR	3 < 4	○	◎	◎	◎	※	×	×
	5	暗褐色土層10YR	1 < 5	×	○	×	×	※	×	×
	6	褐色土層10YR	3 < 6	○	◎	○	△	※	×	×
竪	①	褐色土層7.5YR		△	○	△	※	※	×	△
	②	褐色土層10YR	1 > 2	△	○	△	※	※	×	※
	③	にぶい赤褐色土層5YR	1 < 3	△	○	△	※	※	×	○
D-1	1	黒褐色土層10YR		△	○	×	×	×	×	×
	2	暗褐色土層10YR	1 < 2	△	○	△	※	※	×	×
	3	暗褐色土層10YR	2 < 3	△	○	△	※	※	×	×
	4	黒褐色土層10YR	1 > 4	△	○	※	※	※	×	×

第32図 H-38号住居址実測図

H-39号住
T-2号竖穴

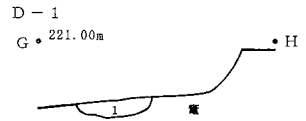
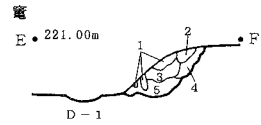
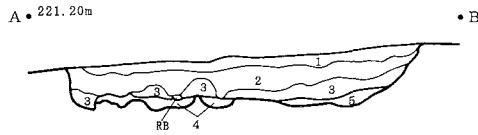
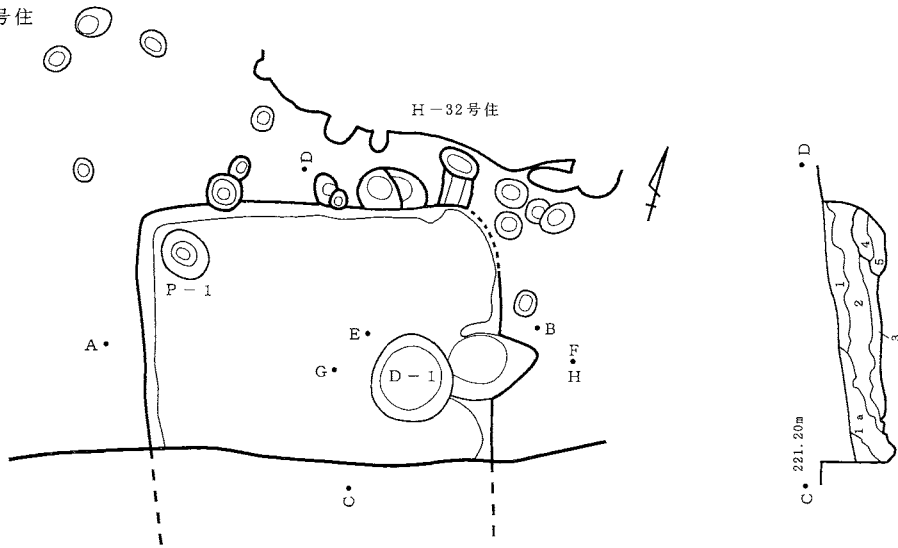


H-2 H-39号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	C	
H-39号住	1	黒褐色土層10Y R	△	○	※	×	×	×	×	
	2	黒褐色土層10Y R	1 > 2 △	○	※	※	※	×	×	
	3	暗褐色土層10Y R	2 > 3 △	○	※	×	※	×	×	
	4	褐色土層10Y R	3 < 5 △	◎	◎	○	※	×	×	貼床
	5	暗褐色土層10Y R	3 < 5 △	○	※	※	※	×	×	
	6	暗褐色土層10Y R	2 < 6 △	○	△	△	※	△	×	
T-2号竖穴	①	暗褐色土層10Y R	2 > ① △	○	×	×	×	×	×	
	②	黒褐色土層10Y R	① > ② △	○	※	△	×	×	×	
	③	暗褐色土層10Y R	② < ③ △	○	△	△	×	×	×	
竈	1	褐色土層7.5Y R	△	○	※	×	※	×	※	
	2	にぶい赤褐色土層5 1 < 2 △	△	△	△	×	※	※	○	
D-1	1	黒褐色土層10Y R	○	○	△	※	※	※	※	
	2	にぶい黄褐色土層10 1 < 2 ○	○	○	○	△	※	※	※	

第33図 H-39号住居址・T-2号竖穴状遺構実測図

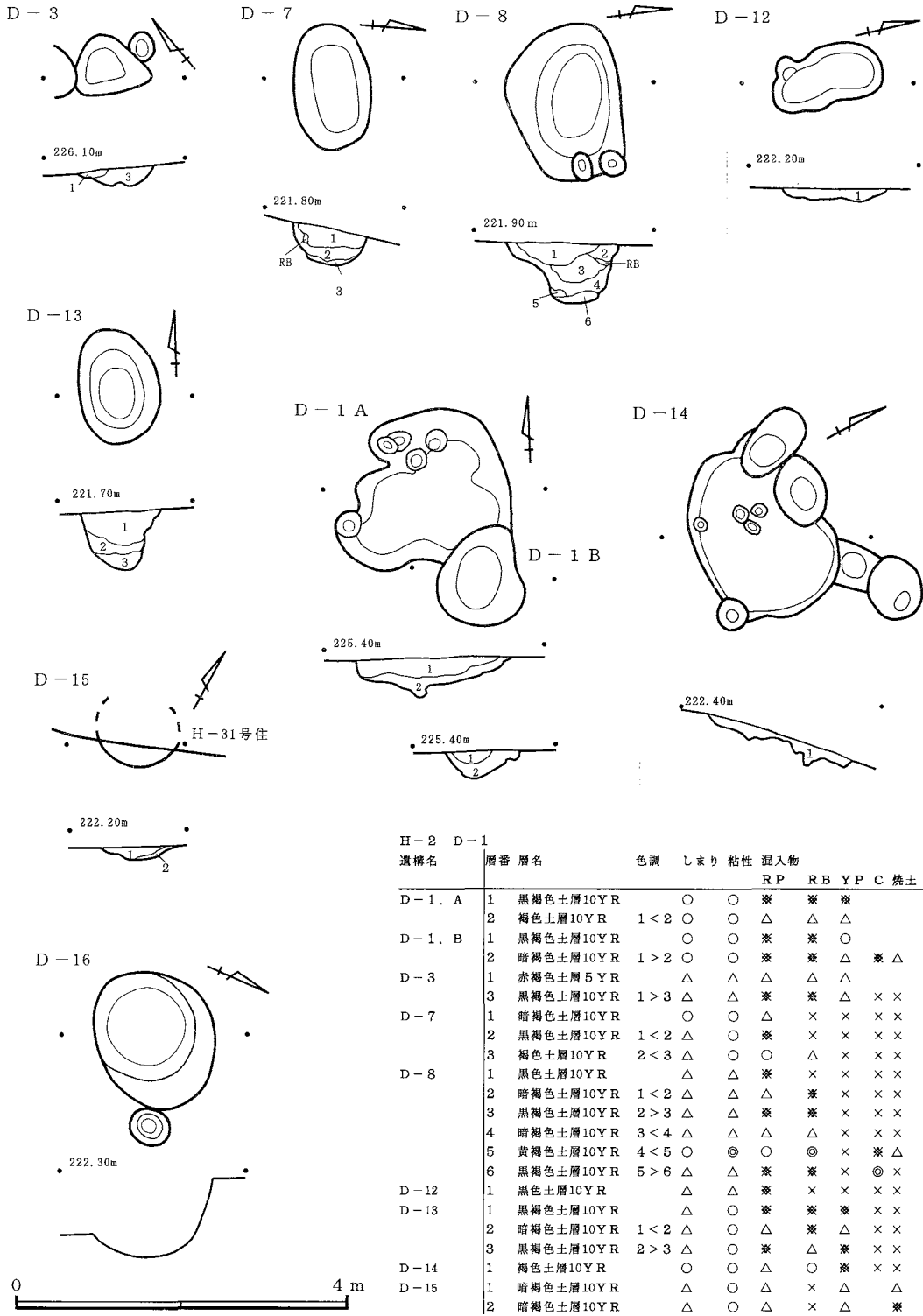
H-40号住



H-2 H-40号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	C	
竈	1 a	黒褐色土層10YR		△	○	※	×	×		
	1	黒褐色土層10YR		△	○	×	×	※		
	2	褐色土層10YR		△	○	△	△	※	※	
	3	黒褐色土層10YR		△	○	×	×	※		
	4	褐色土層10YR		○	◎	○	○	※		貼床
	5	暗褐色土層10YR		×	○	○	×	※		貼床
	1	暗褐色土層10YR		△	○	△	×	※	×	※
	2	明褐色土層7.5YR	1 < 2	△	○	△	×	※	×	○
	3	褐色土層7.5YR	1 < 3	△	○	○	×	※	×	△
	4	褐色土層10YR	3 > 4	△	○	△	×	※	×	※
D-1	5	褐色土層10YR	3 < 5	△	○	△	×	×	×	○
	1	暗褐色土層10YR		△	○	△	※	※	○	×

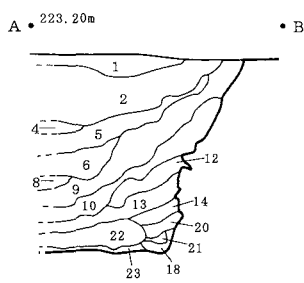
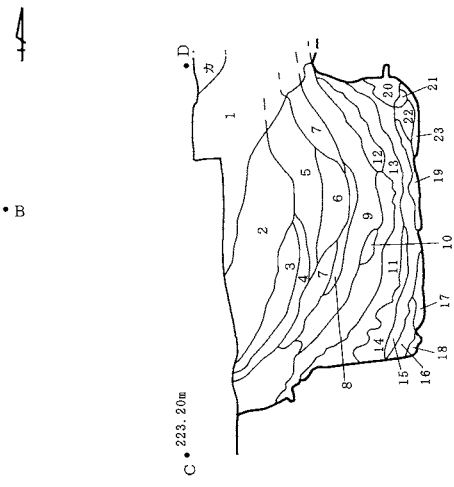
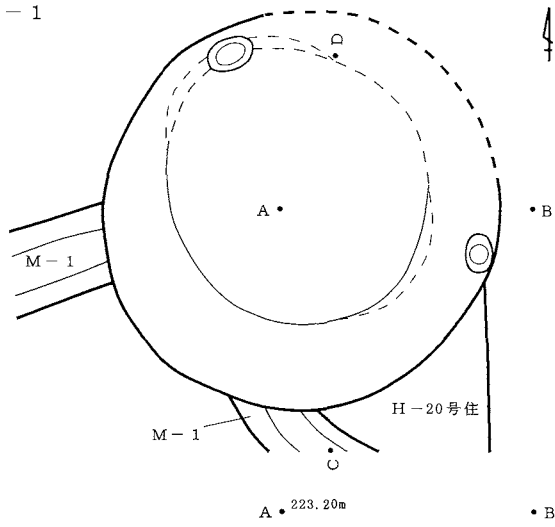
第34図 H-40号住居址実測図



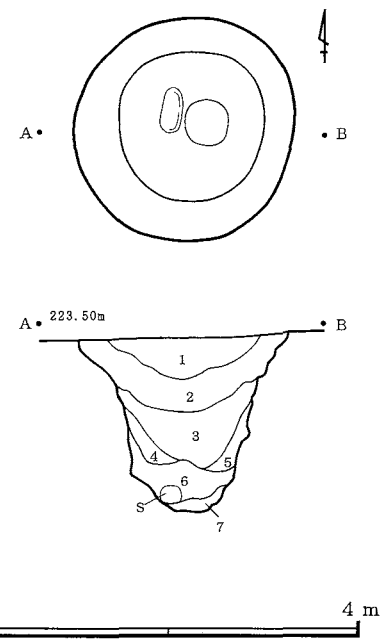
H-2 D-1 遺構名	層番 層名	色調	しまり	粘性	混入物					
					RP	RB	YP	C	焼土	
D-1. A	1 黒褐色土層10YR		○	○	※	※				
	2 褐色土層10YR	1 < 2	○	○	△	△	△			
D-1. B	1 黒褐色土層10YR		○	○	※	※	○			
	2 暗褐色土層10YR	1 > 2	○	○	※	△	※	△		
D-3	1 赤褐色土層5YR		△	△	△	△	△			
	3 黒褐色土層10YR	1 > 3	△	△	※	※	△	×	×	×
D-7	1 暗褐色土層10YR		○	○	△	×	×	×	×	×
	2 黒褐色土層10YR	1 < 2	△	○	※	×	×	×	×	×
	3 褐色土層10YR	2 < 3	△	○	○	△	×	×	×	×
D-8	1 黒色土層10YR		△	△	※	×	×	×	×	×
	2 暗褐色土層10YR	1 < 2	△	△	△	※	×	×	×	×
	3 黒褐色土層10YR	2 > 3	△	△	※	※	×	×	×	×
	4 暗褐色土層10YR	3 < 4	△	△	△	△	×	×	×	×
	5 黄褐色土層10YR	4 < 5	○	◎	◎	◎	×	※	△	
	6 黒褐色土層10YR	5 > 6	△	△	※	※	×	◎	×	
D-12	1 黒色土層10YR		△	△	※	×	×	×	×	
D-13	1 黒褐色土層10YR		△	○	※	※	※	×	×	×
	2 暗褐色土層10YR	1 < 2	△	○	△	※	△	×	×	×
D-14	3 黒褐色土層10YR	2 > 3	△	○	※	△	※	×	×	×
	1 褐色土層10YR		○	○	△	○	※	×	×	×
D-15	1 暗褐色土層10YR		△	○	△	×	△	△	△	
	2 暗褐色土層10YR		△	○	△	×	△		※	

第35図 土坑実測図

I-1



I-2



H-2 I-1

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性					混入物
					RP	RB	YP	B	焼土	
1	黒褐色土層	10YR	△	○	×	×	×	×	×	×
2	暗褐色土層	10YR	1 < 2	○	○	○	×	×	×	×
3	暗褐色土層	10YR	2 > 3	○	○	△	×	×	×	×
4	黒褐色土層	10YR	3 > 4	△	○	△	×	×	×	△
5	黒褐色土層	10YR	4 ≈ 5	△	○	×	×	×	△	×
6	黒褐色土層	10YR	5 > 6	△	○	×	×	×	○	×
7	暗褐色土層	10YR	6 < 7	△	○	△	×	×	○	×
8	黒褐色土層	10YR	7 < 8	△	○	×	×	×	×	×
9	暗褐色土層	10YR	8 < 9	△	○	△	×	×	△	×
10	黒褐色土層	10YR	9 > 10	△	○	×	×	×	×	×
11	暗褐色土層	10YR	10 > 11	△	○	×	×	×	△	×
12	暗褐色土層	10YR	11 < 12	△	○	×	×	×	△	×
13	暗褐色土層	10YR	12 < 13	△	△	△	△	△	○	×
14	黄褐色土層	10YR	13 < 14	△	△	△	○	◎	×	×
15	黄褐色土層	10YR	14 > 15	△	○	◎	◎	△	×	×
16	褐色土層	10YR	15 < 16	△	△	○	○	○	×	×
17	暗褐色土層	10YR	16 > 17	△	◎	×	×	×	×	×
18	黒褐色土層	10YR	17 > 18	△	◎	×	×	×	×	×
19	黄褐色土層	10YR	15 < 19	△	◎	◎	△	△	△	○
20	暗褐色土層	10YR	19 > 20	△	◎	△	△	△	×	×
21	褐色土層	10YR	20 < 21	△	◎	△	△	×	×	×
22	黄褐色土層	10YR	21 < 22	△	◎	△	△	×	×	×
23	黄褐色土層	10YR	22 > 23	△	◎	○	△	×	×	×

H-2 I-2

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性					混入物
					RP	RB	YP	C	焼土	
1	暗褐色土層	10YR	△	○	×	×	×	×	×	×
2	黒褐色土層	10YR	1 > 2	△	○	×	×	×	×	×
3	黒褐色土層	10YR	2 < 3	△	○	×	×	×	△	×
4	暗褐色土層	10YR	3 < 4	×	△	△	×	×	○	×
5	褐色土層	10YR	3 < 5	△	○	○	×	×	×	×
6	黄褐色土層	10YR	5 < 6	×	△	△	△	◎	×	×
7	赤褐色土層	5YR	6 < 7	△	○	○	×	×	○	○

第36図 I-1号・I-2号井戸状遺構実測図

〔遺物出土状況〕

住居址（第37図～第49図） 住居址の遺物出土状態は第37図～第49図に図示したとおりである。この時期の住居址の場合、竈及びその周辺から土器がまとまって出土することが一般的であり、本遺跡での遺物出土状態も基本的にはこうした傾向が強い。また、①遺棄された状態を示すもの、②廃棄された状態を示すもの、③埋没時に二次的に混入したものが存在する。ただし、確実なパターン①の事例は、本遺跡には存在しておらず、①と②や③が複合した状態であった。

ここでは、完形の土器がまとまって出土した事例を中心に代表的な住居址の出土状態を述べる。

H-3号住居址遺物出土状態（第7図・第37図） 竈右脇（3区2層）からほぼ完形の土師器甕（第53図2）が横倒しの状態で検出されているが、床面との間に間層が存在していることから、住居廃絶後に廃棄されたものと判断される。また、竈左脇の土坑（D-1）の上層部分から底部の欠損した土師器甕（第52図12）が正位で出土している。これは器台として設置されて二次利用されていた

隣接して完形の土師器甕（第53図1）が口縁部を下向きにした状態で検出された。土坑が相当埋没した段階で投げ込まれたような状態で出土していることから、これらも住居廃絶後に廃棄されたものである可能性が高い。この住居址からは他にも完形の土師器杯が3点出土している。14区から床直状態で出土した例（第52図3）以外は、覆土中からの出土であり、土師器甕と共に廃棄されたものである可能性が高い。したがって、ここで出土した遺物は一部パターン①が存在し、大部分はパターン②と推定される。

H-4号住居址遺物出土状態（第38図） 住居址中央部下層から土師器甕2個体分の大形破片（第51図10・11）と、大形の川原石が検出された。これらはパターン②に相当すると判断される。

H-8号住居址遺物出土状態（第39図） 南東部（9・10・13・14区）床面直上より、編物石が12点まとまって検出された。パターン①に相当する。この住居址で他に完形の遺物としては、竈前面に伏せた状態で土師器杯（第54図8）が検出されており、パターン①と判断される。しかし、それ以外の遺物は、破片で各層から検出されており、パターン②・③に相当すると判断される。

H-10号住居址遺物出土状態（第39図） 竈前面の床面直上から土師器甕（第55図3・6）が出土した。また、土坑付近の床面直上から須恵器甕（同7）と、土師器球胴甕底部（同4）が隣接して出土した。土師器球胴甕底部は器台に転用されていた可能性が高い。これらの遺物はパターン①と判断される。

H-14号住居址遺物出土状態（第41図） 北西隅（1区）の壁際から須恵器碗（第58図5）が伏せた状態で出土している。パターン①に相当する。

H-16号住居址遺物出土状態（第16図・第42図） 土坑（D-1）の両脇から土師器鉢（第60図1）と球胴甕底部（同5）が設置された状態で検出された。これは、土坑に付随する器台的な施

設と判断される。いずれもパターン①と判断される。また、土坑覆土上層から鉢（同2）が出土しているが、これはパターン②に相当する。そして、13区床面直上からは、編物石が14点まとまって出土している。これはパターン①と判断される。また、16区床面直上からは、玉が1点検出されている。単品で検出されていることから、パターン③の可能性が強い。なお、この住居址は本遺跡最大規模の大形住居址であるにも関わらず、遺物出土量が比較的少なく、小破片も多いことから、パターン③としての色彩が強い。

覆土上層からは、9世紀後半の須恵器杯・皿などが出土しており、住居廃絶後も相当長期間完全に埋没していなかった可能性がある。

H-23号住居址遺物出土状態（第43図） 「太」字の墨書のある須恵器皿（第61図9）が15区床面直上から伏せた状態で出土した。パターン①と判断される。

H-24号住居址遺物出土状態（第44図） 住居南（14・15区）覆土最下層及び床面直上から18点の編物石がまとまって検出された。パターン①に相当する。

H-32号住居址遺物出土状態（第46図） この住居址は遺構としての遺存状態が良好であったが、遺物はパターン②・③と判断される状態を示しており、あまり良好な出土状態とは言えない。ほぼ完形の須恵器杯が1点出土しているのみであり、残りは欠損品である。

H-35号住居址遺物出土状態（第30図・第47図） 竈内から4点の土器がまとまって出土している。土師器甕2点（第70図12・13）は竈内に直立した状態で並んで出土した。口辺部や胴上半部が欠損しているが、12は後世の削平行為で欠損した可能性が高いが、13を覆うように土師器杯（同6）が伏せた状態で出土しており元々口辺部が欠損した状態であったと判断される。そして、もう一つの土師器杯（同7）は煙道部から伏せた状態で検出された。パターン①と判断される。

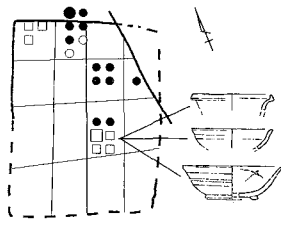
竪穴状遺構（第50図） T-1号竪穴状遺構からは、廃棄あるいは流れ込みによると推定される少量の土師器破片が出土したのみであった。また、T-2号竪穴状遺構からは、全く遺物が検出されていない。

井戸状遺構（第50図） I-1号井戸状遺構では、1層・3層から器形の分かる土師器杯・甕が検出されている。近接するH-16号住居址と時期が同じであることから、周囲のものが流れ込んだものと推定される。I-2号竪穴状遺構は少量の土師器破片が出土しているほか、底面から比較的大形の川原石が検出されている。いずれの遺構の遺物も出土量が少なく、廃棄されたというよりも埋没時に二次的に混入したものと推定される。

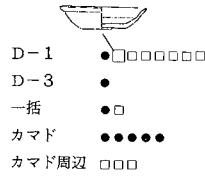
M-3号溝（第78図・第80図） H-16号住居址と重複しているが新旧関係は判然としなかった。長さ7m、上幅0.7m、深さ0.2mの規則性のない浅い溝である。

（大工原 豊）

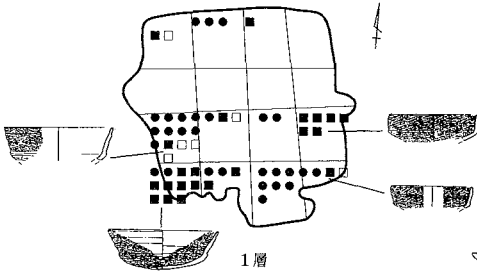
H-1号住



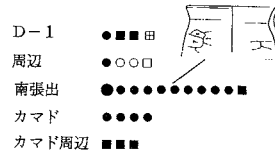
1層



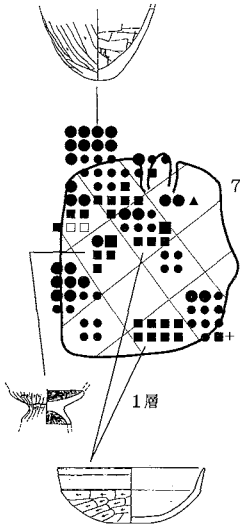
H-2号住



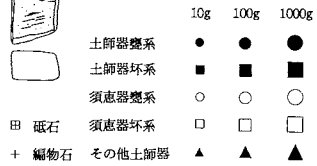
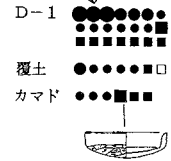
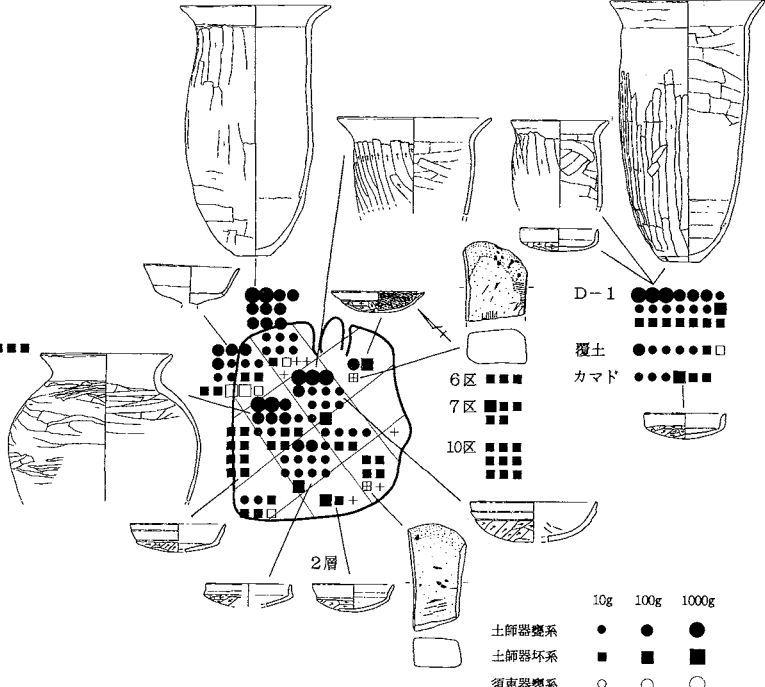
1層



H-3号住

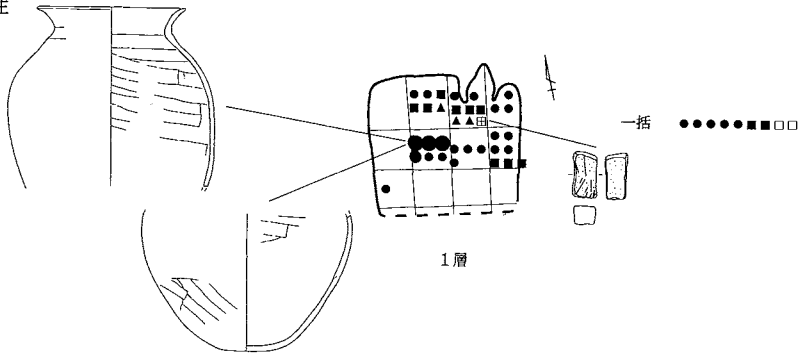


1層

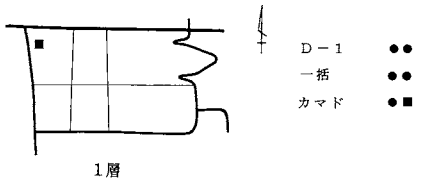


第37図 H-1・2・3号住居址遺物分布図

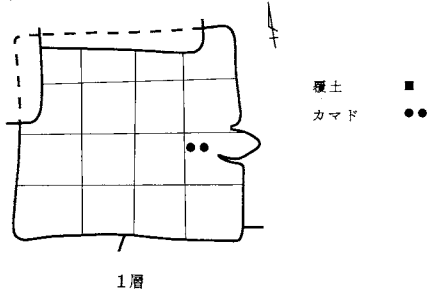
H-4号住



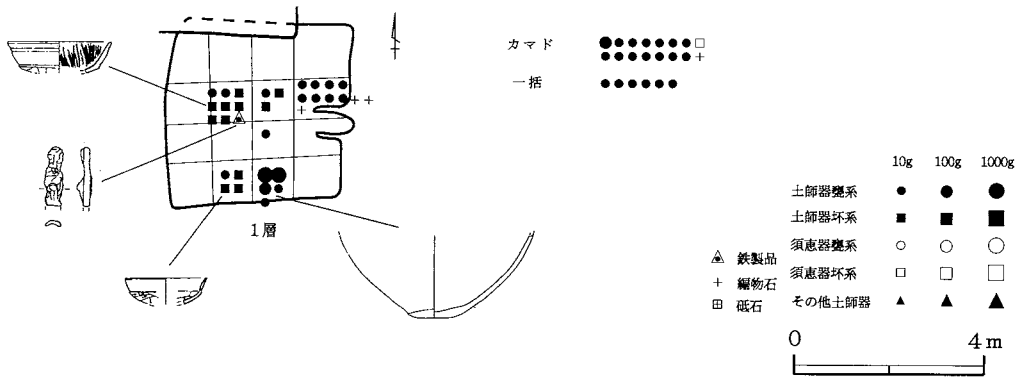
H-5号住



H-6号住

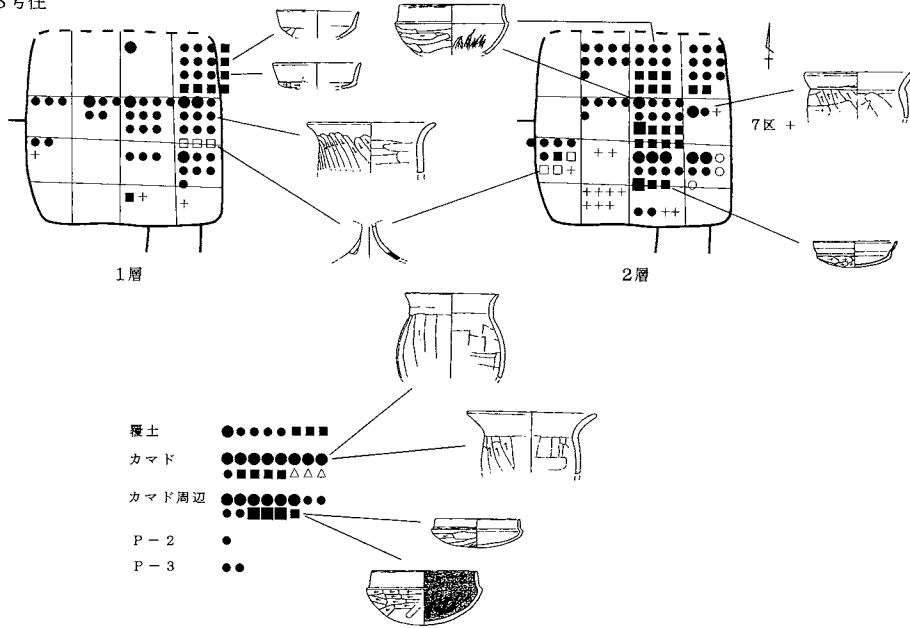


H-7号住

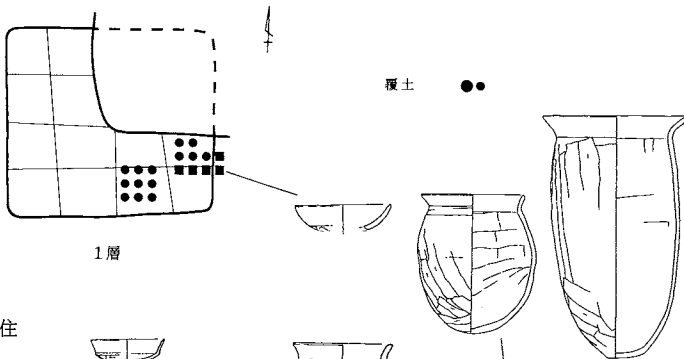


第38図 H-4・5・6・7号住居址遺物分布図

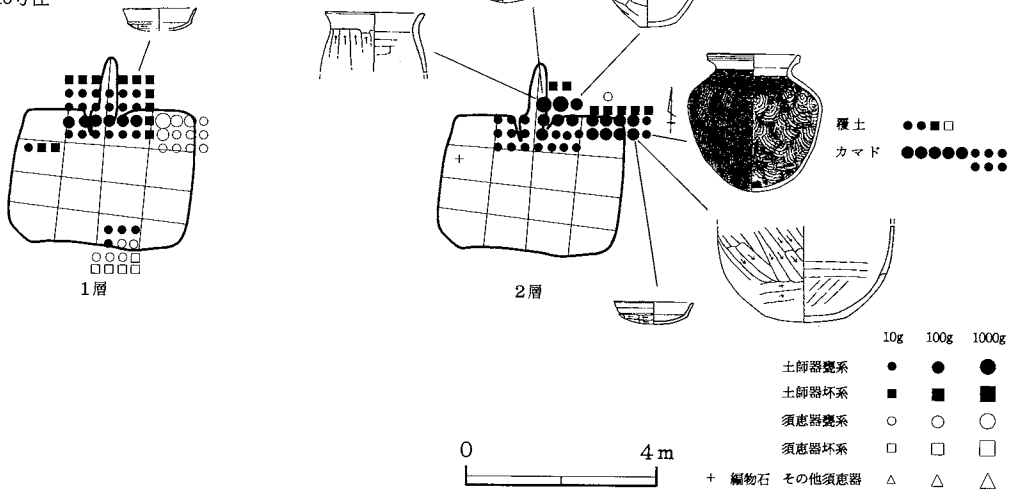
H-8号住



H-9号住

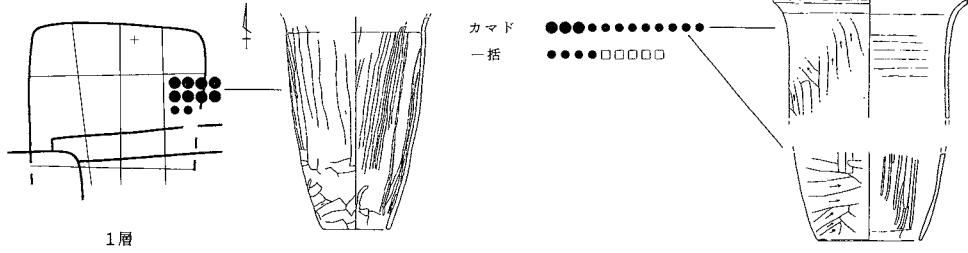


H-10号住

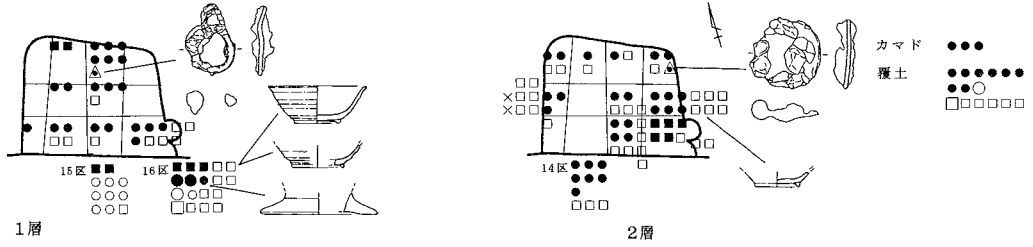


第39図 H-8・9・10号住居址遺物分布図

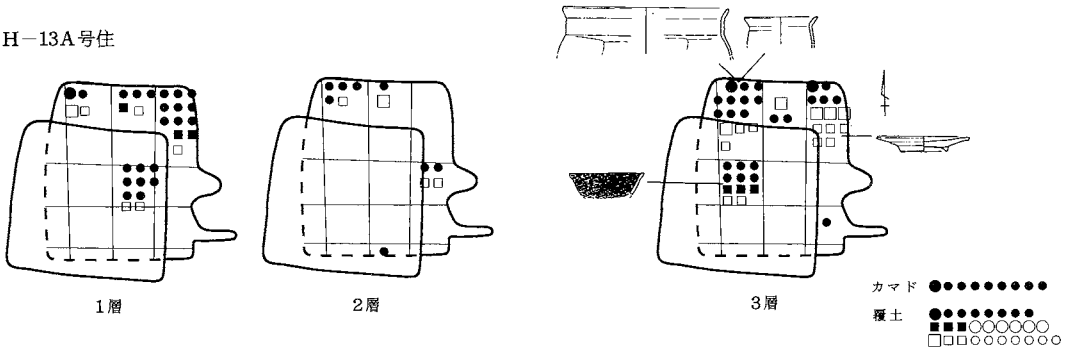
H-11号住



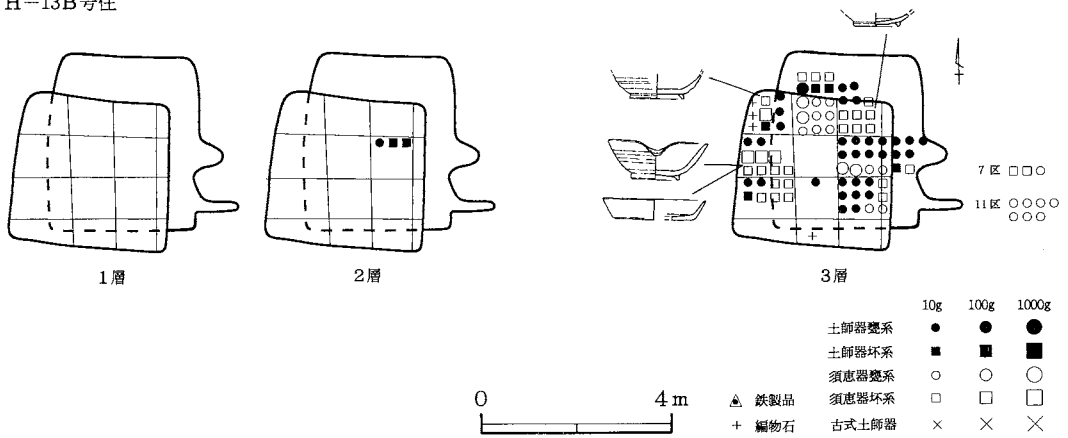
H-12号住



H-13A号住

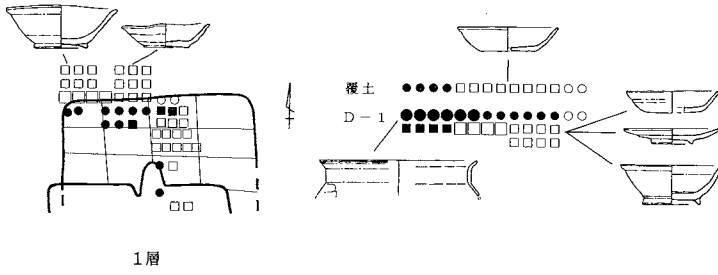


H-13B号住

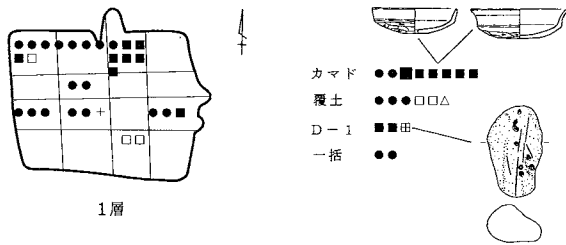


第40図 H-11・12・13A・13B号住居址遺物分布図

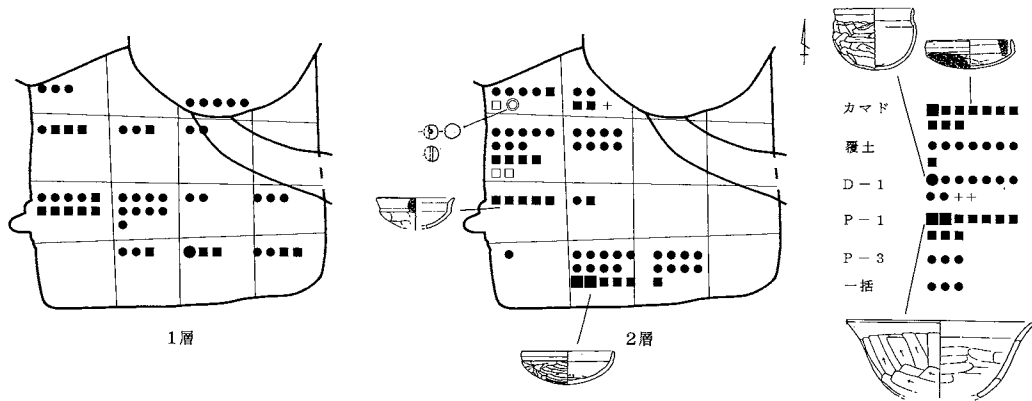
H-14号住



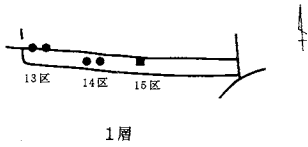
H-15号住



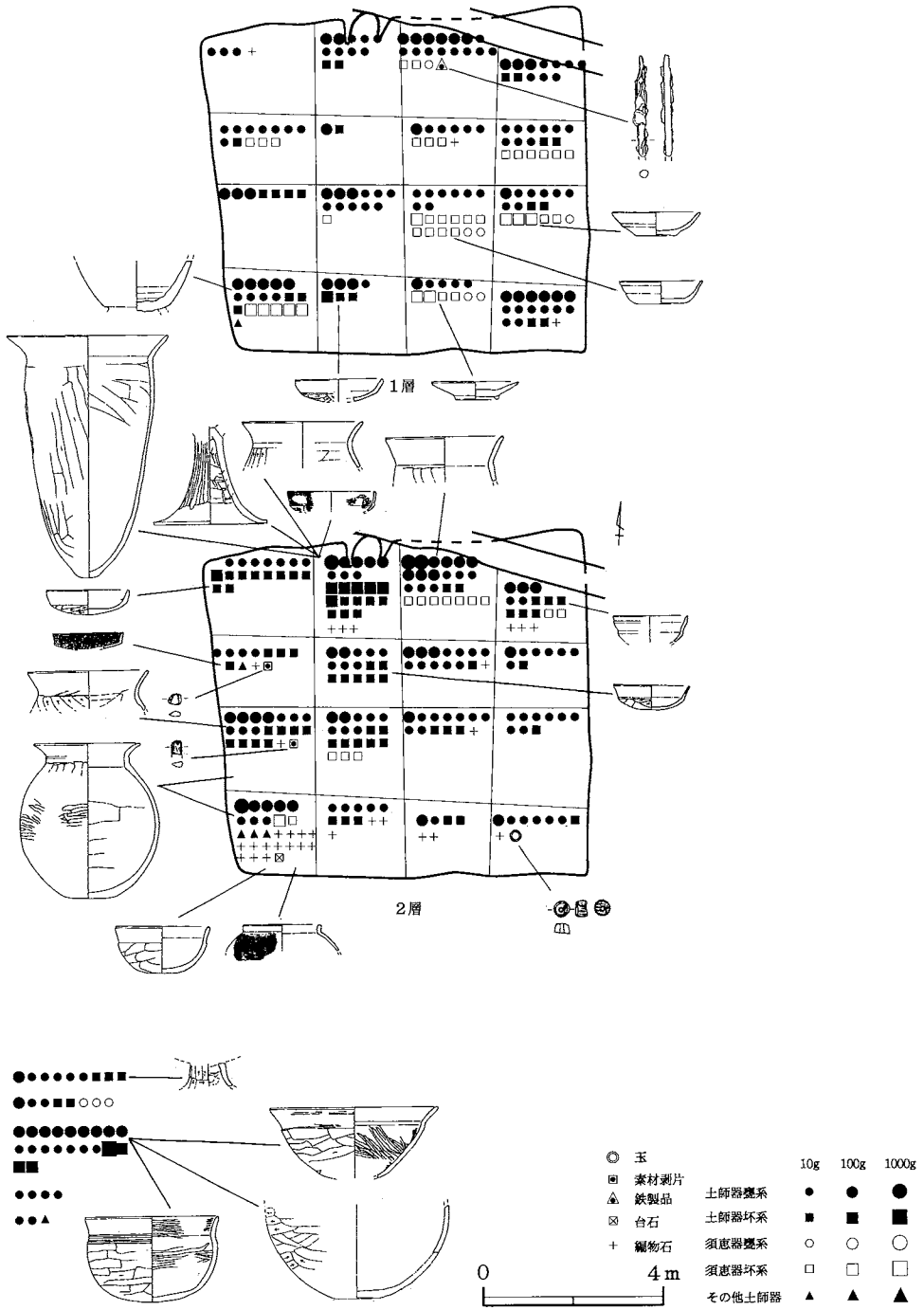
H-20号住



H-21号住

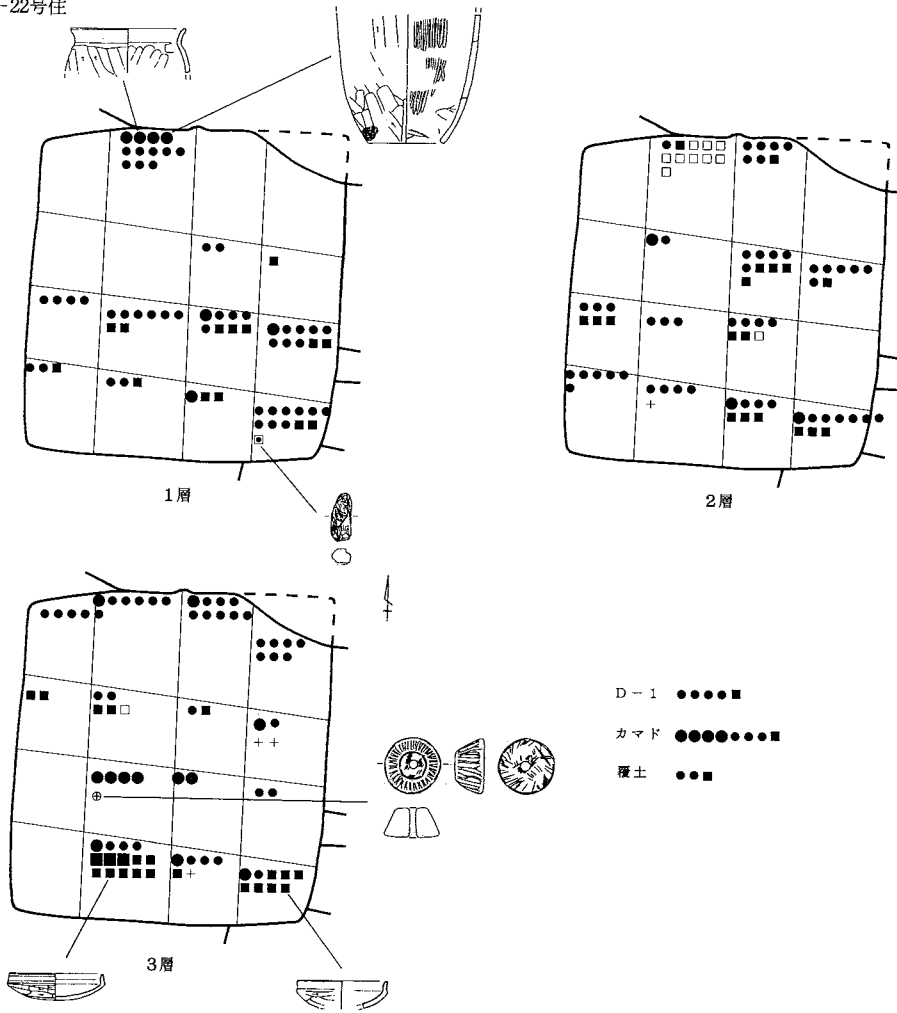


第41図 H-14・15・20・21号住居址遺物分布図

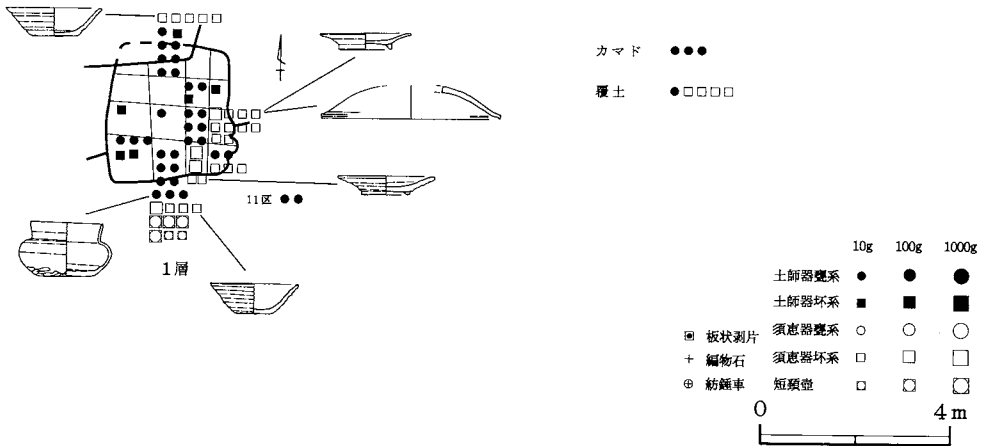


第42図 H-16号住居址遺物分布図

H-22号住

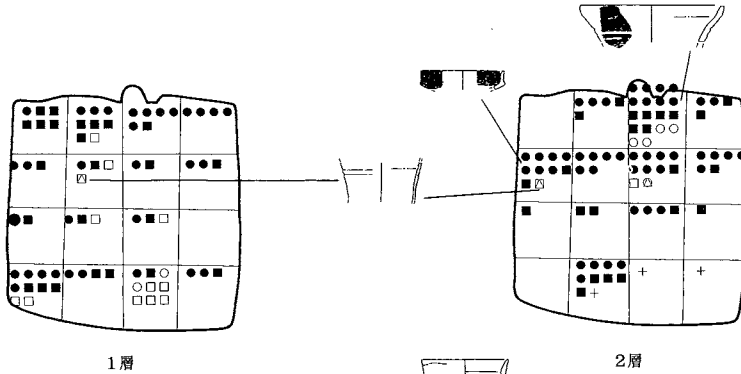


H-23号住



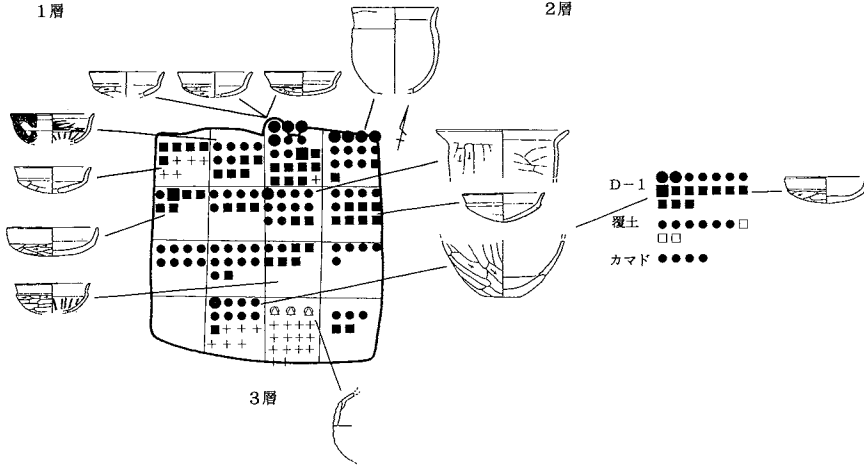
第43図 H-22・23号住居址遺物分布図

H-24号住



1層

2層



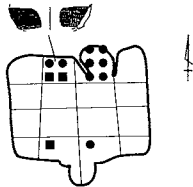
3層

D-1

覆土

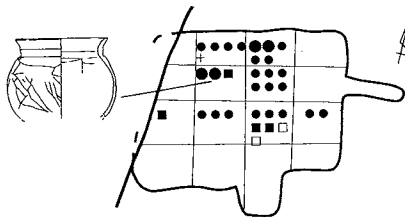
カマド

H-25号住



1層

H-26号住



1層

D-2

覆土

カマド

+ 編物石

10g 100g 1000g

土師器壺系

土師器环系

須恵器壺系

須恵器环系

長頸壺

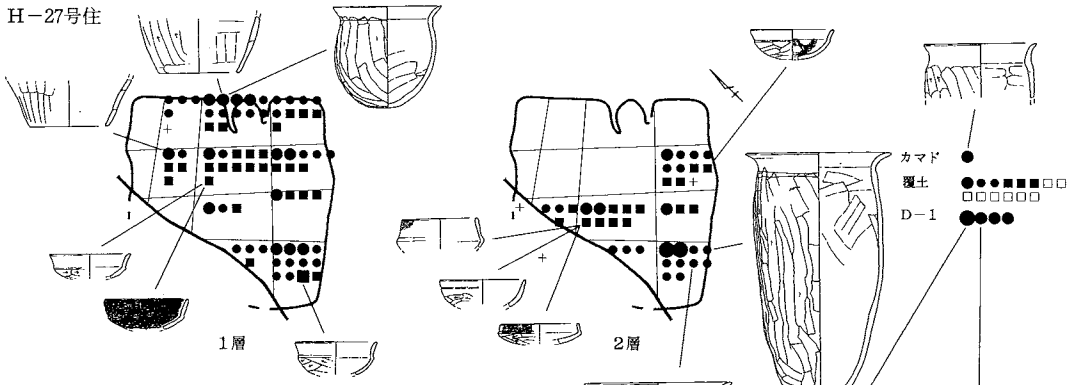
提瓶

0

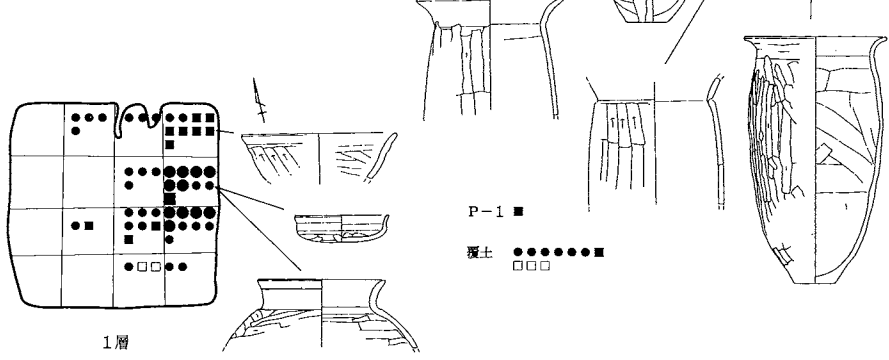
4 m

第44図 H-24・25・26号住居址遺物分布図

H-27号住



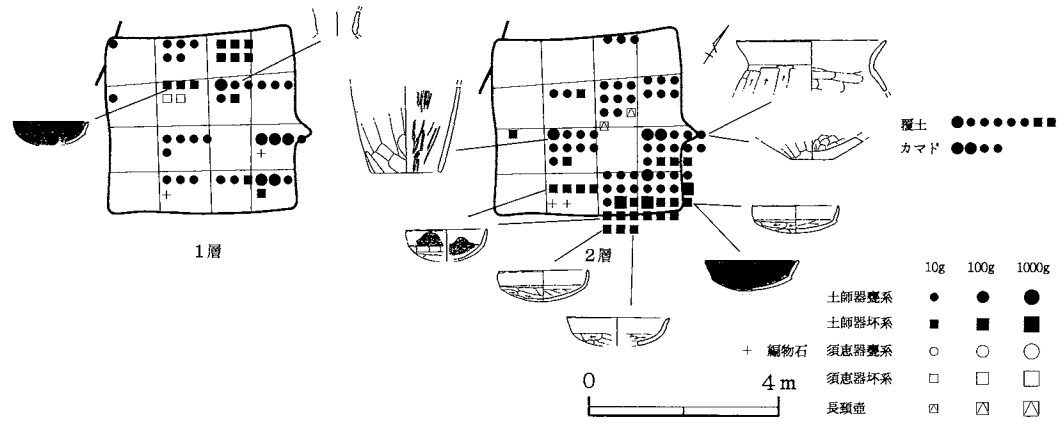
H-28号住



H-29号住

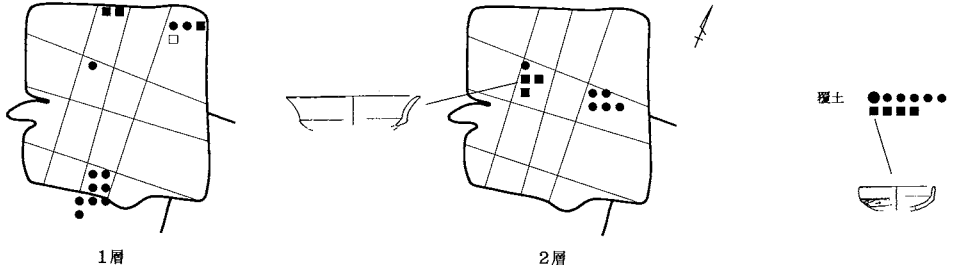


H-30号住

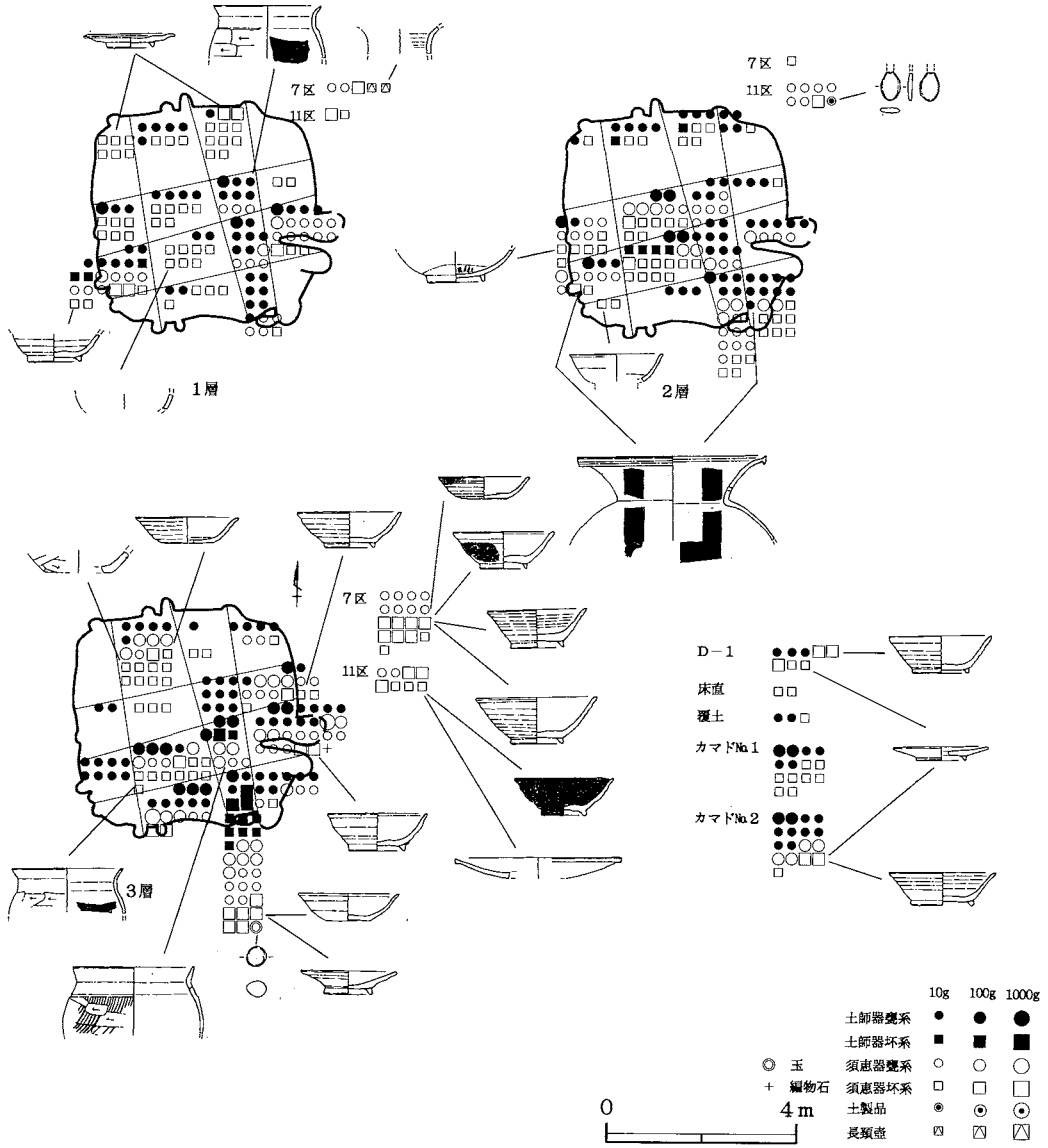


第45図 H-27・28・29・30号住居址遺物分布図

H-31号住

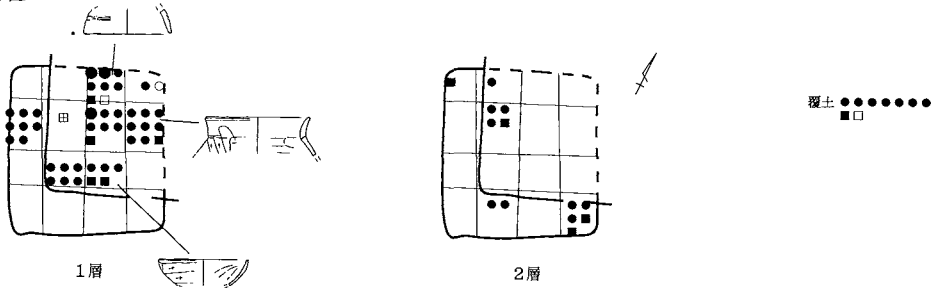


H-32号住

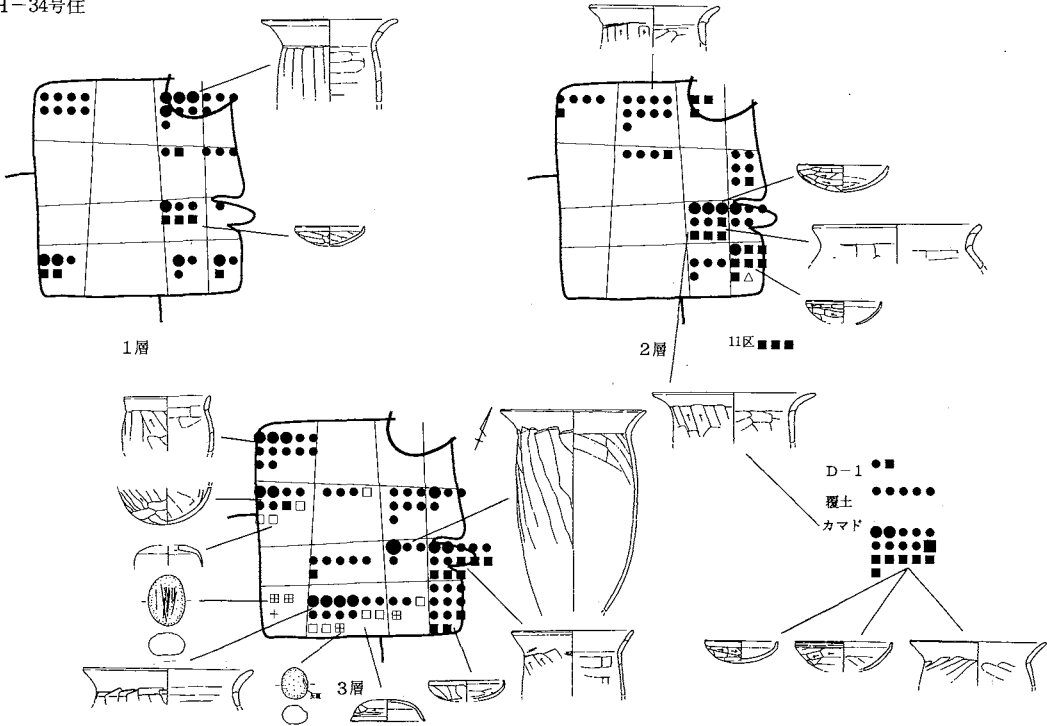


第46図 H-31・32号住居址遺物分布図

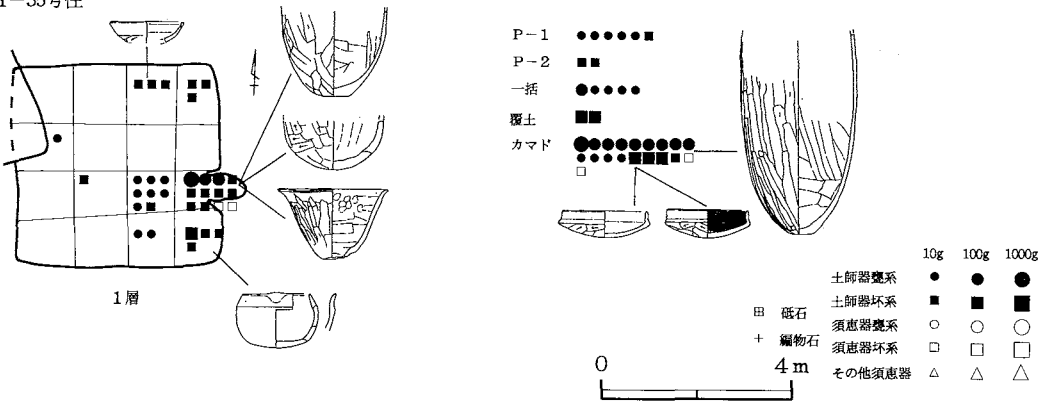
H-33号住



H-34号住

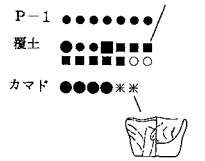
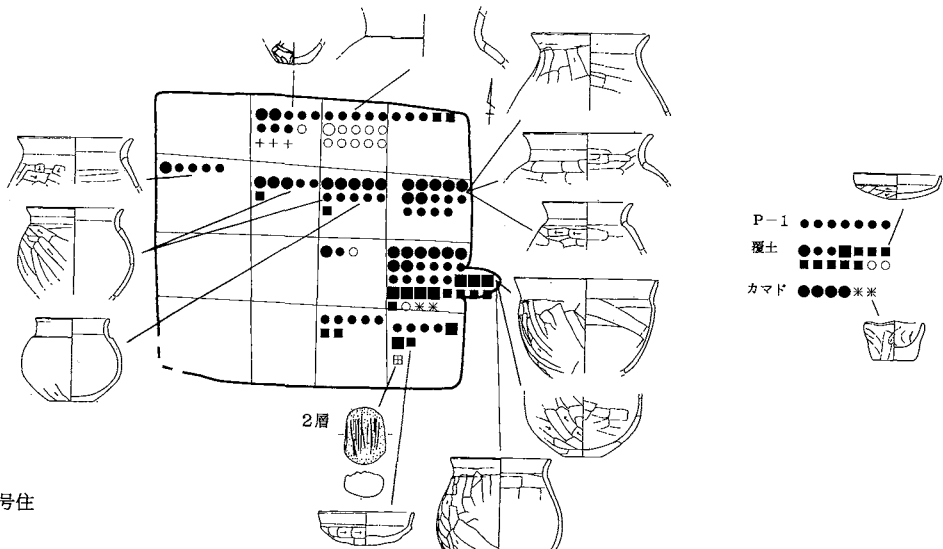
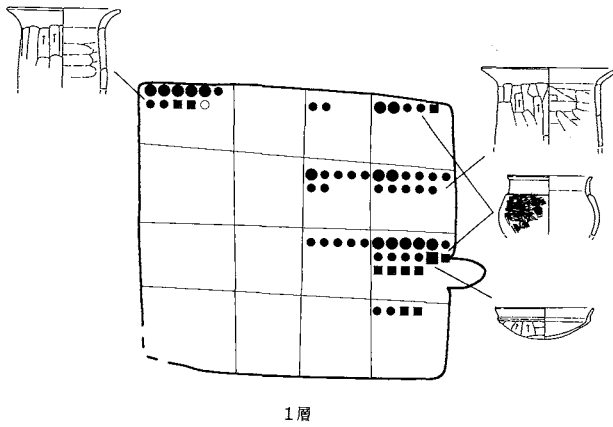


H-35号住

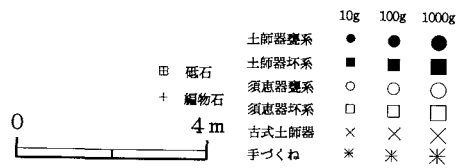
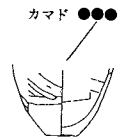
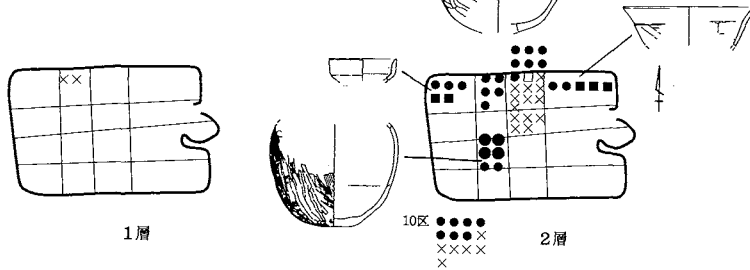


第47図 H-33・34・35号住居址遺物分布図

H-36号住

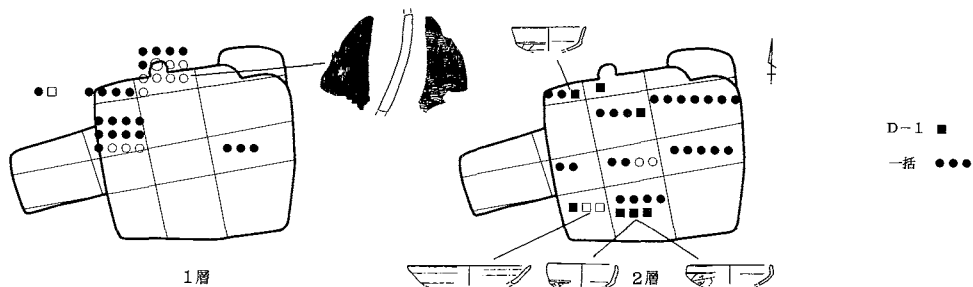


H-38号住

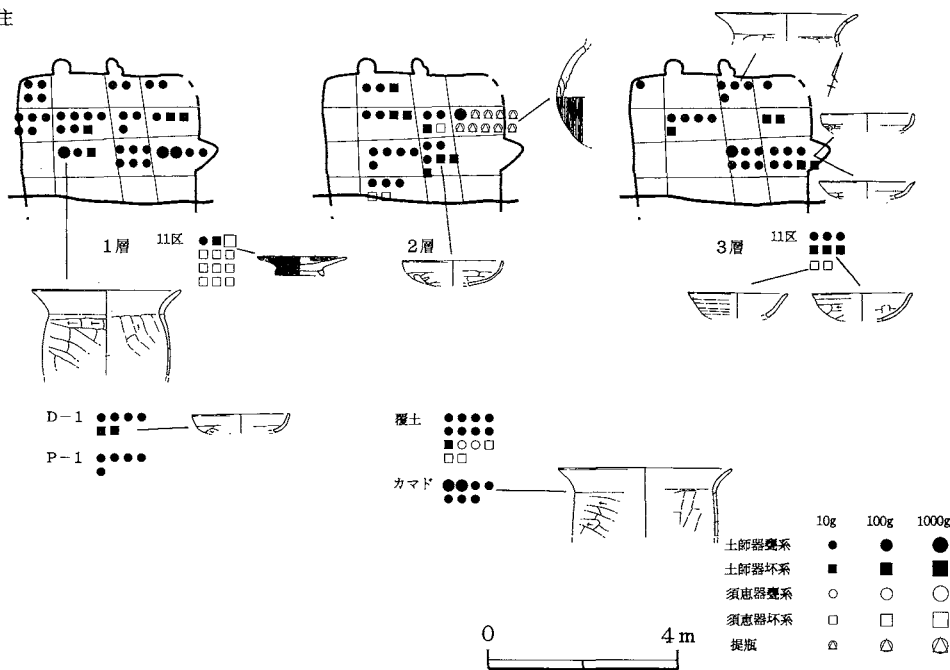


第48図 H-36・38号住居址遺物分布図

H-39号住

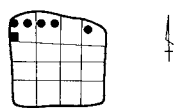


H-40号住



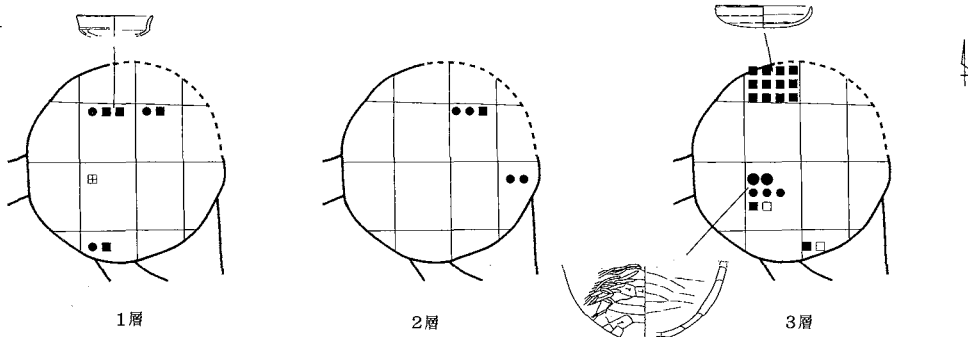
第49図 H-39・40号住居址遺物分布図

T-1号竖穴



1層

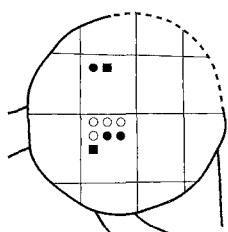
I-1



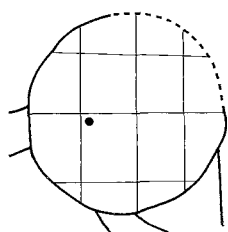
1層

2層

3層

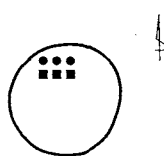


4層

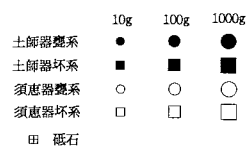


5層

I-2



一括



第50图 T-1号竖穴状遺構・I-1号・I-2号井戸状遺構遺物分布図

(2) 遺物

[土器] (第51図～第75図)

古墳時代～平安時代の土器は第51図～第75図に遺構別に代表的なものを図示した。また、土器の観察表は第7表～第20表のとおりである。基本的には通常の集落遺跡から検出される土師器・須恵器・灰釉陶器である。器種としては、土師器では坏・甕・小形甕・鉢・片口鉢などがあり、須恵器では、坏・蓋・碗・皿・大形甕・甕・長頸壺・短頸壺・提瓶・高坏などがある。

本遺跡の住居址は重複が少ないので、別の時期の土器の混入する頻度は低く、その点では一括性の高い資料と成り得る。その反面重複関係が少ないことは、住居の新旧関係を具体的に検証することができない短所を有している。したがって、新旧関係の決定はこれまでに蓄積されたこの時期の土器研究に依存することとなる。しかし、共伴関係を検討する上では、混入が少ないので良好な資料と成り得る。

墨書土器としては、須恵器碗の「丁」(第57図5)、須恵器皿の「太」(第61図9)、須恵器坏の「祢(?)」(第75図15)の3点が検出されている。「丁」・「太」は9世紀後半のものであり、先に隣接する西殿遺跡からも同時期の「太」のある須恵器坏が出土している。「太」は墨書は2例目である。この時期の本集落群に関連する文字と推定される。

なお、この時代の土器群の様相については、V章で詳述する。

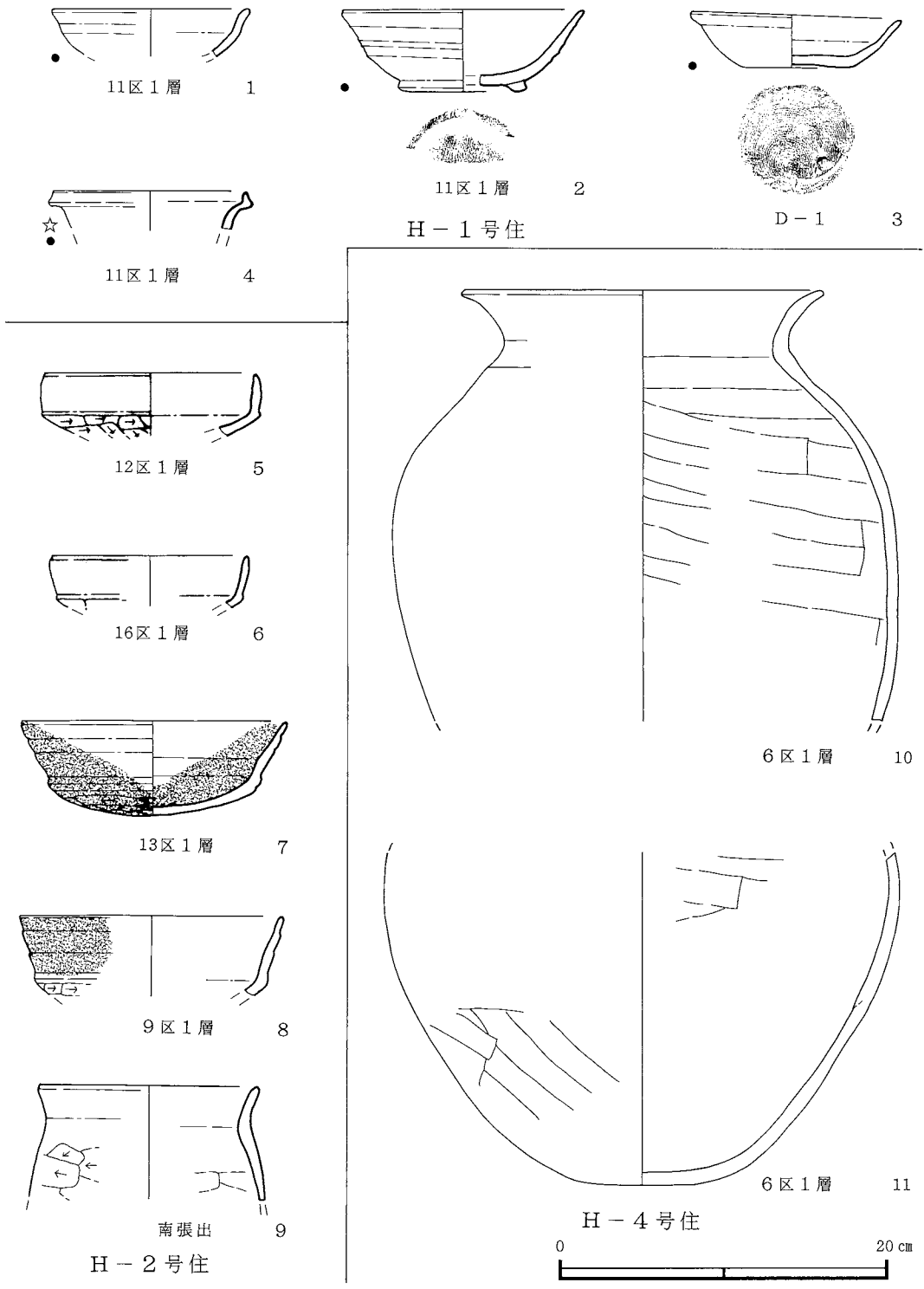
[鉄製品] (第76図)

鉄製品は第76図に図示した。また、観察表は第21表のとおりである。刀子・鉄製紡錘車・環状鉄製品が検出されている。

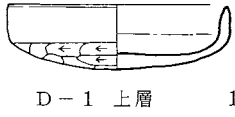
[石製品] (第76図)

石製品は第76図に図示した。また、観察表は第22表のとおりである。石製品としては、玉・紡錘車・砥石・滑石素材剥片がある。

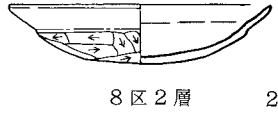
(大工原 豊)



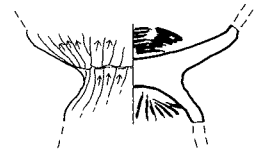
第51図 H-1号・H-2号・H-4号住居址出土の土器



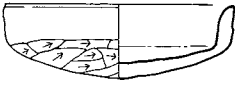
D-1 上層 1



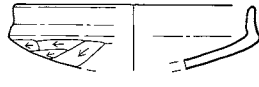
8区2層 2



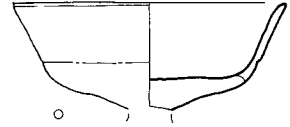
6区1層 7



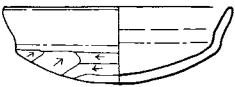
竈内 3



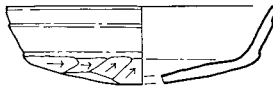
10区2層 4



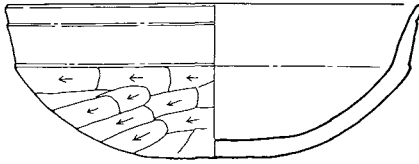
2区2層 8



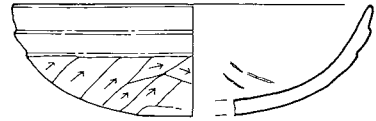
14区床直 5



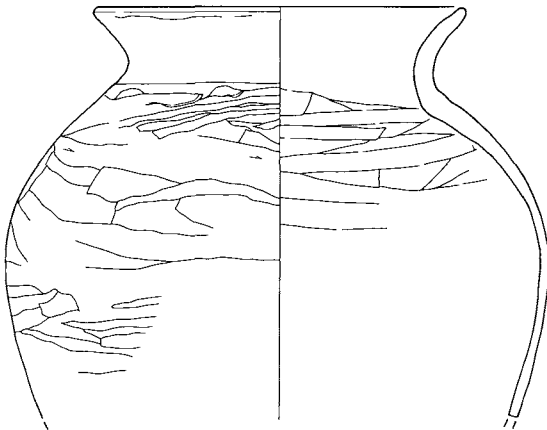
5区2層 6



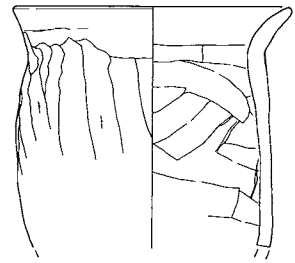
7区1層・10区2層・14区1層 9



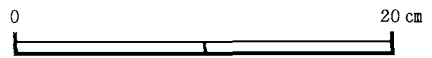
7区2層 10



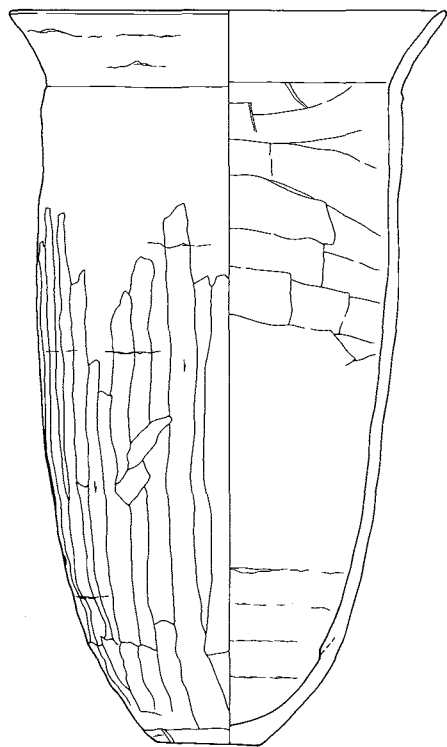
6区2層 11



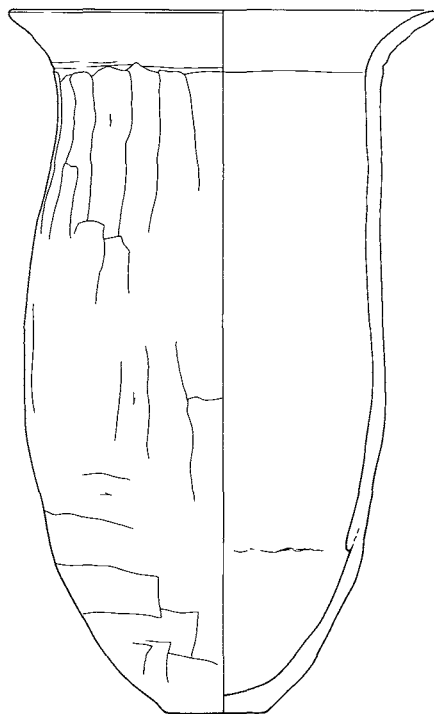
No. 2 D-1 12



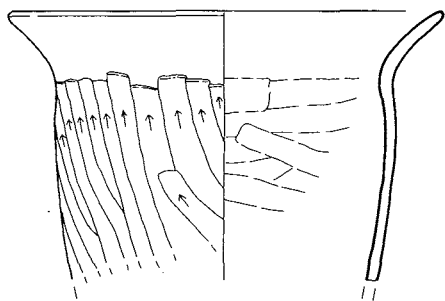
第52図 H-3号住居址出土の土器(1)



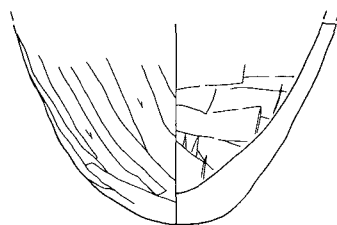
NO.1 D-1 1



3区2層 2



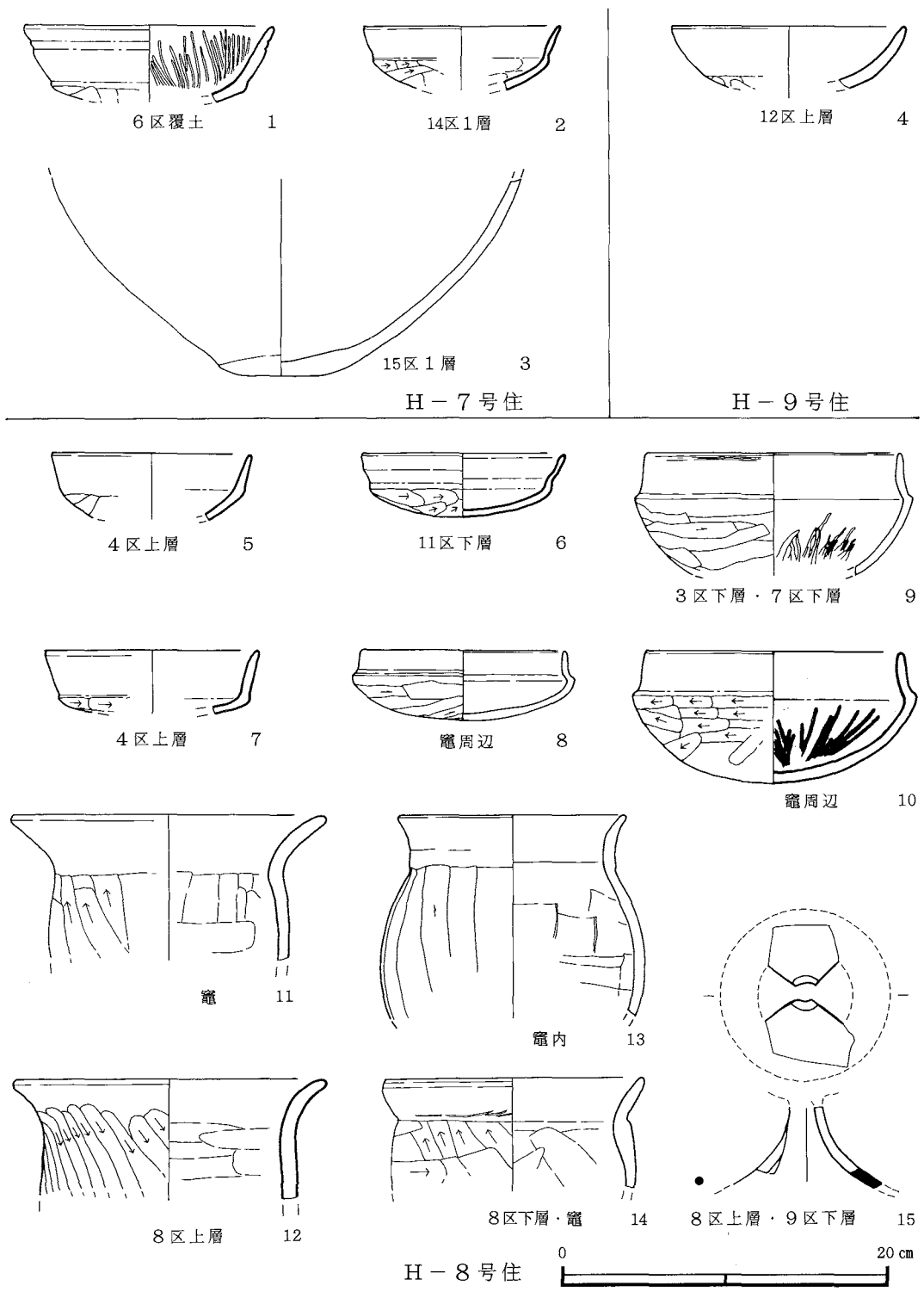
7区2層 3



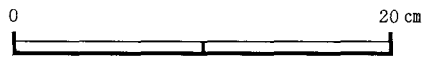
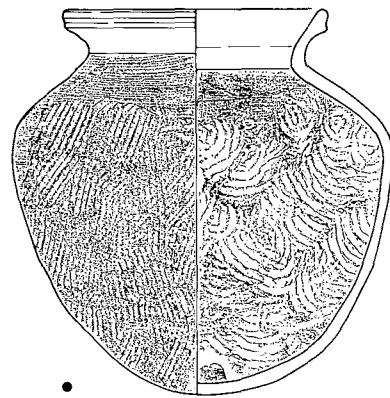
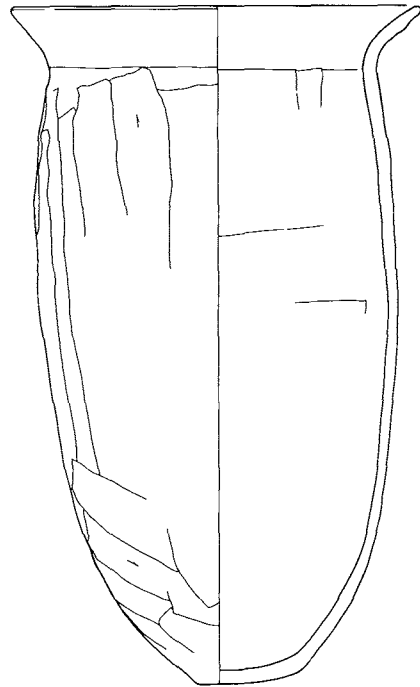
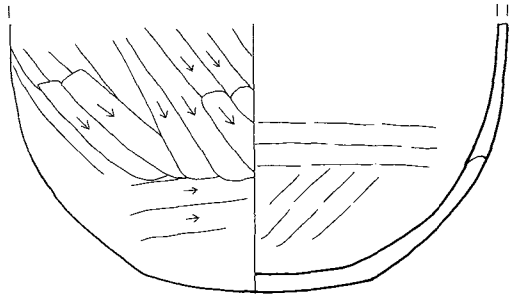
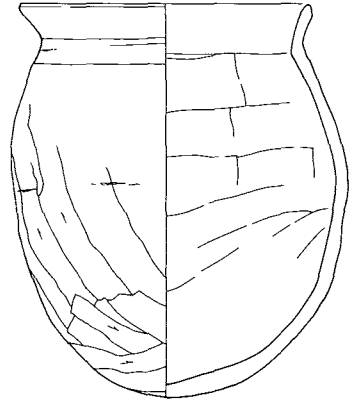
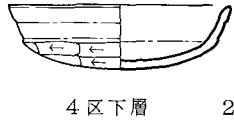
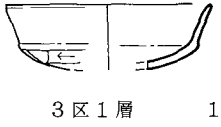
3区1層 4



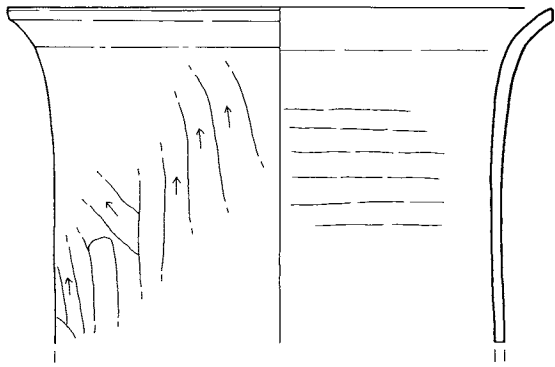
第53図 H-3号住居址出土の土器(2)



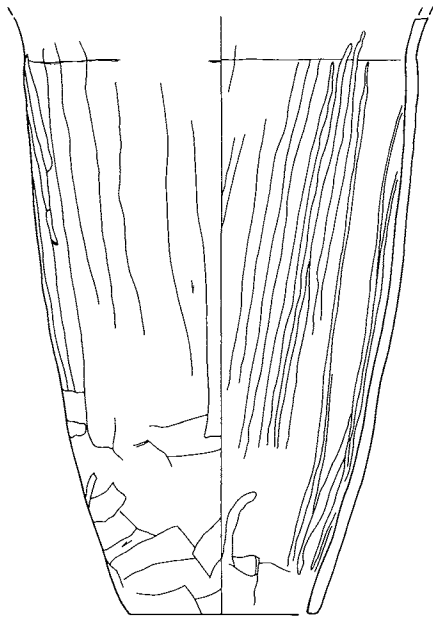
第54図 H-7号・H-8号・H-9号住居址出土の土器



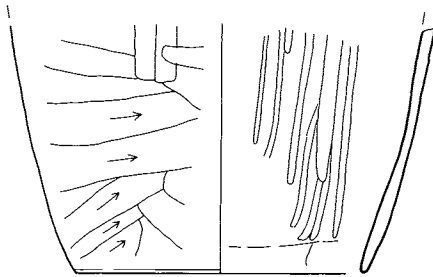
第55図 H-10号住居址出土の土器



竈 1



8区1層 2

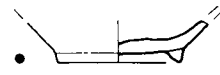


竈 3

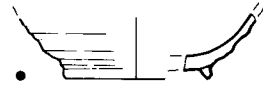
H-11号住



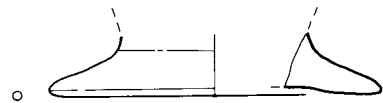
16区1層 4



8区2層・16区1層 5



16区1層 6

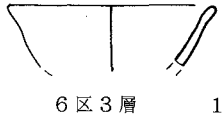


16区1層 7

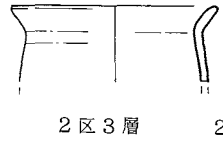
H-12号住



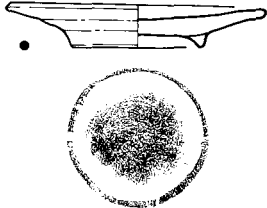
第56図 H-11号・H-12号住居址出土の土器



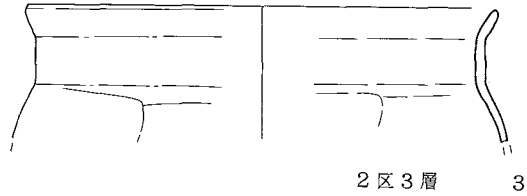
6区3層 1



2区3層 2

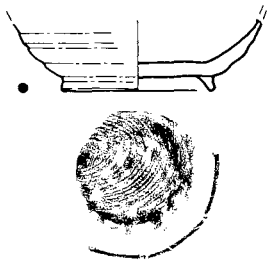


4区3層 4

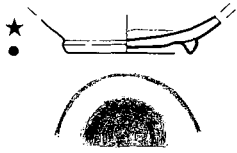


2区3層 3

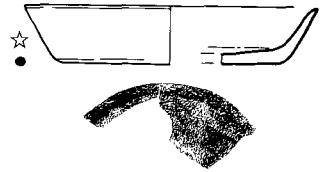
H-13A号住



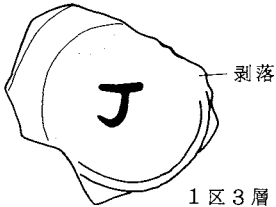
1区3層 5



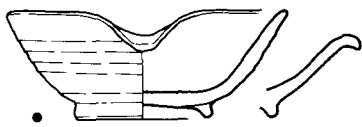
3区3層 6



5区3層 7

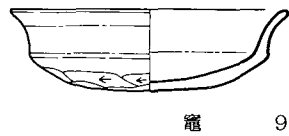


1区3層 5

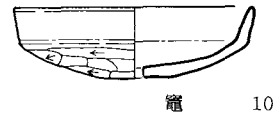


5区3層 8

H-13B号住

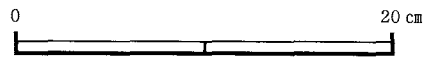


竈 9

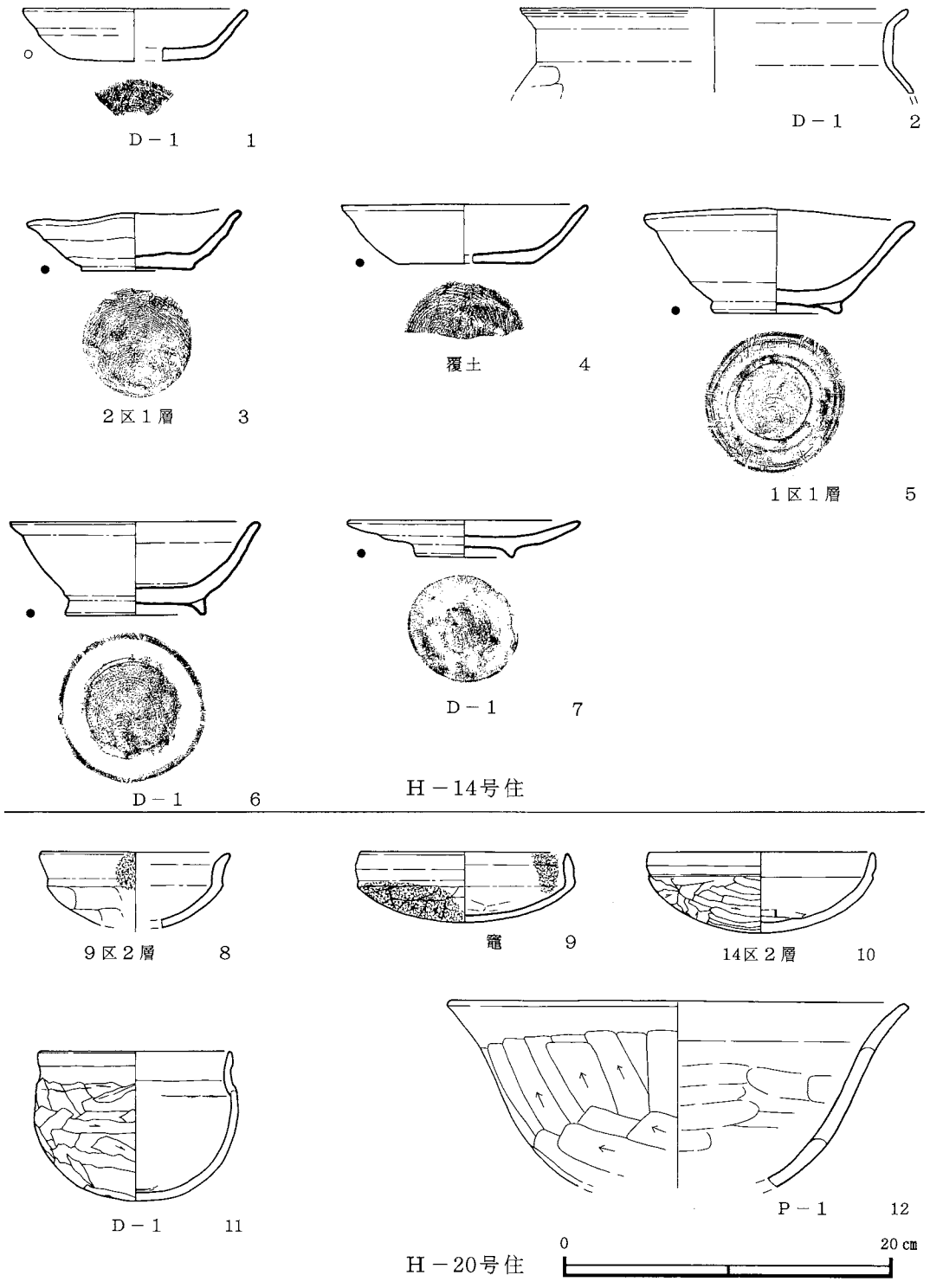


竈 10

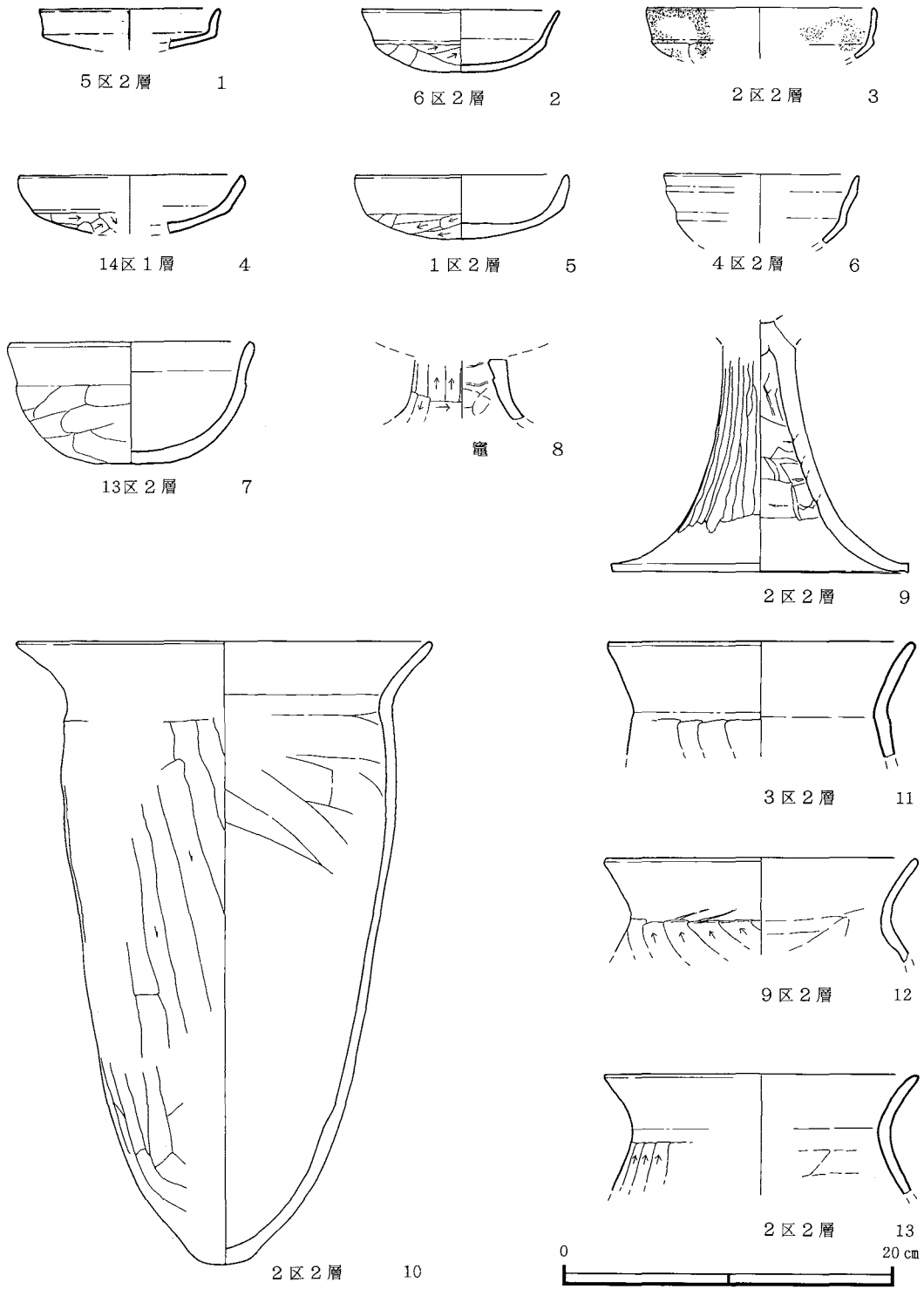
H-15号住



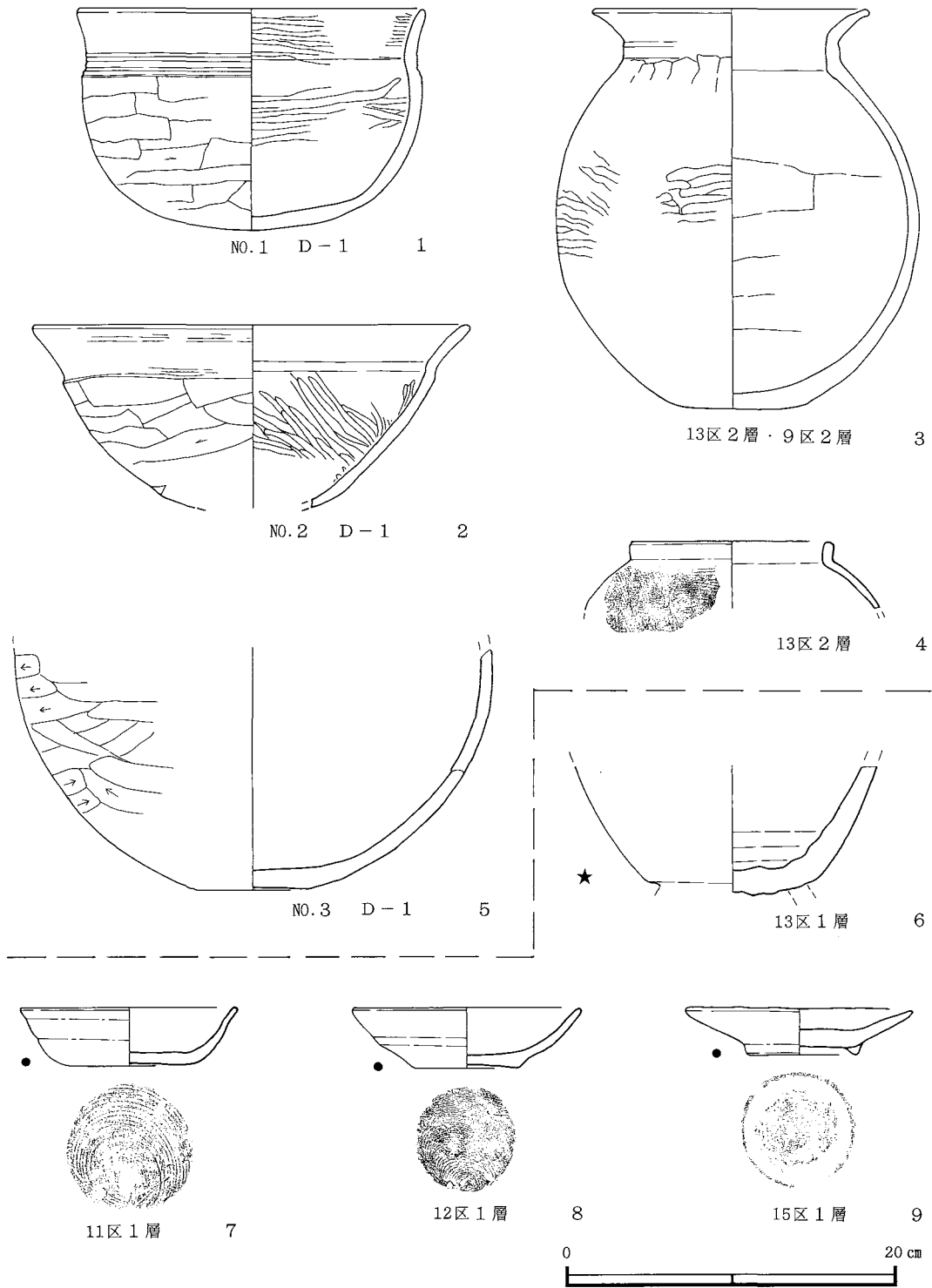
第57図 H-13号・H-15号住居址出土の土器



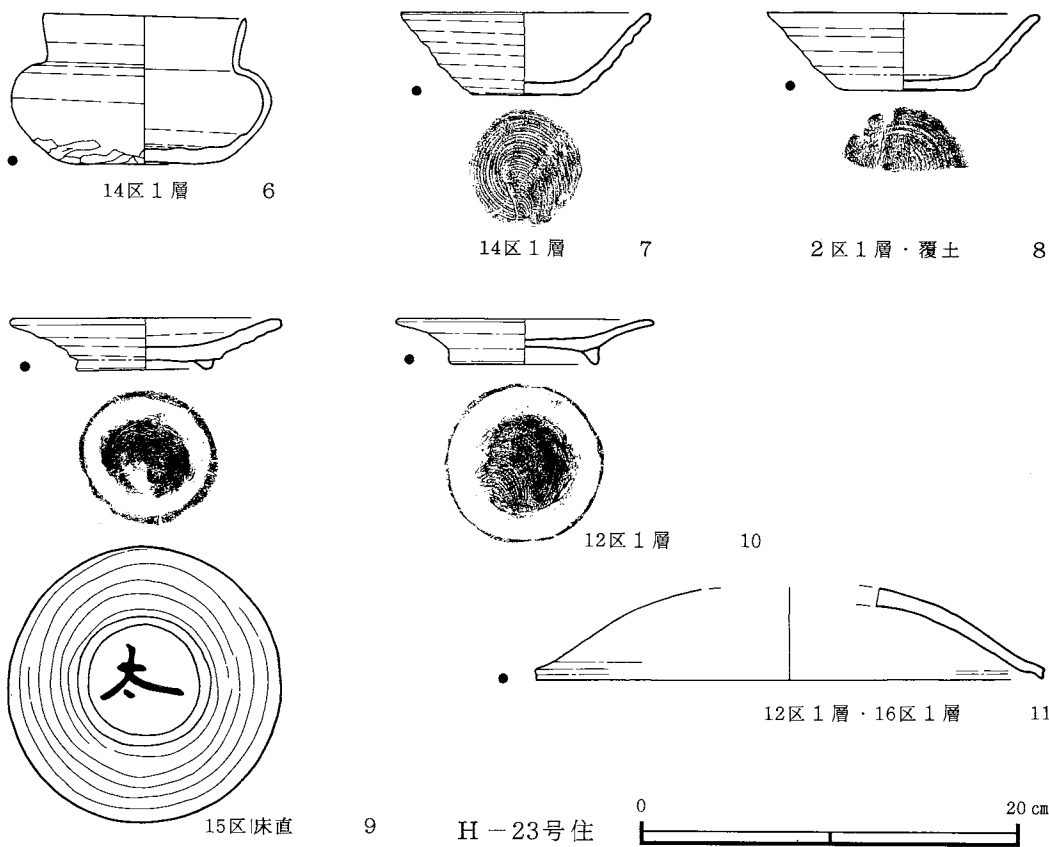
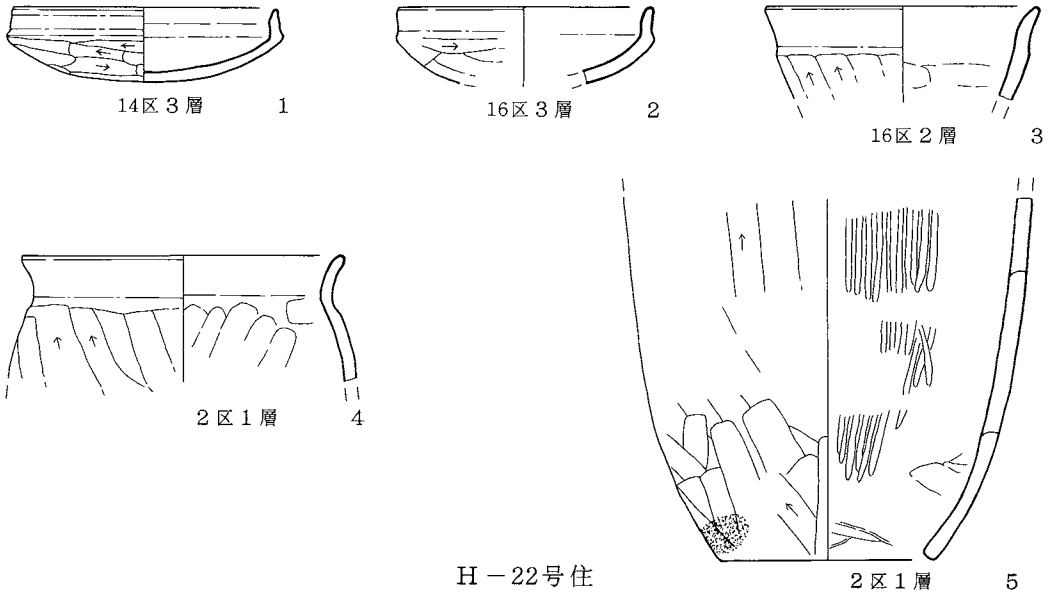
第58図 H-14号・H-20号住居址出土の土器



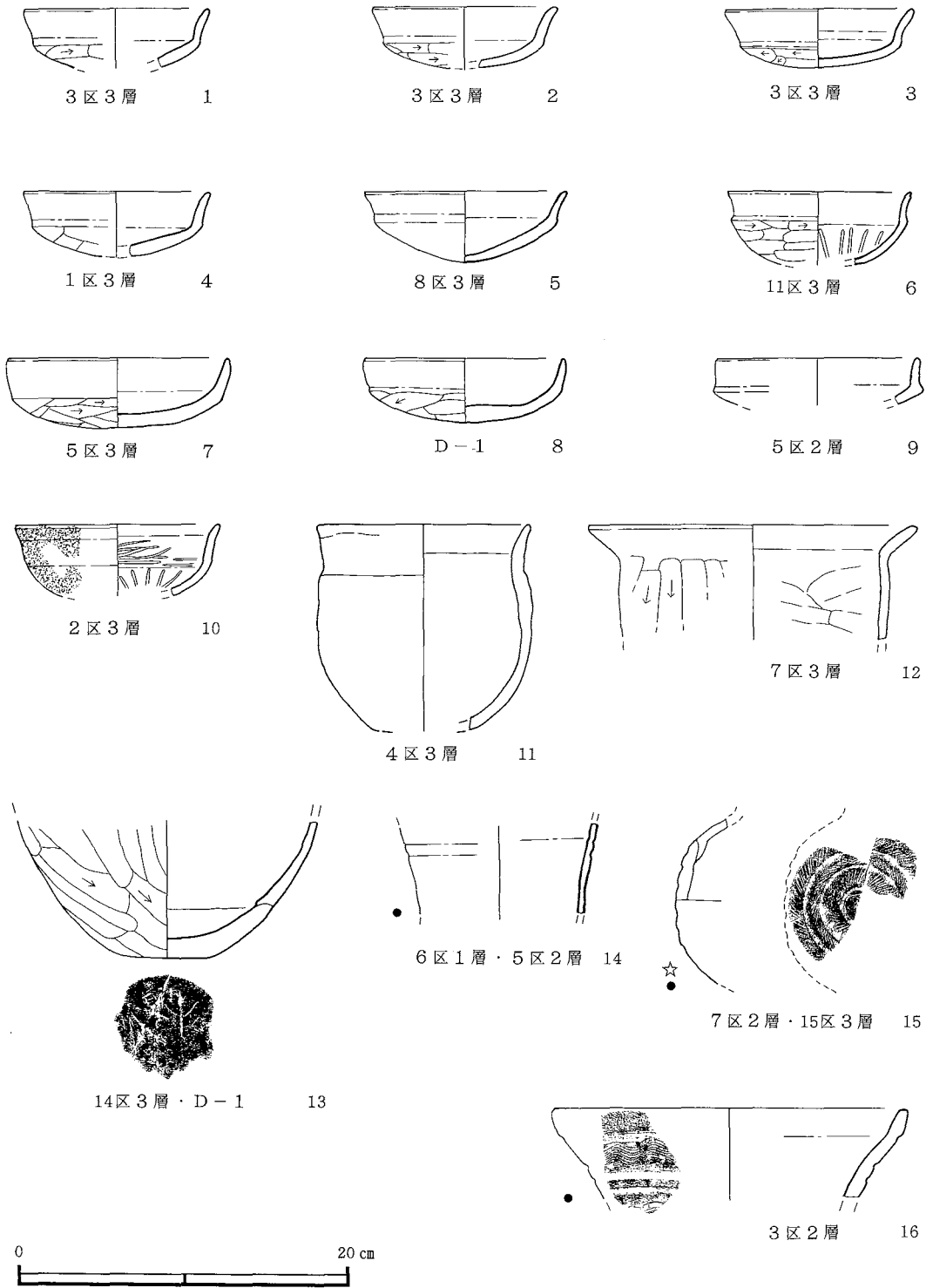
第59図 H-16号住居址出土の土器 (1)



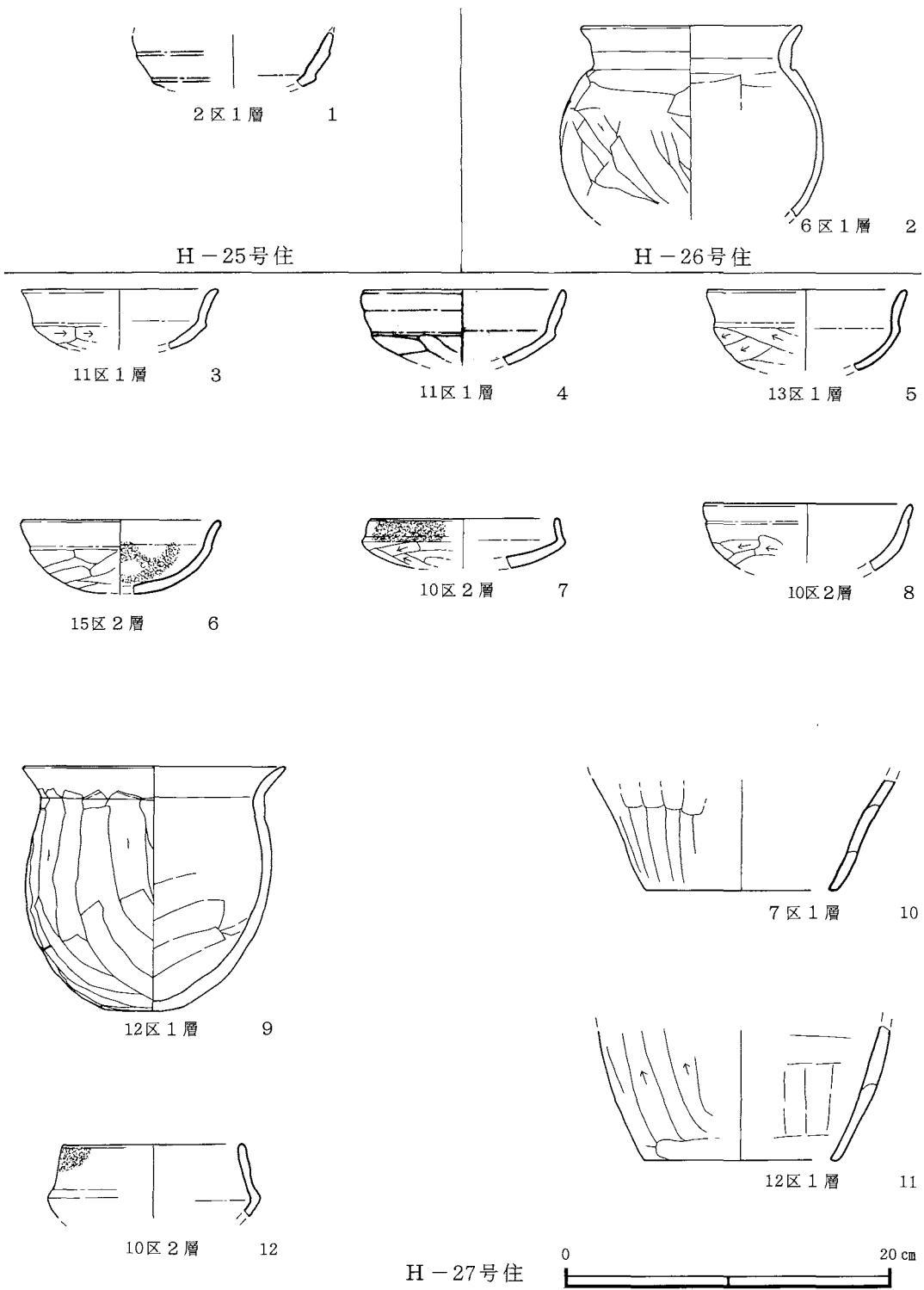
第60図 H-16号住居址出土の土器 (2)



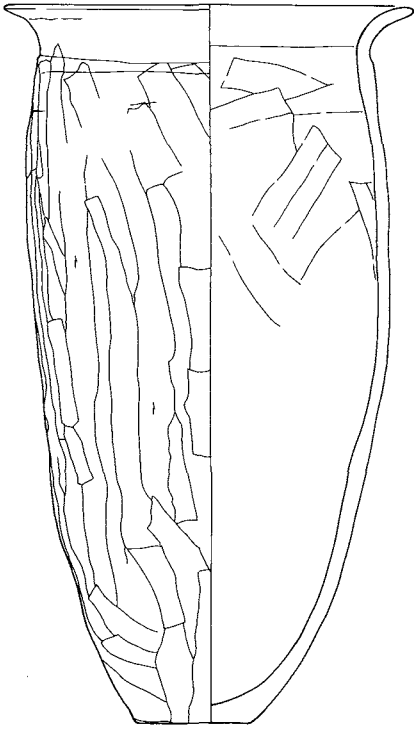
第61図 H-22号・H-23号住居址出土の土器



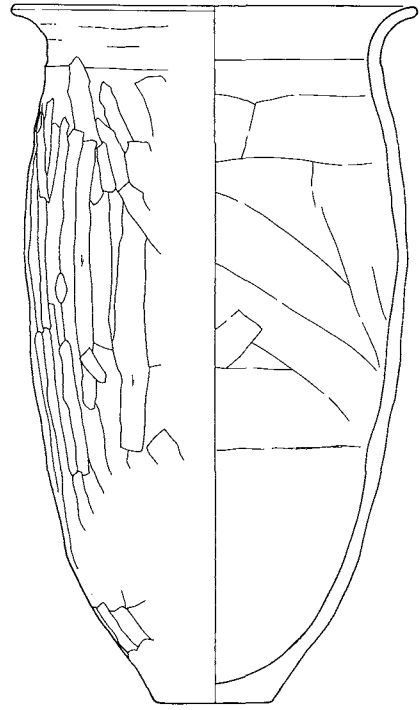
第62図 H-24号住居址出土の土器



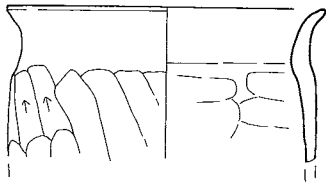
第63図 H-25号・H-26号・H-27号住居址出土の土器(1)



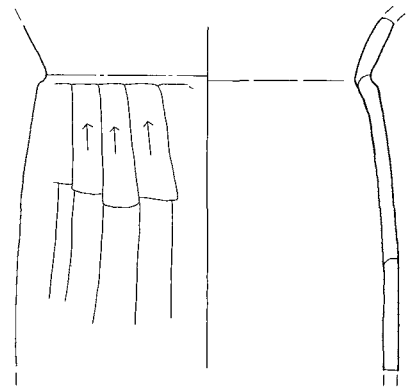
13区2層 1



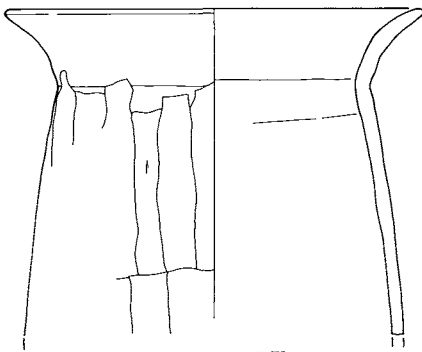
NO.1 D-1 2



竈 3



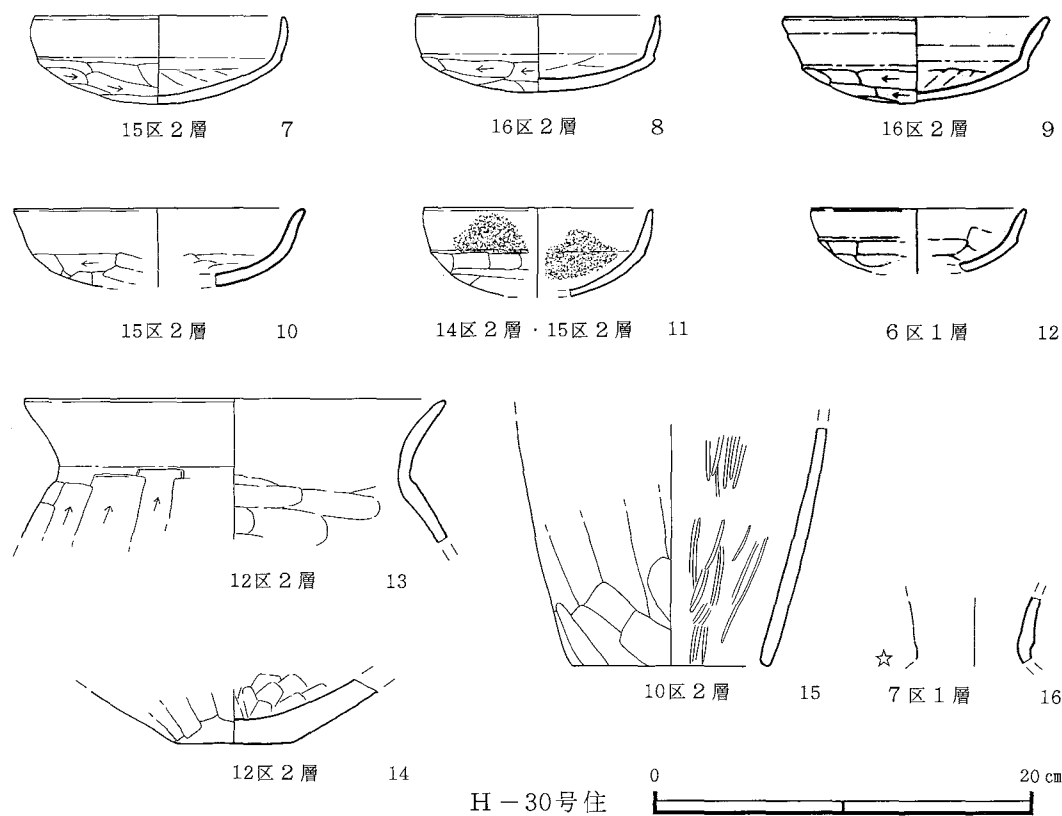
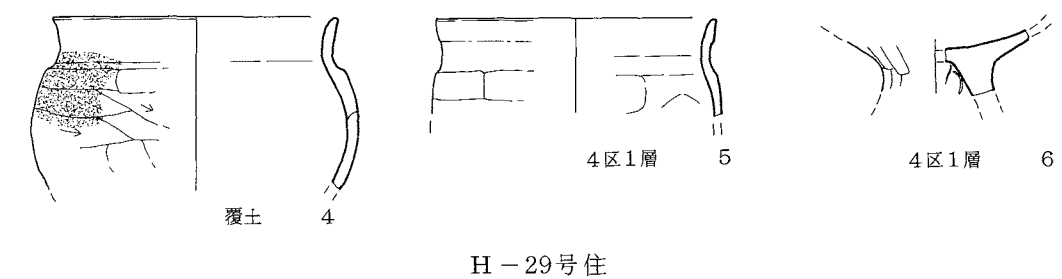
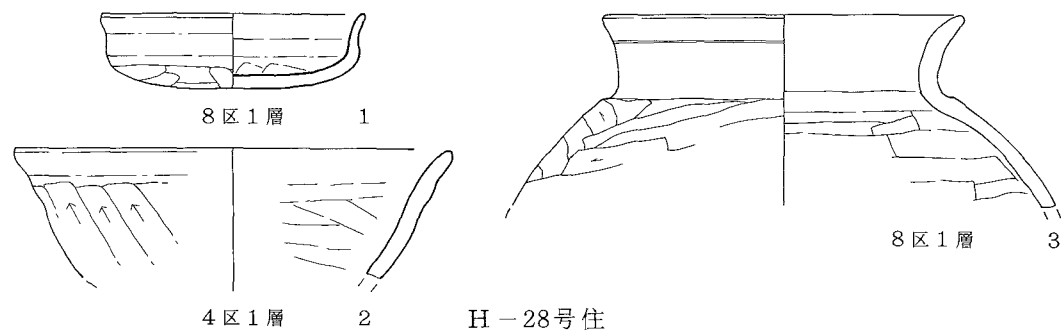
NO.2 D-1 5



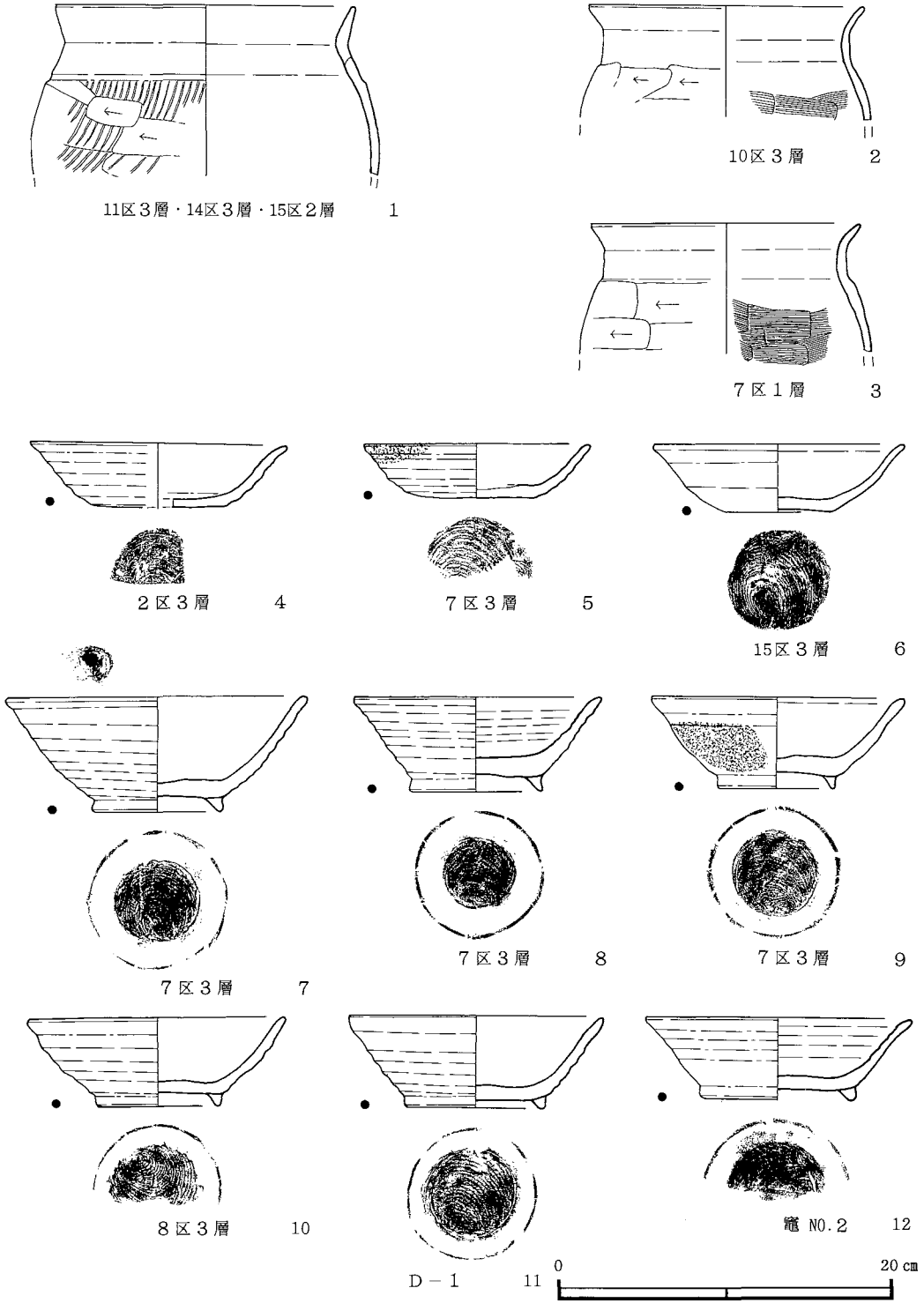
13区2層 4



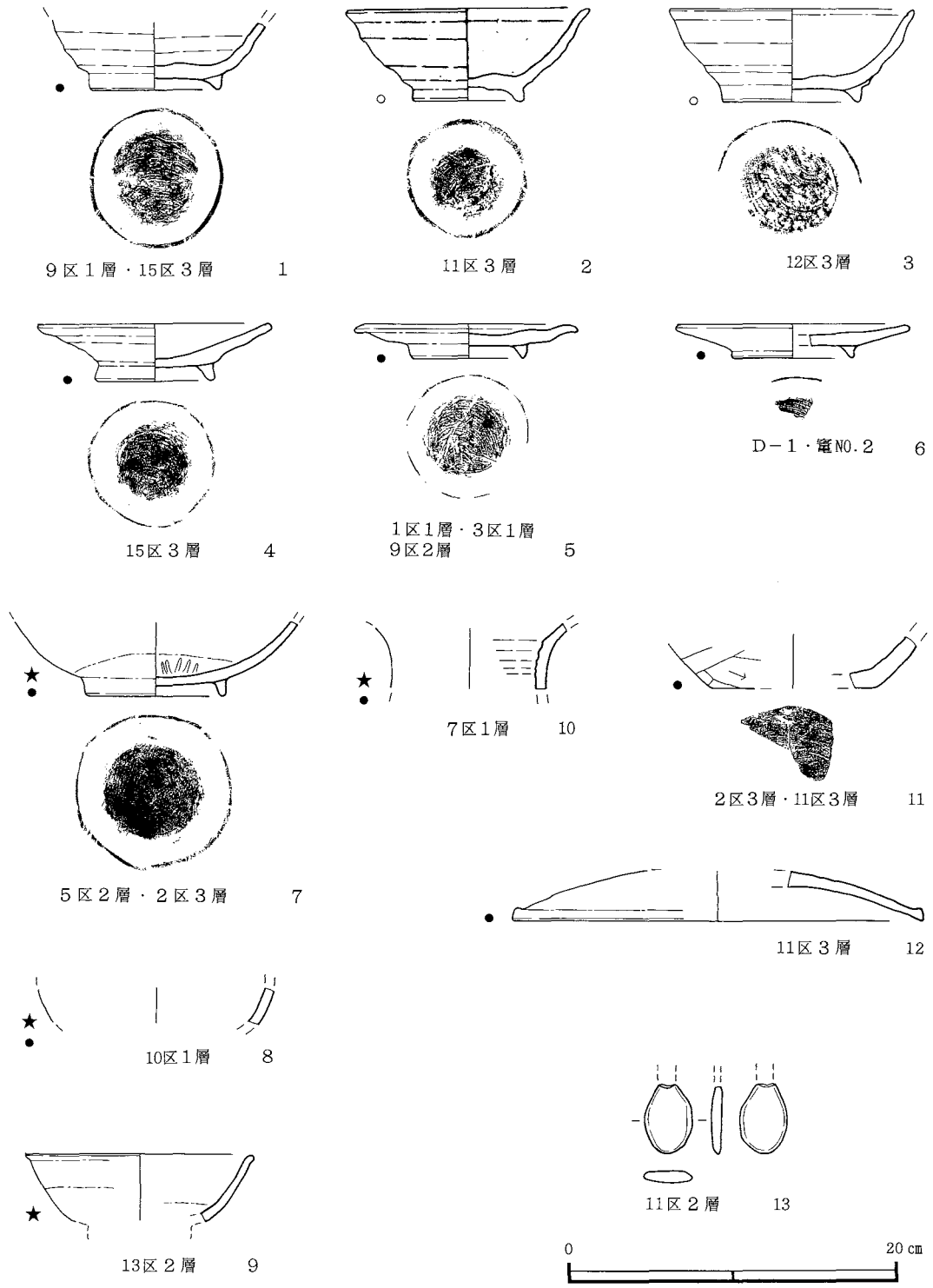
第64図 H-27号住居址出土の土器 (2)



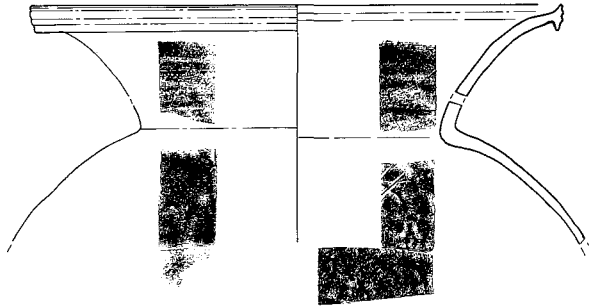
第65図 H-28号・H-29号・H-30号住居址出土の土器



第66図 H-32号住居址出土の土器 (1)

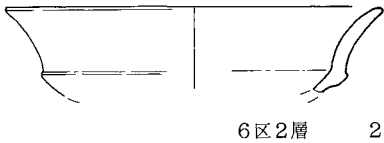
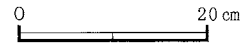


第67図 H-32号住居址出土の土器 (2)

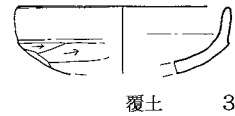


9区2層・16区2層・15区3層・竈No. 2 1

H-32号住

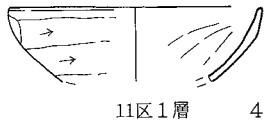


6区2層 2

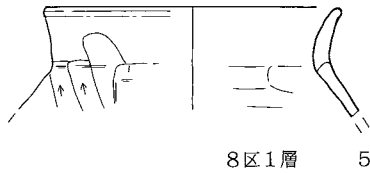


覆土 3

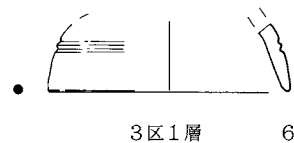
H-31号住



11区1層 4



8区1層 5

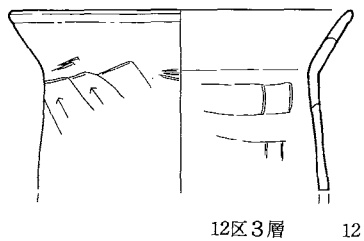
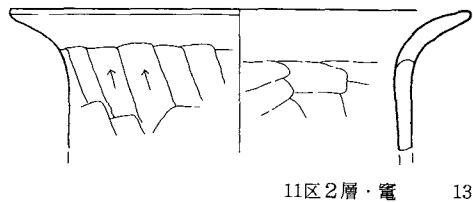
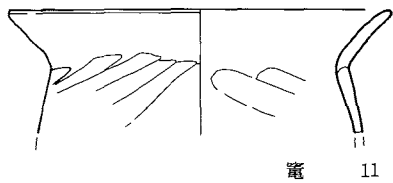
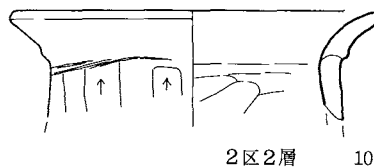
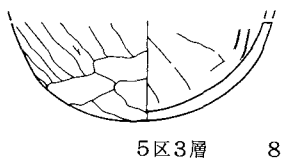
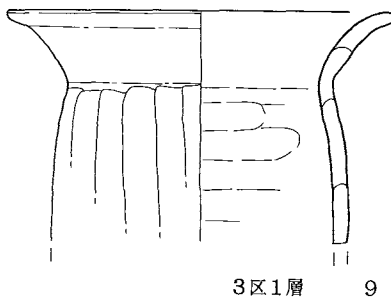
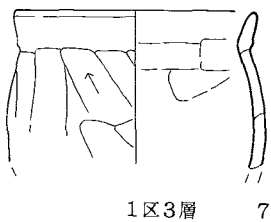
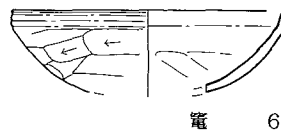
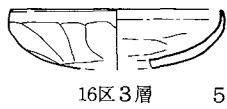
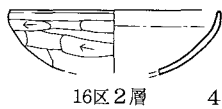
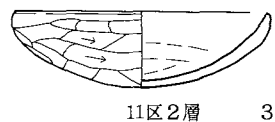
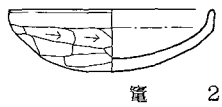
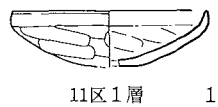


3区1層 6

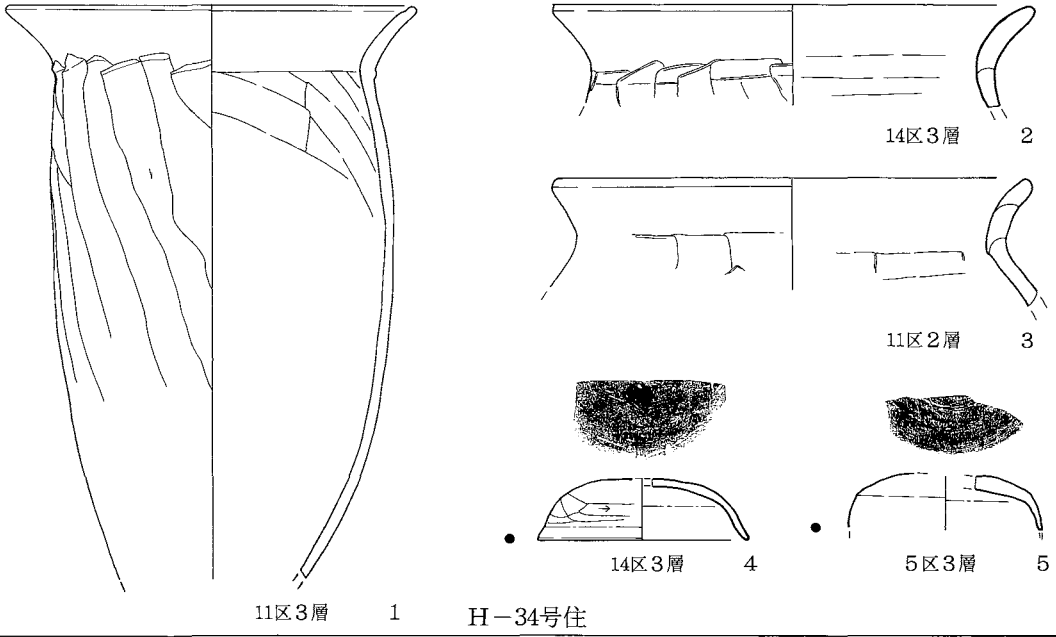
H-33号住



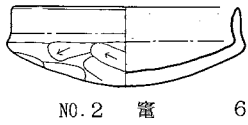
第68図 H-32号(3)・H-31号・H-33号住居址出土の土器



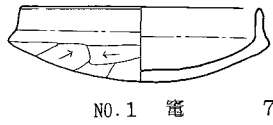
第69図 H-34号住居址出土の土器 (1)



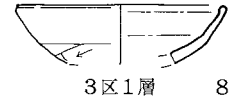
11区3層 1 H-34号住



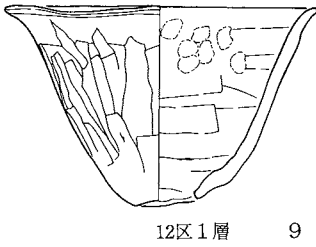
NO. 2 甕 6



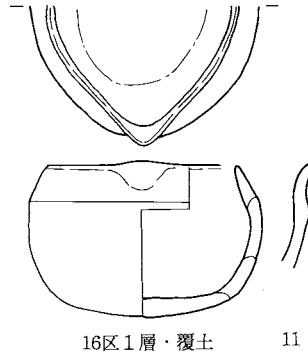
NO. 1 甕 7



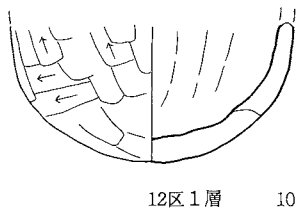
3区1層 8



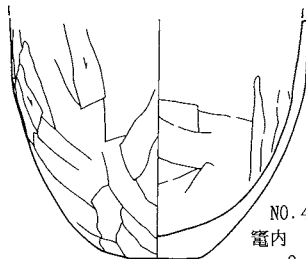
12区1層 9



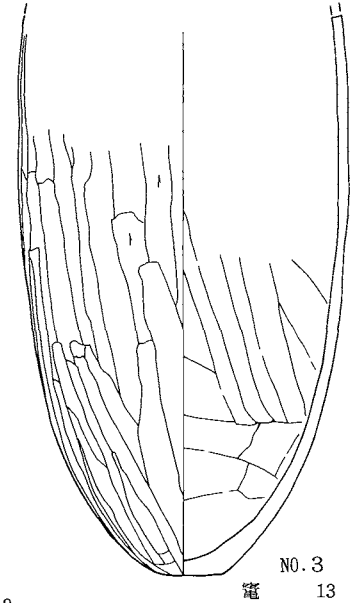
16区1層・覆土 11



12区1層 10

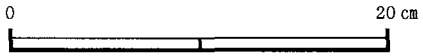


NO. 4 甕内 12

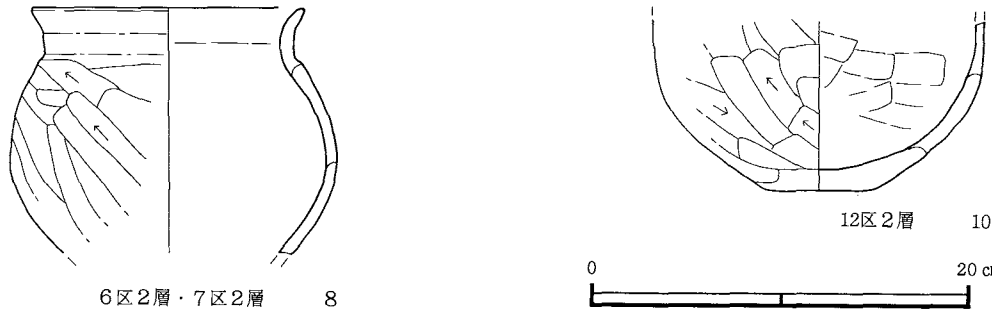
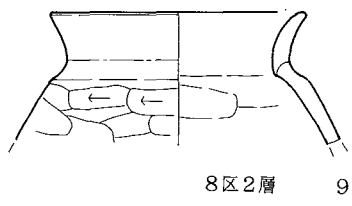
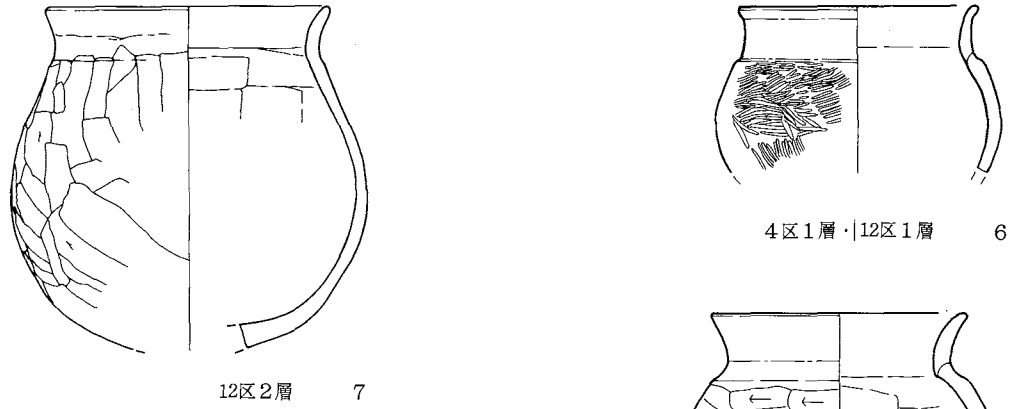
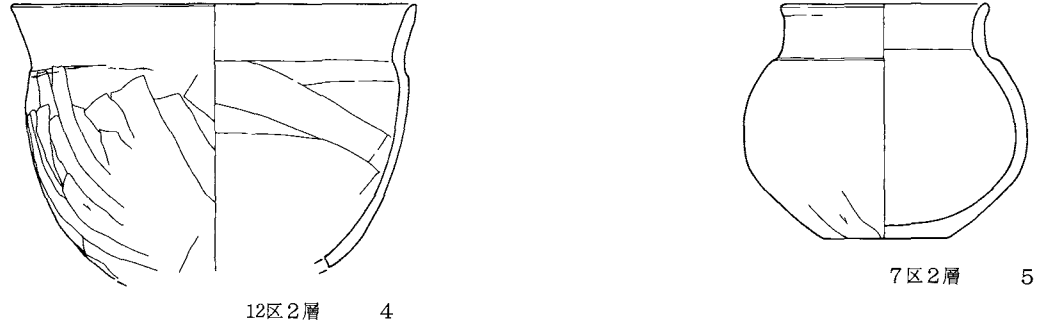
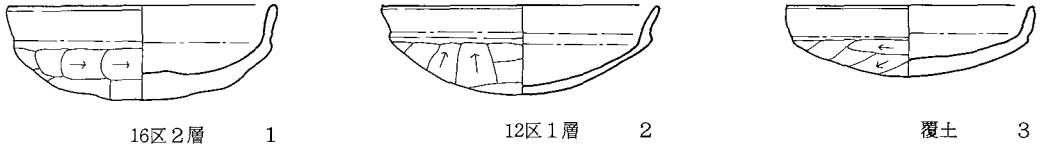


NO. 3 甕 13

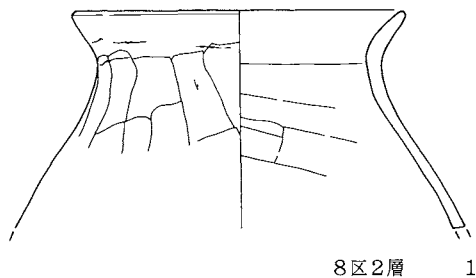
H-35号住



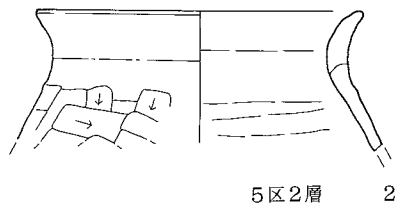
第70図 H-34号(2)・H-35号住居址出土の土器



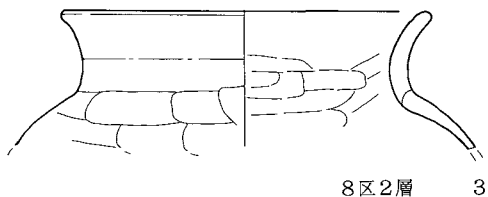
第71図 H-36号住居址出土の土器 (1)



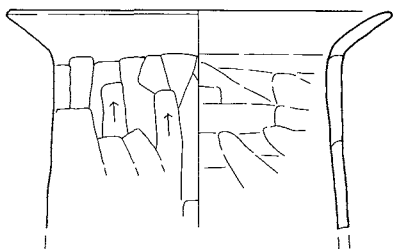
8区2層 1



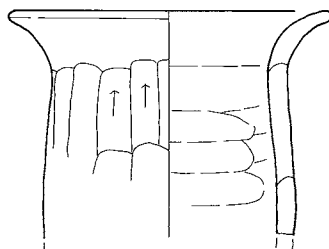
5区2層 2



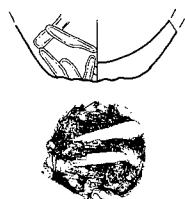
8区2層 3



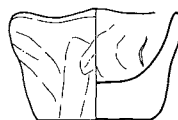
8区1層 4



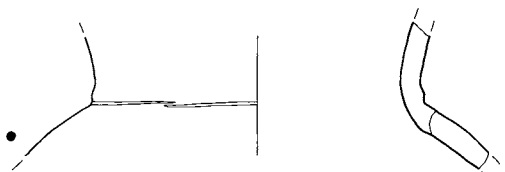
1区1層 5



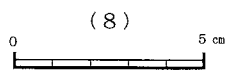
2区2層 6



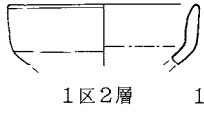
8



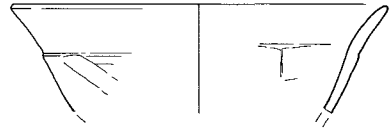
3区2層 7



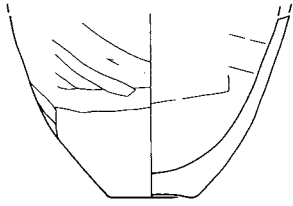
第72図 H-36号住居址出土の土器 (2)



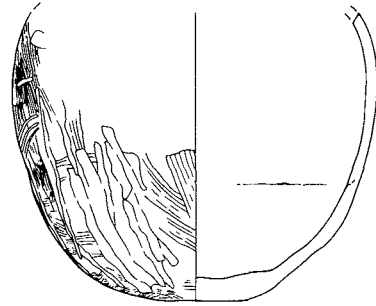
1区2層 1



4区2層 2

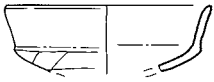


3 窟



10区2層 4

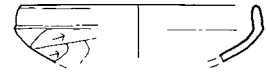
H-38号住



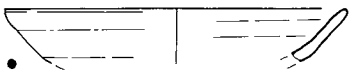
2区2層 5



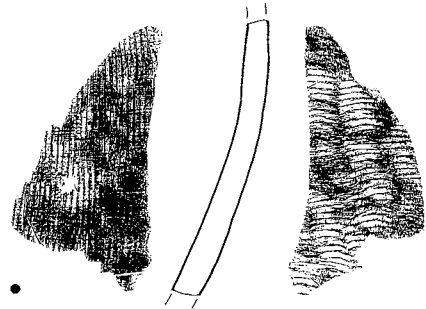
15区2層 6



15区2層 7



14区2層 8

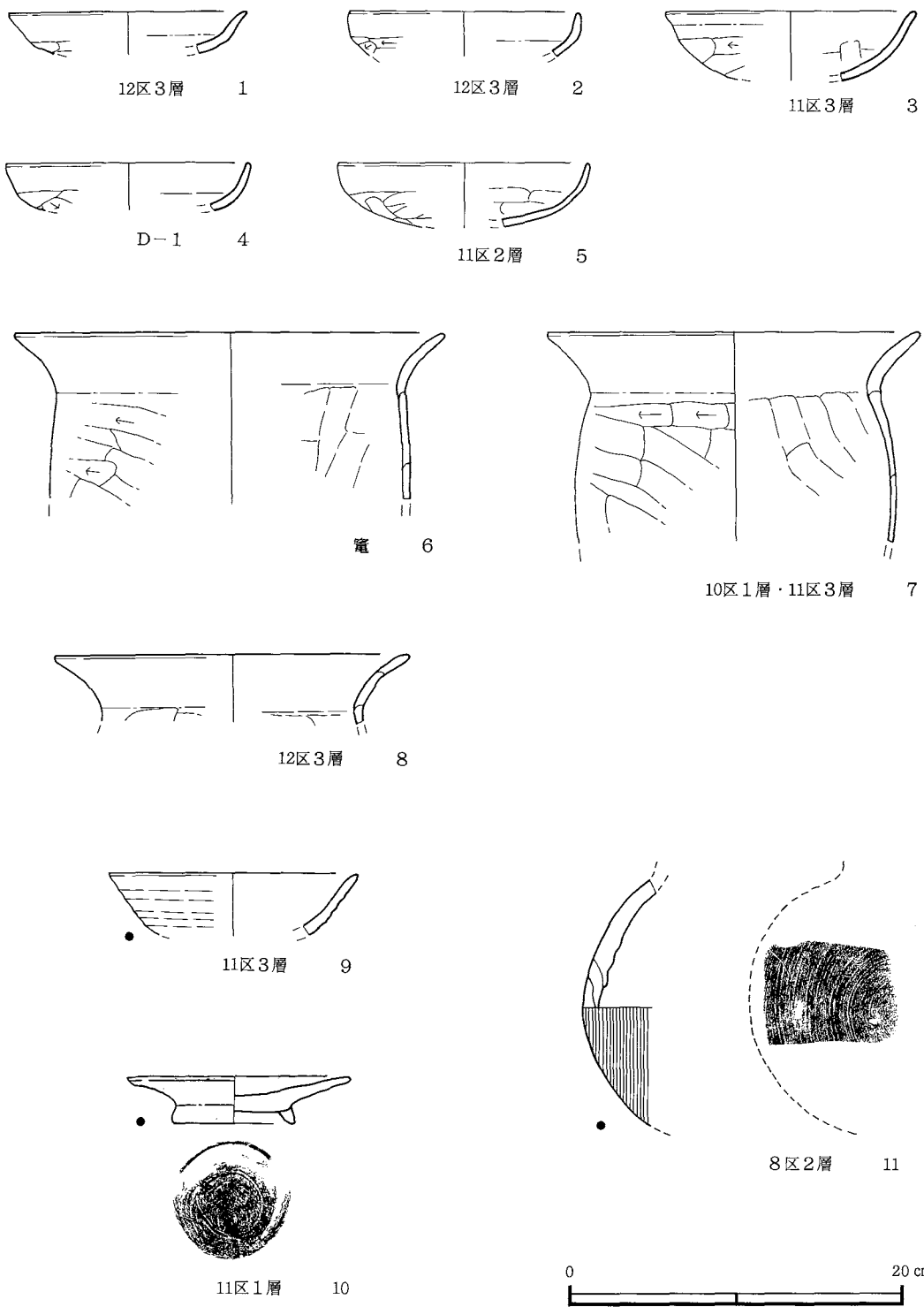


3区1層 9

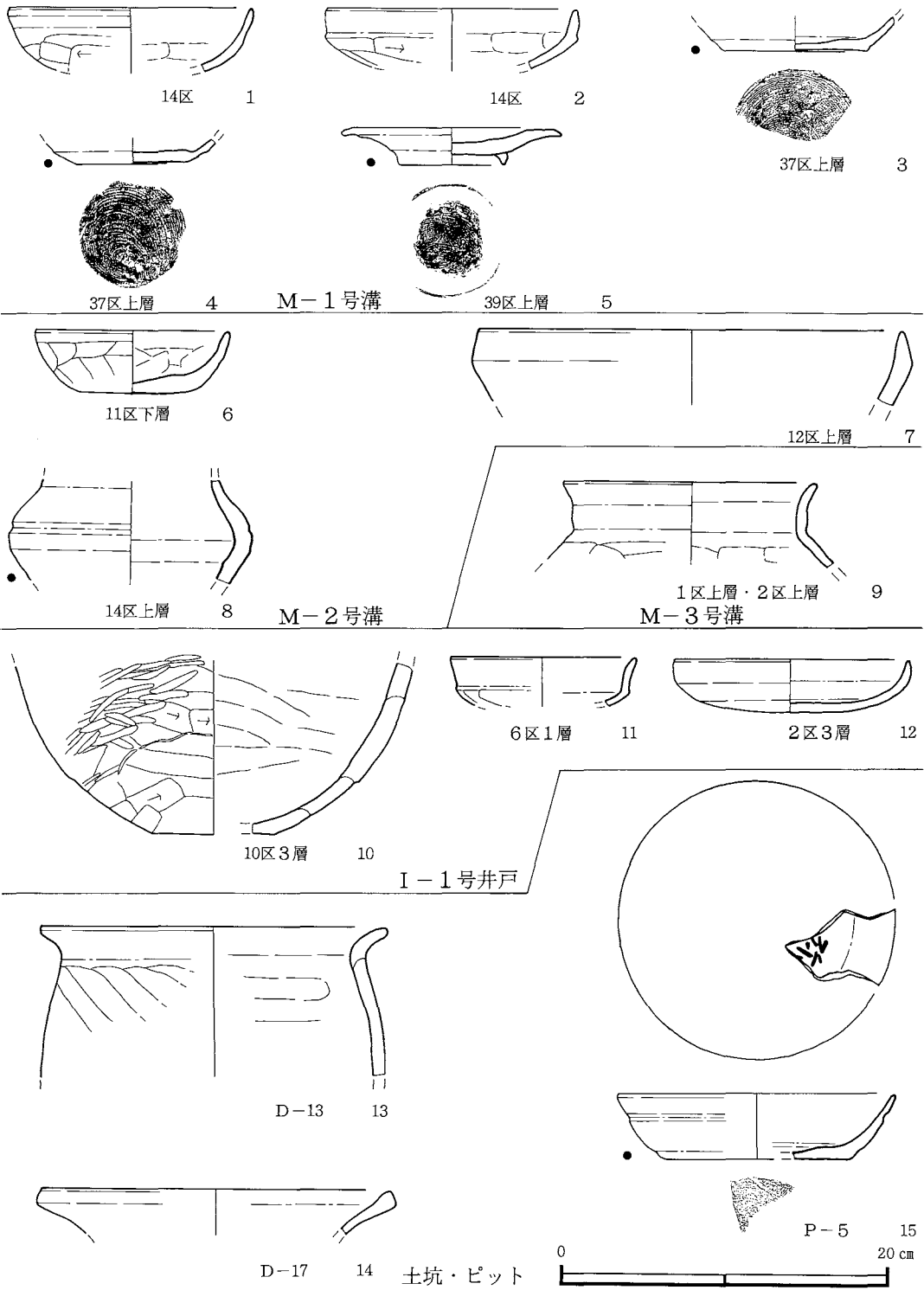
H-39号住



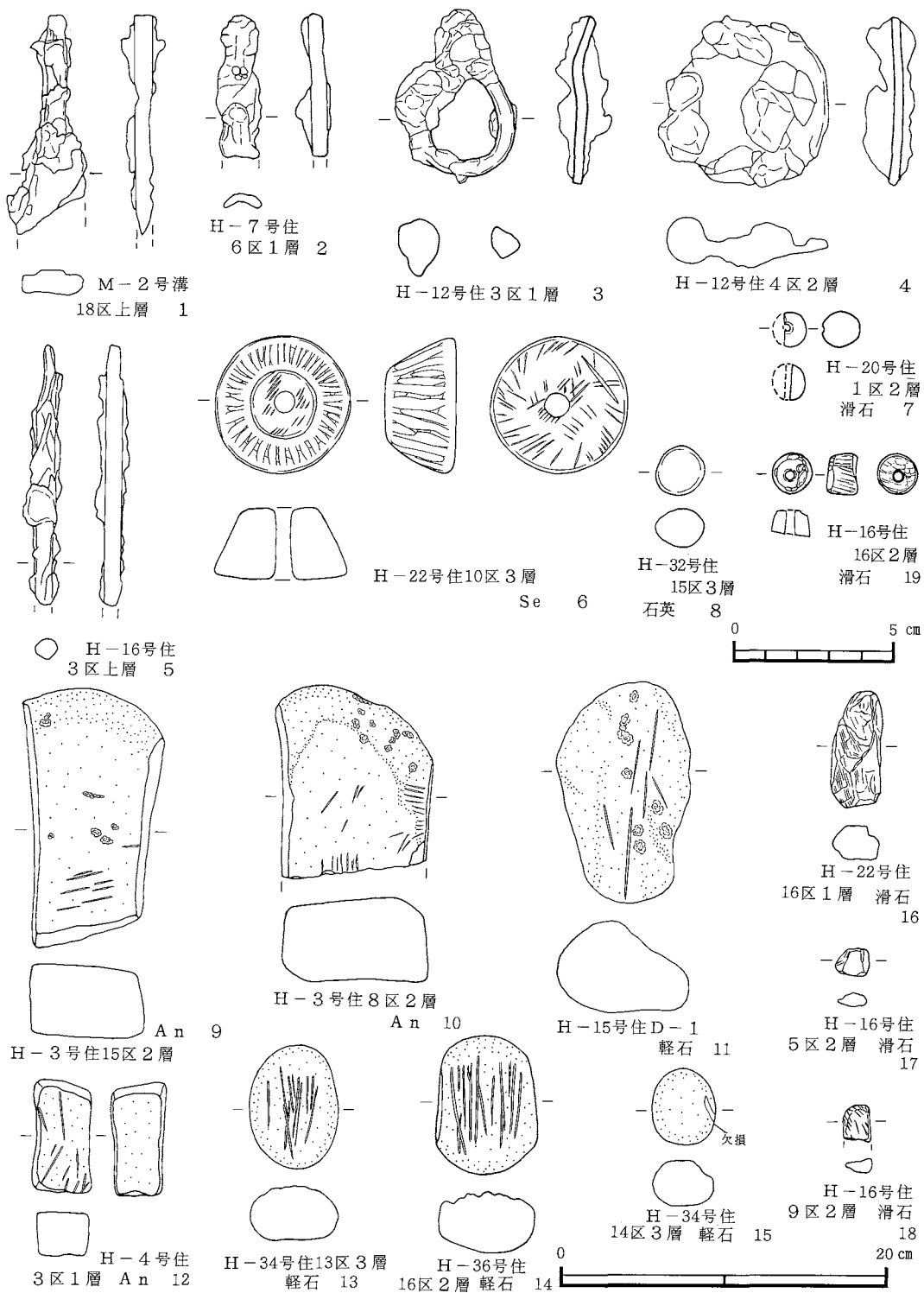
第73図 H-38号・H-39号住居址出土の土器



第74図 H-40号住居址出土の土器



第75図 M-1・2・3号溝・I-1号井戸・土坑・ピット出土の土器



第76図 鉄製品・紡錘車・白玉・砥石・素材剥片実測図

挿図No	遺構名	区	層	種類	器種	法量		①焼成	②色調	成・整形技法の特徴			備考		
						口径	底径			器高	③胎土	④残存		外面	内面
51図	1	H-1号住	1	須恵器	高台付碗	(12.0)	—	(2.7)	灰白色	③胎土	口縁部～体部1/10	回転横ナデ	回転横ナデ		
	2		1	須恵器	高台付碗	(14.8)	(8.0)	(4.9)	褐灰色	③胎土	口縁部多含・小礫少含	回転横ナデ 底回転糸切り	回転横ナデ	墨書土器	
	3		D-1	須恵器	碗	12.3	6.7	3.2	灰白色	③胎土	完形	底回転糸切り	回転横ナデ		
	4		1	須恵器	長頸壺	(12.0)	—	(2.3)	灰色	③胎土	口縁部1/5	回転横ナデ	回転横ナデ	自然灰釉	
	5	H-2号住	1	土師器	碗	(13.0)	—	(3.7)	にぶい橙色	③胎土	口縁部～体部1/3	体部寛削り	口縁部横ナデ 体部ナデ	内外面 黒色	
	6		16	1	土師器	碗	(12.0)	—	(3.1)	にぶい橙色	③胎土	口縁部～体部1/10	口縁部横ナデ 体部ナデ	内外面 黒色	
	7		13	1	土師器	碗	(16.0)	—	(5.7)	にぶい橙色	③胎土	口縁部～体部1/2	口縁部横ナデ 体部ナデ	内外面 スス付着	
	8		9	1	土師器	碗	(16.0)	—	(4.8)	にぶい橙色	③胎土	口縁部～体部1/6	口縁部横ナデ 体部ナデ	外面スス 付着	
	9		南張出		土師器	小形壺	(13.5)	—	(6.8)	普通	③胎土	口縁部～胴部1/3	口縁部横ナデ 胴部寛削り	外面一部 スス付着	
	10	H-4号住	6	1	土師器	球胴壺	21	—	(26.0)	普通	③胎土	口縁部～胴部3/4	口縁部横ナデ 胴部寛削り	口縁部横ナデ	
	11		6	1	土師器	球胴壺	—	5.0	(19.2)	普通	③胎土	胴部～底部3/5	胴部寛削り	胴部横ナデ	
52図	1	H-3号住	D-1	土師器	碗	11	—	3	普通	③胎土	完形	口縁部横ナデ 体部寛削り	口縁部横ナデ 体部ナデ		
	2		8	2	土師器	碗	14	—	3	普通	③胎土	口縁部横ナデ 体部寛削り	口縁部横ナデ 体部ナデ	内面黒色	
	3		竈内		土師器	碗	(12.0)	—	(3.8)	普通	③胎土	口縁部横ナデ 体部1/2	口縁部横ナデ 体部ナデ		
	4		10	2	土師器	碗	(12.7)	—	(3.3)	普通	③胎土	口縁部～体部1/5	口縁部横ナデ 体部ナデ		
	5		14	床直	土師器	碗	12.1	—	4.0	普通	③胎土	ほぼ完形	口縁部横ナデ 体部ナデ		
	6		5	2	土師器	碗	(14.2)	—	(4.1)	普通	③胎土	口縁部～体部1/4	口縁部横ナデ 体部ナデ		
	7		6	1	土師器	高坏	—	—	—	普通	③胎土	坏部下部～ 胴部上部	坏部脚部寛削り	坏部寛削り 脚部横ナデ	内面黒色
	8		2	2	須恵器	高坏	(14.4)	—	(5.4)	酸化焰	③胎土	坏部1/3	底回転糸切り	底回転糸切り	
	9		100H	1・2	土師器	鉢	(21.8)	—	(7.9)	普通	③胎土	口縁部～体部1/2	体部寛削り	体部ナデ	

第7表 住居址出土遺物観察表(1)

挿図No	遺構名	区	層	種類	器種	法量		①焼成	②色調	③胎土	成・整形技法の特徴			備考	
						口径	底径				④残存	外面	内面		
52図	H-3号住	7	2	土師器	鉢	(19.0)	-	(5.8)	普通	橙色 にぶい、褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ		
		6	2	土師器	球胴壺	19	-	(21.5)	普通	赤褐色 にぶい、黄褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ		
		D-1		土師器	長胴壺	15	-	(12.6)	普通	明黄色 にぶい、褐色	粗砂粒・小礫少含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ		
53図	H-3号住	D-1		土師器	長胴壺	23	5	39	普通	明黄色 にぶい、黄褐色	細砂粒・小礫少含	ほぼ完形	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	
		3	2	土師器	長胴壺	(22.2)	(5.0)	37	普通	明黄色 にぶい、黄褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ		
		7	2	土師器	長胴壺	(23.8)	-	(14.1)	普通	褐色	粗砂粒・小礫少含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ		
		3	1	土師器	長胴壺	-	-	(10.5)	普通	褐色 にぶい、黄褐色	粗砂粒・小礫少含	胴部下位～底部	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	
54図	H-7号住	6		土師器	坏	(15.0)	-	(4.5)	普通	褐色 にぶい、黄褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ		
		14	1	土師器	坏	(12.0)	-	(3.8)	普通	褐色 にぶい、黄褐色	細砂粒若干含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ		
		15	1	土師器	長胴壺	3.8	(12.0)	普通	褐色 にぶい、黄褐色	細砂粒少含	胴部中位～底部	不明瞭	不明瞭		
		H-9号住	12	上層	土師器	坏	(14.2)	-	(3.7)	普通	褐色 にぶい、黄褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	
		H-8号住	4	上層	土師器	坏	(14.0)	-	(4.0)	普通	褐色 にぶい、黄褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	
			11	下層	土師器	坏	(12.5)	-	4	普通	褐色 にぶい、黄褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	
			4	上層	土師器	坏	(13.0)	-	(3.8)	普通	褐色 にぶい、黄褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	
	竈周辺			土師器	坏	12	-	4	普通	褐色 にぶい、黄褐色	細砂粒若干含	ほぼ完形	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	
		3・7	下層	土師器	坏	(15.4)	-	(7.4)	普通	褐色 にぶい、黄褐色	細砂粒若干含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ		
		竈周辺		土師器	坏	(15.7)	~	(7.8)	普通	褐色 にぶい、黄褐色	細砂粒若干含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	内面黒色
		竈		土師器	長胴壺	(18.6)	-	(8.5)	普通	明褐色	小礫少含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	
		8	上層	土師器	長胴壺	(18.8)	-	(7.4)	普通	明褐色	小礫少含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	
		竈内		土師器	小形壺	(13.6)	-	(12.3)	普通	褐色 にぶい、黄褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	

第8表 住居址出土遺物観察表(2)

挿図No	遺構名	区	層	種類	器種	法量		①焼成	②色調	成・整形技法の特徴			備考											
						口径	底径			③胎土	④残存	外面		内面										
54図	H-8号住	8・竈	下層	土師器	小形甕	(15.6)	-	普通	明褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ												
														上層	須恵器	高坏	-	-	良好	灰色	細砂粒若干含	回転横ナデ	回転横ナデ	
55図	H-10号住	3	1	土師器	坏	(10.8)	-	普通	褐色	細砂粒若干含	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ												
														4	土師器	坏	(11.6)	-	普通	褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
																								3
														4	土師器	甕	(26.0)	-	普通	にぶい赤褐色	ほぼ完形	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
																								3
														3	土師器	長胴甕	21	5	36	普通	にぶい褐色	細砂粒・小礫多含	口縁部横ナデ	
																								4
56図	H-11号住	竈	(28.6)	-	普通	褐色	細砂粒少含	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ															
										8	土師器	甕	(9.2)	(31.2)	普通	にぶい褐色	細砂粒少含	頸部～底部2/3	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ				
3	土師器	甕	(15.4)	(12.9)	普通	褐色	細砂粒少含	胴部～底部1/8	口縁部横ナデ												口縁部横ナデ			
										4	H-12号住	16	1	須恵器	高台付碗	(14.6)	7	6	普通	灰黄色		細砂粒・小礫若干含	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ
5	8・16	2・1	須恵器	高台付碗	(6.4)	(2.2)	普通	灰白色	細砂粒若干含												底部回転糸切り			
										6	16	1	須恵器	高台付碗	(7.6)	(3.2)	還元焰	灰黄色	細砂粒若干含	底部回転糸切り		底部回転糸切り		
7		16	1	須恵器	甕	(17.6)		酸化焰	灰黄色												細砂粒・小礫少含		口縁部横ナデ	口縁部横ナデ
										57図	H-13A号住	6	3	土師器	坏	(10.8)	-	普通	灰黄褐色	口縁部横ナデ		口縁部横ナデ		
2	土師器	小形甕	(11.0)	-	普通	にぶい黄褐色	細砂粒少含	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ															

第9表 住居址出土遺物観察表(3)

挿図No	遺構名	区	層	種類	器種	法量		①焼成	②色調	③胎土	成形技法の特微		備考		
						口径	底径				器高	④残存		外面	内面
57図	H-13A号住	4	3	須恵器	高台付皿	13	7	還元焼	灰白色	細砂粒・小礫若干含	完形	④残存	回転横ナデ		
		2	3	土師器	壺	(24.2)	-	普通	にぶい橙色	細砂粒・小礫若干含	口縁部1/8		回転横ナデ	回転横ナデ	
	H-13B号住	1	3	須恵器	高台付碗	(8.0)	(3.5)	還元焼	灰白色	細砂粒・小礫若干含	坏部～底部1/8		回転横ナデ	回転横ナデ	
		3	3	須恵器	高台付碗	(6.4)	(2.0)	良好	灰黄色	細砂粒・小礫若干含	底部1/2		回転横ナデ	回転横ナデ	
		5	3	須恵器	坏	(15.4)	3	良好	にぶい黄橙色	細砂粒・小礫少含	口縁部～底部1/4		回転横ナデ	回転横ナデ	
		5	3	須恵器	高台付碗	15	7	還元焼	灰褐色	細砂粒・小礫少含	完形			回転横ナデ	回転横ナデ
		9	5	土師器	坏	15	-	普通	にぶい橙色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～体部2/3			口縁部横ナデ	口縁部横ナデ
		10	5	土師器	坏	(12.8)	-	普通	明赤褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部～体部1/4			口縁部横ナデ	口縁部横ナデ
	58図	H-14号住	D-1		須恵器	坏	(13.4)	-	酸化焼	褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部～底部1/4		回転横ナデ	回転横ナデ
			D-1		土師器	壺	(23.6)	-	普通	にぶい赤褐色	細砂粒少含	口縁部1/6		口縁部横ナデ	口縁部横ナデ
		2	1	須恵器	坏	13	8	還元焼	灰色	細砂粒・小礫若干含	完形		回転横ナデ	回転横ナデ	
		2	1	須恵器	坏	(15.0)	(3.5)	還元焼	灰白色	細砂粒若干含	口縁部～底部1/3			回転横ナデ	回転横ナデ
		5	1	須恵器	高台付碗	16	8	還元焼	灰色	細砂粒・小礫若干含	完形			回転横ナデ	回転横ナデ
		6	D-1	須恵器	高台付碗	(15.2)	8	還元焼	灰白色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～底部3/4			回転横ナデ	回転横ナデ
		7	D-1	須恵器	高台付皿	14	6	普通	灰白色	細砂粒少含	完形			回転横ナデ	回転横ナデ
H-20号住		9	2	土師器	坏	(11.2)	-	普通	褐色	細砂粒若干含	口縁部～体部2/3			口縁部横ナデ	口縁部横ナデ
		9	2	土師器	坏	13	-	普通	にぶい赤褐色	細砂粒・小礫少含	完形			口縁部横ナデ	口縁部横ナデ
		10	14	土師器	坏	13.5	-	普通	明褐色 ～にぶい、褐色	細砂粒・小礫少含	ほぼ完形			口縁部横ナデ	口縁部横ナデ
		11	D-1	土師器	小形壺	11.5	-	普通	褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部～底部4/5			口縁部横ナデ	口縁部横ナデ

第10表 住居址出土遺物観察表(4)

挿図No	遺構名	区	層	種類	器種	法量		①焼成	②色調	③粘土	成形技法の特徴		備考
						口径	底径				④残存	外面	
58図	H-20号住	P-1	2	土師器	鉢	—	(27.6)	普通	橙色	細砂粒・小礫少含	口縁部～底部1/4	口縁部横ナデ 底部ナデ	内外面黒色
59図	H-16号住	5	2	土師器	坏	—	(10.8)	普通	褐色	細砂粒若干含	口縁部～底部1/8	口縁部横ナデ 底部ナデ	一部ハス 付着
		6	2	土師器	坏	—	(12.0)	普通	にぶい橙色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～底部1/4	口縁部横ナデ 底部ナデ	
		2	2	土師器	坏	—	(13.6)	普通	明赤褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～底部1/5	口縁部横ナデ 底部ナデ	
		14	1	土師器	坏	—	(13.6)	普通	橙色	細砂粒・小礫少含	口縁部～底部1/4	口縁部横ナデ 底部ナデ	
		1	2	土師器	坏	12.8	—	普通	橙色	細砂粒・小礫少含	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 底部ナデ	
		4	2	土師器	坏	(11.7)	—	普通	浅黄褐色	細砂粒若干含	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 底部ナデ	
		13	2	土師器	鉢	(13.6)	—	普通	にぶい橙色	細砂粒・小礫少含	口縁部～底部1/5	口縁部横ナデ 底部ナデ	
		窟		土師器	高坏	—	—	良好	褐色	細砂粒・小礫若干含	脚下部	横ナデ	
		2	2	土師器	高坏	17.4	14.9	普通	にぶい橙色 ～にぶい黄褐色	細砂粒・小礫若干含	脚部	上部寛削り 下部横ナデ	
		2	2	土師器	長胴壺	24.8	3	普通	にぶい赤褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部～底部1/2	口縁部横ナデ 胴部横ナデ	
		3	2	土師器	長胴壺	(18.6)	—	普通	にぶい褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部～胴部1/4	口縁部横ナデ 胴部横ナデ	
		9	2	土師器	長胴壺	(19.0)	—	普通	褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部～胴部1/4	口縁部横ナデ 胴部横ナデ	
		2	2	土師器	長胴壺	(19.0)	—	普通	にぶい褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部～胴部1/5	口縁部横ナデ 胴部横ナデ	
60図	H-16号住	D-1	2	土師器	鉢	20.7	—	普通	にぶい褐色 ～灰褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部～底部3/4	口縁部横ナデ 底部ナデ	
		D-1	2	土師器	鉢	(26.0)	—	普通	褐色 ～にぶい褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部～底部2/3	口縁部横ナデ 底部ナデ	
		13	2	土師器	球胴壺	(16.2)	5.4	普通	褐色 ～灰黄褐色	細砂粒若干含	口縁部～底部1/2	口縁部横ナデ 胴中部寛削り	
		13	2	土師器	球胴壺	(11.6)	—	普通	灰白色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～胴部1/8	口縁部横ナデ 胴部横ナデ	
		D-1	1	土師器	球胴壺	6.8	—	普通	褐色	細砂粒・小礫少含	底部	口縁部横ナデ 胴部横ナデ	
		13	1	須臾器	高台付碗	(16.3)	—	(7.5)還元焼成	灰白色	細砂粒若干含	口縁部～底部1/3	口縁部横ナデ 胴部横ナデ 底部回転系切り	外面灰皿

第11表 住居址出土遺物観察表(5)

挿図No	群	遺構名	区	層	種類	器種	法量		成形・整形技法の特徴				備考		
							口径	底径	①焼成	②色調	③胎土	④残存		外面	内面
60図	7	H-16号住	11	1	須恵器	坏	—	(13.0)	還元焼	灰白色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～底部1/2	回転ナデ	回転横ナデ	
													底部回転糸切り	回転横ナデ	
													底面回転糸切り	回転横ナデ	
61図	8	H-22号住	12	1	須恵器	坏	6.3	(13.8)	還元焼	灰白色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～底部2/3	回転ナデ	回転横ナデ	
													底面回転糸切り	回転横ナデ	
													底面回転糸切り	回転横ナデ	
61図	9	H-22号住	15	1	須恵器	高台付皿	13.6	6.5	2.9	普通	灰白色	壳形	口縁部横ナデ	回転横ナデ	
													口縁部横ナデ	回転横ナデ	
													口縁部横ナデ	回転横ナデ	
61図	10	H-22号住	14	3	土師器	坏	(13.7)	—	(3.9)	にぶい橙色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～底部1/2	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
61図	11	H-22号住	16	3	土師器	坏	(13.6)	—	(2.9)	にぶい橙色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～底部1/4	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
61図	12	H-22号住	16	2	土師器	坏	(14.4)	—	(4.9)	橙色	細砂粒・小礫少含	口縁部～底部1/4	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
61図	13	H-22号住	2	1	土師器	長胴壺	(17.2)	—	(6.5)	にぶい赤褐色	細砂粒・小礫少含	胴部～底部1/8	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	一部分ス 付着
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
61図	14	H-23号住	2	1	土師器	瓶	(17.2)	—	(6.5)	橙色	細砂粒・小礫少含	胴部～底部1/8	口縁部・胴部回	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
61図	15	H-23号住	14	1	須恵器	短頸壺	(10.6)	6.5	7.8	還元焼	灰色	口縁部～頸部1/2次	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
61図	16	H-23号住	14	1	須恵器	坏	(13.0)	(5.3)	(4.3)	普通	灰黄色	口縁部1/5次	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
61図	17	H-23号住	2	1	須恵器	坏	(14.2)	(6.7)	(4.0)	普通	灰黄色	口縁部～底部1/3	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
61図	18	H-23号住	15	床直	須恵器	高台付皿	13.7	2.2	6.9	普通	にぶい黄褐色	壳形	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	墨書土器
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
61図	19	H-23号住	12	1	須恵器	高台付皿	13.5	2.3	7.5	還元焼	灰白色	壳形	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
61図	20	H-24号住	12・16	1	須恵器	蓋	(26.6)	—	(4.8)	還元焼	灰黄色	1/8	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
62図	1	H-24号住	3	3	土師器	坏	(11.0)	—	(4.1)	普通	橙色	口縁部～底部1/5	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
62図	2	H-24号住	3	3	土師器	坏	(11.0)	—	(3.6)	普通	淡褐色	口縁部～底部1/5	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
62図	3	H-24号住	3	3	土師器	坏	11.3	—	3.5	普通	橙色	壳形	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
62図	4	H-24号住	1	3	土師器	坏	(11.0)	—	(3.8)	普通	橙色	口縁部～底部1/6	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
62図	5	H-24号住	8	3	土師器	坏	(12.0)	—	(4.2)	普通	橙色	口縁部～底部1/2	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	

第12表 住居址出土遺物観察表(6)

挿図No	遺構名	区	層	種類	器種	法量		成・整形技法の特徴			備考					
						口径	底径	①焼成	②色調	③胎土		④残存	外面	内面		
62図	H-24号住	11	3	土師器	坏	(11.0)	-	(4.3)	普通	橙色	細砂粒若干含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ		
		5	3	土師器	坏	(13.0)	-	(4.2)	普通	にぶい橙色	細砂粒少含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ		
		D-1		土師器	坏	12.2	-	3.8	普通	にぶい橙色	細砂粒・小礫若干含	ほぼ完形	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	内外面黒色	
		5	2	土師器	坏	(12.0)	-	(2.8)	普通	褐灰色	細砂粒・小礫若干含	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ		
		2	3	土師器	坏	(12.0)	-	(4.3)	普通	にぶい橙色	細砂粒若干含	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ		
		4	3	土師器	小形壺	(12.7)	-	(12.3)	普通	にぶい橙色	粗砂粒・礫少含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ		
		7	3	土師器	長胴壺	(19.8)	-	(6.9)	普通	にぶい橙色	粗砂粒・礫含	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ		
		D-1 ・14	3	土師器	長胴壺	(17.4)	5	(8.3)	普通	にぶい橙色	細砂粒・小礫少含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	底面に木炭痕	
		6・5	1・2	須恵器	長頸壺?	-	-	-	-	還元焰褐灰色	粗砂粒少含	頸部1/5	回転ナデ	回転ナデ		
		7・15	2・3	須恵器	提瓶?	-	-	-	-	良好	細砂粒若干含	底部	回転ナデ	回転ナデ	自然灰釉	
		3	2	須恵器	壺	(30.6)	-	(5.4)	還元焰褐灰色	粗砂粒少含	粗砂粒少含	口縁部1/10	回転ナデ	回転ナデ		
	63図	H-25号住	2	1	土師器	坏	-	-	(3.2)	普通	褐灰色	粗砂粒少含	口縁部1/10	横ナデ	横ナデ	内外面黒色
		H-26号住	6	1	土師器	小形壺	(13.4)	-	(11.7)	普通	にぶい赤褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	
H-27号住		11	1	土師器	坏	(12.0)	-	(3.6)	普通	褐色	細砂粒若干含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ		
		11	1	土師器	坏	(12.2)	-	(4.5)	普通	にぶい橙色	細砂粒少含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	内外面黒色	
		13	1	土師器	坏	(12.0)	-	(4.8)	普通	にぶい橙色	細砂粒若干含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ		
		15	2	土師器	坏	(12.0)	-	(4.4)	普通	褐色	細砂粒少含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	内面スス付着	
		10	2	土師器	坏	(11.4)	-	(3.0)	普通	にぶい橙色	細砂粒・小礫若干含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	外面一部スス付着	
		10	2	土師器	坏	(12.6)	-	(6.4)	普通	褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ		

第13表 住居址出土遺物観察表(7)

挿図No	遺構名	区	層	種類	器種	法量		①焼成	②色調	③胎土	整形技法の特徴			備考
						口径	底径 器高				④残存	外面	内面	
63図	H-27号住	12	1	土師器	小形壺	(16.0)	2.3 14.8	普通	灰褐色 ～にぶい赤褐色	粗砂粒・礫少含	口縁部～底部2/5	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
		7	1	土師器	甌	—	(11.7) (6.7)	普通	にぶい褐色	粗砂粒・礫少含	底部1/5	胴部寛ナデ		
		12	1	土師器	甌	—	(12.0) (7.8)	普通	明赤褐色	粗砂粒少含	底部1/8	胴部寛ナデ		
		10	2	土師器	小形壺	(10.0)	—	普通	にぶい褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部1/5	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	外面一部 スス付着	
64図	H-27号住	13	2	土師器	長胴壺	(20.8)	(5.9) 37.5	普通	明褐色 ～にぶい・褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部～底部3/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
		D-1		土師器	長胴壺	(20.9)	6 36.5	普通	褐色 ～にぶい・黄褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部～底部1/2	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
		竈		土師器	小形壺	(17.0)	—	普通	にぶい赤褐色	粗砂粒・礫少含	口縁部～胴部1/5	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
		13	2	土師器	長胴壺	(21.6)	—	普通	にぶい赤褐色	粗砂粒・礫少含	胴部中位1/2	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
		D-1		土師器	長胴壺	—	—	普通	にぶい赤褐色	粗砂粒・礫少含	口縁部～胴部1/10	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
65図	H-28号住	8	1	土師器	坏	(13.5)	—	普通	明赤褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～底部1/2	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
		4	1	土師器	鉢	(23.0)	—	普通	明赤褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～体部1/8	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
		8	1	土師器	球胴壺	(18.7)	—	普通	にぶい褐色	粗砂粒少含	口縁部～胴部上位1/2	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
	H-29号住			土師器	小形壺	(15.0)	—	普通	明赤褐色	粗砂粒・礫少含	口縁部～胴部1/5	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	外面一部 スス付着	
		4	1	土師器	小形壺	(15.0)	—	普通	明赤褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～胴部1/10	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
	4	1	土師器	台付 小形壺	—	—	普通	明赤褐色	粗砂粒・礫少含	底部～胴上部	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ			
	H-30号住	15	2	土師器	坏	(13.0)	—	普通	褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～底部2/3	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
		16	2	土師器	坏	(12.7)	—	普通	褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～底部2/3	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
		16	2	土師器	坏	(14.0)	—	普通	灰褐色	細砂粒・小礫若干含	ほぼ完形	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	内外面黒 色	
		15	2	土師器	坏	(15.4)	—	普通	明赤褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～体部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
		14・15	2	土師器	坏	(12.0)	—	普通	にぶい褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～体部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	一部スス 付着	

第14表 住居址出土遺物観察表(8)

標図No	遺構名	区	層	種類	器種	法量		①焼成	②色調	③胎土	成形技法の特徴				備考
						口径	底径				④残存	外面	内面		
65図	H-30号住	6	1	土師器	坏	(11.2)	—	(3.4)	普通	橙色	細砂粒・小礫若干含	口縁部~体部1/4	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	内外面黒色
													体部縦ナデ	体部縦ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													胴部縦ナデ	胴部縦ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
66図	H-32号住	15	2・3	土師器	小形壺	(17.8)	—	(10.0)	普通	橙色	細砂粒若干含	口縁部~胴上半部1/2	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	自然灰釉
													胴部縦ナデ	胴部縦ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
口縁部横ナデ	口縁部横ナデ														
67図	H-32号住	9・15	1・3	須恵器	高台付碗	(12.4)	(7.5)	(4.2)	還元焰	灰色	細砂粒・小礫若干含	口縁部~底部分3/4	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	内外面黒色
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
													口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	

第15表 住居址出土遺物観察表(9)

挿図No	遺構名	区	層	種類	器種	法量		成・整形技法の特徴				備考			
						口径	底径	①焼成	②色調	③胎土	④残存		外面	内面	
67図	H-32号住	15	3	須恵器	高台付皿	(13.7)	(7.0)	3.4	普通	灰白色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～底部2/3	回転横ナデ	回転横ナデ	
													底部回転糸切り	回転横ナデ	
													底面回転糸切り	回転横ナデ	
													底面回転糸切り	回転横ナデ	
													底面回転糸切り	回転横ナデ	
													底面回転糸切り	回転横ナデ	
													底面回転糸切り	回転横ナデ	
													底面回転糸切り	回転横ナデ	
													底面回転糸切り	回転横ナデ	
													底面回転糸切り	回転横ナデ	
													底面回転糸切り	回転横ナデ	
													底面回転糸切り	回転横ナデ	
													底面回転糸切り	回転横ナデ	
68図	H-32号住	15・ 2	2・3	須恵器	大甕	(56.0)	-	-	還元焰灰色	細砂粒・小礫少含	口縁部～ 胴上半部1/3	回転横ナデ	回転横ナデ	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
69図	H-34号住	11	1	土師器	坏	(10.2)	-	普通	橙色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～底部1/4	回転横ナデ	回転横ナデ	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	
												不明瞭	不明瞭	不明瞭	

第16表 住居址出土遺物観察表(10)

挿図No	遺構名	区	層	種類	器種	法量		①焼成	②色調	③胎土	成形技法の特徴			備考
						口径	底径				器高	④残存	外面	
69図	H-34号住	甕	3	土師器	坏	(14.6)	-	(4.3)	明赤褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部~	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
												体部横ナデ	体部横ナデ	
	1	3	土師器	小形甕	(16.0)	-	(8.0)	明赤褐色	明赤褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部~	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
												胴部横ナデ	胴部横ナデ	
	5	3	土師器	甕	-	-	(5.1)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	細砂粒若干含	胴部下位~	底	底	甕ナデ
												胴部横ナデ	胴部横ナデ	
	9	3	1	土師器	長胴甕	(20.0)	-	(12.0)	赤褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部~	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
												胴部横ナデ	胴部横ナデ	
	10	2	2	土師器	長胴甕	(21.2)	-	(6.1)	橙色	粗砂粒・小礫少含	口縁部~	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
												胴部横ナデ	胴部横ナデ	
	11	甕		土師器	長胴甕	(20.0)	-	(6.4)	橙色	粗砂粒多含	口縁部~	不明	不明	不明
												胴部横ナデ	胴部横ナデ	
	12		12	3	土師器	長胴甕	(18.0)	-	橙色	細砂粒少含	口縁部~	不明	不明	不明
胴部横ナデ												胴部横ナデ		
13	H-34号住	11・甕	2	土師器	長胴甕	(24.0)	-	(7.3)	橙色	細砂粒・小礫少含	口縁部~	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
												胴部横ナデ	胴部横ナデ	
70図	H-34号住	11	3	土師器	長胴甕	(22.0)	-	(30.0)	橙色	細砂粒・小礫少含	口縁部~	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
												胴部横ナデ	胴部横ナデ	
2		14	3	土師器	長胴甕	(25.0)	-	(5.0)	橙色	細砂粒・小礫少含	口縁部~	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
												胴部横ナデ	胴部横ナデ	
3		11	2	土師器	球胴甕	(26.0)	-	(5.8)	良好	細砂粒・小礫少含	口縁部~	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
												胴部横ナデ	胴部横ナデ	
4		14	3	須恵器	蓋	(11.0)	-	(3.2)	還元焰明褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部~	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
												底	底	
5		5	3	須恵器	蓋	(10.0)	-	(3.0)	還元焰褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部~	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	内面黒色
												底	底	
6	H-35号住	甕		土師器	坏	(12.3)	-	(4.1)	にぶい橙色	細砂粒・小礫少含	口縁部~	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
												体部横ナデ	体部横ナデ	
7		甕		土師器	坏	12.3	-	3.9	にぶい橙色	細砂粒・小礫若干含	口縁部~	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
												胴部横ナデ	胴部横ナデ	
8		3	1	土師器	坏	(11.0)	-	(3.3)	普通	細砂粒・小礫若干含	口縁部~	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
												胴部横ナデ	胴部横ナデ	
9		12	1	土師器	甕	16	10.4	-	普通	明赤褐色	口縁部~	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
												体部横ナデ	体部横ナデ	
10		12	1	土師器	長胴甕	-	-	(7.0)	普通	にぶい赤褐色	口縁部~	口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	
												胴部横ナデ	胴部横ナデ	
11	16・甕	土	1	土師器	片口鉢	(12.8)	-	(8.3)	普通	細砂粒・小礫少含	胴下半部~	底	底	
												口縁部横ナデ	口縁部横ナデ	

第17表 住居址出土遺物観察表(11)

挿図No	遺構名	区	層	種類	器種	法量		①焼成	②色調	成・整形技法の特徴			備考		
						口径	底径 器高			③胎土	④残存	外面		内面	
70図	H-35号住	竈		土師器	長胴壺	-	3.3 (12.5)	普通	にぶい橙色 ～褐灰色	細砂粒・小礫少含	胴部下位～底部	施削り	寛ナデ		
									にぶい赤褐色 ～にぶい橙色					粗砂粒・礫少含	胴部下位～底部4/5
71図	H-36号住	16	2	土師器	坏	(13.8)	4.9	普通	橙色	細砂粒・礫若干含	口縁部～底部3/4	口縁部横ナデ 体部寛ナデ	口縁部横ナデ 体部寛ナデ		
									にぶい橙色					ほぼ定形	口縁部横ナデ 体部寛ナデ
									橙色					ほぼ定形	口縁部横ナデ 体部寛ナデ
									にぶい橙色					口縁部～ 胴部下位7/8	口縁部横ナデ 体部寛ナデ
									橙色 ～にぶい橙色					口縁部～底部1/2	口縁部横ナデ 体部寛ナデ
									にぶい橙色					口縁部～ 胴上半部1/3	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
72図	H-36号住	8	2	土師器	長胴壺	(17.2)	(11.3)	普通	粗砂粒・小礫少含	口縁部～ 胴部中央1/3	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
									にぶい赤褐色 ～にぶい橙色					口縁部～ 胴上半部1/5	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									橙色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									明赤褐色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									橙色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									明赤褐色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									橙色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									明赤褐色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									明赤褐色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									明赤褐色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
72図	H-36号住	8	2	土師器	長胴壺	(17.2)	(11.3)	普通	粗砂粒・小礫少含	口縁部～ 胴部中央1/3	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
									にぶい赤褐色 ～にぶい橙色					口縁部～ 胴上半部1/5	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									橙色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									明赤褐色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									橙色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									明赤褐色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
72図	H-36号住	1	1	土師器	小形壺	(12.4)	(8.7)	良好	細砂粒・小礫若干含	口縁部～ 胴上半部1/3	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
									にぶい橙色					口縁部～ 胴上半部1/3	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									橙色 ～にぶい橙色					口縁部～ 胴上半部1/3	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									にぶい橙色					口縁部～ 胴上半部1/3	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									明赤褐色					口縁部～ 胴上半部1/3	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									明赤褐色					口縁部～ 胴上半部1/3	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
72図	H-36号住	5	2	土師器	長胴壺	(17.0)	(6.9)	普通	粗砂粒・小礫少含	口縁部～ 胴中央1/3	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
									にぶい赤褐色 ～にぶい橙色					口縁部～ 胴上半部1/5	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									橙色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									明赤褐色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									橙色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									明赤褐色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
72図	H-36号住	8	2	土師器	長胴壺	(17.2)	(11.3)	普通	粗砂粒・小礫少含	口縁部～ 胴部中央1/3	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
									にぶい赤褐色 ～にぶい橙色					口縁部～ 胴上半部1/5	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									橙色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									明赤褐色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									橙色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									明赤褐色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
72図	H-36号住	1	1	土師器	長胴壺	(16.8)	(4.8)	普通	粗砂粒・小礫少含	口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
									にぶい赤褐色 ～にぶい橙色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									橙色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									明赤褐色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									橙色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
									明赤褐色					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ
72図	H-36号住	2	2	土師器	長胴壺	(4.8)	-	普通	粗砂粒・小礫少含	口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ		
									粗砂粒・小礫少含					口縁部～ 胴上半部1/4	口縁部横ナデ 胴部寛ナデ

第18表 住居址出土遺物観察表(12)

挿図No	遺構名	区	層	種類	器種	法量		胎土	成・整形技法の特徴				備考																																																																																																																											
						口径	底径		①焼成	②色調	③胎土	④残存		外面	内面																																																																																																																									
67図	H-32号住	15	3	須恵器	高台付皿	(13.7)	(7.0)	3.4	普通	灰白色	細砂粒・小礫若干含	口縁部1/3	口縁部回転糸切り	回転横ナデ																																																																																																																										
																D-1・電	13.2	6.6	2.2	還元焼	灰白色	細砂粒・小礫若干含	口縁部4/5	回転横ナデ	回転横ナデ																																																																																																															
																											2	(14.0)	(7.2)	(2.0)	還元焼	灰白色	細砂粒・小礫若干含	口縁部1/3	回転横ナデ	回転横ナデ																																																																																																				
																																						5-2	(17.0)	(8.2)	(4.5)	良好	灰白色	細砂粒若干含	底部	回転横ナデ	回転横ナデ	灰軸内外																																																																																								
																																																	10	—	—	—	良好	淡黄色	細砂粒若干含	破片	不明瞭	不明瞭	外面灰釉																																																																													
																																																												13	(13.7)	—	(4.0)	良好	灰白色	細砂粒若干含	口縁部1/5	回転横ナデ	回転横ナデ	外面灰釉																																																																		
																																																																							7	—	—	—	良好	灰オリーブ	細砂粒若干含	頸部破片	回転横ナデ	回転横ナデ	外面灰釉																																																							
																																																																																		2-11	(10.0)	(3.2)	(3.05)	還元焼	灰色	細砂粒・小礫若干含	胴下半部~底部1/4	胴部磨削り	回転横ナデ	面刷毛塗																																												
																																																																																													11	(24.8)	—	—	還元焼	灰色	細砂粒若干含	1/8	回転横ナデ	回転横ナデ	面刷毛塗																																	
																																																																																																								11	—	—	—	普通	褐色	細砂粒若干含	匙先端部	不明瞭	不明瞭	面刷毛塗																						
																																																																																																																			9・16・	(56.0)	—	—	還元焼	灰色	細砂粒・小礫少含	口縁部~	口縁部回転横ナ	不明瞭	面刷毛塗											
																																																																																																																														15・	—	—	—	還元焼	灰色	細砂粒・小礫少含	胴上半部1/3	口縁部回転横ナ	不明瞭	面刷毛塗
6	(11.4)	—	(3.5)	普通	褐色	細砂粒・小礫少含	口縁部~底部1/3	口縁部横ナデ	不明瞭	面刷毛塗																																																																																																																														
											11	(13.2)	—	(3.8)	普通	褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部~底部1/4	口縁部横ナデ	不明瞭	面刷毛塗																																																																																																																			
																						8	(15.2)	—	(5.4)	普通	にぶい褐色	細砂粒・小礫若干含	胴上半部1/6	口縁部横ナデ	不明瞭	面刷毛塗																																																																																																								
																																	3	(13.4)	—	(3.6)	還元焼	灰色	細砂粒若干含	口縁部1/8	回転横ナデ、2本の沈線?	不明瞭	面刷毛塗																																																																																													
																																												11	(10.2)	—	(2.9)	普通	褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部~底部1/4	口縁部横ナデ	不明瞭	面刷毛塗																																																																																		
																																																							11	10.7	—	3.3	普通	明赤褐色	細砂粒・小礫若干含	壳形	口縁部横ナデ	不明瞭	面刷毛塗																																																																							
																																																																		11	(13.3)	—	(4.0)	普通	褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部~底部1/3	口縁部横ナデ	不明瞭	面刷毛塗																																																												
																																																																													16	(11.0)	—	(3.3)	普通	褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部~底部1/4	口縁部横ナデ	不明瞭	面刷毛塗																																																	
																																																																																								16	(11.0)	—	(3.5)	普通	褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部~底部1/4	口縁部横ナデ	不明瞭	面刷毛塗																																						

第19表 住居址出土遺物観察表(13)

棟図No	遺構名	区	層	種類	器種	法量		①焼成	②色調	③胎土	成形技法の特徴				備考	
						口径	底径				器高	④残存	外面	内面		
74図	H-40号住	11	1	須恵器	高台付皿	13.2	3.6	2.7	普通	灰白色	細砂粒・小礫若干含	完形	回転横ナデ 底部回転系切り	回転横ナデ		
		8	2	須恵器	提瓶	-	-	-	還元焰	褐色	細砂粒若干含	一部	同心円状の紋様あり	回転横ナデ指頭圧痕あり		
75図	M-1号溝	14		土師器	坏	(14.8)	-	(3.9)	普通	橙色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～体部1/4	口縁部横ナデ 体部縦ナデ	口縁部横ナデ 体部縦ナデ		
		14		土師器	坏	(15.2)	-	(3.7)	普通	明赤褐色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～体部1/4	口縁部横ナデ 体部縦ナデ	口縁部横ナデ 体部縦ナデ		
		37	上層	須恵器	坏	(8.6)	-	(1.4)	還元焰	灰白色	細砂粒若干含	底部1/6	回転横ナデ 底部回転系切り	回転横ナデ	自然釉	
		37	上層	須恵器	坏	(6.8)	-	(1.5)	良好	灰色	細砂粒若干含	底部1/6	回転横ナデ 底部回転系切り	回転横ナデ	自然釉	
		39	上層	須恵器	高台付皿	(6.6)	-	(2.3)	還元焰	灰白色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～底部2/3	回転横ナデ 底部回転系切り	回転横ナデ		
		11	下層	土師器	坏	(11.8)	-	(4.2)	普通	浅黄褐色	細砂粒若干含	口縁部～体部1/3	口縁部横ナデ 体部縦ナデ	口縁部横ナデ 体部縦ナデ指頭圧痕あり		
		12	上層	土師器	鉢	(13.6)	-	(4.5)	普通	にぶい黄褐色	細砂粒若干含	口縁部1/10	横ナデ	横ナデ		
		14	上層	須恵器	長頸壺?	-	-	-	還元焰	灰色	細砂粒・小礫若干含	胴部	回転横ナデ、中央部に乳線が一周する	回転横ナデ		
		M-3号溝	1・2	上層	土師器	球胴罐	(15.6)	-	(5.0)	普通	にぶい橙色	細砂粒若干含	口縁部1/3	横ナデ	横ナデ	
		I-1号井戸	10	3	土師器	球胴罐	-	(7.4)	(10.3)	普通	橙色	細砂粒・小礫若干含	胴下半部～底部1/3	胴部縦ナデ 口縁部縦ナデ	横ナデ	
		6	1	土師器	坏	(11.0)	-	(3.0)	普通	橙色	細砂粒若干含	口縁部1/4	口縁部横ナデ 体部縦ナデ	口縁部横ナデ		
		2	3	土師器	坏	(14.2)	-	(3.2)	普通	橙色	細砂粒・小礫若干含	口縁部～底部2/3	口縁部横ナデ 体部縦ナデ	口縁部横ナデ 体部縦ナデ		
	D-13			土師器	長胴罐	(21.0)	-	(9.0)	普通	明赤褐色	粗砂粒・礫少含	口縁部～胴部1/4	口縁部横ナデ 胴部縦ナデ	口縁部横ナデ 胴部縦ナデ	一部ス 付着	
	D-17			須恵器	鉢	(21.2)	-	(2.3)	普通	浅黄色	細砂粒・小礫若干含	口縁部破片	不明瞭	不明瞭		
	P-5			須恵器	坏	(16.6)	-	(4.0)	還元焰	灰白色	細砂粒少含	口縁部～底部1/8	回転横ナデ 底部回転系切り	回転横ナデ	墨書土器	

第20表 住居址出土遺物観察表(14)

挿図No	番号	遺跡名	区	層	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
76図	1	M-2	18	上層	刀子	(65.6)	23.1	13.1	16.52	
	2	H-7	6	1	刀子	(43.1)	14.0	1.9	2.55	板状
	3	H-12	3	1	環状鉄製品	53.5	35.1	15.4	16.65	
	4	H-12	4	2	紡錘車	49.1	49.8	14.5	30.61	
	5	H-16	3	上層	刀子	(78.7)	10.6	6.1	12.25	

第21表 鉄製品計測表

挿図No	番号	遺跡名	区	層	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
—	—	H-2	2	1	不明	頁岩	117.84	67.58	32.56	406.2	完形
—	—	H-2	D-1		砥石	安山岩	143.68	49.5	35.83	522.3	
76図	9	H-3	15	2	砥石	安山岩	154.17	74.55	45.56	650.2	盤状
76図	10	H-3	8	2	砥石	安山岩	117.23	93.41	47.89	525.2	盤状
—	—	H-3	7	2	礫?	頁岩	161.34	57.88	63.79	871.8	
76図	12	H-4	3	1	砥石	安山岩	68.47	36.06	31.76	83.2	角柱状
76図	11	H-15	D-1		砥石	軽石	129.13	76.67	53.17	345.4	不定形
76図	17	H-16	5	2	素材剥片	滑石	19.88	15.94	8.85	4.2	
76図	18	H-16	9	2	素材剥片	滑石	21.24	17.14	8.26	4.2	
—	—	H-16	13	2	台石	安山岩	191.11	156.65	74.62	4440	2/3
76図	19	H-16	16	2	白玉	滑石	12.9	11.7	9.6	2.0	
76図	7	H-20	1	2	白玉	滑石	10.17	6.89	10.95	0.9	1/2
—	—	H-20	D-1		砥石	安山岩	128.83	70.81	45.23	623.2	磨面2
76図	6	H-22	10	3	紡錘車	蛇紋岩	41.04	40.5	21.5	47.9	滑石変岩質. 黒褐色
76図	16	H-22	16	1	板状剥片	滑石	67.58	28.73	21.01	60.23	
—	—	H-24	15	3	磨石	安山岩	110.1	54.91	32.48	280.3	側面磨面1
—	—	H-24	15	3	礫	安山岩	(73.48)	88.11	45.12	(476.6)	赤色. 1/2
—	—	H-30	14	2	砥石	安山岩	171.29	65.51	37.04	811.6	
76図	8	H-32	15	3	不明	石英	15.79	16.19	11.95	4.5	
—	—	H-33	6	1	砥石	安山岩	171.39	72.08	63.21	1250	先端敲打
76図	13	H-34	13	3	砥石	軽石	75.34	53.66	34.06	69.3	楕円状
76図	15	H-34	14	3	砥石	軽石	46.13	39.33	30.22	29.5	球状
—	—	H-34	15	3	搬入礫	安山岩	162.74	89.29	47.03	1049.2	
—	—	H-34	15	3	砥石	安山岩	131.31	64.03	35.22	545.5	被熱・磨面1
—	—	H-34	13	3	砥石	安山岩	164.77	74.31	50.99	1047	
76図	14	H-36	16	2	砥石	軽石	81.68	60.24	39.68	96.9	楕円状
—	—	I-1	10	1	砥石	軽石	83.94	70.28	50.86	271.2	被熱. 完形. 未使用
—	—	P-3			剥片	石英	19.51	19.54	15.16	8.7	1/4

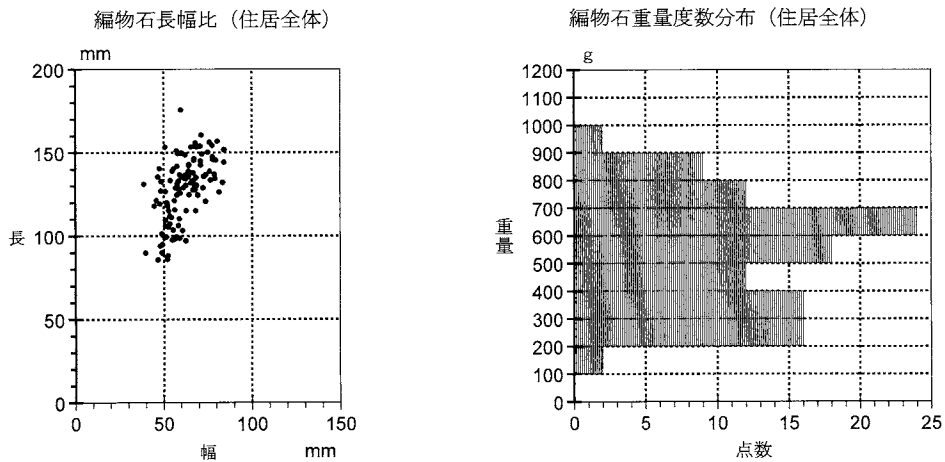
第22表 石製品観察表

[編物石] (第77図)

編物石と判断される棒状礫は114点検出されている。石材はほとんどが安山岩であるが、砂岩と結晶片岩がそれぞれ1点ずつ検出されている。大きさ・形状は、第77図のように長幅比2:1程度の棒状の形状が選択される傾向がある。また、長さでは9~12cmの中形と12~16cmの大形の二つのグループが認められる。特に後者に集中する。幅は4~6cmの範囲に集中する。重量別では100g程度の小形なものから1kg程度の大形のものまで幅広い重量分布を示すが、礫の大きさに関係して200~400gと500~700gの二つの集中が認められる。特に700g前後のものが多い。

編物石はその機能性から大きさ・形状が優先され、大形の礫が選択される傾向が考えられる。なお、石製品の中で安山岩製の砥石等は大きさ・形状が編物石に類似していることから、編物石からの転用と考えられる。

(井上慎也)



第77図 編物石長幅比・編物石重量度数分布

4 中世の遺構

(1) 遺構

ここで中世の遺構としたものは、浅間B軽石を覆土中に混入するものであり、厳密には古代末～近世後期（1108年～1783年）までの間に造られたものである。

[溝]

ここで検出された台地を区画する溝は、後述するように水を流す目的でも、居住域での区画でもないことが判明しており、それ以外の目的で構築された施設であると考えられる。同様な溝は西殿遺跡でも検出されており、この地域全体に及ぶ広域的な施設と推定される。したがって、目的も個人的なものではなく、集団的な目的であったと考えられる。現状で物的証拠は存在していないが、動物が落ちたら登りにくいM-2号溝の断面形状からみて、猪など農作物を荒らす動物が耕作地へ進入することを防ぐ目的で構築された「シシ堀」の可能性が高い。

M-1号溝（第78図・第80図） 北調査区で検出された。舌状台地を縦に割いて東西に延びる。調査区内でも70m以上に及ぶ。西端は北へ折れ曲がって谷地の方向へ向かって延びている。最大で上幅1.2m、深さ0.7mのU字状の断面形を呈する。覆土には浅間B軽石を含有する土壌が堆積している（詳細はVI章を参照のこと）。V層（As-Y層）中に掘り込まれ、水はけが良いことと、覆土に水の流れた痕跡がないことから、水を流す溝ではなかったと考えられる。なお、この溝は本来M-2号溝のような薬研形を呈していたと推定される。したがって、台地の削平行為がM-1号溝が造られた後に行われた可能性が高い。

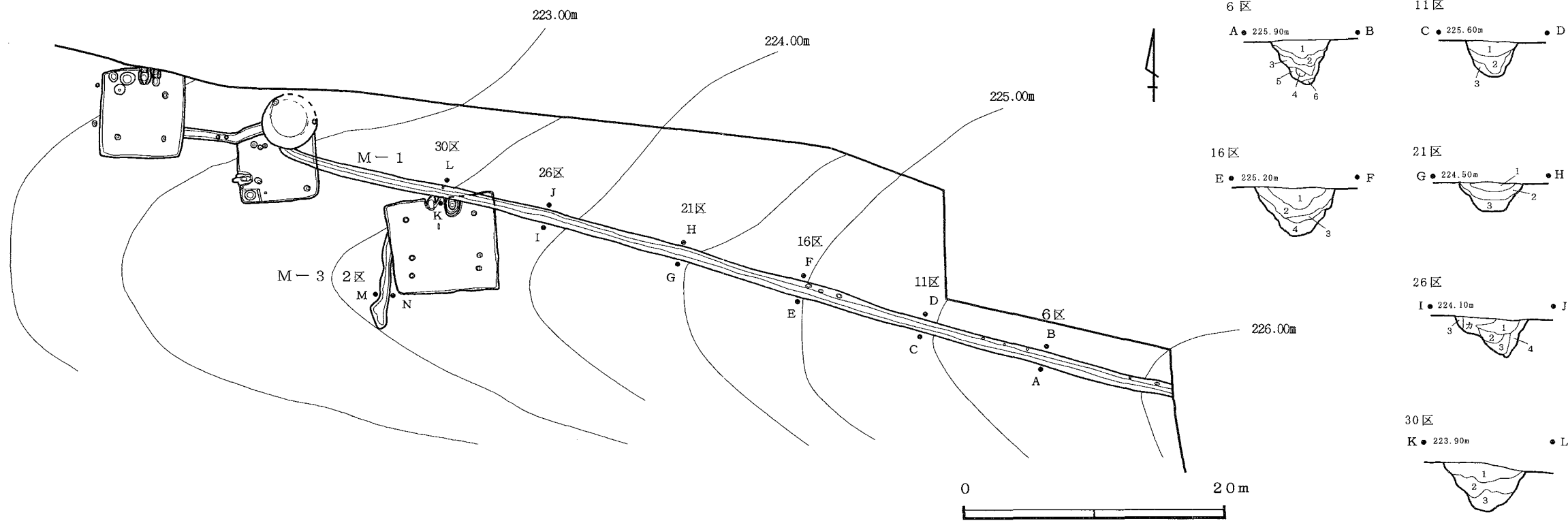
遺物出土状態は第80図のとおりである。この溝の時期の遺物は全く検出されておらず、すべて二次的に混入した土師器片・須恵器片である。したがって、この場所が日常生活の行われていた居住域（集落）とは離れていた可能性が高い。

M-2号溝（第79図・第81図） 南調査区で検出された。舌状台地を縦に割くかたちで、東西に延びている。調査区中央で「く」の字に屈曲している。調査区内で約72m検出されており、東西両方向へそのまま延びている。上幅1.8m、深さ1.2mで中程で屈曲する薬研形を呈する。覆土に浅間B軽石を混入する土層が堆積している。中層（2b層）にロームを大量混入する土層が堆積しており、掘り上げた土が流れ込んだものと推定される。

時期的に近い遺物としては、鉢（第75図7）が出土している。また、それ以外に土師器・須恵器・刀子などが検出されている。

（大工原 豊）

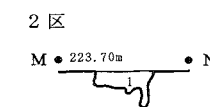
M-1号・M-3号溝



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				
						RP	RB	YP	As-BC	
M-1 6区	1	黒色土層10YR	△	○	×	×	×			
	2	褐色土層10YR	1<2	○	○	×	×			
	3	黒褐色土層10YR	2>3	△	○	※	×	※		
	4	褐色土層10YR	3≒4	○	○	※	×	○		
	5	黒褐色土層10YR	4<5	○	○	○	○	△		
	6	黒褐色土層10YR	5>6	○	○	△	△	※		
11区	1	黒褐色土層10YR	△	○	※	※	※	※		
	2	黒褐色土層10YR	1<2	△	○	※	△	△	※	
	3	黒褐色土層10YR	2>3	△	△	※	※	△	※	
16区	1	黒褐色土層10YR	△	△	×	×	※	※		
	2	暗褐色土層10YR	1<2	△	△	△	※	※	※	
	3	暗褐色土層10YR	2>3	△	△	※	※	△	※	
	4	褐色土層10YR	3<4	△	△	△	△	※	※	

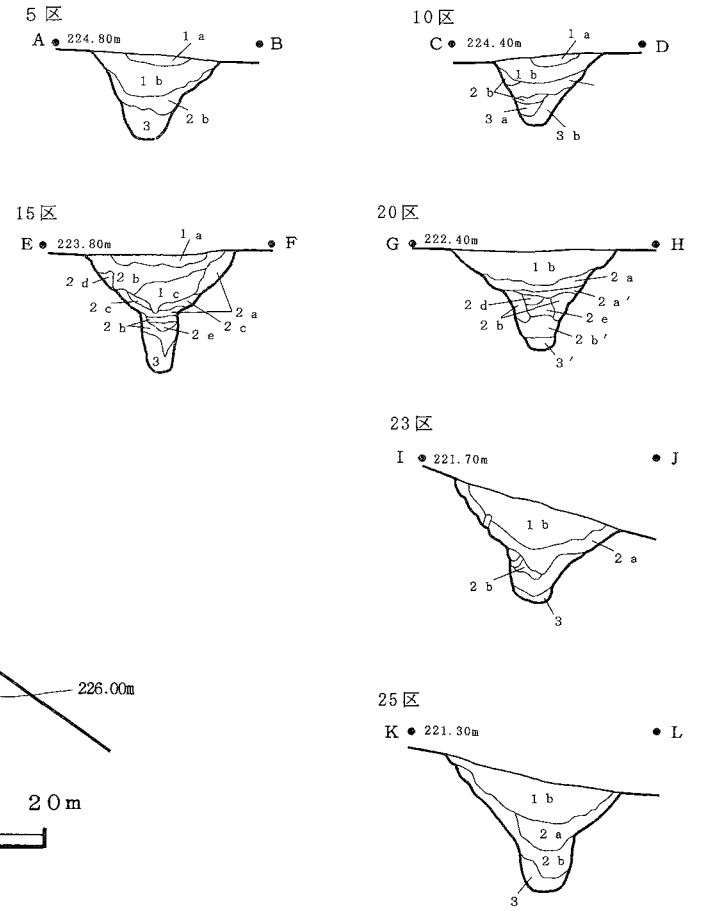
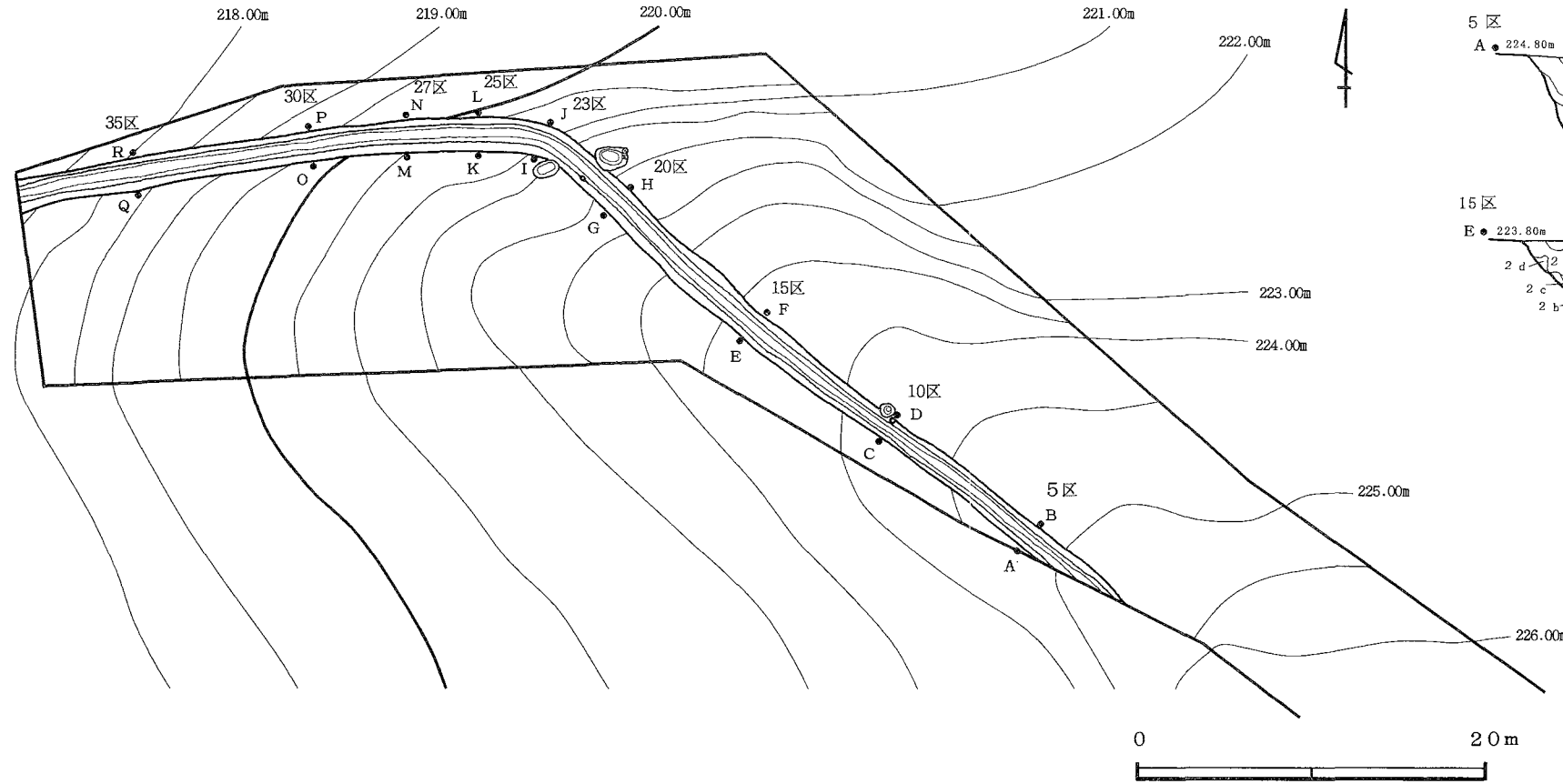
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				
						RP	RB	YP	As-BC	
M-1 21区	1	暗褐色土層10YR	△	△	※	×	※	※		
	2	暗褐色土層10YR	1<2	△	△	△	△	※	※	
	3	暗褐色土層10YR	2<3	△	△	△	△	○	※	
26区	1	暗褐色土層10YR	△	△	※	×	※	※		
	2	暗褐色土層10YR	1<2	△	△	※	×	※	※	
	3	暗褐色土層10YR	2<3	△	△	※	×	△	※	
	4	褐色土層10YR	3<4	△	○	○	△	※	※	
30区	1	暗褐色土層10YR	△	△	△	×	×	○	×	
	2	黒褐色土層10YR	1>2	△	△	※	※	※	○	※
	3	黒褐色土層10YR	2<3	△	○	※	※	○	△	※
M-3 2区	1	暗褐色土層10YR	△	○	※	×	※	×		

M-3号溝

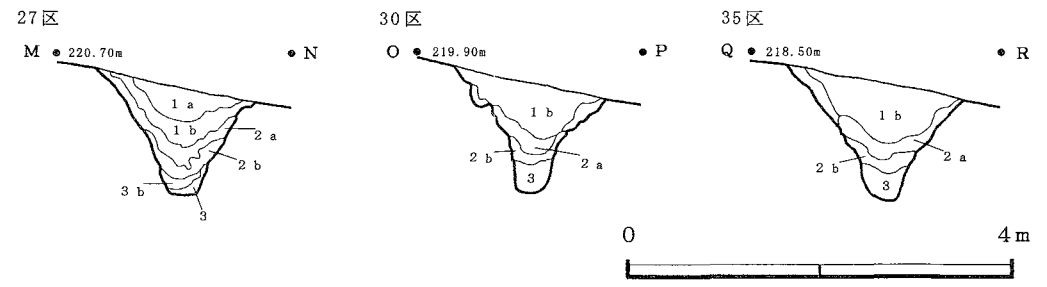


第78図 M-1・M-3号溝実測図

M-2号溝

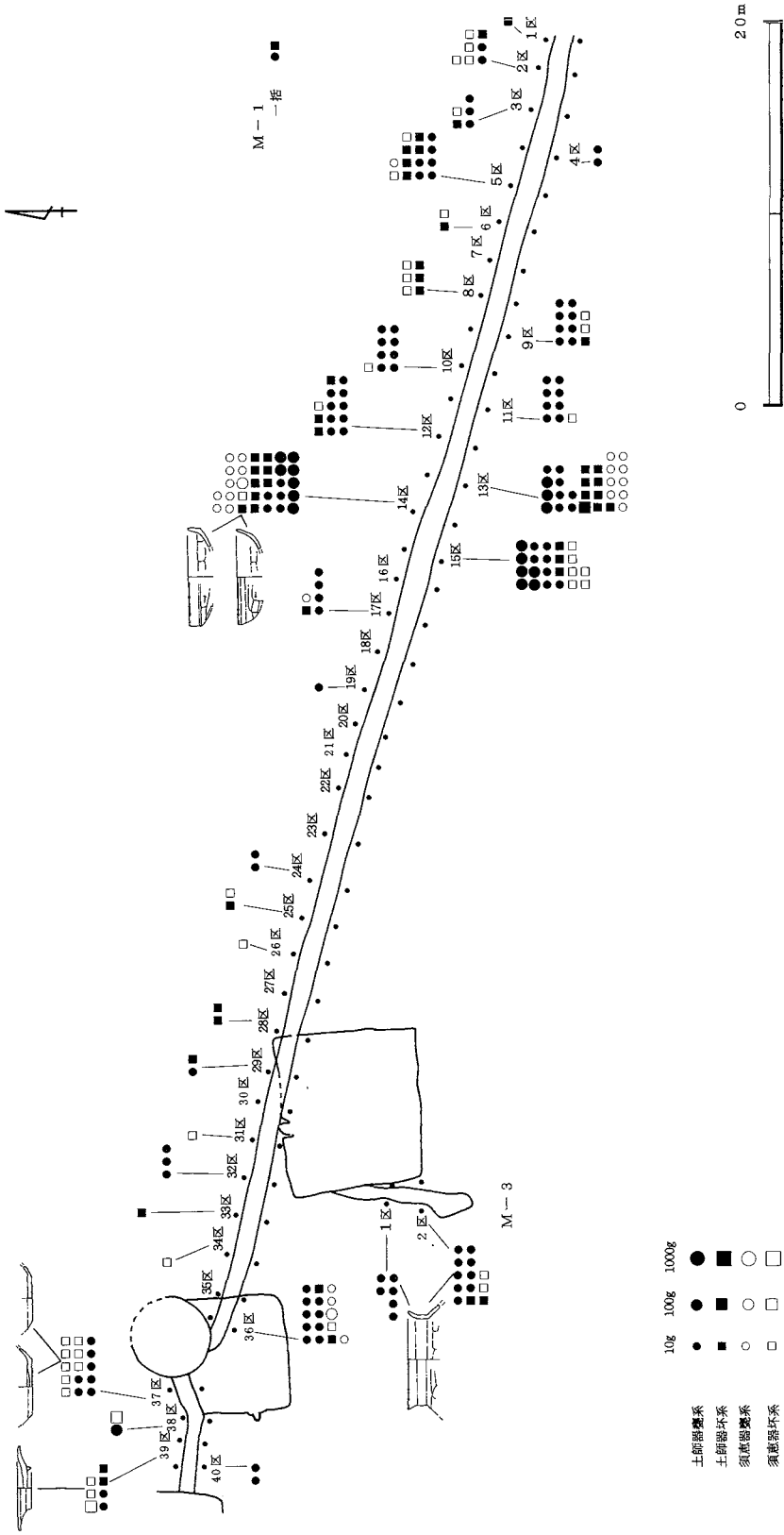


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				備考
						RP	RB	YP	As-AA s-B	
M-2	1 a	黒褐色土層10YR		△	△	△	※	※	○	
	1 b	黒褐色土層10YR	1 a < 1 b	△	△	※	※	※	△	
	1 c	黒褐色土層10YR	1 b < 1 c	△	△	※	※	※	△	
	2 a	褐色土層10YR	1 c < 2 a	△	○	○	※	※	※	
	2 a'	黒褐色土層10YR	2 a < 2 a'	△	○	○	※	※	※	
	2 b	褐色土層10YR	2 a < 2 b	△	◎	◎	◎	△	×	
	2 b'	暗褐色土層10YR	2 b = 2 b'	△	△	△	※	※	×	
	2 d	暗褐色土層10YR	2 c > 2 d	△	○	△	※	△	×	
	2 e	暗褐色土層10YR	2 d > 2 e	△	△	※	※	△	×	
	3	暗褐色土層10YR	2 b > 3	△	○	△	※	※	×	○ Aの可能性あり
	3 a	暗褐色土層10YR	2 b > 3 a	△	○	△	※	※	×	○ Aの可能性あり
	3 b	暗褐色土層10YR	3 a < 3 b	△	○	△	○	△	×	※ Aの可能性あり
	3'	暗褐色土層10YR	3 = 3'	△	△	※	×	※		○

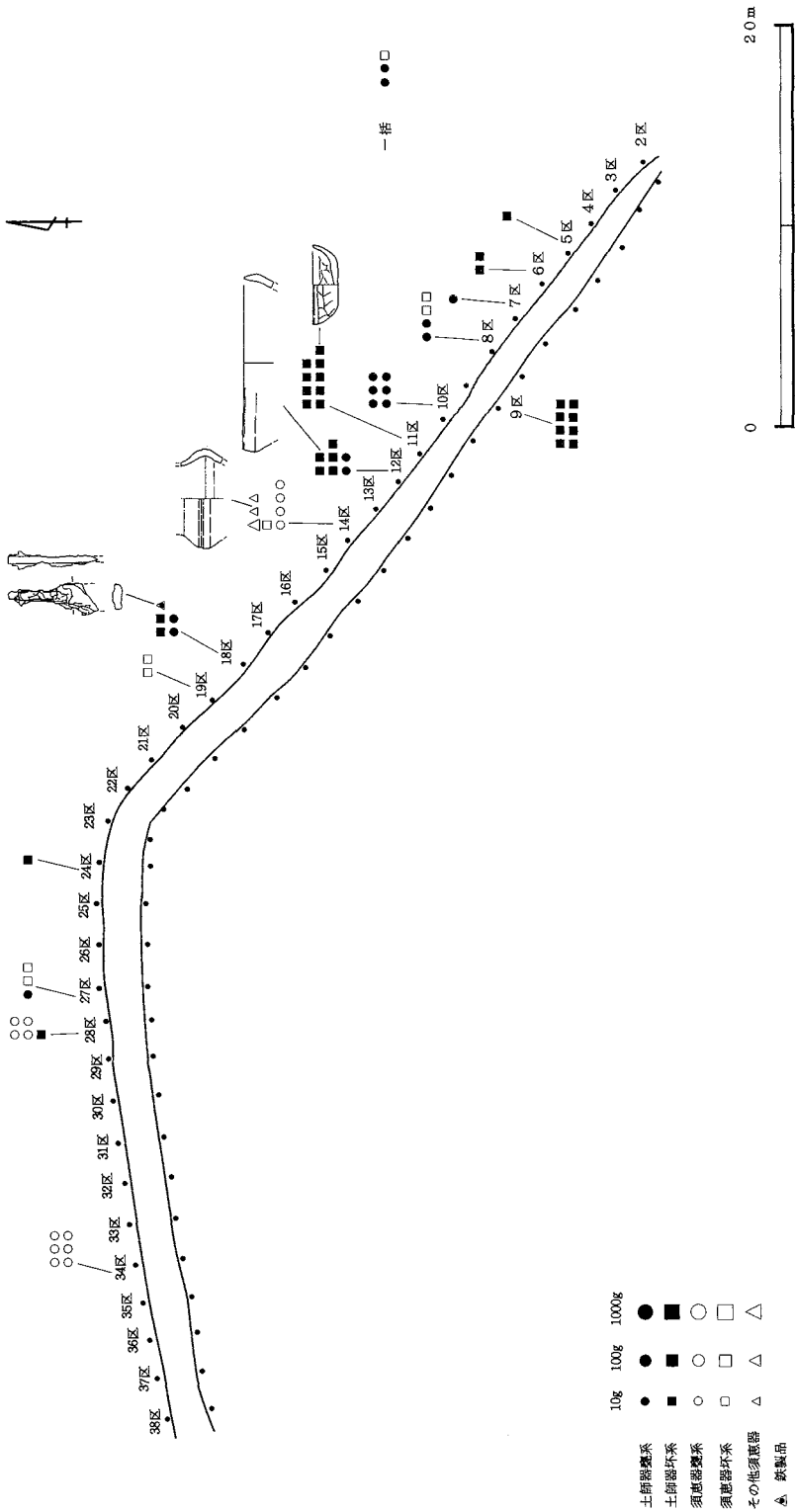


第79図 M-2号溝実測図

M-1号・M-3号溝



第80图 M-1・M-3号溝出土遺物分布图



第81図 M-2号溝出土遺物分布図

V 成果と問題点

1 堀谷戸遺跡出土の古墳時代～平安時代の土器群について

(1) 土器群の変遷

本節では、およそ6世紀後半から9世紀後半に属する竪穴住居址^(註1)出土の土器群について検討を行う。本遺跡で検出した住居址は37棟である。出土状況から住居の時期を示すと考えられる土器群について概観したところ、当遺跡の住居址存続時期は大きく2時期に分けられる。6世紀後半から7世紀初頭の時期と9世紀後半で、その間は遺構が極端に希薄となる状況が看取できる。重複関係を持つ住居址および遺構は次の通りである。

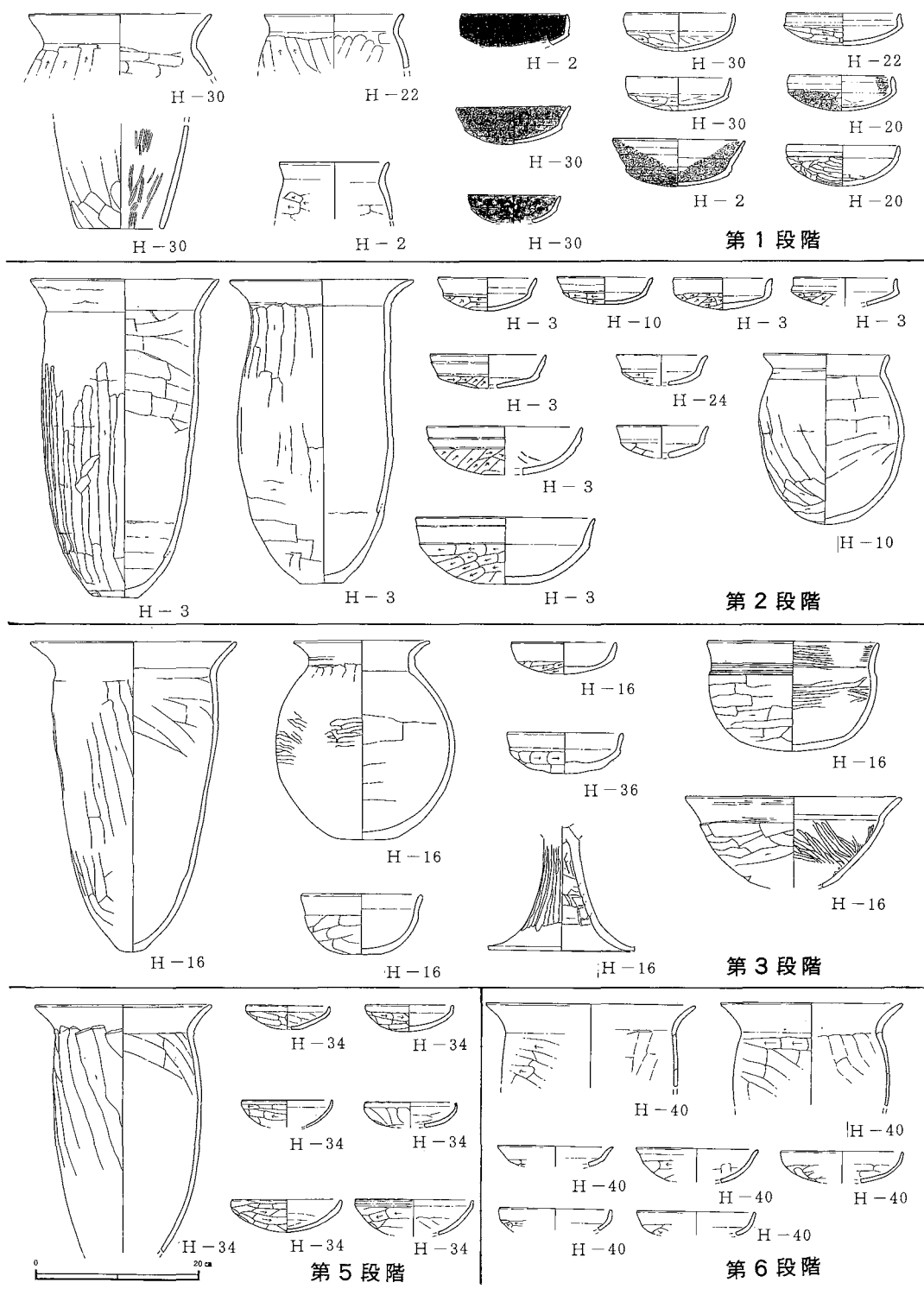
7号住→6号住→5号住→8号住	9号住→8号住	13A号住→13B号住
15号住→14号住	11号住→14号住	24号住→23号住
22号住→23号住	35号住→31号住	36号住→34号住
33号住→34号住	2号竪穴→39号住	20号住→1号井戸

住居群の半数に重複があるが、このうち6世紀後半から7世紀代において時期が近接して重複を示すものはH-5号住～9号住のグループ、H-31・33号住～H-36号住のグループである。9世紀代に属するものはH-13号住である。本来こうした重複関係を手がかりとして土器群の検討をすべきであるが、遺跡の中心部分に大規模な削平を受けていることもあり遺構の残存状況が悪く、従って遺物の出土量も少ない。また重複住居間での同一器種の出土も少ないため、当遺跡のみで編年を検討するには資料不足である。そこで、ここでは群馬県における当期の土器編年研究の成果^(註2)を援用して時期認定を行い、周辺遺跡出土土器群^(註3)とも併せて地域的特性を見いださうるか否かを検討する。

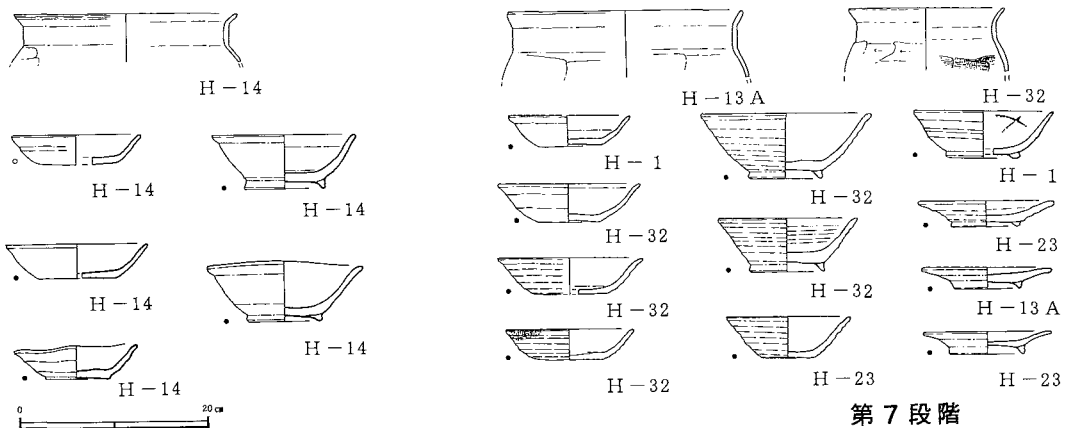
以下に7段階に分け得た土器群の様相について述べる。

[第1段階] (第82図)

H-2・9・20・22・25・30・31・38号住がこの段階に属する。このうちH-20号住とH-30号住に比較的良好な土器群が出土している。器種には土師器甕、甗、坏、鉢、小型甕がある。甕は丸胴の大型甕が認められている。たまたま当段階では図示できないが、通常は第2段階にみられるような体部に膨らみのない長胴甕が中心である。甗は長胴甕に対応する大型の長胴タイプである。坏は模倣坏で器形にバラエティーがみられる。丸底の体部から稜を持って口縁部へ立ち上がるが ①内湾ぎみのもの ②外反するもの ③内傾して短いもの さらに稜を持たずに口縁部



第82図 堀谷戸遺跡土器群 (1)



第83図 堀谷戸遺跡土器群 (2)

にいたるものなどである。体部が深く口径も13.5cm前後のものが多い。また、ヘラ磨きはみられないが、内外面に黒色処理を施したものが認められる。

[第2段階] (第82図)

第1段階と僅差の時期で、坏の器形変化によって段階を設定した。

H-3・4・5・6・7・8・10・24・27・28・35・39号住がこの段階に属する。遺物量の少ないH-11・26・29号住も調査所見からは当段階に含まれる。重複関係のあるH-5号住からH-8号住の4棟では遺物の検討からは时期的な分離ができなかった。また、近接して建物が建てられていて同時存在が疑わしいH-26号住からH-29号住においても遺物の時期差は見出しがたい。H-3・8・10・24号住は一括性の高い出土状況が見られている。器種は土師器甕、甌、壺、坏、高坏、鉢、小型甕、須恵器甕、高坏、提瓶である。

土師器甕は伝統的な長胴甕と丸胴の甕があり、長胴のものは器肉が厚く口縁部はくの字に外反するものと、緩くひらくものとある。縦方向のヘラ削りである。丸胴の甕は壺形と区別しにくい。坏は前段階に対して体部から口縁部の稜が鈍化し、身が浅くなり口縁部の立ちあがりも短いものが目立つ。口径は11.5cm前後と小型化の傾向が伺える。須恵器の供伴が増えてくるのも当段階の変化の一つといえよう。H-8号住出土の須恵器高坏は脚部に台形の透かし穴を切り込んだもので、おそらく二方向であろう。小型品である。

[第3段階] (第82図)

H-15・16・36号住がこの段階に属する。出土した器種は土師器甕、壺、坏、高坏、鉢、小型甕である。当段階は土師器甕の器形に変化が認められる。長胴の甕は胴下部すばまり器肉が薄い

作りとなり、斜め方向のヘラ削りを施す。口縁部はくの字状につよくくびれるものと、ゆるやかに外行するものがある。器肉が厚く胴部は直線的で口縁部が大きく開く中型の甕もみられる。坏は前段階の変化傾向を継承する様に定型的な模倣坏がみられず、稜の鈍化や器肉の厚い平底傾向のものも認められる。

[第4段階]

当段階に属するのはH-33号住1棟のみであり、小片のみの資料であったため段階図として図示しなかった。少ない資料であるが第3段階との間には時間的な空白をみてとれる。出土している器種は、短頸壺様の土師器甕、坏、須恵器蓋である。このうち須恵器蓋については伝統的な系譜を引くものの残存例とできるだろう。土師器甕のうち丸胴の甕は口縁部の立ち上がりが直線的で短いタイプが次段階以降みられるようになる。また、坏は器肉が均質で薄く、体部から口縁部まで内湾するもので、この器形も次段階以降に主流となる坏である。

[第5段階] (第82図)

当段階に属するのはH-34号住のみで、出土した器種は土師器甕、坏、須恵器蓋、である。

土師器甕は長胴と丸胴の二種があり、長胴のものには胴部が僅かに膨らみを持ち頸部がくの字状にくびれ、口縁部が外行するタイプと、体部が直線的で頸部のくびれが弱く口縁部は外反するタイプとある。前者は器肉が薄く均質となり、斜め方向の削りを施す。後者は器肉が厚く縦方向の削りである。当段階の長胴甕の整形は底部方向から頸部方向にヘラ削りを施すが、頸部のくびれ部分に強いヘラの「あたり」を残すようになる。丸胴甕は口縁部の立ち上がりが短い。坏は底部より口縁部へ内湾気味となる。口径10.0cm前後・11.0cm前後・13.5cm前後がある。相伴している須恵器蓋(坏身?)は地域的な特徴を示す器形であるのか今後の検討としたい。

[第6段階] (第82図)

H-40号住のみが当段階に属する。出土している器種は土師器甕、坏である。土師器甕の長胴甕には前段階の二種がみられるが、器形の特徴は継承するものの体部の調整は斜め方向、あるいは横方向となる。器肉も胎土もともに均質である。坏は底部より口縁部に内湾気味となるタイプと緩い稜をもって口縁部が外行するタイプがあるが、総じて器高が減じる傾向である。

[第7段階] (第83図)

前段階とは器種においてもその構成においても大きく異なっている土器群で、時間的なギャップが存在する。H-1・12・13A・13B・14・23・32号住が当段階に属する。出土した器種は土師器甕、須恵器坏、椀、皿、灰釉陶器碗、瓶である。土師器甕はコの字状口縁のもので、大型と小型とある。小型はおそらく台付き甕であろう。H-14号住の土師器甕はコの字状口縁が比較的明確で、H-13A号住のそれは変化した段階が伺える。須恵器坏、椀は平底と高台付きとがあり体部のろくろ成形痕を強く残し、僅かにまるみをもつタイプと口縁端部を僅かに外反させるタイプと

ある。高台の形状は三角、あるいは台形である。皿は作りの丁寧なものやや雑に見えるものがあるが工人の差によるものか時期差かは、生産地の資料との詳細な対比、検討をおこなったのちのこととしたい。以上のように当段階はそれぞれの器種に変化様相がみられるもののさらに細分して段階設定をおこなうにはいたらない。むしろ変化の中間段階の時期を当てておくことが妥当かと考える。

(2) 各段階の時期と当遺跡の土器群の様相

当遺跡の土器群を一括性を手がかりとし、群馬県内の土器編年研究を援用して7段階に区分し得たが、これを実年代に当てはめるとおおよそ以下の通りである。

第1段階は6世紀後半、第2段階は6世紀末から7世紀初頭、第3段階は7世紀第1四半世紀、第4段階は7世紀第3四半期、第5段階は7世紀第4四半期に第6段階は8世紀前半に、第7段階は9世紀後半の中頃であろう。

当遺跡の土器群の様相は県中央部の変化傾向と大きな差はなく推移するが、古墳時代後期の6世紀後半代における内外面黒色模倣杯の出土率は、県中央部に比べて高いといえよう。同じく、碓氷川南岸に展開する新寺地区遺跡群においても同様に目立つ存在であって、群馬県域でも山間部に共通する様相として位置付けられるだろう。また土師器長胴甕は器肉の厚いタイプが7世紀の後半段階にまで残存する。さらに須恵器の共伴例が少ない傾向も指摘できるだろう。特に秋間窯の操業開始以降においても保有率は大きな変化を示さない。当遺跡の住居の内7世紀後半から8世紀に前半にかけては極端に減少傾向がみられるが、当遺跡北側に続く西殿遺跡、先に述べた新寺地区遺跡群でも須恵器の出土量は少ない。安中市域でも偏差があると思われる。碓氷川を挟んで北側の集落、生産地である秋間地域の集落との格差は、窯業生産の仕組みと関わることは明白で、地域性の解明にとって重要な課題である。さて、第6段階と第7段階の間は当遺跡は集落はなく、およそ100年間の空白となる。遺構外出土の遺物の中にはその間を埋めうるものもあるが、別の土地利用を想定すべきだろう。9世紀後半に位置付けられる土器群は、古墳時代後期や奈良時代にみられた様式の斉一性指行の一方で、個々の土器における地域性が払拭される観がある。この状況は、群馬県域の西部と東部あるいは北部というような中地域ごとの土器の供給システムが確立してきている可能性がある。住居形態の変化や、カド³方向の斉一化とも大きな関連性を持っている。当段階の須恵器杯、椀類は秋間窯のものと思われ、このことから土器の生産供給システムの変換が伺える。

(外山政子)

(註1)

竪穴住居という呼称は、竪穴式建物とすべきとの提起がなされて久しいが、削平された一般的な遺跡においても竪穴式建物と、平地式建物群の組み合わせを持って当時の住居を想定するとすれば呼称の変更は必要である。後に考察する様に当遺跡の竪穴建物群の配置状態は、地形的制約や時期的限定が幸いして、こうした想定を可能とするものであり、呼称を統一する必要性も充分承知しているが、報告書という制限のなかで混乱を招かない事を第一義として従来の呼称を使用した。

(註2)

坂口 一 1986「古墳時代後期の土器の編年」『群馬文化』208

坂口 一・三浦京子 1986「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』24 群馬県史編纂委員会

三浦 京子 1990「奈良。平安時代の土器」『戸神諏訪遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

中沢 悟 1996「矢田遺跡周辺における古墳時代の土器について」『矢田遺跡 VI』同

中沢 悟 1997「矢田遺跡周辺における古墳時代後期から平安時代の土器について」『矢田遺跡 VII』同

(註3)

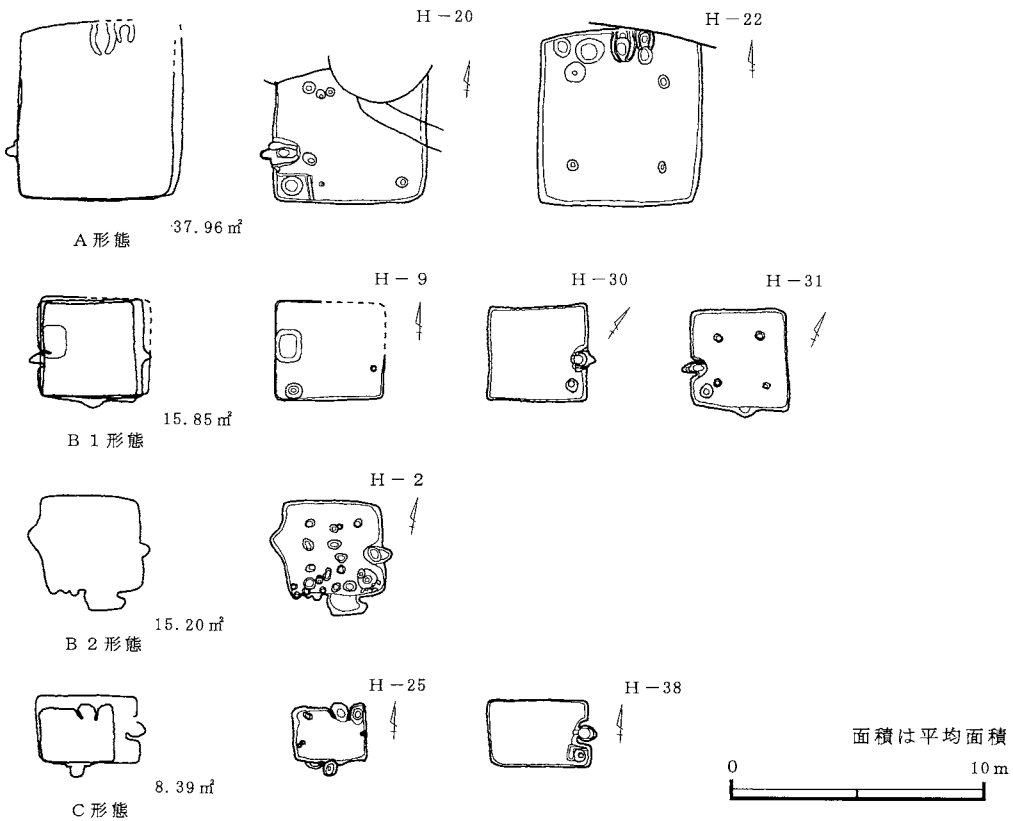
大工原豊・金井京子・和田宏子 1991『新寺地区遺跡群』安中市教育委員会

大工原豊・千田茂雄 1988『野殿北屋敷・西殿遺跡』安中市教育委員会

2 住居址について

本遺跡では37棟（軒）の竪穴住居址が検出された。古代においては、こうした竪穴住居址以外にも集落到平地式住居址が存在していることは、黒井峯遺跡や中筋遺跡の調査によって明らかとなっており、従来どおりの竪穴住居址のみを対象とした分析では、集落構造を解明することは不十分なものとなっている。本遺跡のように台地全体が削平されてしまっている遺跡では、本来存在していた遺構が大きく欠落していると判断される。したがって、本遺跡を用いて集落構造を解明しようとする分析を行うには大きな制約がある。ここでは、簡単に竪穴住居址について時期ごとに整理しておきたい。

6 世紀



第84図 時期別にみた住居址の形態 (1)

〔形態〕

本遺跡で検出された竪穴住居址を、時期別に形態・規模ごとに分類して並べたものが、第84図～第86図である。

6世紀後半（第84図） 8棟の竪穴住居址があり、A形態（大形正方形）2棟、B1形態（中形正方形）3棟、B2形態（中形正方形・張出部付き）1棟、C形態（小形・中形横正方形）2棟に分類される。この時期では標準的な規格のB1形態がやや多く、それ以外の形態は少ない傾向が認められる。

支柱穴が検出されたものは、A形態2棟、B1形態1棟、B2形態1棟であり、いずれも4本柱である。これらは大規模な住居址に多く、小規模のものでは支柱穴が存在していないものが多い。上部構造が異なる2種類の竪穴住居が存在していたと推定される。竈は基本的にローム混じりの黒褐色土で作られており、石を用いたものは1例のみである。そして、竈位置は北・西・東のものがあり、方向に対する規則性は弱い（第84図）。

なお、B2形態は南に張出部が付いていることと、床面に多数の柱穴が存在していることから工房址と判断される。

6世紀末～7世紀前葉（第85図） 18棟の竪穴住居址があり、D形態（大形正方形）2棟、E形態（中形正方形）5棟、F形態（中形正方形）4棟、G1形態（小形・中形横長方形）4棟、G2形態（中形横長方形・張出部付き）1棟、H形態（小形正方形）2棟に分類される。標準的なE・F形態が最も多く、大形のD形態や小形のG1・H形態は少ない。

支柱穴が検出されたものは9棟あるが、大形・中形に限定される。中形のE・F形態では4本柱が標準である。しかし、大形のD形態では6・7カ所支柱穴が存在しており、大形化に伴い上部構造も強化されていたものと判断される。したがって、この時期では上部構造の異なる3種類の住居が構築されていたものと推定される。

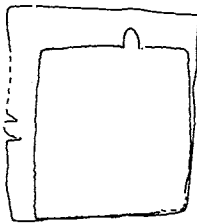
竈は石を用いるものが半数を占めており、袖の芯材や天井石として使用されている。竈の位置は北と東に限定されている（第85図）。また、竈脇の土坑が柱穴のように小さくて深いものが多い。H-7・16・27住では土坑の周囲に方形または楕円形の区画が設けられている。

なお、G2形態はB2形態に類似した張出部付きの特殊な形態であり、工房的な施設であった可能性がある。

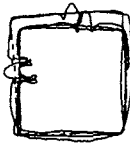
7世紀後葉～8世紀前葉（第86図） 3棟の竪穴住居址があり、いずれもI形態（中形正方形）である。支柱穴は検出されておらず、前段階とは上部構造が変化していることが分かる。竈は東に限定されており、石は用いられていない（第86図）。

9世紀後半（第86図） 7棟の竪穴住居址があり、J形態（中形正方形）1棟、K形態（中形横長方形）1棟、L形態（中形縦長方形）3棟、M形態（中形正方形）1棟、N形態（小形縦長方

6世紀末～7世紀



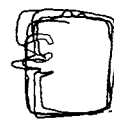
D 形態 49.24 m²



E 形態 20.02 m²



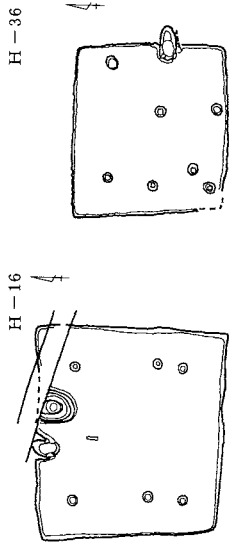
F 形態 14.67 m²



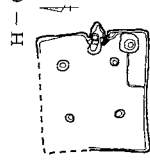
G 1 形態 12.04 m²



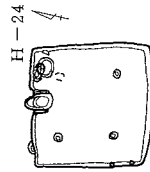
H 形態 8.98 m²



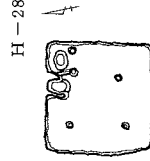
H-16



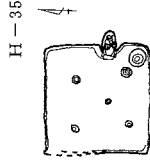
H-6



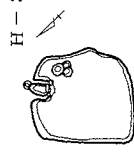
H-24



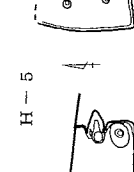
H-28



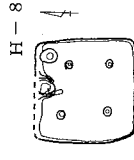
H-35



H-3



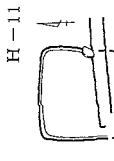
H-5



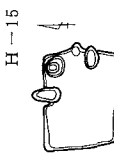
H-7



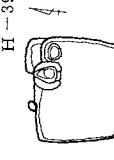
H-8



H-11



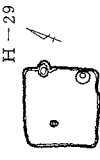
H-15



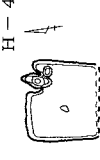
H-39



H-26

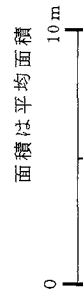


H-4



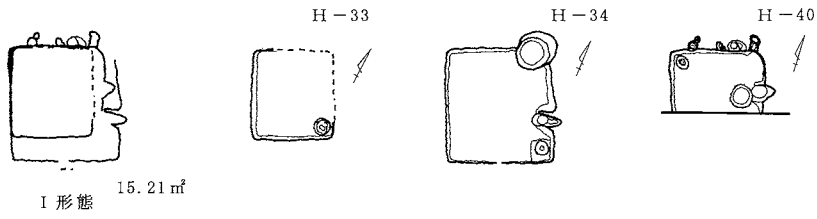
H-29

G 2 形態 13.20 m²

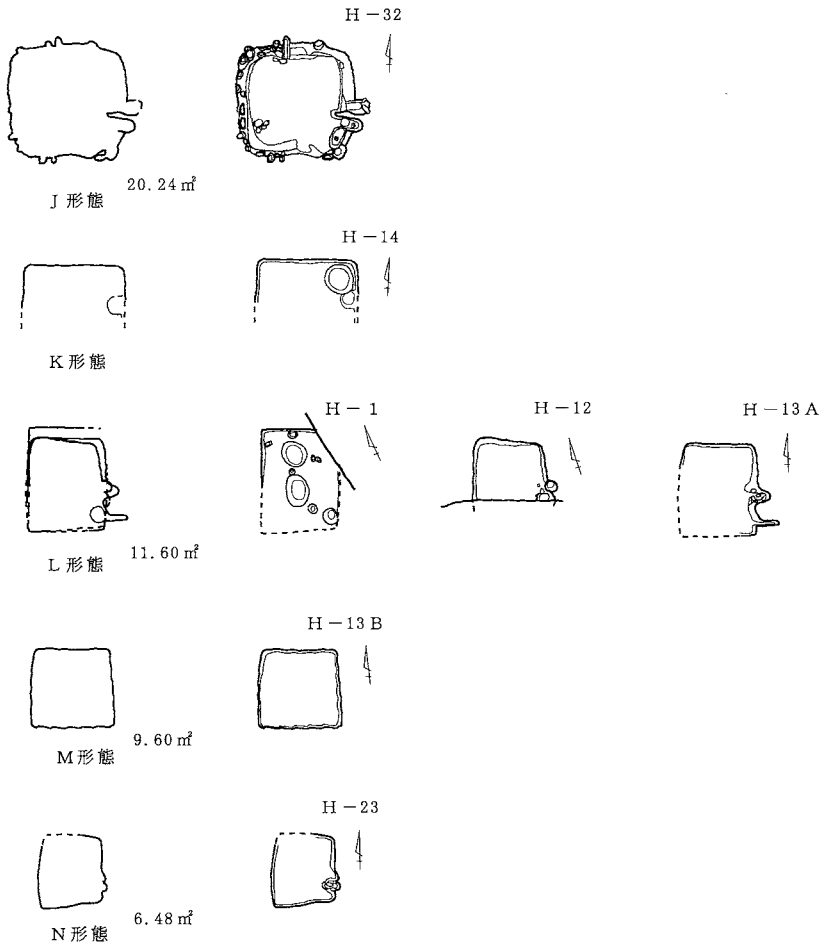


第 85 図 時期別にみた住居址の形態 (2)

7世紀後半～8世紀

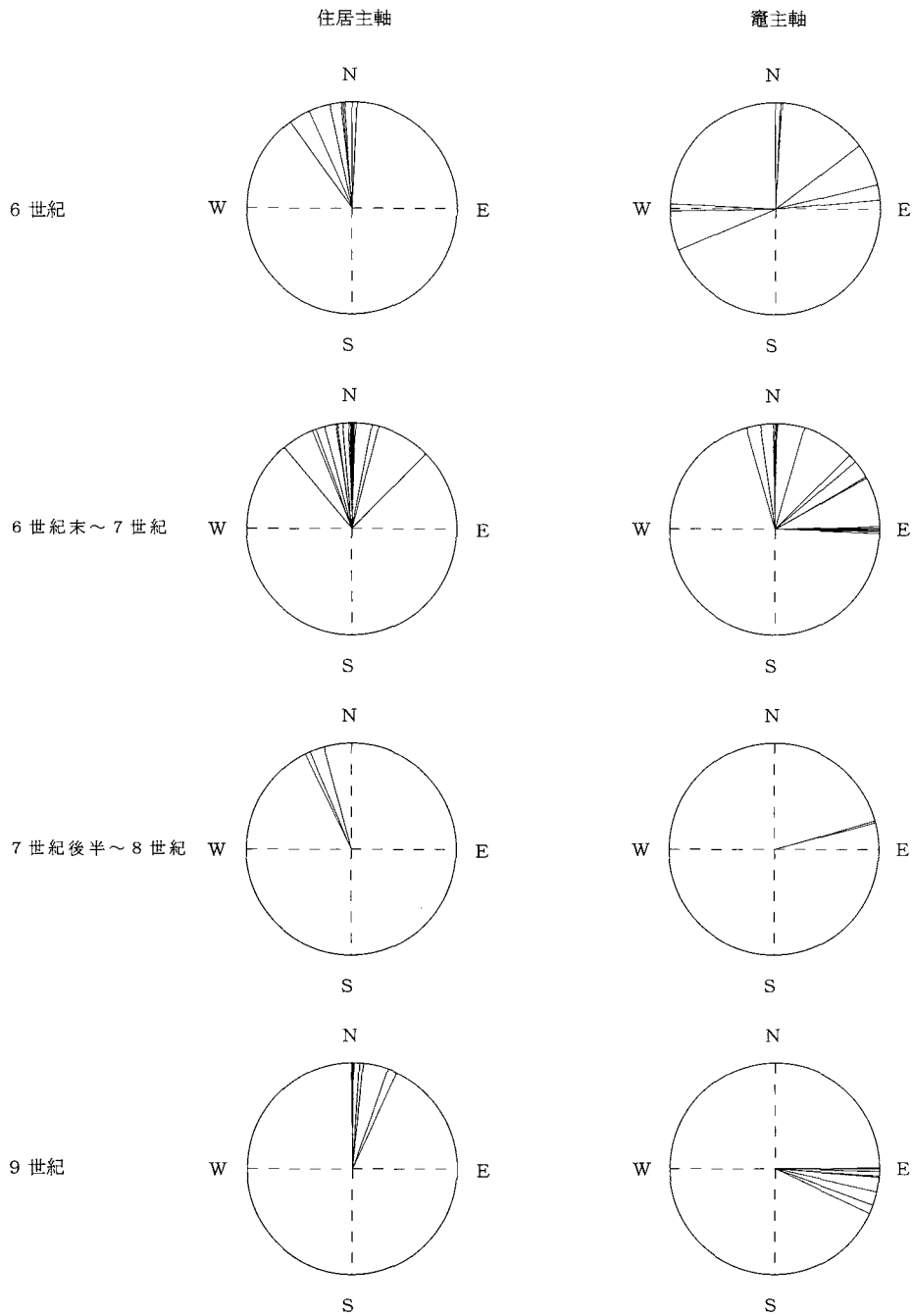


9世紀



面積は平均面積  10 m

第86図 時期別にみた住居址の形態 (3)



第87図 時期別にみた住居址の主軸方向

形) 1棟に分類される。標準的なL形態が最も多く、やや大形のJ・K形態と小形のM・N形態は少ない。しかし、この時期では大形のものは存在しておらず、全体に小形化している。また、堅穴も浅くなる。

床面に支柱穴は存在していない。H-32住の事例のように、壁の上端部から伸びる垂木を合掌させる上部構造であったと推定される。ただし、堅穴の浅い住居址も確実に存在していることから、これとは別に壁立ち構造の住居址が並存していたと考えられる。

住居の掘り方をみると、住居構築の際、床面下のローム層を除去し、床面下部に黒褐色土を敷き込み、その上部に床面を構築する方法が採られており、床下に土坑が存在するものも多い。これは、床面の湿気対策のためと推定される。同じ堅穴住居址でも、6・7世紀のものに比べ、床下の処理は念入りに行われており、機能的にも進歩していることが分かる。住居址が削平されてしまい、壁がほとんど残っていても住居址が検出されるのは、こうした構築方法が採用されていることに帰因するとみられる。

竈は袖の芯に石を利用したものが3例認められるが、いずれも小形の住居である。竈位置はすべて東であり、斉一性が強い(第86図)。

以上のように、6・7世紀前葉では基本的に少数の大形住居、多数の中形住居、少数の小形住居によって集落が構成されていたことが分かる。また、工房的な施設がしばしば存在していた点も共通している。この時期の集落は、大形住居居住者を核として、それに従属する多数の中形住居居住者と少数の小形住居居住者から構成される社会構造であったと推定される。

また、竈位置は6世紀後半では西向きが存在していたが、6世紀末以降北と東に二極化するようになる。両者とも各形態に認められることから、形態差ではないことが分かる。おそらく、時期が下るにつれて徐々に東へ転換していったものと推定される。

これに対し、9世紀後半の集落では大形住居が欠落し、中・小形住居のみで集落が構成されており、集落構造が6・7世紀とは異なっていたことが分かる。

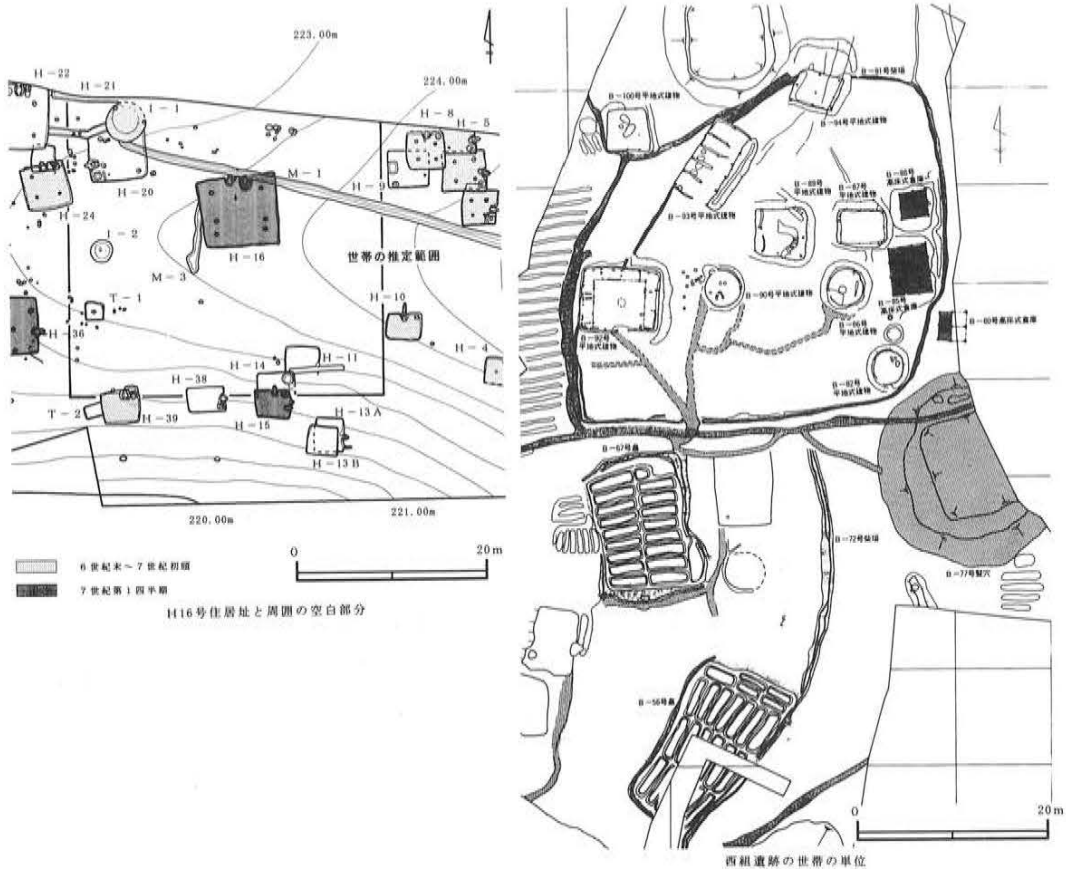
住居構造からも、各時期で変化していることが分かる。上部構造は6世紀後半では2種類、6世紀末～7世紀前葉では3種類、9世紀後半では2種類存在していたと推定される。

[居住単位と世帯]

一般的な集落遺跡では堅穴住居址以外の居住施設や、付随的な施設はほとんど検出されないことがない。しかし、6世紀中葉の黒井峯遺跡や西組遺跡の事例では、堅穴住居址の周囲には芝垣に囲まれた平地式住居・高床式建物・平地式建物などの施設が存在することが明らかとなっている。したがって、本遺跡でも黒井峯遺跡と時期的に近い6世紀後半～7世紀初頭堅穴住居址の周囲には付随的な施設群が存在していたものと考えられる。

第88図右は石井克己氏が西組遺跡の大形の堅穴住居址と、それに付随する施設群の在り方を示したものである（石井 1990）。この規模の堅穴住居址では芝垣に囲まれた内側に9棟の平地式建物と、高床式高床式建物2棟が存在している。このような堅穴住居址と芝垣に囲まれた建物群を一つの生活単位としての「世帯」と想定している。したがって、本遺跡のような堅穴住居址のみしか検出されない集落遺跡では、堅穴式住居址はこうした「世帯」を表象する遺構と認識されるのである。

第88図左は6世紀末～7世紀前葉に相当する大形堅穴住居址（H-16住）とその周囲を示したものである。周囲には長方形の範囲で、堅穴住居址の存在しない空白部分が存在している。この空白部分の西端には、井戸状遺構（I-1・2）や、堅穴状遺構（T-1・2）が直線的に配列しており、H-16住に付随する施設群の一部に相当する可能性が高い。



第88図生活単位としての「世帯」

このように、本遺跡でも西組遺跡の事例を参考にした場合、竪穴住居址を中心とした生活単位としての「世帯」の存在を垣間見ることが可能である。H-16住は本遺跡最大規模であるが、西組遺跡の大形竪穴住居址より、相当規模が小さい。したがって、付随する施設の数は、より少なかったものと判断される。さらに、中形の竪穴住居址でも同様なさらに規模は小さいものの付随する施設（群）の存在が推定されるのである。

[小結]

以上のように、簡単に住居址について述べた。最初にも述べたように、黒井峯・中筋以降、古代の居住施設の構造や配置については、大きく進展した。しかし、それは群馬県内でも一部の地域に限定され、本遺跡を始めとする安中市域では、検出される遺構は従来と同じ状態である。したがって、常に竪穴住居址を分析する場合、その周囲の空白部分についても、付随する平地式建物群が存在していたことを念頭におく必要がある。

今後は、黒井峯・中筋の成果をこうした普通の条件下に置かれた集落遺跡に対してどのように還元して行くかが、今後の研究課題であろう。

(大工原 豊)

3 集落の変遷について

第1節では本遺跡の土器群は7段階に分けることができた。そして、第2節では土器群の段階に基づき竪穴住居址の形態について検討を行った。本節では、こうした検討結果を踏まえ、古墳時代～平安時代にかけての集落の変遷について概観することにする。

[6世紀後半] (第89図)

この時期の竪穴住居址は8棟存在する。大形(A形態)の住居であるH-20・22住が、台地中央の平坦部に近接して存在する。両者は重複関係はないものも位置関係からみて、同時並存するものではなく、新旧関係があったと判断される。同様に、位置的関係からみて中形(B1・B2形態)のH-30・31住、H-2・9住でも新旧関係が推定される。そして、小形(C形態)のH-25・38住は、大形の住居の周辺部に存在しており、新旧関係は明らかではない。

このように、大形・中形の住居は、特定の場所を占有しており、少なくとも1度の建て替えが行われていた可能性が高い。おそらく小形の住居も同時並存するものではなく、同様な新旧関係が存在していたものと推測される。また、それぞれの住居址群の間には20mほどの空白部分が存在しており、別々の生活単位が存在していたものと考えられる。この単位が世帯に相当するものとみられる(石井 1990)。

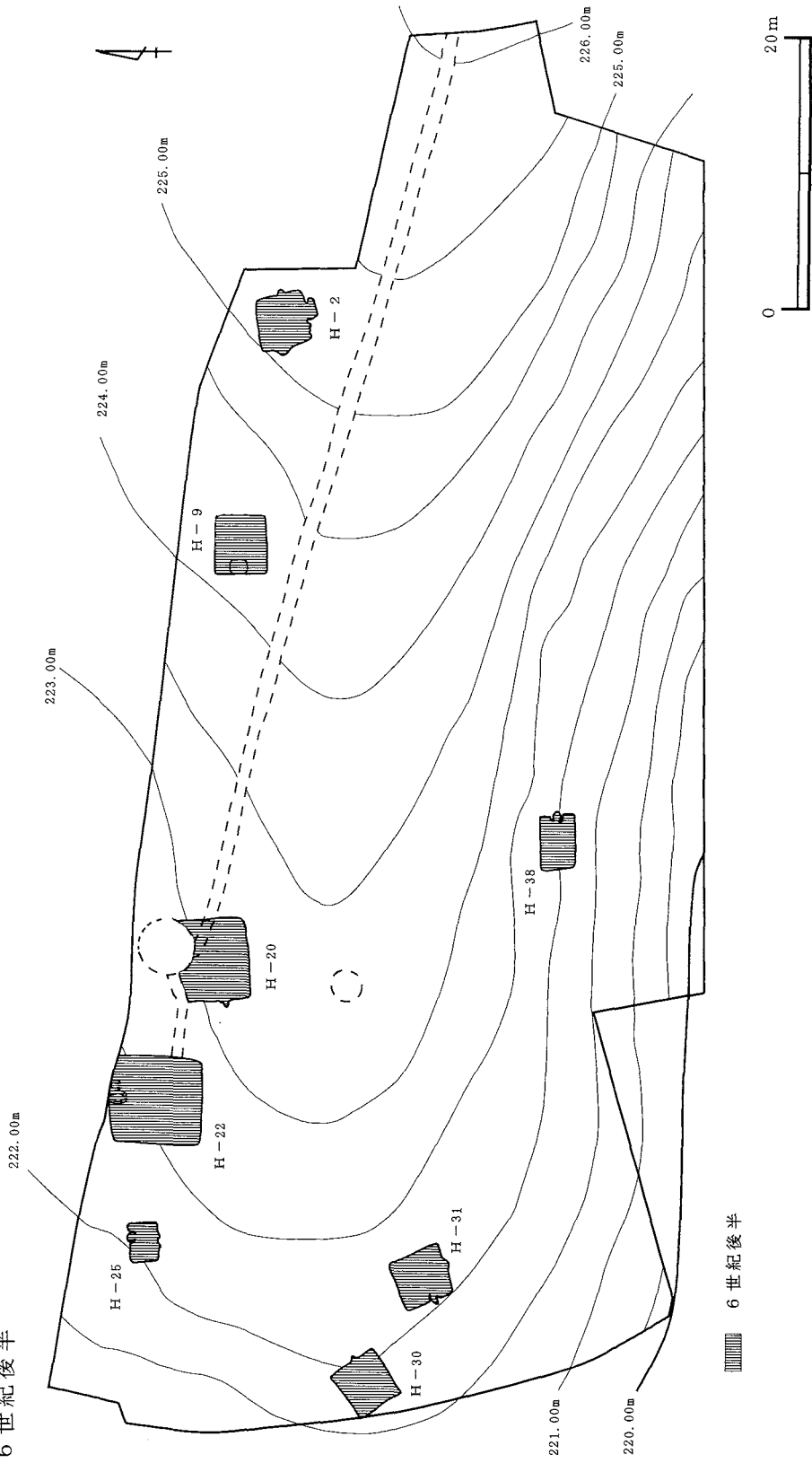
以上のように、この時期では調査区内に4つの異なる生活単位(世帯)が並存していた可能性が高い。そして、集落は中心的な存在であるA形態1世帯、標準的なB形態2世帯、小形のC形態1世帯によって、構成されていたと推察される。C形態は位置的にみて、A形態に隷属する世帯であった可能性がある。なお、各住居間の空白部分には、黒井峯・西組の事例のような、それぞれの住居に付随する各種建物(平地式住居・高床式建物・平地式建物など)や畠の存在が想定される。

[6世紀末～7世紀前葉] (第90図)

この時期には18棟の竪穴住居址が存在する。標準的な中形の住居を主体とし、4棟が重複・近接する状態の住居群が2カ所に認められる。これをA群(H-5～8住)、B群(H-26～29住)と呼ぶことにする。両住居群の場所は、6世紀後半に中形の住居が占有していた場所であり、それがこの時期まで継続していたものと判断される。両群とも3度住居が建て替えられていたのであり、この時期内でも4段階あったことが分かる。これを基に他の住居の状態を検討する。

大形の住居(D形態)は、台地の中央部を占拠する最大規模のH-16住と、南斜面部にあるや

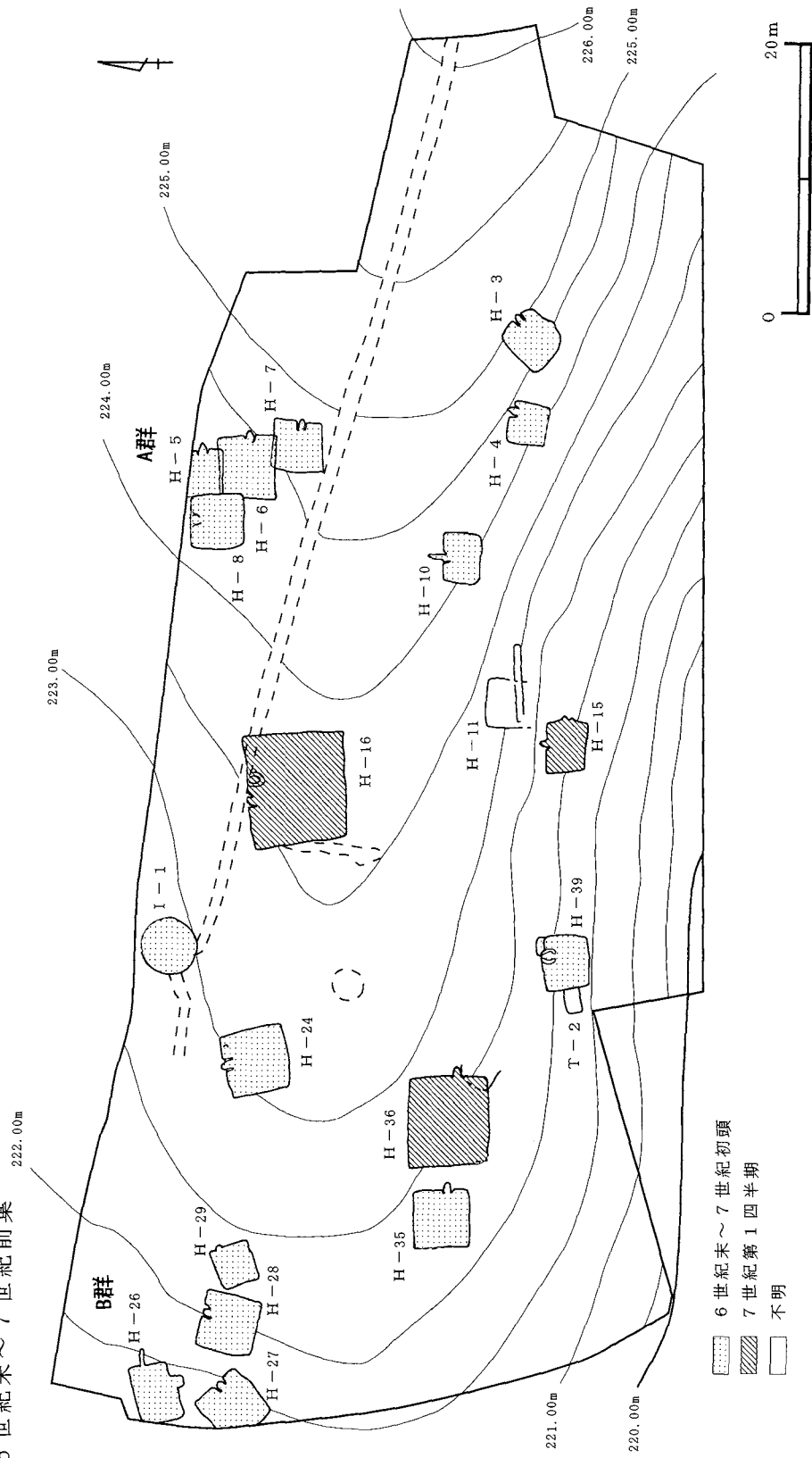
6 世紀後半



6 世紀後半

第89図 集落変遷図(1)

6 世紀末～7 世紀前葉



第90図 集落変遷図(2)

や小形のH-36住がある。前後の位置関係からみて、H-16住→H-36住の変遷が推定される。兩住居址とも出土土器からみると、A・B兩群よりやや後出の様相を示しているが、住居址の支柱穴の在り方からみて、拡張や同一場所建て替えが行われていた可能性が高い。また、大形の住居の方が構造的にも長持ちするものであったとも考えられ、A・B兩群と同時並存していた可能性が高い。特に、H-16住は台地中央部を占拠し、その周囲15mの範囲には空白部分が存在しており、比較的長期間この場所に居住していたものと思われる。

また、小形の住居（G1・H形態）は、6棟（竪穴状遺構を含めて7棟）が南斜面部に帯状に分布している。H-3・4住、H-11・15住、H-39住・T-1竪穴がそれぞれ新旧関係にあり、2段階に分けられる。ただし、ここではA・B兩群のような明確な単位性は認められず、同時並存していた世帯数を確定することはできない。この要因として、小形の住居の場合、集落内での存在場所が流動的であったことによると考えられる。

以上のように、この時期の集落は大形のD形態1世帯、中形のE・F形態2～3世帯、小形のG1・H形態2～3世帯によって構成されていたと推定される。そして、集落構造は6世紀後半と基本的には同じであったと推察される。

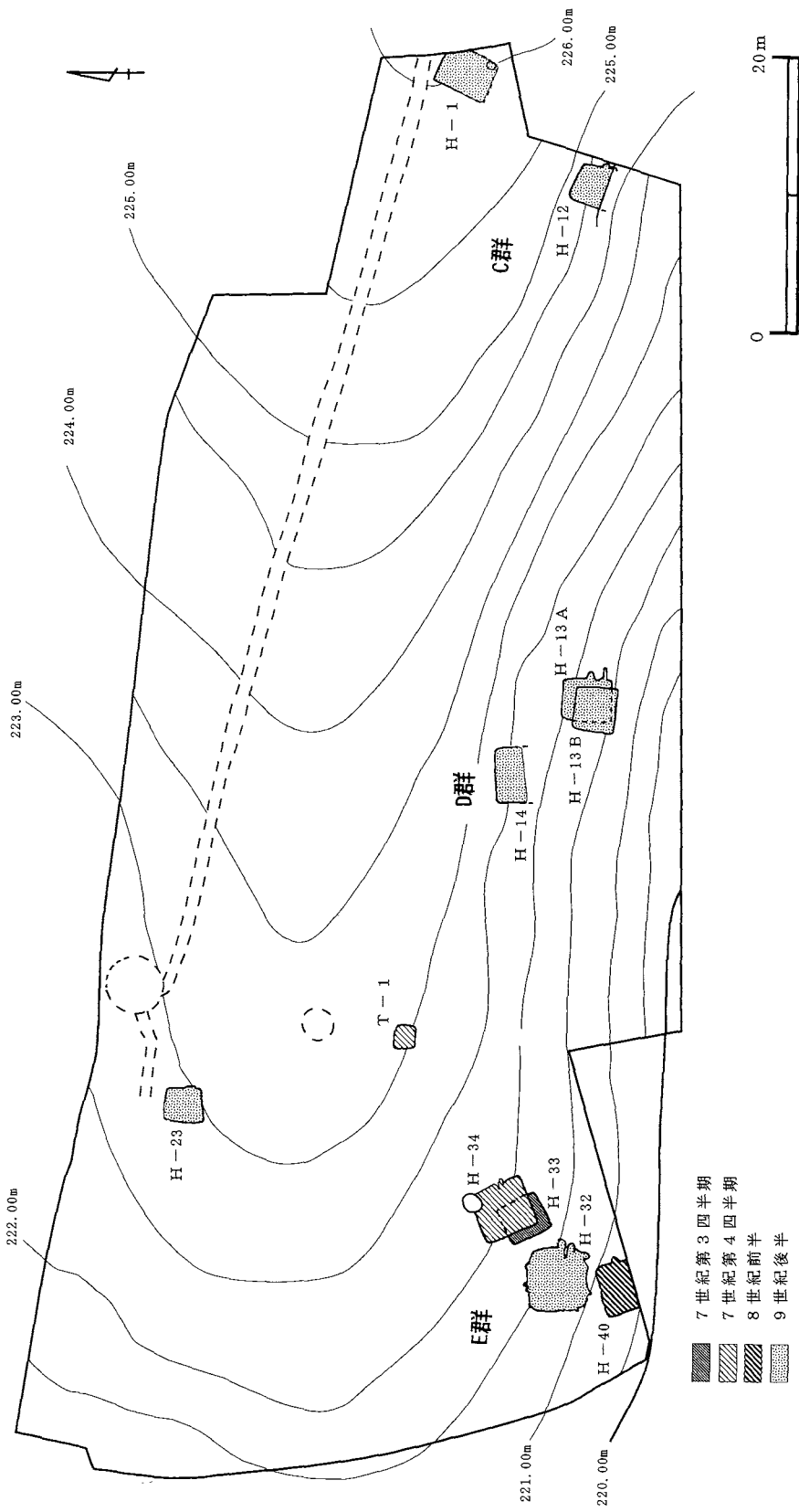
[7世紀後葉～8世紀前葉]（第91図）

この時期には3棟の竪穴住居址が存在する。前段階との間には短期間の断絶が認められる。住居址は調査区南西部に集中しており、中形（I形態）の住居が各時期1棟ずつである。したがって、標準的な1つの世帯が継続的にこの場所を占有していたと推定される。住居数が少な過ぎるため集落構造ははっきりしないが、住居は南斜面に存在するのみであり、平坦な台地中央部は空白地帯となっていることから、7世紀前葉の集落構造とは、変容していた可能性が高い。

[9世紀後半]（第91図）

前段階との間には長期間の断絶が認められる。この時期には7棟の中形・小形の竪穴住居址が存在する。住居址は調査区南斜面に偏在しており、一定の間隔をおいて3カ所に分かれている。これをC群（H-1・12住）、D群（H-13A・13B・14住）、E群（H-32住）と呼ぶことにする。なお、C群とE群は調査区端に位置しており、調査区外に1～2棟の住居が存在していた可能性が高い。D群の事例のように3段階に分かれると推定される。そして、これらの住居群が同時並存していたものとみられ、J～N形態3～4世帯から構成されていたと推定される。なお、この時期では住居規模が均一化しており、世帯間の格差は認められない。また、台地中央の平坦部分にはほとんど遺構が存在しておらず、非常に特徴的な集落景観を呈していたと推定される。

7世紀後半～8世紀前半・9世紀後半



第91図 集落変遷図(3)

[野殿地区の集落変遷] (第92図)

野殿地区では本遺跡と、北の舌状台地に存在する西殿遺跡の調査が実施されている。両遺跡で検出された住居址を時期ごとに示したものが第92図である。なお、西殿遺跡は道路部分の調査であり、住居数も9棟と少なく集落の全体規模や詳しい内容は不明であるが、本遺跡とやや時期が異なる住居址も存在しているため参考に示した。

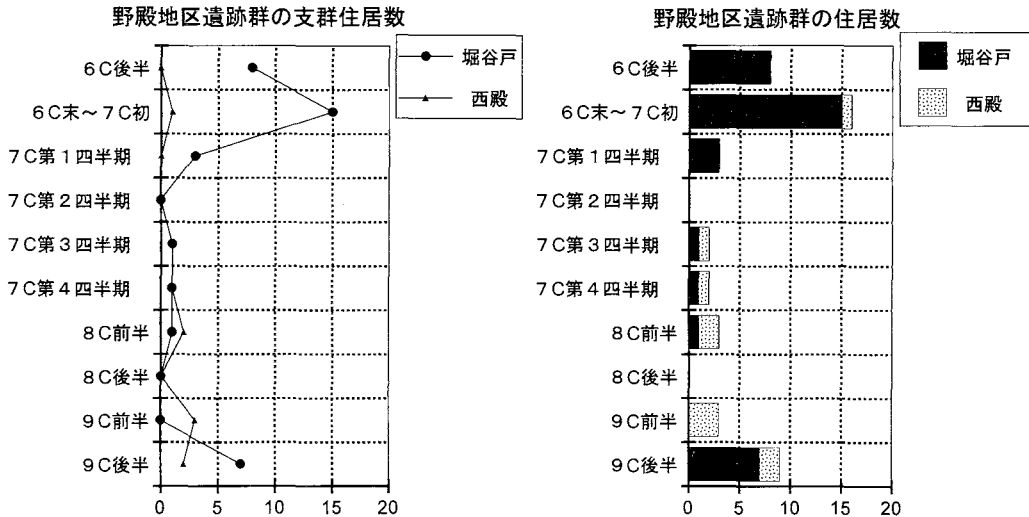
ここでは6世紀後半に集落の形成が開始され、9世紀後半まで断続的に集落が形成され続けていることが分かる。7世紀中葉と8世紀後半の2度、集落は断絶している。最も規模が大きいのは6～7世紀初頭である。この時期に集落規模が拡大する傾向は、鷲宮地区遺跡群でも認められており(大工原 1998)、本地域での一つの発展期として理解することができる。本遺跡の北東約1kmに存在する野殿天王塚古墳は6世紀後半の築造とみられ、本遺跡群の集落規模の拡大と連動する現象と考えられる。

また、7世紀後葉～8世紀前半までの時期は、小規模な集落が断続的に営まれている。この時期の集落の様相については、不明な部分が多い。現状でみる限りにおいては、本遺跡群での集落規模の落ち込みは、鷲宮地区遺跡群や新寺地区遺跡群と比較して大きいようである。

本遺跡群では、9世紀になると集落規模が再び拡大する。この傾向は新寺地区遺跡群(大工原他 1991)でも認められており、碓氷川流域での一般的傾向としてとらえることができる。

以上、簡単に本遺跡群の変遷を概観した。安中市域でも岩野谷地区での調査事例が少ないことから、不明な点が多い。今後、調査事例の増加により徐々に本地域の様相についても明らかになることであろう。

(大工原 豊)



第92図 野殿地区遺跡群の住居数の推移

引用・参考文献

- 大工原豊・関根慎二・林克彦 他 1996 『落合Ⅱ遺跡・平塚遺跡・三本木Ⅱ遺跡・三本木Ⅲ遺跡』
安中市教育委員会
- 大工原豊 他 1998 『上ノ久保遺跡・桜林遺跡・五ヶ遺跡』 同
- 能登健 1984 「山棲み集落の研究」 『熊倉遺跡』 六合村教育委員会
- 坂口一・三浦京子 1986 「奈良・平安時代の土器編年」 『群馬県史研究』 24
- 石井克己 1990 「黒井峯遺跡の集落構造研究(1)」 『群馬考古学手帳Vol.1』 群馬土器観会
- 田辺昭三 1975 『陶磁大系4 須恵』 平凡社
- 友廣哲也 他 1997 『中宿在家遺跡・上豊岡一里塚遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大工原豊・関根慎二・林克彦 他 1994 『中野谷地区遺跡群』 安中市教育委員会
- 大工原豊・千田茂雄 他 1990 『中野谷地区遺跡群発掘調査概報1』 同
- 大工原豊・金井京子・和田宏子 1991 『新寺地区遺跡群』 同
- 大工原豊・千田茂雄 1988 『野殿北屋敷・西殿遺跡』 同
- 玉口時雄・小金井靖 1984 『土師器・須恵器の知識』 東京美術刊
- 深町真 他 1998 『日向後原遺跡・野毛良遺跡・山峰遺跡』 安中市教育委員会
- 能登健・内田憲治 1985 「里棲み集落の発掘調査」 『峯岸遺跡』 新里村教育委員会
- 中沢悟 1996 「矢田遺跡周辺における古墳時代の土器について」 『矢田遺跡』 VI
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 同 1997 「古墳～平安時代の住居址について」 『矢田遺跡』 VII 同
- 同 1997 「矢田遺跡周辺における古墳時代後期から平安時代の土器について」 『矢田遺跡』 VII 同

VI 自然科学分析

早田 勉 (古環境研究所)

1 テフラ分析

1. はじめに

野殿丘陵に位置する堀谷戸遺跡では、尾根上に構築された溝状遺構が検出された。そこで地質調査を行って土層の記載を行うとともに、覆土についてテフラ検出分析を行って示標テフラとの関係から遺構の構築年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、深掘トレンチ、H-32、M-2号溝28区およびM-1号溝11区の4地点である。

2. 土層の層序

(1) 深掘トレンチ

ここではいわゆるローム層の良好な断面が認められた。この地点では、下位より褐色粘質土(層厚4cm以上)、白色細粒火山灰層(層厚2cm)、褐色粘質土(層厚3cm)、下部が橙色軽石層(層厚43cm, 軽石の最大径23mm, 石質岩片の最大径8mm)で上部が灰色風化軽石層(層厚13cm, 軽石の最大径5mm, 石質岩片の最大径2mm)からなるテフラ層、褐色土(層厚5cm)、下部が灰色粗粒火山灰に富む黄灰色細粒軽石層(層厚6cm, 軽石の最大径6mm, 石質岩片の最大径2mm)で上部が淘汰の良い灰色粗粒火山灰層(層厚2cm)からなるテフラ層、褐色がかった白色土(層厚1cm)、下位より暗灰色土粗粒火山灰を多く含む橙色軽石層(層厚19cm, 軽石の最大径6mm, 石質岩片の最大径2mm)、褐灰色軽石層(層厚9cm, 軽石の最大径8mm, 石質岩片の最大径2mm)、橙色軽石層(層厚25cm, 軽石の最大径11mm, 石質岩片の最大径3mm)、白褐色土(層厚2cm)、黒灰色粗粒火山灰に富む橙色軽石層(層厚8cm, 軽石の最大径8mm, 石質岩片の最大径4mm)、白褐色土(層厚5cm)、黄色軽石層(層厚4cm, 軽石の最大径9mm, 石質岩片の最大径3mm)、暗褐色土(層厚1cm)、下部が橙色粗粒軽石層(層厚5cm, 軽石の最大径14mm, 石質岩片の最大径3mm)で上部が橙色細粒軽石混じりの暗灰色土粗粒火山灰層(層厚6cm, 軽石の最大径5mm, 石質岩片の最大径2mm)が認められる(図1)。

これらの土層のうち、白色細粒火山灰層は層相から約2.2-2.5万年前に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 町田・新井, 1992)に同定される。またその上位の土層中に含まれる6層の降下テフラ層は、約1.8-2.2万年前に浅間火山から噴出した浅間板

鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 新井, 1962, 早田, 1994) に同定される。

As-BP Groupの上位には、さらに下位より褐色砂質土 (層厚 2 cm)、若干白味をおびた褐色土 (層厚 7 cm)、褐色土 (層厚 23cm)、黄白色軽石混じり褐色土 (層厚 14cm, 軽石の最大径 14mm)、褐色土 (層厚 8 cm)、黄色粗粒軽石層 (層厚 40cm, 軽石の最大径 39mm, 石質岩片の最大径 17mm) の連続が認められる。褐色土中に含まれる黄白色軽石は、層位や岩相などから約 1.7 万年前に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第 1 軽石 (As-OP₁, 中沢ほか, 1984, 早田, 1994) に由来すると考えられる。また最上位の軽石層は、層相から約 1.3-1.4 万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992) に同定される。

(2) H-32

この住居に覆土には成層したテフラ層が認められる。この成層したテフラ層は、下位より灰褐色粗粒軽石 (最大径 27mm) 混じり黄褐色軽石層 (層厚 4 cm, 軽石の最大径 6 mm)、灰褐色細粒火山灰層 (層厚 0.6 cm)、黄色細粒軽石に富む暗灰色土粗粒火山灰層 (層厚 5 cm, 軽石の最大径 4 mm) から構成されている (図 2)。このテフラ層は、層相から 1108 (天仁元) 年に浅間火山から噴出した浅間 B テフラ (As-B, 新井, 1979) に同定される。

(3) M-2号溝

本遺構の 28 区セクションにおける覆土は、下位より黒褐色土 (層厚 6 cm, 3 層)、黄褐色土ブロック混じり暗灰褐色土 (層厚 12cm, 3b 層)、黄褐色土ブロックに富む褐色土 (層厚 11cm, 2b 層)、灰色土 (層厚 18cm, 2a 層)、比較的発泡の良い灰色軽石混じり暗灰褐色土 (層厚 27cm, 1b 層)、比較的発泡の良い灰色軽石混じり黒褐色土 (層厚 24cm)、比較的発泡の良い灰色軽石に富む暗褐色土 (層厚 7 cm, 以上 1a 層) からなる (図 3)。

(4) M-1号溝

本遺構の 11 区セクションにおける覆土は、下位より発泡の良い黄色軽石に富む黒褐色土 (層厚 18cm)、発泡の良い黄色軽石に富む若干色調の暗い暗褐色土 (層厚 19cm)、発泡の良い黄色軽石に富む黒褐色土 (層厚 17cm) から構成されている (図 4)。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラの降灰層準を求めるために、2遺構の覆土について基本的に5cmごとに採取された土壌試料のうち17試料を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察記載。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。今回分析を行ったいずれの試料についても比較的よく発泡した淡褐色や褐色の軽石が比較的多く認められた。軽石の最大径は5.1mmである。班晶には斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴からAs-Bに由来すると考えられる。遺構の基盤にあたる土層が認められないことから明言することは難しいが、軽石の産出状況からこれらの遺構はAs-B降灰以後に構築されたと考えられる。

なおM-1号溝覆土セクションで認められた発泡の良い黄色軽石は、よく発泡していることと、風化を受けているために分析中に消失してしまった。この軽石は、その岩相からAs-YPに由来していると考えられる。

4. まとめ

堀谷戸遺跡において地質調査とテフラ検出分析を行った。その結果ローム層中に下位より始良Tn火山灰(AT, 約2.2-2.5万年前)、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 約1.8~2.2万年前)、浅間大窪沢第1軽石(As-OP₁, 約1.7万年前)、浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.3~1.4万年前)が認められた。またH-32覆土中には、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)の堆積が認められた。そして尾根上に構築されたM-2号溝とM-1号溝はAs-B降灰以降に構築された可能性の大きいことが推定された。

参考文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p. 1-79.
- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no. 157, p. 41-52.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義. 科学, 46, p. 339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山, 黒班~前掛期のテフラ層序. 日本第四紀学会講演要旨集, no. 14, p. 69-70.
- 早田 勉 (1994) 群馬の示標テフラと自然環境. 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会編「群馬の岩宿時代の変遷と特色」, p. 20-24.

表1 堀谷戸遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
M-2号溝28区	1	++	淡褐, 褐	4.2
	3	++	淡褐, 褐	3.4
	5	++	淡褐, 褐	5.1
	7	++	淡褐, 褐	4.1
	9	++	淡褐, 褐	4.9
	11	++	淡褐, 褐	3.8
	13	++	淡褐, 褐	4.6
	15	++	淡褐, 褐	3.0
	17	++	淡褐, 褐	4.7
	19	++	淡褐, 褐	4.1
20	++	淡褐, 褐	4.1	
M-1号溝11区	1	++	淡褐, 褐	4.1
	3	++	淡褐, 褐	3.3
	5	++	淡褐, 褐	3.3
	7	++	淡褐, 褐	5.1
	9	++	淡褐, 褐	4.1
	11	++	淡褐, 褐	3.8

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない. 軽石の最大径の単位はmm.

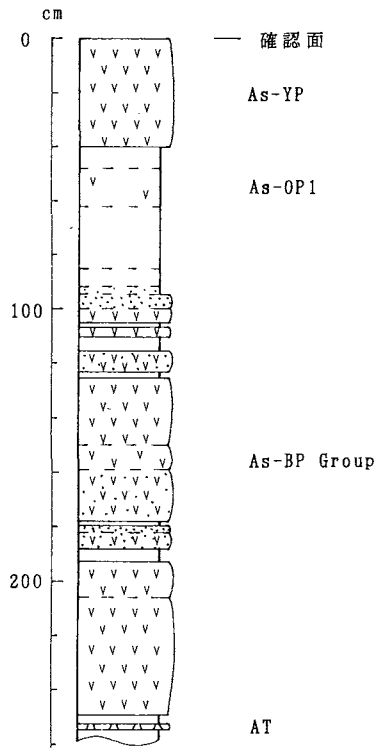


図1 深掘トレンチの土層柱状図

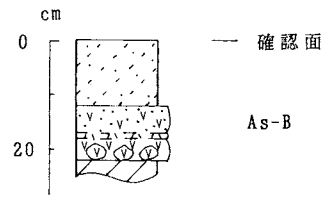










図2 H-32覆土(一部)の土層柱状図

凡例

-  軽石
-  粗粒火山灰
-  細粒火山灰
-  黒褐色土
-  暗褐～暗灰褐色土
-  灰～褐灰色土
-  褐～黄褐色土
-  砂

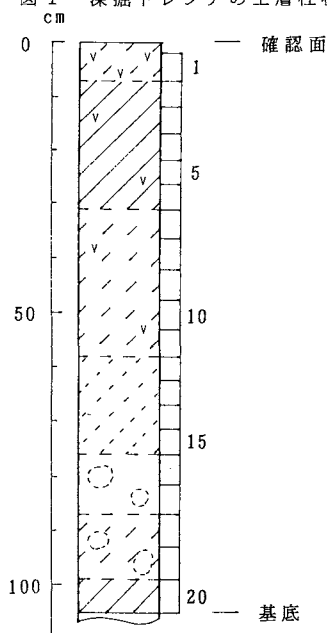


図3 M-2号溝28区セクションの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

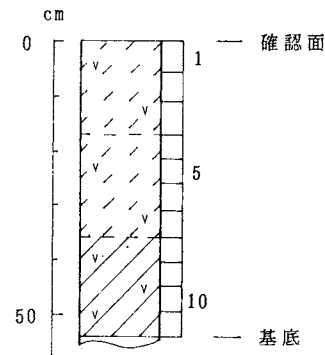


図4 M-1号溝11区セクションの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

2. 植物珪酸体分析

杉山真二 (古環境研究所)

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 1987)。

2. 試料

試料は、深堀トレンチから採取された14点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976)」をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾 (105°C ・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加 (直径約 $40\ \mu\text{m}$ ・約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法 (550°C ・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (300W ・ 42kHz ・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子 ($20\ \mu\text{m}$ 以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属 (ヨシ) の換算係数は6.31、ネザサ節は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族、ウシクサ族（大型）、イネ科Bタイプ、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

(2) 植物珪酸体の検出状況

AT直下層（試料14）からAs-YP直下層（試料1）までの層準について分析を行った。その結果、全体的にクマザサ属型、タケ亜科（未分類等）、棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族なども少量検出された。また、ATの上下層（試料13、14）およびAs-OP₁直下層（試料3）ではネザサ節型が検出され、As-OP₁混層（試料2）ではヨシ属も検出された。

おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、全体的にクマザサ属型が優勢であり、とくにAs-BP Group直下層やAs-OP₁直下層ではクマザサ属が圧倒的に卓越していることが分かる。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生・環境

始良Tn火山灰（AT，約2.4-2.5万年前）直下層から浅間板鼻黄色軽石（As-YP，約1.3-1.4万年前）直下層にかけては、クマザサ属などのササ類を主体としたイネ科植生が継続されていたと考えられ、とくに浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group，約1.8-2.1万年前）直下層や浅間大窪沢第1軽石（As-OP₁，約1.7万年前）ではクマザサ属が繁茂する状況であったものと推定される。また、始良Tn火山灰（AT，約2.4-2.5万年前）の上下層では、ウシクサ族やネザサ節なども見られたものと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節とクマザサ属は一般に相反する出現傾向を示し、前者は温暖の、後者は寒冷の指標とされている。また、ネザサ節とクマザサ属の推定生産量の比率である「ネザサ率」の変遷は、地球規模の氷期-間氷期サイクルの変動とよく一致することが分かっている（杉山・早田，1996）。ここでは、クマザサ属が卓越していることから、当時は寒冷な気候

条件下で推移したものと推定される。なお、ATの上下層の堆積当時は、その前後の時期と比較してやや温暖であった可能性が考えられる。

クマザサ属は氷点下5℃程度でも光合成活動をしており、雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高槻，1992）。気候条件の厳しい氷期にクマザサ属が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

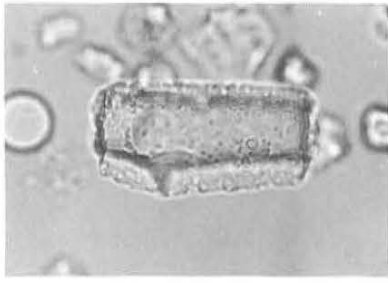
参考文献

- 杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第2号，p. 27-37.
- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p. 70-83.
- 杉山真二・早田勉（1996）植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の高環境推定－中期更新世以降の氷期－間氷期サイクルの検討－．日本第四紀学会 講演要旨集，26，p. 68-69.
- 高槻成紀（1992）北に生きるシカたち－シカ、ササそして雪をめぐる生態学－．どうぶつ社.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p. 15-29.

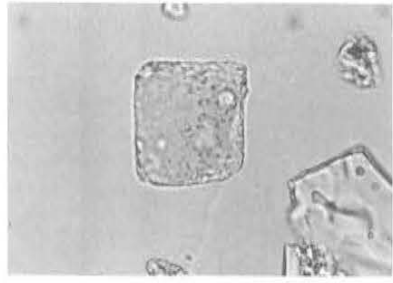
分類群 \ 試料	深堀トレンチ													
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
イネ科														
キビ族型											7		8	
ヨシ族	7													
ウシクサ族	15	15			22	8	7	22		8	37	7	91	134
ウシクサ族(大型)	7													
Bタイプ	15													
タケ亜科														
ネザサ節型			22										45	89
クマガサ科	199	237	543	221	97	100	310	224		272	249	254	742	395
未分類等	590	503	625	354	59	38	490	388		596	609	82	901	723
その他のイネ科														
表皮毛起源	7	7									7		8	15
棒状珪酸体	744	739	863	516	141	107	749	552		784	836	269	1143	1028
頸部起源											7		8	
未分類等	597	628	751	531	134	92	641	485		558	447	195	749	670
植物珪酸体総数	2167	2136	2812	1623	453	345	2167	1671		2217	2200	808	3694	3054

主な分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm)														
ヨシ族	0.47													
ネザサ節型	0.11													
クマガサ科	1.49	1.77	4.07	1.66	0.72	0.75	2.32	1.68		2.04	1.87	1.91	5.56	2.96

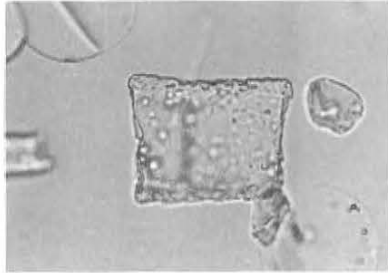
表1 安中市、堀谷戸遺跡の植物珪酸体分析結果



1



2



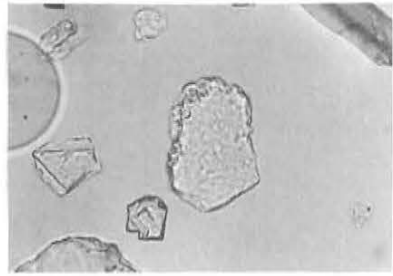
3



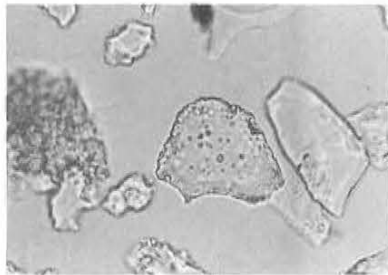
4



5



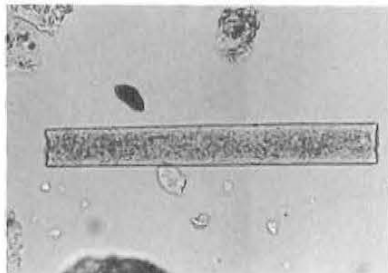
6



7



8



9

- 1 キビ族型
- 2 ウシクサ族
- 3 イネ科B
- 4 ネザサ節型
- 5 クマザサ属型
- 6 クマザサ属型
- 7 クマザサ属型
- 8 タケ亜科
- 9 棒状珪酸体

0 50 100 μm

発掘調査報告書抄録

ふりがな	ほりがいとせき
書名	堀谷戸遺跡
副書名	特別養護老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大工原豊・井上慎也・外山政子
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379-0192 群馬県安中市安中一丁目 23-13
発行年	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほりがいとせき 堀谷戸遺跡	あんなかしのとの 安中市野殿 あざほりがいと 字堀谷戸	102113	H-2	36° 18' 57"	138° 55' 5"	19960311- 19960705	5230㎡	特別養護老 人ホーム建 設のため

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堀谷戸遺跡	集落	古墳時代～平安	住居址37・土坑9 井戸状遺構2 溝1・竪穴状遺構2	土師器・須恵器・ 鉄製品・砥石 石製品	
	その他	中・近世	溝2		

堀 谷 戸 遺 跡

—特別養護老人ホーム建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日	平成11年3月31日
編集・発行	安中市教育委員会 群馬県安中市安中一丁目23-13
印刷	荒瀬印刷株式会社 群馬県高崎市下小墾町733